北谷町文化財調査報告書　第23集

キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査

― 伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業 ―

2005(平成17)年３月

沖縄県　北谷町教育委員会

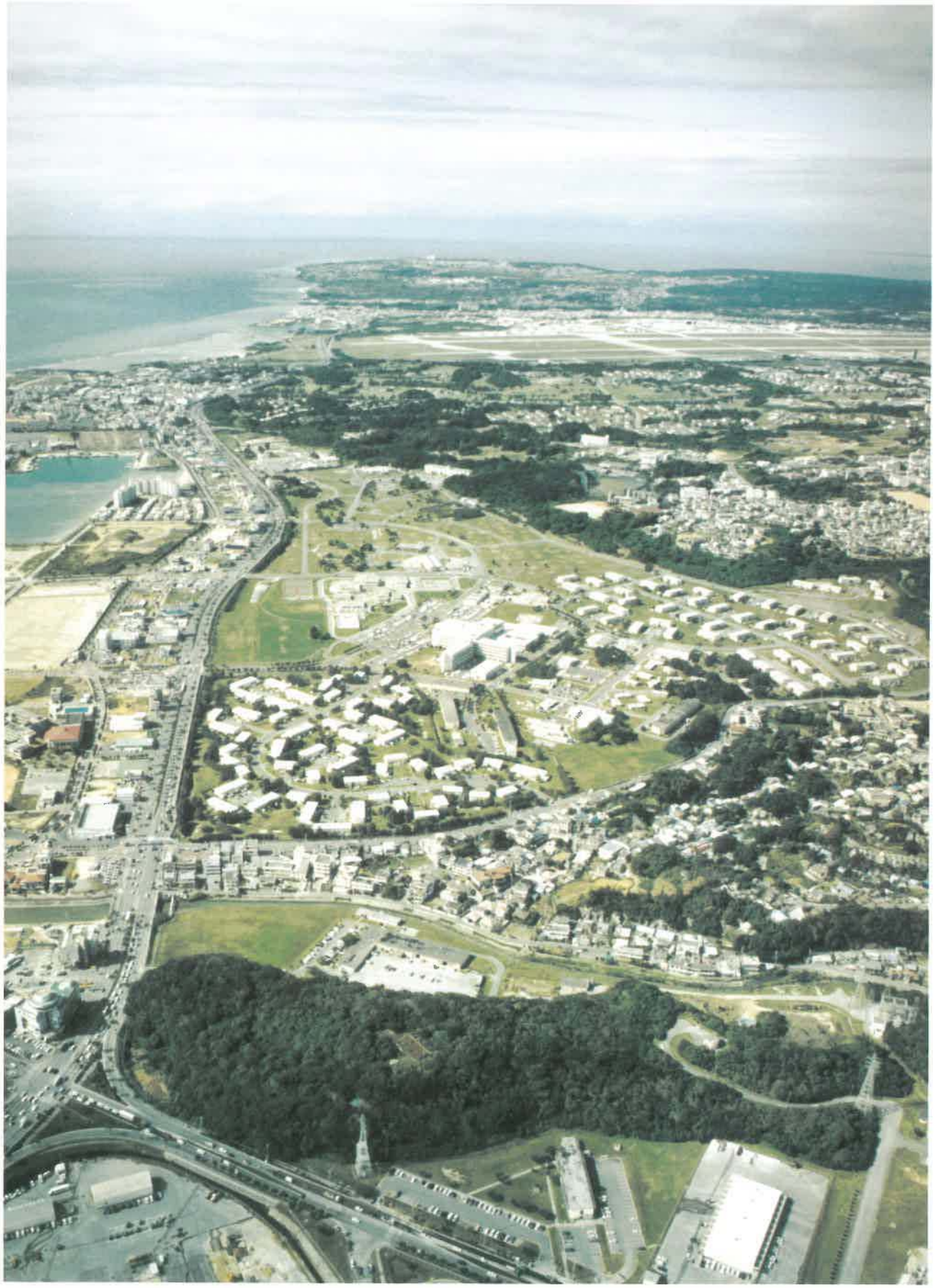
北谷町文化財調査報告書　第23集

キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査

―　伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業　―

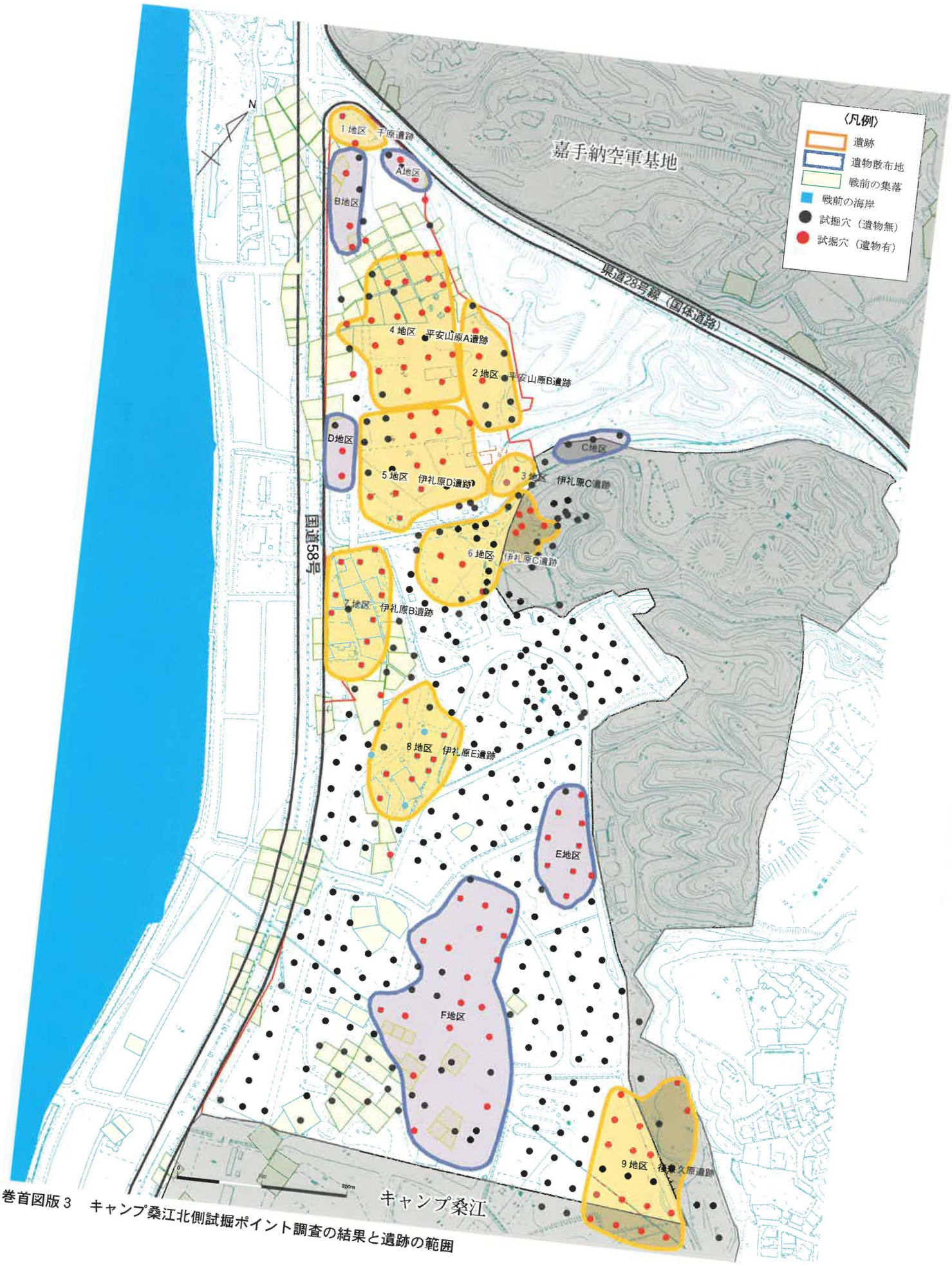
2005(平成17)年３月

沖縄県　北谷町教育委員会



巻首図版１　キャンプ桑江北側地区遠景

巻首図版２　キャンプ桑江北側の戦前の様子（沖縄県公文書館所蔵「米軍撮影空中写真」ON24146　058－2（1945年２月28日）撮影に加筆）



巻首図版３　キャンプ桑江北側試掘ポイント調査の結果と遺跡の範囲

3 －A

3 －B

巻首図版４　Ａ：曽畑式土器　Ｂ：伊波式土器・大山式第Ⅳ類土器

4－A

4－B

4－C

4－D

4－E

4－F

巻首図版５　Ａ：黒曜石　Ｂ：チャート　Ｃ・Ｄ：木の実　Ｅ：滑石製石鍋　Ｆ：タイ産陶器

5－A

5－B

5－C

巻首図版6　A・B：木製品　C：海獣葡萄鏡

はじめに

今回、キャンプ桑江北側半分約38.4haが平成15年度末日をもって返還されました。これは町民はもとより、沖縄県民の永く待ち望んだ願いの一つでありました。特に基地の集中する町民にとって、戦後の復興はいやがうえにも広大な基地との隣り合わせの生活を余儀なくされ、苦労は言葉では言い表せないほどのものでありました。今回その土地の返還は新たな「まちづくり」地域として希望を抱いていることと思います。

戦前のキャンプ桑江地域には平安山・伊礼・桑江と3つの集落がありました。祖父母や両親からおりに触れて、その生い立ちや由来を聞くに及んで先祖伝来の土地・集落・田畑・山林に思いをはせたことと思います。

これらの土地の履歴である埋蔵文化財、いわゆる文化財保護の主旨である周知徹底を図る立場から、返還後の区画整理事業や諸開発に対応できる準備を北谷町教育委員会では進めてきました。

実際には平成7年度から文化庁の補助を得て、キャンプ桑江北側半分の返還跡地と関連施設を含め40.5haを3年計画で埋蔵文化財の有無の試掘調査をおこなってきました。

その結果、返還予定内には9遺跡と6遺物散布地が発見され、9遺跡で9.74ha、6遺物散布地で4.95haの範囲が確認されました。その後は9遺跡の範囲を確定するための範囲確認調査をおこなっています。

これらの事前調査では、当初の予定を上回るほどの先人たちの痕跡が発見され、沖縄諸島の編年が網羅できるほどの歴史があることが判明しました。約7000年前の縄文時代早期から15世紀のグスク時代まで、さらには戦前の集落まで連綿と痕跡がたどれ生活環境の良い地域であったようです。また、類例のない低湿地遺跡の発見があり、おびただしい有機質の出土遺物には往時の人々の木製道具、植生食物のみでなく、種子や樹木から古環境が再現できるほどの貴重な資料であるとのことです。

今後、これらの貴重な埋蔵文化財の保護を考慮に入れながら、これからおこなわれる跡地利用計画の桑江伊平土地区画整理事業、さらに諸開発との調和を計りながら文化財行政を進めていきたいと思います。

末尾になりましたが、ご指導やご助言、ご協力頂きました文化庁をはじめ、沖縄県文化課、那覇防衛施設局、在沖海兵隊環境保全部の皆様には心からお礼を申し上げます。

平成17年3月1日

北谷町教育委員会
教育長　瑞慶覽 朝宏

例　言

1．本報告書は平成7・8年度の「伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業」、平成9年度の「北谷城ほか発掘調査事業」として文化庁補助を受けてキャンプ桑江北側半分の約40.5haを3年間にまたがり試掘調査をおこなった結果をまとめたものである。

2．本事業を施行するにあたり那覇防衛施設局連絡調整課、在沖海兵隊基地施設土木部環境保護課・施設技術部不動産課、各ユーテリィテイセクションから多大な便宜を得た。

3．成果について辻誠一郎先生から国立歴史民俗博物館科学研究費で有機質の花粉・種子・有機質の分析、AMS14C年代測定の成果。樹種は森林総合研究所木材利用部組織研究室の能城修一先生の分析、獣魚骨は早稲田大学・東京農業大学非常勤講師樋泉岳二先生の分析、貝類は千葉県立中央博物館上席研究員黒住耐二先生の分析結果をいただいた。その一部については了解を得て記載した。熊本大学の甲元真之教授からは科学研究費で種子のAMS14C年代測定の成果、名古屋大学の渡辺誠教授も種子の14C年代測定もいただいた。

4．本書の編集は東門研治・中村愿・島袋春美で協議して行った。なお、執筆分担は以下の通りである。

第一章～第五章	中村愿
第六章	東門研治・中村愿・島袋春美
第七章	中村愿・東門研治

5．実測・集計・図面整理・トレース・図版作成等の資料整理は以下の専門員・専門補助員・補助員でおこなった。

島袋　春美	前川　恵子	玉城　和美	我那覇智美	照屋　高之
松原　哲志	真喜屋　隆	我如古真弓	與那覇政之	喜友名勇人
上間真寿美	豊里　初江	富平砂綾子	山城小百合	佐久間クリエ
東　　順子	八田　夕香			

6．本報告書に使用した米軍航空写真は沖縄県公文書館の承諾を得たものである。

7．本事業で試掘調査をし、出土した遺物又は調査記録は北谷町教育委員会に保管している。

＜巻首図版＞

巻首図版１　キャンプ桑江北側地区遠景
巻首図版２　キャンプ桑江北側の戦争前の様子
巻首図版３　キャンプ柔江北側試掘ポイントと遺跡の範囲
巻首図版４　Ａ：曽畑式十器、Ｂ：伊波式土器・大山式第Ⅳ類土器
巻首図版５　Ａ：黒曜石、Ｂ：チャート　Ｃ・Ｄ：木の実　Ｅ：滑石製石鍋　Ｆ：タイ産陶器
巻首図版６　Ａ・Ｂ：木製品　Ｃ：海獣葡萄鏡

＜本文目次＞

はじめに
例言
報告書抄録
第一章　北谷町の概要 …… 1
第二章　調査に至る経緯 …… 4
第三章　調査組織 …… 6
第四章　調査の方法 …… 8
　１．事務手続 …… 8
　２．事務手続きの経緯 …… 9
　３．実際の方法 …… 12
第五章　調査経過 …… 20
　１．三区の区分 …… 20
　２．三区分の詳細 …… 20
第六章　調査成果
　１地区　千原遺跡（平成9年度） …… 22
　２地区　平安山原B遺跡　（平成9年度） …… 24
　３地区　伊礼原C遺跡（平成9年度） …… 26
　４地区　平安山原Ａ遺跡（平成9年度） …… 28
　５地区　伊礼原D遺跡（平成9年度） …… 33
　６地区　伊礼原Ｃ遺跡（平成８年度） …… 47
　７地区　伊礼原Ｂ遺跡（平成８年度） …… 37
　８地区　伊礼原E遺跡（平成8年度） …… 39
　９地区　後兼久原遺跡（平成７年度） …… 41
　Ｆ地区　遺物散布地（平成７年度） …… 54
　Ａ地区　遺物散布地（平成9年度） …… 43
　Ｂ地区　遺物散布地（平成9年度） …… 43
　Ｃ地区　遺物散布地（平成9年度） …… 44
　Ｄ地区　遺物散布地（平成9年度） …… 45
　Ｅ地区　遺物散布地（平成８年度） …… 54
　地区外　遺物散布地（平成８年度） …… 55
第七章　まとめ …… 130

＜挿図目次＞

第１図　北谷町の遺跡分布 …… 2
第２図　基地内文化財取り扱いにおけるフローチャート ……13
第３図　米軍文書① ……14
第４図　米軍文書② ……15
第５図　米軍文書③ ……16
第６図　米軍文書④ ……17
第７図　調査カード ……19
第８図　キャンプ柔江北側位置と年度別調査区の範囲 ……21
第９図　キャンプ桑江試掘ポイント（平成9年度）第三期 ……23
第10図　キャンプ桑江試掘ポイント（平成9年度）第二期 ……39
第11図　キャンプ桑江試掘ポイント（平成7年度）第一期 ……52
第12図　１地区　千原遺跡　試掘No.30 ……61
第13図　２也区　平安山原B遺跡　試掘No.20 ……62
第14図　２地区　平安山原B遺跡　試掘No.21 ……63
第15図　２地区　平安山原B遺跡　試掘No.53 ……64
第16図　３地区　伊礼原C遺跡　試掘No.6 ……65
第17図　４地区　平安山原A遺跡　試掘No.11 ……66
第18図　４地区　平安山原A遺跡　試掘No.37 ……67
第19図　４地区　平安山原A遺跡　試掘No.59 ……68
第20図　４地区　平安山原A遺跡　試掘No.72 ……69
第21図　５地区　伊礼原D遺跡　試掘No.50 ……70
第22図　５地区　伊礼原D遺跡　試掘No.52 ……71
第23図　５地区　伊礼原D遺跡　試掘No.62 ……72
第24図　５地区　伊礼原D遺跡　試掘No.65 ……73
第25図　６地区　伊礼原C遺跡　試掘No.119 ……74
第26図　６地区　伊礼原C遺跡　試掘No.125 ……75
第27図　６地区　伊礼原C遺跡　試掘No.127 ……76
第28図　６地区　伊礼原C遺跡　試掘No.133 ……77
第29図　６地区　伊礼原C遺跡　試掘No.138 ……78
第30図　６地区　伊礼原C遺跡　試掘No.143 ……79
第31図　６地区　伊礼原C遺跡　試掘No.145 ……80
第32図　６地区　伊礼原C遺跡　試掘No.146 ……81
第33図　７地区　伊礼原B遺跡　試掘No.97 ……82
第34図　７地区　伊礼原B遺跡　試掘No.116 ……83
第35図　７地区　伊礼原B遺跡　試掘No.136 ……84
第36図　８地区　伊礼原E遺跡　試屈No.60 ……85
第37図　８地区　伊礼原E遺跡　試掘No.72 ……86
第38図　８地区　伊礼原E遺跡　試掘No.144 ……87
第39図　９地区　後兼久原遺跡　試掘No.19 ……88
第40図　９地区　後兼久原遺跡　試掘No.26 ……89
第41図　９地区　後兼久原遺跡　試掘No.139 ……90

第42図　A地区　遺物散布地　試掘No.40 ……91
第43図　B地区　遺物散布地　試掘No.41 ……92
第44図　C地区　遺物散布地　試掘No.3 ……93
第45図　D地区　遺物散布地　試掘No.45 ……94
第46図　E地区　遺物散布地　試掘No.42 ……95
第47図　F地区　遺物散布地　試掘No.119……96
第48図　地区外　遺物散布地　試掘No.69 ……97
第49図　キャンプ桑江試掘ポイント　第一期（平成9年度）……98
第50図　キャンプ桑江試掘ポイント　第二期（平成8年度）……99
第51図　キャンプ桑江試掘ポイント　第三期（平成7年度）……100
第52図　柱状土層断面図（1 ～ 5ライン）……102
第53図　柱状土層断面図（6 ～ 8ライン）……104
第54図　柱状土層断面図（9・10ライン）……106
第55図　旧地形の復元状況 ……108
第56図　土器 ……110
第57図　土器 ……111
第58図　土器 ……112
第59図　土器 ……113
第60図　土器 ……114
第61図　青磁 ……115
第62図　青磁・染付 ……116
第63図　染付・白磁・天日・カムイヤキ・沖縄産陶器・本土産陶器 ……117
第64図　貝製品 ……118
第65図　骨製品 ・石製品・滑石製石鍋 ……119
第66図　木製品 ……120
第67図　タイ産陶器 ……32
第68図　海獣葡萄鏡 ……32

＜図版目次＞

図版１　１地区　千原遺跡　試掘No.30　南壁 ……61
図版２　２地区　平安山原B遺跡　試掘No.20　北壁 ……62
図版３　２地区　平安山原B遺跡　試掘No.21　西壁 ……63
図版４　２地区　平安山原B遺跡　試掘No.53　南壁 ……64
図版５　３地区　伊礼原C遺跡　試掘No.6　南壁 ……65
図版６　４地区　平安山原A遺跡　試掘No.11　北東壁 ……63
図版７　４地区　平安山原A遺跡　試掘No.37　北西壁 ……67
図版８　４地区　平安山原A遺跡　試掘No.59　東壁 ……68
図版９　４地区　平安山原A遺跡　試掘No.72　東壁 ……66
図版10　５地区　伊礼原D遺跡　試掘No.50　北壁 ……70
図版11　５地区　伊礼原D遺跡　試掘No.52　北壁 ……71
図版12　５地区　伊礼原D遺跡　試掘No.62　東壁 ……72

図版13　5地区　伊礼原D遺跡　試掘No.65　西壁 ……73
図版14　6地区　伊礼原C遺跡　試掘No.119　北壁 ……74
図版15　6地区　伊礼原C遺跡　試掘No.125　南壁 ……75
図版16　6地区　伊礼原C遺跡　試掘No.127　南壁 ……76
図版17　6地区　伊礼原C遺跡　試掘No.133　北壁 ……77
図版18　6地区　伊礼原C遺跡　試掘No.138　南西壁 ……78
図版19　6地区　伊礼原C遺跡　試掘No.143　北壁 ……79
図版20　6地区　伊礼原C遺跡　試掘No.145　東壁 ……80
図版21　6地区　伊礼原C遺跡　試掘No.146　北壁 ……81
図版22　7地区　伊礼原B遺跡　試掘No.97　南壁 ……82
図版23　7地区　伊礼原B遺跡　試掘No.116　東壁 ……83
図版24　7地区　伊礼原B遺跡　試掘No.136　南壁 ……84
図版25　8地区　伊礼原E遺跡　試掘No.72　南壁 ……85
図版26　9地区　後兼久原遺跡　試掘No.19　北東壁 ……88
図版27　9地区　後兼久原遺跡　試掘No.26　南東壁 ……89
図版28　9地区　後兼久原遺跡　試掘No.139　西南壁 ……90
図版29　A地区　遺物散布地　試掘No.40　北壁 ……91
図版30　B地区　遺物散布地　試掘No.41　西壁 ……92
図版31　C地区　遺物散布地　試掘No.3　南壁 ……93
図版32　D地区　遺物散布地　試掘No.45　西壁 ……94
図版33　E地区　遺物散布地　試掘No.42　南壁 ……95
図版34　F地区　遺物散布地　試掘No.119　北壁 ……96
図版35　地区外　遺物散布地　試掘No.69　西壁 ……97
図版36　土器 ……137
図版37　土器 ……139
図版38　土器 ……141
図版39　土器 ……144
図版40　土器 ……146
図版41　青磁 ……148
図版42　青磁・染付 ……149
図版43　染付・白磁・天日・カムイヤキ・沖縄産陶器・本土産陶器 ……150
図版44　貝製品 ……151
図版45　貝製品 ……152
図版46　骨製品・石製品 ……153
図版47　石器（1） ……154
図版48　石器（2） ……155
図版49　チャート（1） ……156
図版50　チャート（2） ……157
図版51　木の実（1） ……158
図版52　木の実（2） ……159
図版53　英字新聞資料 ……160

<表目次>

第１表　１地区　千原遺跡　（平成９年度）出土遺物集計 ……24
第２表　２地区　平安山原Ｂ遺跡（平成９年度）出土遺物集計 ……27
第３表　３地区　伊礼原Ｃ遺跡　（平成９年度）出土遺物集計 ……29
第４表　４地区　平安山原Ａ遺跡（平成９年度）出土遺物集計 ……33
第５表　５地区　伊礼原Ｄ遺跡　（平成９年度）出土遺物集計 ……37
第６表　樹種リスト　６地区　試掘No.143より出土（平成８年度） ……45
第７表　種子リスト　６地区　試掘No.143より出土（平成８年度） ……45
第８表　６地区　伊礼原Ｃ遺跡（平成８年度）出土遺物集計 ……46
第９表　７地区　伊礼原Ｂ遺跡（平成８年度）出土遺物集計 ……48
第10表　８地区　伊礼原Ｅ遺跡（平成８年度）出土遺物集計 ……50
第11表　９地区　後兼久原遺跡（平成７年度）出土遺物集計 ……53
第12表　Ａ地区　遺物散布地　（平成９年度）出土遺物集計 ……54
第13表　Ｂ地区　遺物散布地　（平成９年度）出土遺物集計 ……55
第14表　Ｃ地区　遺物散布地　（平成９年度）出土遺物集計 ……56
第15表　Ｄ地区　遺物散布地　（平成９年度）出土遺物集計 ……56
第16表　Ｅ地区　遺物散布地　（平成８年度）出土遺物集計 ……57
第17表　Ｆ地区　遺物散布地　（平成７年度）出土遺物集計 ……59
第18表　地区外　遺物散布地　（平成８年度）出土遺物集計 ……60
第19表　各遺跡の状況……101
第20表　遺物散布地域……101
第21表　土器・青磁・染付観察一覧……121
第22表　青磁・染付観察一覧……127
第23表　骨製品観察一覧……128
第24表　貝製品観察一覧……129
第25表　石器観察一覧……140

報 告 書 抄 録

ふ り が な	きやんぷくわえきたがわへんかんにともなうしくつちょうさ
書 名	キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査
副 書 名	伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業
巻 次	
シ リ ー ズ 名	北谷町文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第 23 集
編 著 者 名	中村 愿　　東門 研治　　島袋 春美
発 行 機 関	北谷町教育委員会
所 在 地	〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地　TEL　098-936-3159
発 行 年 月 日	西暦2005年3月31日（平成17年）

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	°　′　″	°　′　″			
伊礼原B遺跡ほか	北谷町字桑江	473260		26° 19' 25" 26° 19' 27"	127° 45' 21" 127° 45' 50"	1995.4～ 2010.3	1,6200㎡	キャンプ桑江北側返還にともなう緊急発掘調査

所収遺跡名		種別	主な時代	主な遺物	特記事項
H7	後兼久原遺跡	9地区		土器,青磁	
H7	遺物散布地	F地区		土器,青磁,染付	
H8	伊礼原C遺跡	6地区		土器,青磁,貝製品	
H8	伊礼原B遺跡	7地区		土器,青磁,染付,沖縄産陶器,本土産磁器	
H8	伊礼原E遺跡	8地区		土器,貝製品	
H8	遺物散布地	地区外		染付,貝製品	
H9	千原遺跡	1地区		カムィヤキ,白磁,青磁,染付,天目	
H9	平安山原B遺跡	3地区		土器	
H9	平安山原A遺跡	4地区		カムィヤキ,白磁,青磁,染付,貝製品	
H9	伊礼原D遺跡	5地区		土器,青磁,貝製品	
H9	遺物散布地	A地区		土器.白磁	
H9	遺物散布地	B地区		土器,青磁	
H9	遺物散布地	D地区		土器,貝製品	
	遺物散布地	試掘143		曽畑式土器	
	遺物散布地	2地区		白磁,　,染付	

第一章　北谷町の概況

北谷町は沖縄本島の略南北に細長く伸びる島の脊梁からみると、中部のやや南よりの西に面しており、東シナ海に面した位置にある。

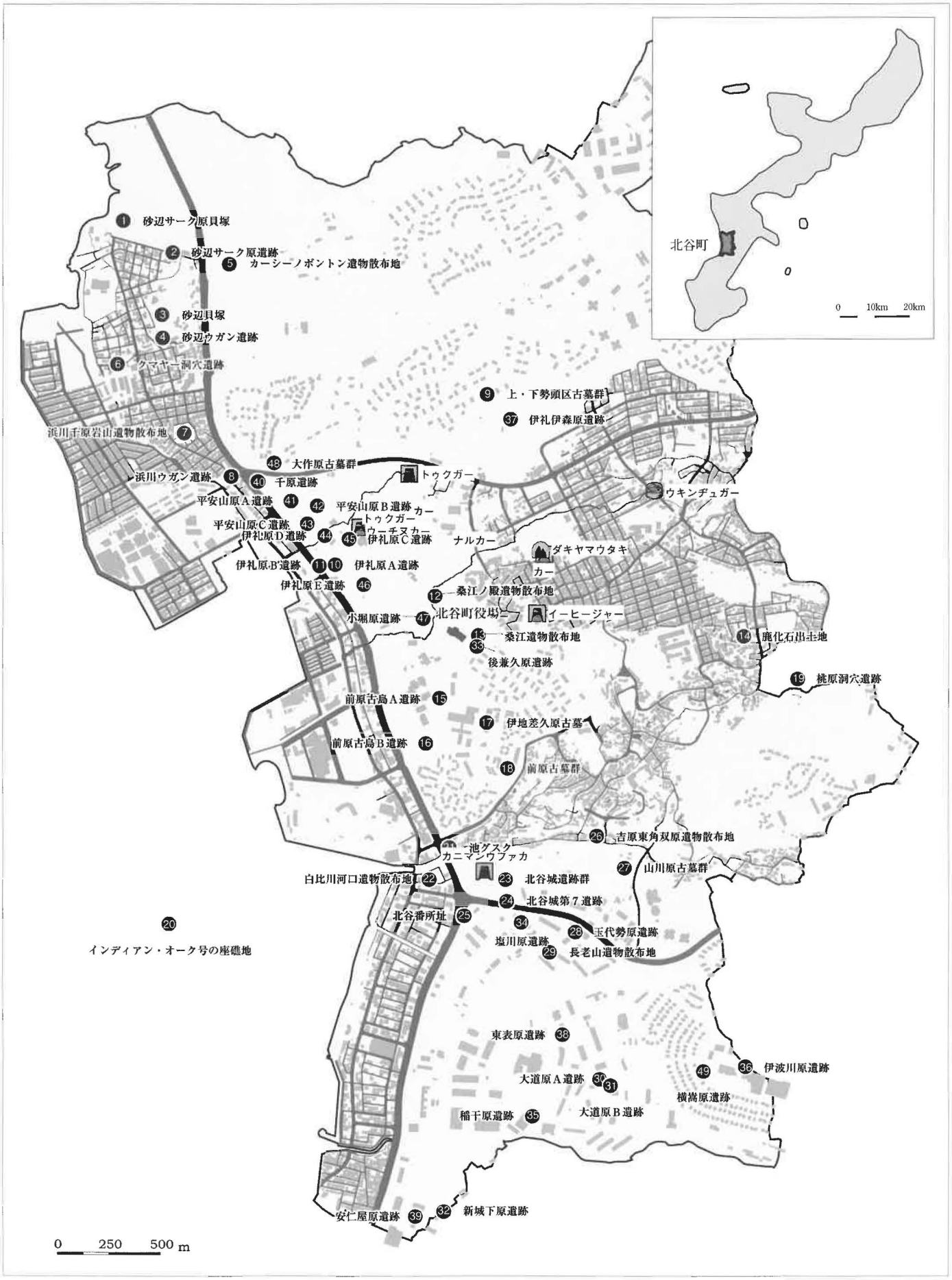
南北約6.0km、東西約4.3km、総面積13.63㎢とこぢんまりとした町である。東側は標高約100mの脊梁にあたり、東側と西側の分水点に接し、東側は沖縄市になる。北側はその脊梁が不明瞭になり低く広くなるが、かろうじて目線で追える稜線が拡がり開ける。ここが極東一の声が高い米軍嘉手納飛行場である。地図上ではその間に北谷町と嘉手納町との行政の境が明確にラインを追うことができるが、現地に立つとナビゲーターに頼らざるえない状況で、広々とした芝生と滑走路が拡がるだけである。南側は脊梁の一部を追うことができる標高約70mの台地が拡がり、これを反時計回りに取り巻く形で流れる佐阿天川があり、東シナ海にそそぐ河口を境とし、南側の宜野湾市との行政境になっている。西側は東シナ海に面していることから夕日の沈む景観が慶良間諸島を介して美しい地域といわれる所以である。

文献的には「おもろさうし」に記録されている“くわい”“きたたん”と記述されているが、三山時代というグスク時代でさえその城の所属は不明である。その後の文献からみると中山に所属されている記録が多いが、北谷町の中央部を東西に横切る白比川を境として北と南ではノロの所管が異なり、また、民俗的伝承も北側方向と南側方向では異なるようである。白比川を境として北側はグスク時代の三権分立時代中頃の北山（今帰仁城）との伝承が強く、北の砂辺集落に残っている。第二尚氏時代になると中山（首里城）との関わりで緊密になったという。

白比川の南側にそって存在する北谷城は中山との関わりがあるようで、伝承では金満按司、つづく大川按司と谷茶按司との攻防で大川按司が復興し、北谷王子に引き継がれるらしい。考古学的には、これまでの町単独による第14回目の試掘調査によると染付碗の出土する以前、青磁のみの出土する時期にグスクの一の郭が炎上する層が確認されていて、15世紀前半のころと判断されている。前述の攻防はこのころと考えられる。後の近世に組踊の奇才といわれている玉城朝薫による創作劇「大川敵討」は北谷城がモデルだともいわれている。劇中の重陣“村原”は砂辺の村内原の人ではないかとの声もささやかれている。谷茶は恩納村の谷茶ではなく、現嘉手納町に所在する屋良グスク北側の地域ではとの話もある。屋良グスクも北谷グスクも古名は大川グスクであることから、戦前の北谷村は戦後の嘉手納飛行場の拡張に伴う分村によって嘉手納町・北谷町に分かれた以前の領域内の攻防ということになる。

北谷グスクの大川按司が初戦で敗れ、隠れたところがキャンプ桑江の中央、北東側に位置するナルカー（湧水）の谷間深くの洞穴という。このナルカーの南となりには今回の試掘調査で発見され、北谷町の庁舎建設に伴う緊急調査でグスク時代初期の11世紀後半から12世紀前半の沖縄では初めての住居址と高床式建物址がセットで、しかも集落・墓域を形成していたことが明らかになった地域でもある。この集落は15世紀前半の時期を最後に終焉を迎えるようである。北谷グスクの攻防の時期と軌を一にしているのである。

どうも15世紀前半頃に“きたたん”の領域ができたように思われる。これらはすべて東側の脊梁部から西側へ形成された海岸段丘の隆起石灰岩が沖積平野部近くで湧き出す湧水に要因がある



第1図　北谷町の遺跡分布

と考えられ、キャンプ桑江地域だけでも北側からトクガー、ウーチヌカー、ウキンジュ、ナルカー、イーヒジャー（上樋川）という湧水が知られており、グスク時代（12世紀前後の集落と15世紀前半の集落）と近世の沖積平野部への集落形成過程の重要な要因であったと思われる。戦前のキャンプ桑江地域内には北から平安山、伊礼、桑江の本集落があり、その個々の集落の周辺に寄留した人々の散村が形成され、現国道58号に沿ってその形成が顕著であったことが伝承や屋敷林の成長過程で拡がる様子が窺える。

そのような純農村であった戦前の北谷村に1945年（昭和20年）4月1日に米国連合軍は、北の読谷村の残波岬から北谷村の桑江集落の前面に上陸した。上陸した米軍は多量の物資の陸揚げと、飲料水としての湧水の確保に専念し、詳細な米軍地図には「spring」と書かれた正確な位置が示されている。キャンプ桑江内のナルカーは平成10年の復元調査の際に、米軍が簡易水道の施設を1946年4月10日に完成させた銘記が英文で記述されていた。

また、キャンプ桑江内の字小堀原237番地付近には戦後復興の「1949年10月4日琉球列島司令部軍政府及び沖縄地区技術本部は最高計画に従って沖縄の復興をととのえるためこの地に統合司令部を設置した。」との碑文があり、戦後沖縄の軍事建設はこの地から発信されたことが窺える。その後、基地強化は進められ今日のような施設が建設された。

米軍施設は白いビルディングと芝生に囲まれた平坦部にある。戦前のおもかげは屋敷林として植栽された福木、ガジュマル、オオハマボウ、まれにテリハボク、アカギの大樹が茂り以前に屋敷があったことが示しているだけである。古老はこの樹木を目当てに戦前の集落のたたずまいや拝所、河川の流れ、田畑の位置関係を語ってくれる記憶の証言者である。戦後60年も経過した現在、記憶の証言者も限られ、当時10歳前後から15歳の人に限られてくる。年少の人は記憶がおぼろで、15歳以上の人になると生地から離れ、また、歳を増すと記憶が判然としない現状である。

戦後のこの地形が、戦前の旧地形をどれほど残し、どれほど改変されてのかを復元することから始めてきた。幸いに、基地内の開発行為に伴う試掘調査は昭和60年から確立していたので、少しづつではあるがデータを蓄積することができた。もう一つは、北谷城の試掘調査は毎年少しづつではあったが、町単独の事業として行うことができた。前者は旧地形の復元、後者は事務手続きのノウハウを培うことができた。

その結果、機械力で無造作に造成してきたと考えれた米軍施設は、マウンドは平らに削りその上には建物を建設し、削った土砂で谷間を埋め、そこには道路を走らせて地形をうまく取り込んでいることが理解できた。ただ、判断できないのがキャンプ桑江の旧集落の中央部に大きな建物である陸軍病院（現海軍病院）と、米軍住宅を集中させていたことである。それは後に知ることになったが、土台は浅く、大きく作り、その上に建物を造る工法をおこなっている。マウンド上の遺跡は削平された可能性が高いが、平坦部や斜面地の遺跡は残存していることが高いことが判断できた。

〈参考文献〉

1　中村　愿「砂辺貝塚・クマヤー洞穴遺跡」北谷町教育委員会 1989年
2　北谷町役場 『北谷町史　第三巻　資料編2　民俗　上』　1992年
3　北谷町役場 『北谷町史　第二巻　資料編　1986年　前近代・近代文献資料』　1992年
4　中村　愿・田場勝也 『北谷町の遺跡－詳細分布調査報告書－』 北谷町教育委員会 1994年
5　中村　愿・与那覇政之「後兼久原遺跡展」 北谷町教育委員会 1997年
6　北谷町役場 『北谷町史　第六巻　資料編5　北谷の戦後』　1998年

第二章　調査に至る経過

キャンプ桑江北側半分が返還される話に合ったのは平成5年8月で、例年のごとく夏休みの親子文化財巡りの立ち入り許可書を申請に、在沖海兵隊不動産事務所に文書を持っていった際のできごとからである。奥のオフィスから窓口で手続きをしている会話を聞いた事務所所長のポール・宜野座さんが「ナカムラさんおめでとう」「キャンプ・クワエが返還されますよ、」との第一声の喜びの声であった。その内容からすると平成13年３月に返還されるという。

沖縄県文化課にその旨伝え、試掘調査の必要性とこれまで前例があるかどうかの情報を求めたが、県内では大規模な試掘調査は類例がないということだった。近隣市町村の返還後の遺跡の確認の状況をみると、かなりの時間を費やすことが窺えることから、早めの遺跡の確認調査の必要性を痛感した。これまで町内の基地内で埋蔵文化財の有無確認を行う際にバックホー（ユンボ）を用いて試掘調査を進めてきた経験を元に、確実に確認できる方法を用いた。

基地内では戦後建設のビルが老朽化し、立て直しのものが多く、使用中のビルの周辺で試掘調査を行うことから試掘調査の間合い（ピッチ）も20m間隔のものと30m間隔のものとを臨機応変に使い分けて行っている。新設のビルの場合は基本的に30m間隔のメッシュを組んで機械的に掘り下げて有無の確認を行っている。

包含層にあたるとその中間地点を掘削し、包含層の粗密や有無の確認をおこないその範囲の縮小化を図るとともに、遺跡の中心部の方向の確認をも行った。間隔の間をバックホーで掘る穴（グリット）は沖積平野部では4×4mの範囲を、石灰岩丘陵部では3×3mの範囲を掘削してきた。キャンプ桑江やキャンプ瑞慶覧の沖積平野部では平均的に表土下約2mを掘り下げると地下水が流出し、その水圧で掘り下げた壁面が崩落して原型を保ちえないからである。キャンプ瑞慶覧の石灰岩丘陵部では地下水の流出はなく崩落の危険性はないが、一見単調な台地も場所によっては陥没ドリーネを埋めた場所があり5～6m下で焼土とともにグスク時代の土器が出土することがある。このような場合は試掘穴を拡張するか、バックホー（ユンボ）を07に替えての試掘となる。基本的にはグリットの深さは丘陵部では石灰岩が露出するまで沖積平野部では07のバックホーがとどく約6mを掘削の深さとした。

嘉手納飛行場のなだらかな丘陵部では30mピッチで開けたグリットの直線ライン6本で表土下2mで厚さ60cm～1mの焼けた炭化材がレンズ状に堆積している開発地域があった。
時代を示す物証がなく、真ん中の3本のグリットをトレンチ掘を行い、地質学の大城逸朗先生に急遽来て頂き、探索したが物証がなくデータのみを記録し終えた例もあった。

以上が北谷町内に所在する嘉手納飛行場、キャンプ桑江やキャンプ瑞慶覧で那覇防衛施設局の埋蔵文化財の有無紹介の試掘調査に立ち会ってきた大まかな経緯である。これらは現地での試掘調査の経験によるものであるが、それのみでは遺跡の予測は不可能である。北谷町は幸いにも１／2,500の地形図に地籍図を併合した地図（那覇防衛施設局作成）があり、その併合図に地籍図原本から土地利用の色分けを3ヶ月をかけて作成した。拝所、屋敷、墓地、湧水、川、畑、水田、山林、字界、小字界をみると戦前の集落のたたずまい、湧水と田畑の様子、墓地と山林の関係が地形を介して浮き上がってきた。試掘調査では常に縮小版を持ち歩き現地で照合に使用した。

地形図では見えない微妙な地形は、戦時中米軍が撮影した1945年１月3日の航空写真、最近では1945年2月28日の航空写真がさらに鮮明に示していた。山林で樹木の茂りが円形に見え、陥没ドリーネの痕跡を追うことができた。斜面の樹木の茂り具合で急斜面かなだらかな斜面かが判断でき、コ状の茂り方であるとその下位には墓があることを暗示していた。屋敷周辺の防風林の成長度合いで旧新の集落の拡がり方が確認できるのである。現存する古木が航空写真で確認できる場合がポイントの再確認になることである。

これらの地形・地籍併合図と航空写真に、確認されている遺跡を当てはめると一応の存在場所がおぼろではあるが立地条件がよめてきた。

遺跡の立地について町内の遺跡を概観すると北谷町内では砂辺集落の東側背後に位置する加志原の標高約30mの丘陵上に砂辺貝塚が位置し、それを中心として北側沖積平野部に砂丘遺跡であるサークバル貝塚、それらの中間の微高地にグスク時代初期の12世紀のサークバル遺跡（集落）、西側の集落内には陥没ドリーネ内に存在するクマヤ洞穴遺跡等々が存在する。

南側の北谷城の位置する丘陵部には、沖積平野部から出土する爪形文土器の遺物散布地、荻堂式土器を採集した北谷城の斜面、飛び石状に点在する南側の独立丘陵部（伝道、玉代勢、前城）には7～8世紀の集落址、グスク時代の玉代勢原遺跡が存在する。

両地域とも2～3ヵ所の湧水を近くに保有していることが大きな特徴である。これらの視点で沖積平野部に位置しているキャンプ桑江地域に目を向けると、キャンプ桑江地域の東側は標高約30mの石灰岩丘陵部が拡がり、その境目に湧水が4～5ヶ所確認されるのである。丘陵上部の地域には復帰後、新興住宅が形成されているが、さらに東の桃原洞穴や鹿化石が発見されている以外は遺跡の痕跡が確認されていない地域である。湧水の下流地域は地質的に断層があるらしく、その上に沖積平野部が乗っているという。キャンプ桑江の中央部、旧伊礼集落が存在した所には標高10mに満たない石灰岩微高地が点在し、そのあたりが集落の発祥を示す拝所が点在している。微高地の西先がケラマジーと呼ばれるニライカナイの拝所があり由緒ある地域となっている。東丘陵部には遺跡の存在がなく、湧水の下流域の微高地に古い集落が存在することから、遺跡の存在の高い地域と判断された。

このような北谷町内域の遺跡の存在を、沖縄本島の遺跡の立地にあてはめると、石灰岩丘陵部の段丘が卓越する本島南部と、高島が急激に海中に没する北部の遺跡の立地の両者の特徴を保持していることに気づく。本島南部は丘陵部の段丘上部の縁辺部に古い生活址があり、海岸砂丘地の背後の低地に新しい生活址が住分けられている。本島北部は後者の海岸砂丘地の背後に新旧の生活址が確認できる。立地はいずれも異なるように見えるが、その遺跡の規模については大同小異である。時代によって多少の趣向がみられるが両地域とも同様である。

沖縄本島の遺跡の規模は新しくなると拡大するが、爪形文土器を出土する縄文早期の最小の遺跡でも嘉手納町野国貝塚Ｂ遺跡、与那城町藪地洞穴遺跡、読谷村大久保原遺跡の規模からすると100㎡ほどはあると考えられ、遺跡周辺の散布地はその倍はあり、数片の土器と包含層の末端を30mピッチで引っかければ、その中間の試掘で本体に近いポイントは確認できると考えられる。メッシュ状に行えばさらにその確率は増すものと思われる。

伊波式土器・荻堂式土器期の縄文後期の時期の生活址は石灰岩丘陵部の崖下と考えられているが、後続の宇佐浜式土器期の縄文晩期と同じように丘陵上部にあると考えている。学史的には崖

下の貝塚が目にとまるが、生活址の様子はうかがえない。崖上からの投棄の結果であると考える。宇佐浜式土器期の遺跡の規模は大小あるが、こぢんまりした国頭村宇佐浜遺跡で400㎡、北谷町砂辺貝塚で1,000㎡、広い与那城町シヌグ堂遺跡で3,000㎡の規模である。伊波式・荻堂式土器期の丘陵上部での単独遺跡の発見はない。いずれの場合も宇佐浜式土器期の生活址の下面で重複して発見されている。与那城町仲原遺跡、沖縄市馬上原遺跡、北谷町砂辺貝塚などである。

海岸砂丘地に形成される弥生時代以降の遺跡は、その砂丘背後と丘陵地との接点に海浜に沿って細長く1,000㎡以上に形成されることから、生活址やその縁辺部は30mピッチで確実に確認できると考えられる。

以上が北谷町の基地内における試掘調査の結果から、遺跡範囲の確認調査の確実性、及び沖縄本島の遺跡の立地の特徴から、これまで30mピッチのメッシュで試掘調査を行えば埋蔵文化財の有無の確認はできるものと判断される。

〈参考文献〉

1　岸本義彦・島袋　洋ほか「野国　野国貝塚群Ｂ地点発掘調査報告」沖縄県教育委員会 1984年
2　国分直一・三島格「ヤブチ式土器　琉球と奄美大島における文化交流の一証跡」下関水産大学校 1965年
3　仲宗根求 「読谷村･大久保原遺跡検出の埋葬墓」 沖縄考古学会 1991年
4　知念勇・岸本義彦・大城秀子「宇佐浜遺跡　発掘調査報告」沖縄県教育委員会 1989.3年
5　中村　愿「砂辺貝塚･クマヤー洞穴遺跡」北谷町教育委員会 1989年
6　金武正紀・比嘉春美・金子浩昌「シヌグ堂遺跡－第1･2･3次発掘調査報告－」沖縄県教育委員会 1985.3年
7　當眞嗣一・上原静「伊計島の遺跡－神山遺跡・仲原遺跡確認調査概報－」沖縄県教育委員会 1981.3年
8　宮城利旭・比嘉賀盛ほか 「馬上原遺跡」 沖縄市教育委員会 1997.1年
9　沖縄県立埋蔵文化財センター 『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群』 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002年
10　安里嗣淳･大城秀子･花城潤子ほか「勝連城跡－南貝塚および二の丸北地点の発掘調査－」勝連村教育委員会 1984年

第三章　調査組織

補助事業に伴う平成7・8・9年度の試掘調査の組織体制は以下の通りである。

調査主体	北谷町教育委員会		
調査責任者	教育長	當山　憲一	(平成7～9年度)
	文化課課長	松田　盛	(平成7～9年度)
調査総括	文化課係長	中村　愿	(平成7～9年度)
調査事務		徳吉美奈子	(平成7・8年度)
		我那覇智美	(平成9年度)
調査指導	辻　誠一郎	(国立歴史民俗博物館　歴史研究部助教授　現東京大学教授)	
	能城　修一	(森林総合研究所　木材利用部組織研究室)	
	甲元　真之	(熊本大学文学部教授)	
	渡辺　誠	(名古屋大学文学部教授)	
	山崎　純男	(福岡市教育委員会文化財部課長)	

樋泉　岳二　（早稲田大学・東京農業大学非常勤講師）
黒住　耐二　（千葉県中央博物館上席研究員）
西谷　大　（国立歴史民俗博物館考古学研究部助手）
島袋　春美　（沖縄県文化課嘱託）

調査協力　ポール・宜野座（在沖海兵隊基地施設部不動産事務所所長）
和宇慶　修　（　同上　不動産専門官）
ロミー・宇良　（キャンプ・コーディネーター事務官）
クリス・ホワイト（在沖海兵隊基地環境保全課　自然・文化財保護管）
平敷　兼直　（　同上　自然・文化財保護係）
エリック・ウイリアムズ（　同上　考古学専門官）
喜友名朝重　（在沖海兵隊基地施設営繕部部長）

調査担当　文化課係長　中村　愿　（平成7～9年度）
文化課主事　山城　安生（平成8・9年度）
文化課主事　東門　研治（平成8・9年度）

調査補助員　文化課嘱託　山城　安生（平成7年度）

臨時職員　安里　利枝（平成8年度）
赤嶺　健・花城　可時・與那覇政之（平成8年度）
上間　庄二・儀間　哲二（平成9年度）

日々雇用

平成7年度

喜友名勇人　金城　志哉　与那嶺昌司　国吉　康隆　宮城　弘樹
島袋かおり　仲嶺久里子　山里　千春　仲宗根　禎　玉城　優香
蔵本　雅美　伊藝　有砂　赤嶺　健　花城　可時
渡久地政英　知念　清　渡口　英孝　名嘉　實　我如古　清
仲宗根順次　宮里　盛安　上間　常貞　横田　栄喜　島袋　林吉
下地　寛勝　富村　朝盛　金城　貞夫　湧田　春子　普久原文子
稲田セツ子

平成8年度

名嘉　實　我如古　清　喜屋武盛基　仲宗根順次　宮里　盛安
植田　据治　金城　良夫　上間　常貞　下地　寛勝　宮平　孝重
渡久地政英　平良　松芳

平成9年度

砂川　政幸　花城　可時　伊禮　一恵　浜元　葉月　町田　史野
島尻　綾野

委託

平成9年度　（沖縄市シルバー人材センター）

名嘉　實　我如古　清　喜屋武盛基　宮里　盛安　金城　良夫
上間　常貞　渡久地政英　平良　松芳　郡山　隆彦　新城　正雄

第四章　調査の方法

これまでの基地内における試掘調査の方法から、今回のキャンプ桑江北側半分の試掘調査は以下の方法を採用することとした。

返還予定地の40.5haを単年度で試掘調査を行うには、まだ機能している施設、それに伴う電気・水道・下水道埋設施設の事前認可、最終許可や立ち入り許可の一連の米軍許可をもらうには事務手続きや現地立ち会い許可の事前事務手続きが膨大なことから、3区分して行うこととした。

当初、３区分を行い北側から、中央部、南側と随時行う予定であったが、平成６年、平成７年度の町予算段階で、試掘予定の南側に庁舎建設の予定が返還を先行して建設されることが判明し、おのずから南側から試掘調査を行うこととなった。

年度ごとの区分はキャンプ桑江北側半分約40.5haは、略南北に走る国道58号沿いの1.15kmを南北の基準とし、南側の返還地の境になる東西の底辺約0.5kmを略三角形をする面積である。底辺の長い地区は南北の高さを短くし、面積をできるだけ均等にする方法を考慮した。しかし、区分界は現状の稼働している施設の現状から視覚での区分を優先したため、３区分の均等な区分でなく、大小の区分となった。

１．事務手続き

フェンスの向こうの基地内は、基本的に国際法からみると日本国内の法律がおよばない地外法権の地域である。立ち入り許可についてもそれなりの手続きが必要で正式なものと、簡易なものがある。簡易なものは基地内に所在する拝所、墓等に参拝する場合の一般からの要請による役場総務課の窓口でその場でもらえる仮パス（書類）と米国不動産事務所に直接行ってその場で発行してもらえる仮パスがある。前者が嘉手納飛行場の空軍管轄の立ち入り許可書で、後者がキャンプ桑江、キャンプ瑞慶覧に立ち入る場合の海兵隊所属の許可書である。

正式な場合は公務で短・長期で立ち入る際の手続きである。平成8年度4月までは米軍の窓口である那覇防衛施設局管理課が行い、５月以降は所在する米軍施設と直接市町村が手続きすることとなった。後に知ったがSACO：special action committee on okinawa「沖縄に関する特別行動委員会」によるキャンプ桑江返還合意が決まった際に、同手続きも改変されたらしい。

以前の手続きは那覇防衛施設局の管理課に立ち入りの目的とその理由を書面にし、管理課が審査し、受理・不受理の判断を行い。受理の場合は和文を英文に変え、各所在の米軍窓口に出し、その返事を持って市町村に回答を出すという経緯であった。約１ヶ月の月日を費やすものである。その後は直接米軍施設内の個々のセクション（部署）に申請を行うのである。まず、立ち入り者の確認部署、調査場所の確認、調査地域の埋設物の確認という順序で手続きを行うのである。第図２が基地内立ち入りの手続き経過を示したフローチャートである。

合意以後の手続きは、那覇防衛施設局の窓口が所在地の米軍に申請することになったことである。海兵隊はキャンプ瑞慶覧内にある報道部、別名Ｇ５（ジーファイブ）に提出することになった。和文であると1.5月、英文であると2週間で返事が来ることになった。

また、平成７年度からは米軍海兵隊の環境保全課内に、基地内の動植物の保全と埋蔵文化財の

保全を兼務する職員の配置がされたことである。これらは平成元年に米本国から基地内の文化財について、日本国内にある米軍施設内の有無確認の総合調査の結果からである。海兵隊が1991年に調査成果をまとめ、空軍は1993年にそれをまとめた。主に所在する都道府県や市町村からの資料収集やフィールド調査の成果を英文としてまとめたものである。それらの成果を持って平成９年度からは環境保全課に考古学専門の研究者が米本国から配置され、平成13年からは日本の考古学専門の研究者が配置されるようになった。

それ以前は米軍の建設計画側と那覇防衛施設局との建設場所についての二転三転するトラブルがなくなったと聞いている。一度、呼ばれてその会議にも参加したことがあるが、米軍上層部は埋蔵文化財の歴史についてはかなりの関心と理解を示すことが判断できた。

２．事務手続きの経緯

なお、調査に至る事務手続きは、以下の経緯である。

平成７年度

平成6年 6月29日　平成7年度文化財関係補助事業計画について（照会）
平成6年 7月 7日　同上事業について（回答）
平成6年 9月19日　平成7年度予算要求資料の提出について（進達）
平成6年12月 9日　平成7年度文化財関係補助事業計画書の提出について
平成6年12月15日　同上事業について（回答）
平成7年 6月13日　平成7年度文化財関係国庫補助事業について（通知）
平成7年 6月22日　平成7年度文化財保存事業費補助金交付申請書
名称「伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査」
平成7年10月30日　伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査費補助について（通知）
国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知
平成7年7月28日付け委保第71号「伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査」
平成7年10月30日　平成7年度文化財保存事業費補助金交付決定について
（通知）沖縄県補助金等の交付に関する規則4条の規定による
平成7年11月22日　キャンプ桑江試掘調査の事前調整　那覇防衛施設局連絡調整第一課
平成7年12月 5日　磁気探査の業者選定委員会への諮問
12月 7日　磁気探査指名業者選定審査について（答申）
12月15日　那覇防衛施設局　２回目の調整
12月20日　磁気探査入札参加について（案内）
12月22日　磁気探査現場説明会
12月25日　磁気探査入札　同28日契約　工期1月20日から3月30日まで
平成8年 1月10日　キャンプ桑江への立入について（要請）
那覇防衛施設局施設部長あて　一式書類提出（目的・内容・場所・立入名簿和英・立入車両車検書・対人対物保険書、重機・磁気探査会社も同様提出）

1月12日　那覇防衛施設局から米国海兵隊不動産事務所へ英文で（要請）
1月17日　在沖米海兵隊基地施設土木部・環境保全課、自然・文化財保護係平敷兼直氏から呼ばれ、立入目的と内容について理由を求められさらに同行してもらいユーティリティ関係の挨拶と手続き方法を受ける。
1月22日　米国海兵隊不動産事務所から那覇防衛施設局あて英文で回答、那覇防衛施設局から北谷町へ和文で回答
1月24日　ユーティリティ関係の事務手続きの開始
2月19日　試掘調査のスタート
3月12日　試掘調査の終了　　実質17日間の調査であった。140本
4月 2日　平成７年度文化財保存事業実績報告書
平成8年 4月23日　平成7年度補助金の額の確定について（通知）
国宝重要文化財等保存整備費補助金の額の確定通知書「伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査事業」法律第15条の規定に基づき、確定　平成8年4月23日
4月23日　平成7年度補助金の額の確定について（通知）

平成8年度

平成7年 4月13日　平成8年度国庫補助事業計画書の提出について
5月10日　同上回答
平成8年 5月29日　平成8年度文化財関係補助事業について（通知）
6月 7日　平成8年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書
11月25日　平成8年度文化財保存事業費補助金交付決定について（通知）
11月25日　国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知書
「伊礼原B遺跡ほか発掘調査」
平成9年 1月22日　キャンプ桑江立入りについて（要請）
在沖米海兵隊基地環境保全課
2月５日　5090　14G　同上の英文で許可
2月６日　ユーティリティ関係の手続きに入る。
2月12日　試掘調査スタート
2月13日　文化庁　岡村道雄主任専門官　北谷町基地内視察
2月17日　試掘No.73で壁面崩落
2月24日　水道パイプ破裂騒ぎ　放棄されたものであった。
3月 4日　文化庁による平成8年度補助金実態調査
3月17日　国立歴史博物館歴史研究部　古環境　辻誠一郎先生招聘
3月18日　試掘No.143で縄文前期の曽畑式土器期の低湿地遺跡発見
3月19日　有機質サンプル・土層サンプル・洗浄方法を伝授　最終便で帰路
3月21日　試掘調査終了
平成9年 3月24日　有機質の洗浄　28日まで
3月36・27日　朝日新聞東京本社から伊礼原Ｃ遺跡の取材あり

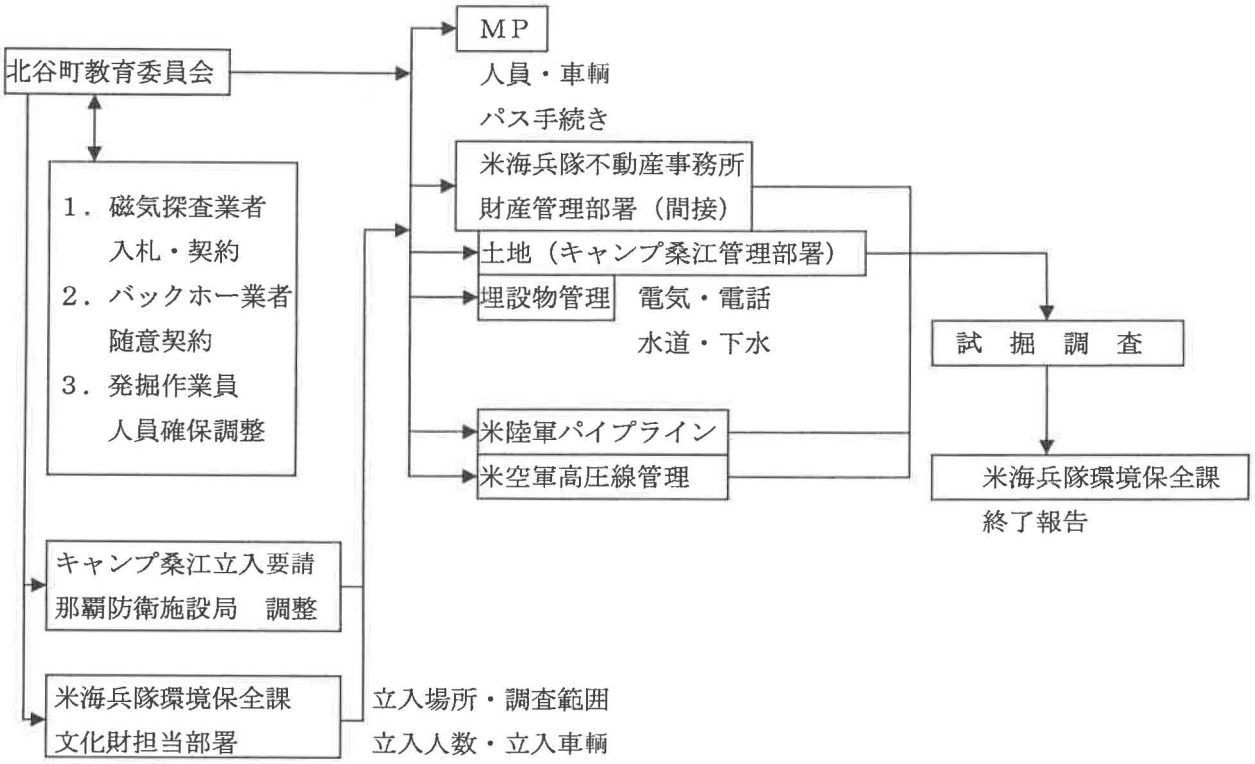
平成9年 4月16日　平成8年度補助金の額の確定について（通知）
5月 9日　平成8年度補助金の額の確定について（通知）沖縄県

平成9年度

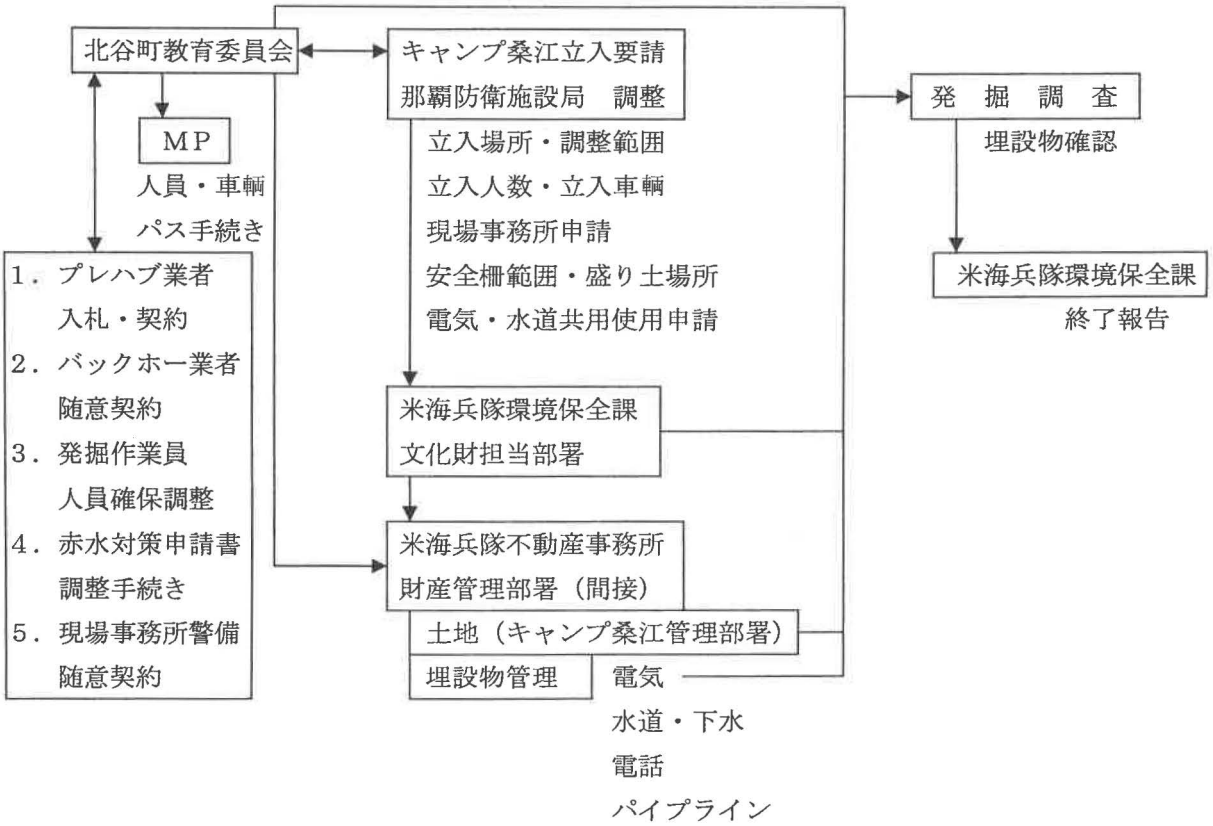
平成8年 4月30日　FAXにて平成9年度国庫支出金要請額調
5月13日　FAXにて同上回答（北谷城含む）
平成9年 4月 7日　国立歴史民俗博物館　辻誠一郎先生　科学研究費で来町　9日まで
5月 6日　米海兵隊司令部在ハワイ　考古学者ジャネット・シモンズ　基地内文化財の情報収集　SACOの件
平成9年 5月22日　平成9年度文化財関係国庫補助事業について（通知）
5月30日　平成9年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書
6月20日　文化庁　小池信彦　調査官　基地内文化財視察
6月27日　沖縄県文化課嘱託　島袋春美　No.143試掘穴の獣魚骨鑑定の招聘
6月28日　国立歴史民俗博物館　辻誠一郎　No.143試掘穴の植物遺存体の鑑定・指導招聘　30日まで
7月28日　国立歴史民俗博物館　西谷大先生　他3人　科学研究費で来町
土器胎土分析の資料収集
7月28日　キャンプ桑江への立入りにつて（要請）
8月18日　江坂輝彌先生　来町　No.143試掘穴の土器を鑑定
8月21日　キャンプ桑江内ユーティリティをすべてクリアした旨の英文文書を在沖米海兵隊基地環境保全課から返送
8月25日　在沖米海兵隊基地環境保全課　平敷兼直氏と調査の打合せ
平成9年 9 月 1日　教文第327号　交付決定通知
「北谷城ほか範囲確認調査」
9月21日　鹿児島県立埋蔵文化センター　宮田栄二・桑波田武志・中原一成
来町　No.143試掘穴の打製石器の同定
10月 3日　試掘調査スタート
10月 6日　在沖米海兵隊基地環境保全課　別添基地司令官許可書を添えて英文で許可
10月 6日　MP駐車場地域のアスファルト5本・コンクリート2本のカットを開始
平成8年10月21日　国立歴史民俗博物館　西谷大先生　科学研究費で来町
土器胎土分析の結果報告
10月22日　MP駐車場地域の試掘調査　ＭＰ車両保管施設のアスファルト4本のカット、バスターミナル地域のアスファルト9本のカット
10月24日　文化庁　岡村道雄主任調査官　現地指導とNo.143試掘穴のその重要性について指導・助言
10月27日　スクールバスターミナルの試掘開始　6本を一日で埋め戻し
車両リサイクル施設のコンクリート3本カット
10月27日　ＭＰ車両保管施設の試掘調査開始　4本を3日に分けて行う

11月 5日　車両リサイクル施設のアスファルトカット3本　試掘調査
11月 6日　試掘調査終了
11月 7日　車両リサイクル施設のアスファルト舗装
11月 7日　熊本大学　白木原和美先生　来町　曽畑式土器の指導・助言
11月17日　朝日新聞東京本社から来町　取材
平成9年11月19日　平成9年度文化財保存事業費補助金交付決定について（通知）沖縄県
11月28日　バスターミナルのアスファルト舗装
12月14日　名古屋大学　渡辺誠先生　盛本勲氏　来町　植物遺存体の実見と助言
12月21日　北谷町教育長　全史協臨時東京大会参加　文化庁へキャンプ桑江返還に伴う試掘調査の成果を報告
12月25日　熊本県菊池市嘱託　古閑啓示氏　来町　曽畑式土器の実見・初見
平成10年1月30日　国立歴史民俗博物館　辻誠一郎・能城修一先生　来町　植物遺存体の中間報告・再調査　種子74種　樹木34種を確認
3月 3日　文化庁　小池伸彦調査官　基地内文化財視察
3月 9日　熊本大学　甲元真之教授　福岡市文化財部　山崎純男課長　来町　出土遺物の指導・助言　11日まで
3月18日　福岡市立歴史博物館　山崎龍雄　来町　石製品の同定
3月31日　実績報告（進達）
4月 9日　平成9年度補助金の額の確定につて（通知）北谷城ほか発掘調査事業
4月28日　平成9年度補助金の額の確定について（通知）沖縄県北谷城ほか発掘調査事業」

伊礼原B遺跡ほか発掘調査（文化庁補助）



庁舎建設に伴う緊急発掘調査（後兼久原遺跡）の調査経過



第２図　基地内文化財取り扱いにおけるフローチャート

NAHA DEFENSE FACILITIES ADMINISTRATION BUREAU
1-5-16, Kume, Naha-shi, Okinawa-ken

Rencho No. 4 12 January 1996

Subject: Request for Permission to Enter Camp Kuwae, FAC 6043

To: Director
Real Estate Branch
Facilities Engineer Division
MCB, Camp Smedley D. Butler, Okinawa

It is requested that personnel of Chatan-cho Board of Education and its entrusted contaractors be granted permission to enter the subject facility and area as described below.

1. Date/Time: From date of approval through March 30 1996, 0830-1700 hours

2. Entry Area: See attached map

3. Purpose of Entry:

To conduct confirmation survey of cultural asset within the subject area to be readjusted in order to gather basic data in coordinating with planned land readjustment project.

4. Manner of Survey:

Dig square holes of 4 x 4 meters by a backhoe(s) at 170 points as shown on the attached map.

5. Entrants: See attached list

6. Vehicles: Okinawa 59 Hi 56-58
Okinawa 45 So 90-86
Oki 44 Fu 42-50
Okinawa 45 Ta 48-85
Okinawa 45 Chi 17-22
Okinawa 11 So 8-85
Okinawa 45 Te 76-89

Eiryo Tamai

EIRYO TAMAI
Chief
Liaison and Coordination Office
Facilities Plannin Section
Facilities Division
Naha DFAB

Encls: 1. Location map
2. Name list

第3図 米軍文書①

UNITED STATES MARINE CORPS
MARINE CORPS BASE
CAMP SMEDLEY D. BUTLER, OKINAWA
REAL ESTATE BRANCH
FACILITIES ENGINEER DIVISION

11011
14D
22 Jan 96

From: Director, Real Estate Branch, Facilities Engineer Division
To: Naha Defense Facilities Administration Bureau
Attn: Chief, Liaison and Coordination Office, Facilities Planning Section

Subj: REQUEST FOR PERMISSION TO ENTER CAMP KUWAE, FAC 6043

Ref: (a) Naha DFAB ltr RENCHO No. 4 of 12 Jan 96

1. Your request contained in the reference is approved subject to the following conditions:

a. The cultural assets survey will be accomplished during 0830-1700 hours from the receipt date of this letter through 30 March 1996 on a noninterference basis with U.S. Marine Corps activities.

b. Chatan-cho contractor personnel will make coordination with Real Estate Office about underground utilities prior to actual digging and must have this letter of approval and the reference in their possession during the survey period.

c. The user, and not the United States of Government (USG), shall be held liable for any injuries or damages to persons or property which may arise from or be incident to the user's activities. The user shall reimburse the USG or third parties for any such injury or damage. The foregoing does not affect and shall not be interpreted as affecting in any way relevant provisions of Article XVIII of the Status of Forces Agreement.

2. If the above conditions are acceptable, you may proceed with the survey. Point of contact is Mr. Osamu Wauke, Real Estate Office at (098) 892-6242.

PAUL K. GINOZA
Real Estate Director

Copy to:
Environmental Branch

第４図　米軍文書②（立ち入り申請（英文））

合衆国海兵隊
在沖米海兵隊基地
施設技術部
不動産課

返書参照先：
11011
14D
平成８年１月22日

発　信：　施設技術部不動産課長
宛　先：　那覇防衛施設局
　　気付：　施設企画課連絡調整室長

件　名：　FAC 6043 キャンプ桑江への立入りについて（要請）

参　照：　(a)　平.８.１.12.付那覇防衛施設局書簡連調第４号

１　参照書簡中の貴職要請は、下記の条件を付して許可する。

a　文化財調査は、合衆国海兵隊の活動の支障とならないよう、本書間の受領日から平成８年３月30日までの0830-1700の時間帯で実施することとする。

b　北谷町の委託業者は、実際の掘削の前に、埋設ユーティリティーについて不動産事務所と調整すること、また、調査期間中、本許可書簡及び参照を携行することとする。

c　合衆国政府ではなく使用者は、使用者の行動に起因又は付随する人身傷害又は財産損害に対して責任を負うこととする。使用者は、係る人身傷害又は財産損害に関して合衆国政府又は第三者に対して賠償することとする。前述したことは、地位協定第18条の関連規定に影響を及ぼすものではなく、かつ、影響を及ぼすものと解釈してはならない。

２　上記条件が受け入れられるのであれば、本件調査を進められたい。連絡先は、不動産事務所、電話番号(098)892-6242の和宇慶修である。

署　　名
ポール・K・ギノザ
不動産課長

写し送付先：
環境課

第５図　米軍文書③〈立ち入り申請（和文）〉

第6図　米軍文書④　調査者名簿

	N A M E 名　前	DOV　生年月日 役　職	PRESENT ADDRESS 現　住　所	PAMANENY ADDRESS 本　籍	HIGHT (cm)	WEIGHT (kg)
1	TAROU CHATAN 北谷太郎	28 MAR 1947 文化課課長	226 KUWAE CHATAN-CHOU 北谷町字桑江226	467-1 KUWAE CHATAN-CHOU 北谷町字桑江467-1	171	70
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						
11						
12						

3．実際の方法

これまでの基地内の試掘調査、沖縄本島の遺跡のあり方から以下の方法が最善と判断された。

1．基本的に1／2,500の地図上で機械的に30mメッシュを切り、メッシュ上の北東角を試掘ポイントの基軸とする。よって、試掘ポイントの範囲はこの基軸から南西方向にグリット設定をすることになる。実際に現場では建築物や樹木等の障害物が存在するので、それを避けるか、保留するかの判断が必要。図面上より実際のポイントは減少する。

2．現地での試掘の調査カード（第７図）はこれまで基地内で試掘調査をおこないながら利便性を図って考案したものである。全体には四分割されている。左上が試掘場所・年月日・天気を主とし、試掘No・標高・観察壁面、最後に記録者。右上が略図表である。左上は□に四方にNSEWが付されているが東西南北の標記で、ここには試掘穴の平面略図で方形か長方形かあるいは階段掘りかの平面図、または層全体の傾斜方向、あるいはユーティリテイ（埋設物）の略図を記入する。右上や下の□は断面略図で、実際の断面図で表現できない四面断面図の比率的な層序を表現するときに用いる。あるいは階段掘りのような堀方の状況を標記しておく。左下が基本の層序を記録する紙面である。1mを実線で示し、その間を破線で五等分してある。1／20で記録出来るようにしてある（現場経験者であれば1／20は手慣れている）。試掘穴にスタッフを立て、それを目安に記録する。破線の間が10cmになり、スタッフの10cm目盛りと、カード破線との間合いで層序に境を決める。標記の深度を7mまであるのはバックホーの07がとどく許容範囲とした。層序は基本的に大中小の区別で標記する。大は色・土質で大枠を決め、次に同色内の濃淡あるいは土質の粗細で区分する。細区分は特に文化層を記述する際に用いる。遺構があるのか、どのような掘込か。遺物の堆積状態は縦か横か等の特徴を図式で記入する。

右側は左側に記述した層位の所見を記録する面とした。層の色・粒子・包含層の有無・遺構の有無。また、文化層の濃淡あるいは土質の粗細、遺構はどのような掘込か。遺物の堆積状態は縦か横か等の特徴を記述する。

3．現地での30mメッシュの設定後、試掘調査の範囲の4×4mの配置を行う。

4．試掘範囲4×4mの範囲の磁気探査を行う（磁気探査は1mの深度が許容範囲であるので、各単位ごとに行う。表土で1回、1mで2回、2mで3回）

5．バックホーにより掘り下げる方法は、芝生の場合はそれのみを剥ぎ取り別に仕分けする。土壌の掘り方は基本的に10cmごとに掘るが、土層の特徴が判断できればその境目まで一気に掘り下げる。層の境目では5cmごとの掘り方をし、文化層の有無を確認する。文化層を確認すると生活址か単純な堆積か状況を判断し、5cmごとの掘り方をおこなう。掘り上げた文化層の土壌は人力で粉砕し、遺物の収集にあたる。その後、遺物の出土状況をカードに記録する。

試掘場所	伊礼原B遺跡ほか 発掘調査	N W E S
平成　年　月　日 天　気		
試掘NO.	標高	
土層観察図 （方位）		
記録者		

0 m

1 m

2 m

3 m

4 m

5 m

6 m

7 m

第7図　調査カード

第五章　調査経過

１．三区の区分

南区は東西の返還地域の境目になる米軍学校の北側の道路、東西約500m、南北の境は現北谷町舎の国道58号の入口になっている道路、約300mを一つの区域とした。東側はパイプライン道路より東側の丘陵斜面をも含む地域である。南区は縦約300m、横約500mの約20haである。この南区は調査期間中便宜上、第一期と別名し、平成7年度事業として予定してた。

中央区は略南北の国道58号沿いの350m、略東西は庁舎の入口にあたる350mの範囲を区域とした。総面積は約10.5haである。この中央区は調査期間中便宜上、第二期と別名し、平成8年度事業と予定した。

北区は略南北の国道58号沿いの500m、略東西の底辺はナガサガー沿いに走る米軍貯油施設に入る進入道路約350mの範囲を区画とした。北側は県道23号線を境とし、一部、以前に返還されたが、今回の区画整理事業に含み開発の対象になっている小字大作原570番地一帯もその対象地に含んでいる。総面積10haである。この北区は調査期間中便宜上、第三期と別名し、平成9年度事業と予定した。

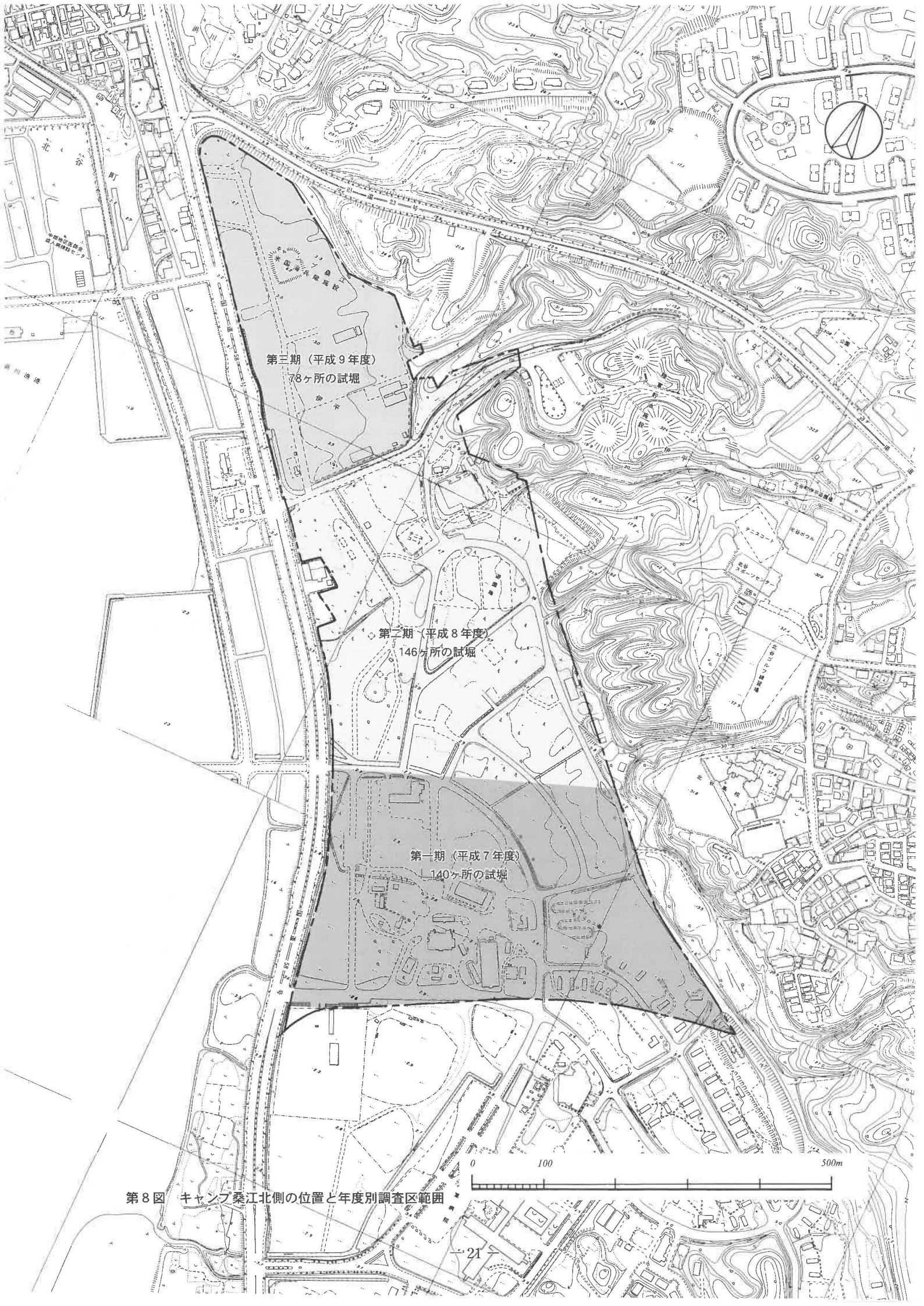
２．三区分の詳細

第一期（南区）の約20haは1／2,500の地図上での30mピッチのメッシュで区分すると総数170ヶ所の試掘穴になった。しかし、基地内の現状はまだ機能しているPX倉庫３棟・遊具施設・ユーティリティ（埋設施設の電気・水道・下水道・電話等）があることから、現地ではポイントを移動するか、割愛するかの判断があり多少の減少が考えられた。

第二期（中央区）の約10.5haでは総数120ヶ所の試掘穴の数であった。この中央区は返還時点まで機能した施設があり、東奥側にはグリーン・ロッジと呼ばれる4階立ての宿泊施設。北東隅にはPX施設（初期の将校クラブ・別名399）、西隣には野球場・テニスコート（二面）、西側半分の国道58号沿い側にはキャンプ場施設が存在していた。それらに付随するユーティリティ（埋設施設の電気・水道・下水道・電話等）施設は残ったが、一部の倉庫と電気・水道の無償借りの恩恵も被った。

第三期（北区）の約10haでは総数119ヶ所の試掘穴の数であった。北区には沖縄本島全域を賄う米軍属の学校施設に通うスクールバスターミナルがあり、また、MPの事故、盗難車車輌を一時保管する施設、車輌のリサイクル施設があり、試掘穴がかなり減らされた。

また、これら３地域の試掘調査の本数を削減されたものは、国道58号沿いにそって走る嘉手納飛行場から普天間飛行場へのパイプラインであった。このラインの両サイド3mは調整段階で許可が下りず、国道58号から東側約50mには幅6mの空白地域が走った結果となった。



第８図　キャンプ桑江北側の位置と年度別調査区範囲

第六章　調査成果

キャンプ桑江北側半分の40.5haを3ヵ年かけて試掘調査を実施してきた。その試掘穴の総数は348本で、9遺跡と6遺物散布地の所在が明らかとなり、その分布範囲は13.59haに及んでいる。これを各区分で見てみると、第一期（平成7年度：20ha）では1遺跡（グスク時代）と1遺物散布地で範囲は5.67ha、第二期（平成8年度：10.5ha）は3遺跡（縄文時代・弥生時代相当期）と1遺物散布地で範囲は3.33ha、第三期（平成9年度：10ha）は5遺跡（縄文時代・弥生時代相当期・グスク時代）と4遺物散布地で4.59haであった。ここでは、各遺跡及び遺物散布地の概要と出土遺物の状況を年度ごとの地区別に報告する。

１地区（千原遺跡）

１地区は第三期で確認された遺跡である。調査範囲の北西に位置し、東には県道23号線が延び、西には国道58号が南北に接している。本地区はこの国道と県道の接点に位置している。

本地区は北側と北東側が高く南西側は低い地形となっている。試掘No.30・31・32で包含層が確認された。その中で北側に位置している試掘No.32は、北側から南側へ傾斜した地層の堆積状況と、表土下2.2mで岩盤が確認された。試掘No.32の東側から西側へ堆積し始めると想定された。遺跡の範囲は試掘No.30～32の3本を囲むようにして西側に広がり、国道と県道の接点の方向にその中心部は拡がると思われる。包含層は表土下1.5mで約40cmの厚さで堆積している。上半部は淡褐色混土砂層で遺物を多く含み、下半部には上下2枚の柱穴が確認でき、下部の柱穴は下層の海浜砂にまで掘り込んでいる。１㎡に５個ぐらいの割合で確認された。出土遺物の内容は青磁やグスク土器などで、その時期はグスク時代である。遺跡の名称は小字名をとって千原遺跡と命名した。

出土遺物

土器（第56図1･43図、図版36）

土器は2点の出土でいずれも平底の底部片である。同図1は復元底径は約4.5cmで立ち上がりは垂直に近く「くびれ」はない。外面と底面は丁寧なナデを施すが内面はやや荒い。焼きは良く締まりがあり重量感のある泥質の土器であるが、微細な鉱物を含み肌触りはザラザラする。全体的に明るい褐色であるが底面と芯部の一部に暗褐色を残す。同図43は底径4.2cmで底面の厚さ2cmと小径で厚みのある底部である。立ち上がりは同図1と同様に垂直で「くびれ」はない。底面は焼成後のスレ痕を残す。外面は上下に内面は上下斜位に荒い擦痕を施す。外面は茶褐色であるが内面は明るい褐色を呈する。胎土には混和材として微細なコーラルが少量みられる。焼きは良く締まりがあり重量感のある泥質の土器である。いずれも北谷城やフェンサ城下層の平底土器に類似している。

第９図　キャンプ桑江試掘ポイント（平成９年度）　第三期

青磁（第61図１～５）（図版41）

第61図１～４は内彎口縁の蓮弁文碗である。図１～３は弁先が連続した半円を施す線刻細蓮弁文である。同図４は弁先を持たず、縦沈線による細蓮弁文である。

同図５は無文の直口口縁で、口径が16.4cmである。外面に轆轤痕による凹みが明瞭にみられる。これら資料は16世紀中頃から後半で、試掘No.30の出土である。

白磁（第63図13・14、図版43）

第63図13は玉縁口縁碗で、玉縁はやや薄手である。12世紀前半から中頃、試掘No.30の出土である。同図14は無文碗の底部で、底径7.5cm。内外面とも胴下部まで施釉する。15世紀、試掘No.30の出土である。

染付（第62図13・15）（図版42）

同図13・15は皿の底部である。同図13は底径4.4cm。高台は高く底部は薄い。胴部は開きながら立ち上がる。見込みは圏線を巡らし花文を施す。外面胴部の文様は構図が不明である。高台内は高い。16世紀、試掘No.30の出土である。同図15は底径が5.6cm。畳付は細い。高台内は高く底部は薄い。胴部はやや屈曲して立ち上がる。見込みに十字架文を施す。外面胴部は唐草文と思われる。腰部より屈曲し立ち上がる。高台は高い。18世紀から19世紀前半、試掘No.30の出土である。

カムィヤキ（第63図23）（図版43）

第63図23は口縁部がラッパ型に外反する壺で口縁部は肥厚する。口径14cm。試掘No.30の出土である。

沖縄産施釉陶器（第63図22）（図版43）

第63図22は沖縄産施釉陶器の酒器の底部である。底径8.4cm。高台外端が畳付となる。内底に回転轆轤痕がみられ、無釉である。外面は黒釉が腰部まで施釉されている。試掘No.30の出土である。

貝製品（図版45－９）

図版45－9はホソヤクシマダカラガイの背面の前端部近くに径5.1mmの粗孔を施したものである。孔は外殻から内殻に打割したもので、他に加工痕は見られない。貝殻の色も残り、製品の可能性は低いが、勝連城跡(註)や久米島カンジン原古墓群(註)などでも大形のタカラガイに穿孔されたものが出土しているため、参考資料として提示した。大きさは殻高6.1cm、殻長3.5cm、重さ40gを測る。（第24表）試掘No.30の淡褐色砂質土層で出土。

引用

1　沖縄県立埋蔵文化財センター『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群』沖縄県立埋蔵文化財センター2002年

2　安里嗣淳・大城秀子・花城潤子ほか「勝連城跡－南貝塚および二の丸北地点の発掘調査－」勝連村教育委員会　1984年

第１表　1地区　千原遺跡(平成９年度)　**出土遺物集計**

器種 / 試掘No	土器					カムィヤキ	青磁				白磁		染付		沖縄産施釉陶器				沖縄産無釉陶器				外国産陶器	その他不明陶器	近世代陶磁器				陶質土器		小計
	曽畑	大当原	後期	グスク	小計		碗	皿	盤	その他	碗	皿	碗	皿	碗	酒器	鉢・壺(褐釉)	その他	小型壺鉢	中大型壺鉢	すり鉢	その他			碗	皿	盃	その他	火炉	その他	
30	1	3	3	3	10	1	29	9	6	1	7	2	24	4	40	6	16	3	25	100	9	10	9	3	16	2	3	16	5	29	385
31			1		1		1					1			6		2	2	7	24	2	3			1			1	1	4	56
合計	1	3	4	3	11	1	30	9	6	1	7	3	24	4	46	6	18	5	32	124	11	13	9	3	17	2	3	17	6	33	441

〈凡例〉①曽畑：曽畑式土器、室川下層式土器、前庭：面縄前庭式土器・仲泊式土器、嘉徳Ⅰ：嘉徳Ⅰ式土器、大山：大山式土器、浜屋原：浜屋原式土器、晩期：晩期系土器
大当原：大当原式土器、後期：具志原式・アカジャンガー式土器、グスク：グスク系土器
②石器・貝製品・骨製品については観察一覧（第21・22・23表）を参照のこと

２地区（平安山原B遺跡）

２地区は第三期の調査で確認された遺跡である。調査範囲の東側に丘陵の谷間２カ所があり、北側に位置する丘陵は標高約27mで、東側は20mとなっており北風を遮るような平場に立地している。南側の谷間は狭く東側から西に向かって開かれ、そこには嘉手納飛行場内を源流とする徳川が流れている。現在の流れは米軍によって迂回されているが、戦前はそのまま西流し、それを境として北側を平安山、西側を伊礼原と小字の区分となっていた。

本地区は試掘穴がNo.19～21・21－Ａ・21－Ｂ・53・54・54－Ａ・54－Ｂ・55の10本で南北に延びている。特にNo.20においては古くは弥生中期に相当する時期からグスク時代、戦前の集落で使用していた村のサーター屋が確認された。サーター屋は焚き口が石灰岩で出来ており西側に面していた。

本地区の包含層は、２枚みられ、グスク時代と弥生時代相当期である。前者は本地区の北側と南側に分かれ、北側の試掘No.20・21－Ｂは表土下1.2mに明茶色土層が約0.2m堆積しているが西側には拡がっていない。南側の試掘No.53・54－Ａでは遺物は確認されたが二次堆積の可能性がある。後者の弥生時代相当期は、試掘No.20を中心とした表土下1.2mの茶黒色土層から茶色砂層の２枚に形成され、その範囲は、北は試掘No.21－Ｂまで広がるがその試掘穴の東側の谷間沿いは岩盤であった。東側の試掘No.19は表土下0.2mで岩盤が確認されたのでそれから西側に堆積し遺跡が形成されたと想定された。南側は試掘No.53まで広がるのが確認できたが、そこから南には層は広がっていない。さらに南側の試掘No.54－Ａ・Ｂの試掘穴は東側の狭い谷間から流れる徳川の河口部にあたり、そこまで及んでいないことが確認できた。出土遺物は白磁や弥生相当期の土器が出土する。

本地区では戦前のサーター屋が上述したように試掘No.20において確認された。当初は茶黒色土層の上面に直径1.2mの炉址で、北西側に焚き口を有するものが確認された。炉址の縁は0.1mから0.15mの厚さで明燈色を呈していた。周辺で確認される遺物から戦前のものであると想定できたが、性格が不明であったため周囲を広げ様子をみようとしたところ、北側から石灰岩を四角柱状に加工した戦前のサーター屋が確認された。焚き口を西側にし灰落としをするための工夫もみられ、焚き口周囲は灰を掻き出すため灰色を呈していた。戦前の集落である平安山集落の方に確認したところ村で使用していたサーター屋であることが確認された。当初の炉址も一連のものであることが確認された。出土遺物は沖縄産陶器と本土産磁器であった。遺跡名は平安山原Ｂ遺跡と命名した。

出土遺物

土器（第56図2・23～41・44～47）（図版36ａ・b）

第56図２・41・42は試掘No.21からの出土である。同図41は肩部に不明瞭な張り、頸部には横位のナデによる弱い反りをもつ口縁部片である。頸部の断面には輪積みの痕跡がみられる。胎土は砂質で内外面とも淡褐色であるが芯は暗褐色を呈している。同図2・42は4.4cm、4.5cmと径の小さな底部である。同図2は底面が平らで立ち上がりは鋭角で開く。胎土に光沢のある微細な鉱物を含む砂質で、外面は茶褐色で内面は暗褐色を呈する。同図42は底面中央部に1cmほどの弱い凹みと、立ち上がり部分に弱い「くびれ」をもつ。全体的に淡褐色で泥質である。

第56図23～39は試掘No.20からの出土である。同図23は口径が12.8cmで逆L字状の口唇部をもつ小形の土器片である。張り出し部は外面に粘土帯を施し、頸部を指頭で押し引くことで形成されている。茶褐色の泥質で内外面とも弱いナデが施され鈍い光沢をもつ。同図24は朝顔の花状に開く口径15.2cmの壺形土器の口縁部片である。口縁部の内側に弱い凹みが、外側には弱い膨らみがみられる。頸部は縦位の擦痕後、ナデられ、鈍い光沢をもつが、内面はやや粗めの石英や雲母がみられるほど締まりがない砂質で外面は茶褐色、内面は淡褐色を呈している。

同図26～35は口縁部片である。大形のものは肩部に沈線を施し、間延びした弱い反りをもつ26、直線的に開く同図27・28、直線的に立ち上がる同図29・30、内傾する31、口唇部が反る35などがある。小形のものは頸部の弱い反りが2.5cm以下と短い同図32～34がある。いずれも外面はナデが施されるが、内面は形成時の指頭痕を残し、胎土は砂質である。同図26・29・35は黄褐色で、同図27・30・31・34は褐色、同図28・32・33は暗褐色を呈している。同図25・39は平底で、同図36～38は丸底的平底の底部である。同図25は底径7cmで底面の厚さが4.3cmと極端に厚い土器である。底面は全体的に凹み、さらに中央部に1.5cmの浅い凹部をもつ。外面は縦・斜位のヘラ磨きがみられ鈍い光沢をもつが、内面は当て物の痕跡のザラつきがある。胎土は粗い石英や細かな雲母を多量に含む泥質で、焼成も良く重量感のある茶褐色である。同図39は弱い「くびれ」をもつ底面の薄いくびれ平底土器片である。胎土に粗い石英や赤粒を混入する淡褐色の砂質の土器である。同図36は底径3.4cm、37は2.6cm、38は3.5cmと径の小さな平底土器である。同図36・37は底面に丸味をもつが38は弱い凹みをもつ。外面は器面保持が良いが、内面は本来の器面が確認できないほど保持が悪い。胎土はいずれも砂質であるが36は黄褐色、37は褐色、38は淡褐色を呈している。

同図23・24・25は弥生土器の影響下の南島の土器である。その他のものはいわゆる「浜屋原タイプ」に類似する一群の土器かと考えられる。

白磁（第63図20）（図版43）

第63図20は碗底部で底径5.9cm。外面胴下部まで施釉する。15世紀中頃から後半、試掘No.54－Aの出土である。

染付（第63図５～７）（図版43）

第63図７は碗である。底径6.6cm。胴部よりやや緩やかに立ち上がる。外面に文様を施すが構図は不明。見込みは蛇の目釉剥ぎである。18世紀前半から中頃、試掘No.21－Bの出土である。

同図５は皿で碁笥底である。底径3.8cm。外面は唐草文部。見込みは二本の圏線を巡らしその内側に寿文と思われる文様を施す。16世紀。試掘No.20の出土である。

同図６は杯で、馬上杯のような器形と思われる。外面胴に圏線が巡らされ、見込みは圏線内に構図不明の文様を施す。16世紀後半から17世紀中頃、試掘No.54－Bの出土である。

貝製品

リュウキュウサルボオ（第24表）の殻頂近くを穿孔するもので、貝の大きさは殻高4.1cm、殻長6cm、孔はタテ7.2mm×ヨコ10.4mm、重さ23gを測る。試掘No.20の茶黒色土層の出土である。

第２表　２地区　平安山原B遺跡（平成９年度）　**出土遺物集計**

器種 / 試掘No	土器									青磁	白磁	染付			沖縄産施釉陶器			沖縄産無釉陶器				外国産陶器	その他不明陶器	近世代陶磁器			陶質土器	合計
	曽畑	前庭	東洞	伊波	弥生	浜屋原	大当原	後期	小計	皿	碗	碗	皿	その他	碗	鉢・壺	その他	小型壺・鉢	中大型壺・鉢	すり鉢	その他			碗	盃	その他	その他	
19		1					1	5	7																		4	11
20	2	4	1	7	13	65	84	106	282	1	1	6	1		4	1		5	22		1		1	5	1	4	1	336
21	3	6				14	5	30	58																			58
21-A		1					6	4	11															1				12
21-B		2							2		1	9			1	2	1	1	11	1				2		1		32
53	3	6	16		1	5		1	32		1															1		34
54						6		10	16															2				18
54-A								8	8		1								3									12
54-B							1	3	4					1					2									7
55							1	2	3										1			1						5
合計	8	20	17	7	14	90	98	169	423	1	4	15	1	1	5	3	1	6	39	1	1	1	1	10	1	6	5	525

〈凡例〉①曽畑：曽畑式土器、室川下層式土器、前庭：面縄前庭式土器・仲泊式土器、嘉徳Ⅰ：嘉徳Ⅰ式土器、大山：大山式土器、浜屋原：浜屋原式土器、晩期：晩期系土器
大当原：大当原式土器、後期：具志原式・アカジャンガー式土器、グスク：グスク系土器
②石器・貝製品・骨製品については観察一覧（第21・22・23表）を参照のこと

３地区（伊礼原C遺跡）

３地区は第三期の調査で確認された遺跡である。第三期の調査範囲の南東側の谷間から流れるナガサ川の北側で、第二期の６地区試掘No.143（曽畑式土器が確認された）の北側に位置している。本地区は北側に標高約14mの丘陵があり、南には第二期で確認された試掘No.143を中心とする平場が広がる。試掘穴はNo.５・６の２本である。包含層は表土下約３m前後にみられる灰黒色土層及び５mの灰白色シルトである。出土遺物は曽畑式土器である。遺跡名は６地区の範疇と思われることから伊礼原Ｃ遺跡と命名した。

出土遺物

土器（第57図47～49、51～59）（図版37）

同図47～49は水摩を受けているが、他の土器にはみられない。図47・48は沈線文を施した胴部破片である。図47は斜位に図48は横位と斜位に施されている。前者は暗褐色で6mmと薄く、後者は淡黄褐色で1cmと厚い。曽畑式土器のくずれた在地土器である。同図49は口縁部が丸みをもつ肥厚部に二枚貝の貝殻の腹縁部で押圧して文様を施した薄手の土器である。仲泊式土器である。同図51・52は同一個体の土器と思われる。図52は直線的にハの字状に開き、口縁部近くで弱い外反をもつ図上口径31.8cmのやや大形の土器である。口縁部は波形で均一でない。内外器面には荒い整形の指頭痕が残るが、形成時の接合面の凹凸が残っている。同図51は底径2cmの乳房状尖底土器である。いずれも淡暗褐色で砂泥質の焼きしまりの良い土器である。大当原式土器より古いタイプの土器である。同図53は口縁部に弱い外反をもつ直線的な土器である。内外面とも丁寧なナデが施されている。同図54は直線的に開く大形の深鉢の口縁部である。口唇部は丸みのあるふくらみをもつ。内面は横位の研磨がみられ、全体的に光沢がある。内外器面は暗褐色であるが、内面の口唇部周辺は黒くくすんでいる。胎土は砂泥質で緻密で硬い。同図55は胴部下半部

が径12cmのボール状の丸みをもった小形土器破片である。器壁は5mmと均一で、内外器面とも丁寧なナデが施されている。内面は白色の混和材が多量にみられ淡黄褐色をおびるが、外面周辺部は黒く煤が付着している。類例のない土器である。同図56は楕円形の横位の把手をもつ胴部片である。把手は長さ6.5cm、幅2cm、厚さ1.8cmの横長である。外面はナデが丁寧におこなわれいるが、内面は弾けていて混和材が露頭して凹凸をなす。外面は淡暗褐色で、内面下半分は黒く煤けている。器壁は8mmと均一で砂泥質の重量感のある土器である。形態は異なるが後兼久原遺跡で類例資料がある。同図57～59は頸部で細まり、口縁部が外反する土器である。図57の口径は23.6cm、58の口径は9.9cm、図59の口径は15.6cmである。いずれも淡黄褐色したシルト質のグスク土器で、指頭痕を内外面に残すが丁寧な水引きが施されている。同図47のみが試掘No.5の出土で、他の同図48～59の土器片はすべて試掘No.6からの出土である。

貝製品（図版45－３、４）

ヤコウガイの蓋（図版45－3、4）、殻を加工したものが計3個得られた。

同図3はヤコウガイの蓋の薄い部分の周縁を中心に複数の剥離を施すもので、剥離の範囲は３分の２を占めている。蓋はやや風化している。大きさは縦6.7cm、横8.3cm、厚さ24.3mm、重さ166gを測る。（第24表）試掘No.5黒色シルト層で出土。

同図4も前者と同様の製品で、大きさは縦6.6cm、横7.7cm、厚さ21.8mm、重さ134gを測る。（第24表）試掘No.6白色シルト層で出土。その他に同層からはヤコウガイの殻を荒く打割したものが出土している。大きさは縦7cm、横7.2cm、最大厚20mm、重さ106gを測る。（第24表）

チャート（図版50－１）

図版15－1は縦8.13cm、横6.6cmを測るチャートの石核で、試掘No.6、黒色砂質土で出土した。同図3は大振りの剥片で、試掘No.5、白色シルト層で出土した。

石器（図版47－１～２、図版47－８）（第25表）

図版47－1はほぼ完形の敲石である。表面は研磨されているが、中央部分は敲きのためにわずかに凹む。裏面および側面にも敲き痕が見られる。石質は砂岩で、大きさは縦11.04cm、横9.04cm、厚さ5.9cm、重さ1000gを測る。試掘No.6の白色シルト層の出土。

同図版2は円盤状製品でほぼ完形である。周縁を打割して円形に整えている。表裏面とも打割加工のみで、他に加工は見られない。石質は輝緑岩で、大きさは縦11.08cm、横9.77cm、厚さ3.0cm、重さ368gを測る。試掘No.5、白色シルト層の出土。

図版48－3は石斧の未製品である。形は整えられ、表面は若干、研磨も見られ、裏面は石の節理面にあたり、平らになるが、中央部分は若干凹み、片方の側面には研磨が見られ、刃部は円形で、断面は楕円を呈する。石質は砂岩で、大きさは縦13.07cm、横5.09cm、厚さ1.9cm、重さ208gを測る。試掘No.5、黒色シルト層の出土。

同図版7は敲石の破損品である。表面および側面に敲き痕が顕著に認められ、裏面は研磨が見られ、丸味を帯びる。石質は輝緑岩で、残存部の大きさは縦9.4cm,横13.4cm,厚さ7.5cm、重さ1500gを測る。試掘No.5、黒色シルト層の出土。

同図版8は石皿で、破損品である。表裏面に研磨が見られ、表面の凹みはやや深い。石質は砂岩で、残存部の大きさは縦15.05cm,横16.08cm,厚さは最大厚2.2cm、最小厚1.2cm、重さ1400gを測る。試掘No.5、白色シルト層で出土。

第３表　3地区　伊礼原C遺跡(平成9年度)　**出土遺物集計**

器種 / 試掘No	土器											合計
	曽畑	前庭	東洞	嘉徳Ⅰ	大山	浜屋原	晩期	大当原	後期	グスク	不明	
5	9				1							10
6	10	1	3	1	1	1	1	12	32	30	1	93
合計	19	1	3	1	2	1	1	12	32	30	1	103

〈凡例〉①曽畑：曽畑式土器、室川下層式土器、前庭：面縄前庭式土器・仲泊式土器、嘉徳Ⅰ：嘉徳Ⅰ式土器、大山：大山式土器、浜屋原：浜屋原式土器、晩期：晩期系土器
大当原：大当原式土器、後期：具志原式・アカジャンガー式土器、グスク：グスク系土器
②石器・貝製品・骨製品については観察一覧（第21・22・23表）を参照のこと

４地区（平安山原A遺跡）

４地区は第三期の調査で確認された遺跡である。調査範囲の中心部に位置し、東側に２地区が広がりその後方は丘陵である。南北は平坦地が広がる。西側は国道58号線が南北に縦走し、海岸へと平坦な地形である。

本地区は試掘No.11～18・22～26・28・29・37・38・59・70～73の22本である。包含層はグスク時代と戦前の遺物が確認された。表土下１mに戦前の旧表土がみられ、本地区あたりに集落を形成していたことが確認できた。グスク時代は表土下1.2～1.5mに砂地の堆積がみられその上部に包含層の広がりが確認できる。主に、試掘No.11～14の範囲と試掘No.37の地域に遺物は集中するが、遺構は確認されていない。その他の試掘穴では同時期層から遺物は少量出土する。試掘No.72においては同時期層あたりから海獣葡萄鏡の破片が検出された。その近くには戦前北谷村に２人のノロがおり、そのうち砂辺・浜川・平安山集落などの祭祀を管轄していた平安山ノロがいたとされる。このことに関わるものであると考えられる。

試掘No.37から北側は本町が管理している盛土が約5,000㎡の広範囲に及んでいる。この盛土はキャンプ桑江が国道より低いため返還後にはその高低差をなくすために保管しているものであった。そのためこの区域については未調査となっている。しかし、試掘No.37の状況からするとこの範囲にグスク時代の包含層が広がる可能性がある。時代はグスク時代である。遺跡名は平安山原Ａ遺跡と命名した。

出土遺物

土器（第56図3～22）（図版36 a）

第56図3は直線的に伸び、丸味のある口唇部には細沈線の刻みをもつ薄手の口縁部片である。胎土は褐色で泥質である。同図4は水摩を受けた薄手で小形の尖底土器片である。胎土は赤粒を多量に混入した淡褐色の砂泥質である。図3・4とも試掘No.59の出土である。

同図５は口唇部の欠けた有文土器である。U字状の薄い突帯上に半裁竹管状の工具で刺突文を連続して施している。類例からみると突帯文は口唇上にまで伸び、結果として二対の瘤をもつ。同図7は水摩を受けた外反する薄手の口縁部片である。口縁部下と肩部に稜をかすかに残す。同図6は底面が欠損した砂質の尖底土器である。同図8は立ち上がりが弱い鈍角な平底土器で、胎土に赤粒を多量に混入する泥質で淡黄褐色のグスク土器である。同図9～12は底面に「くびれ」をもつ平底土器である。

底径は図9・12で6cmと中形で一般的にみられるもので、図10は8cmと大形で例外的な大きさである。11は5.2cmと小ぶりである。いずれの底面も凹み、特に17は中央部に1cmの指頭大の凹みをもち、逆に内底面には小突起部をつくる。特に図12のくびれ部分は整形されていて丸味をもち、類例のないものである。図9・12は褐色で図10・11は淡褐色の泥質土器である。いずれも試掘No.37の出土である。

同図13・14・16は口縁部の土器である。同図13は薄手で外反する褐色の砂質土器である。同図14は口唇部から肩部にかけて逆U字状の突帯文を貼り付けた薄手の黒褐色の砂質土器である。同図16の口唇部は平坦で外面口縁部に縦横約2.5cmの四角形の突起部をもつ褐色の泥質の土器である。前者はくびれ平底の口縁部で、後者は滑石製石鍋の突起部の模倣したグスク土器である。同図15・17はくびれ平底土器で、15は底面が1.6cmと厚く、「くびれ」部がナデられて丸味をもつ淡褐色の砂質である。17は底径6cmで底面中央部が凹み外面が淡褐色、内面は灰褐色の泥質の土器である。試掘No.25の出土である。

同図18は淡水に浸かり鉄分の付着がみられる黄渇色の砂泥質の尖底土器である。底面の厚さは2.4cmと厚い。試掘No.18の出土である。同図19は水摩を受けた底径2.8cmの平底土器である。外内面は淡褐色で、芯は灰褐色の泥質である。試掘No.24の出土である。同図20は底径6.6cmで底面中央部が凹むくびれ平底土器である。接合部の観察から底面周辺部にリング状の粘土紐を貼り付けくびれ部をつくり出している。砂泥質で褐色を呈している。試掘No.14の出土である。同図21は16と同様に縦位の突起部をもつグスク土器で、滑石の混入がみられる褐色の泥質土器である。試掘No.70の出土である。同図22はくびれ部の弱い水摩を受けた平底土器である。内外面は淡褐色で、芯は灰褐色をおびる砂泥質の土器である。試掘No.71の出土である。

青磁（第61図６～22）（図版41）

第61図６は劃花文碗で古手の資料で１点確認された。外面は文様がみられないが、内面口縁部下に圏線が巡らされている。12世紀後半から13世紀中頃、試掘No.11の出土である。

同図７は雷文帯碗で、口径が15cmである。口縁部に雷文帯を巡らし、胴部は花文もしくはラマ式蓮弁文を施すと思われる。内面は花文を施す。14世紀中頃から後半、試掘No.14より出土。

同図８・９・17は無文碗である。図８・９はともに釉の発色が悪い。15世紀中頃から後半、試掘No.14より出土。図17は内彎口縁で口唇部に抉りを入れる輪花碗である。15世紀中頃から後半、試掘No.37の出土である。

同図10・11は線刻細蓮弁文碗である。図10は小型の碗になると思われる。弁先は崩れている。図11は口径が16cmである。胴部でやや屈曲し立ち上がる。弁先の崩れはあまりみられない。両資料とも16世紀中頃から後半、試掘No.14の出土である。

同図14・15・18から21の７点は碗底部である。底部は畳付け外端部を削る図12・14・15・20と高台が高く畳付け幅が小さい図18・19・21に分けられる。前者は見込みが図12スタンプによる十字架文で、図15は蛇の目釉剥ぎを施す。図14は水摩を受けており文様の有無は不明。図20は無文である。図12は15世紀中頃から後半、試掘No.14の出土である。図14・15は15世紀で、試掘No.29より出土。図20は16世紀で試掘No.37の出土である。後者は図18の見込みにスタンプによる花文を施す。図19・21は無文である。図18・19は15世紀前半から中頃、図21は16世紀で、これらは試掘No.37の出土である。

第62図14は小碗の底部で底径4.4cm。胴部は緩やかに立ち上がる。見込みは２本の圏線を巡らし花文を施す。外面胴部の文様は唐草文と思われる。高台外面に２本の圏線を巡らす。高台内に銘と思われる文字？がみられる。16世紀中頃から後半、試掘No.23の出土である。

同図13・22は皿である。図13は口唇部に抉りを入れ波状を呈する稜花皿である。口縁内面は口唇部に沿うように２～３本の櫛目による沈線を巡らす。15世紀前半から中頃、試掘No.15より出土。図22は無文で口縁部が外反する皿である。口径15.6cm。15世紀前半から中頃、試掘No.37の出土である。

白磁（第63図15～19）（図版43）

第63図15は玉縁口縁碗で、口径16.9cmを測り、玉縁は厚く、釉垂れがみられる。12世紀前半から中頃、試掘No.37の出土である。同図18・19は小型の無文碗である。図18は直口型で口径 10.6cm。15世紀中頃から後半、試掘No.37の出土である。図19は底部で底径4.4cm。15世紀中頃から後半、試掘No.14の出土である。

同図16・17は皿である。図16は腰部より立ち上がる皿である。底径5.4cm。見込みは蛇の目釉剥ぎ。15世紀、試掘No.37より出土。図17はベタ底を呈する皿である。外底は黒い。15世紀、試掘No.24の出土である。

染付（第62図14・16～19・21・第63図１～４）（図版42）

第62図16～18・21は碗である。同図16は直口口縁で外面口縁部に一本、胴部中央に二本の圏線を巡らし、その間に波濤文、二本の圏線の下部に蕉葉文を施す。口縁内部に一条の圏線を巡らす。16世紀前半、試掘No.12の出土である。同図17は直口口縁で口径14cm。口縁部内外面に一条の圏線を巡らす。外面胴部に文様を施すが構図は不明。日本産の可能性がある。17世紀、試掘No.14より出土。同図18は直口口縁で口径10.6cm。口縁部両面に一条の圏線を巡らし、外面はその下部に構図不明の文様を施す。18世紀前半から中頃、試掘No.14の出土である。同図21は外反口縁で口径12.6cm。外面は口縁下部に二本の圏線を巡らし、その直下に寿文を施す。胴下部と高台際に圏線を巡らしその間に縦線でくずれた蓮弁文を施す。18世紀前半から19世紀、試掘No.23の出土である。

第63図１は底径6.8cm。畳付けは細く、高台は高い。胴部は丸みを帯て立ち上がる。外面は草花文と思われ、高台際に二本、高台外面に一本の圏線を巡らす。見込みは圏線と葉文？を施す。16世紀後半から17世紀中頃、試掘No.24の出土である。同図２は底径6.6cm。高台内は高く底部が薄い。胴部より丸みを帯びて立ち上がる。外面は花文と思われ、高台際に二本、高台外面に一本の圏線を巡らす。内面胴下部に圏線を巡らし、見込みは蛇の目釉剥ぎもしくは目跡になると思われる。15世紀、試掘No.37の出土である。同図３は直口口縁で口径12.7cm。口縁部の内外面に圏線を巡らし、外面はその直下に芭蕉文と唐草文を施す。16世紀中～後半、試掘No.37の出土である。

第62図19・20は皿である。図19は外反口縁で口径16cm。外面は高台際に一条の圏線を巡らす。胴部の構図は不明。内面は口縁部と見込み際に圏線を巡らしその間に花文を施す。見込みの構図は不明。16世紀中頃から後半、試掘No.23の出土である。同図20は底径５cm。見込みに二本の圏線内に花文を施す。外面は高台際に圏線が巡っている。高台内に文様が施されているが構図は不明。16世紀中頃から後半。試掘No.30より出土。

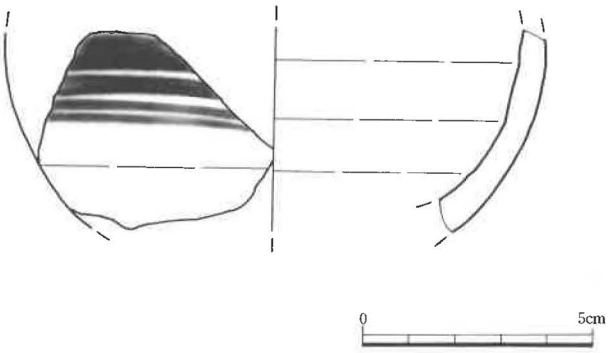
第63図４は角杯である。外面に文様を施す。16世紀後半から17世紀前半、試掘No.72の出土である。

カムィヤキ（第63図24・25）（図版43）

第63図24は碗で口縁部下は窄まり、口縁外端部をつまみ出す。口唇部は平坦に仕上げる。口径12cm。試掘No.15の出土である。同図25は壺の胴部片である。外面は斜行のたたきで、内面は回転轆轤痕の後に格子目状のたたきを施す。試掘No.37の出土である。

タイ産陶器（第67図）（巻首図版５-F）

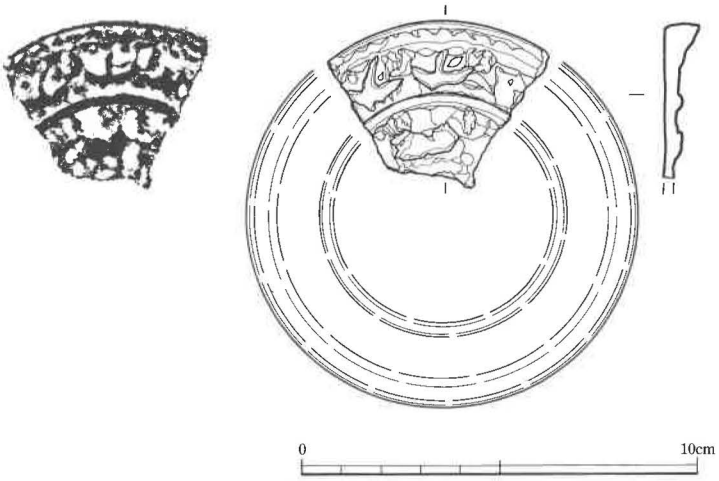
第67図はタイ産陶器の胴部片で、形状から袋物と思われる。胴径11.6cmで、胴上部に鉄釉で圏線が施され、外面は鉄釉の上からくすんだ透明釉がかかる。素地は灰色粗粒子で、黒色砂粒を含んでいる。内面は露胎で轆轤痕が残る。貫入は細かい。試掘No.50の出土である。



第67図　タイ産陶器

鏡（第68図）（巻首図版6-C）

第68図は銅鏡の破片資料で海獣葡萄鏡である。平成９年度試掘調査で試掘No.72より出土。本資料は、鏡背部の文様構成が内外区とも葡萄唐草文を巡らし、その周囲に外区は禽の飛翔、内区は狻猊（獅子）が配されている。外縁帯の構図は不明。いずれの文様も不鮮明である。9.8cm、残存部の重量56.22mg。



第68図　海獣葡萄鏡

出土状況は二次堆積で、周辺の状況を見てみると、戦前に北側には平安山ノロ殿内（試掘No.23・24・25・71辺り）が、北西側には「殿」（試掘No.41辺り）が所在している。また、平安山ノロ殿内よりさらに北側（試掘No.37・38）には15・16世紀頃の遺物が出土している。本資料はこの３地域のいずれかに関連するものではないかと思われる。

平成10年３月中旬頃に沖縄の銅鏡調査のため来沖していた京都国立博物館の久保智康氏に実見していただいたところ次のような所見が得られた。

「素地の荒れや銅が茶褐色を呈する状況から、唐代の白銅鏡（錫の比率が高いもの）を宋・元代以降に踏み返した（型取り複製）鏡の特徴で、文様の不鮮明さから見ても、中世の踏み返しの可能性が高い」という。類似資料として宮崎県神門神社伝来鏡と同型鏡の可能性を挙げている。

このように周辺の状況や久保氏の所見からみても本資料は15・16世紀の年代と考えられる。

第４表　4地区　平安山原A遺跡(平成９年度)　出土遺物集計

器種	土器										須恵器	青磁			白磁			染付			沖縄産施釉陶器					沖縄産無釉陶器			外国産陶磁器	その他不明陶磁器	近世陶磁器				陶質土器		小計
試掘No	曽畑	前庭	東洞	伊波	大山	浜屋原	大当原	後期	グスク	小計		碗	皿	盤	碗	皿	その他	碗	皿	その他	碗	酒器	その他	鉢壺(褐釉)	その他	小型	中大型	すり鉢			碗	皿	盃	その他	火炉	その他	
7										0											5		1	4		4					1					1	16
9							1			1								1																		1	2
11							3	5		8		1																									1
12								1	1	2		4	1			1		1			2						7		3				1				20
13										0		4												1			4		2		1					1	13
14	2	6						1	1	10		11	2	1	1	5		11								4	7	4	9					2		3	70
15	3	2	2						4	11	1		1					2			1			1			2		1								20
16	1	5			1					7																											7
18	1	1			1		1			4																											4
22	1				1	2	9	2	1	16																	2										18
23	1					1	1			3					1			8	1		20	2	1	5	2	3	25	8		1	8		3	5	3	8	107
24					2	2	4	5		13		1			2	1		1			25	5	2	10	2	8	34	3		2	7	5		10	2	2	135
25		1					14	23	1	39																											39
26	1	5						2		8																											8
27										0											9	2			1		3				5		2	2			24
28										0											1		1				4				2	2		3	2	1	16
29										0		1	1								1						10	1	2		1				1		18
37	1			7			2	40	104	154	1	18	2		4	1	2	15	2	1	1					3	6	1	14				1	1			227
39										0														1			1									1	3
59		1		1	1		88	24	1	116																											116
70	1	7			1		2	16	1	28											8				1	1	6		2	1	4		1	3	2	2	59
71	1							3	1	5		1									3			1			13				9		1	19			52
72		1		4				2	1	8		1					1			1				3							2						16
73									3	3					1		1				1	1			1		36	5		1	1			1	4	1	57
合計	13	29	2	12	7	5	125	124	119	436	2	42	7	1	9	8	4	39	3	2	77	10	5	26	7	23	160	22	33	5	41	7	9	46	14	21	1059

〈凡例〉①曽畑：曽畑式土器、室川下層式土器、前庭：面縄前庭式土器・仲泊式土器、嘉徳Ⅰ：嘉徳Ⅰ式土器、大山：大山式土器、浜屋原：浜屋原式土器、晩期：晩期系土器
大当原：大当原式土器、後期：具志原式・アカジャンガー式土器、グスク：グスク系土器
②石器・貝製品・骨製品については観察一覧（第21・22・23表）を参照のこと

貝製品（第64図１・３・８）（図版44）

イモガイ(アンボンクロザメ)の円盤状製品、ゴホウラの背面貝輪未製品､シレナシジミ製貝刃？の３点である。第64図１はアンボンクロザメの螺塔部を横位に切り取り、円盤状にしたものである。体層側の切断部分は顕著に研磨され、殻頂部周辺には10数個のアバタがみられることから、円盤状製品の未製品であろう。大きさは、殻径4.1cm×3.9cm、重さ24.31gを測る。（第24表）試掘No.59の出土である。

同図3はゴホウラの背面型貝輪の未製品である。ゴホウラの背面部分を切り取り、輪状にしたもので、内外縁には打割が見られるが、貝殻の風化著しく、他の加工は確認できない。本品の大きさは縦8.9cm、幅1.5cm、重さ31.87gを測り（第24表）、使用したゴホウラの大きさは、第64図4～5のゴホウラより小さいようである。試掘No.18の出土である。

同図8はシレナシジミの左殻で、貝の成長線に沿うように割れている。殻頂にシレナシジミ特有のアバタが見られ、他に加工痕は見られないことから製品の可能性は低い。殻高8.6cm、殻長8.3cm、重さ123gを測る。（第24表）試掘No.72の出土である。

5地区（伊礼原D遺跡）

5地区は第三期で確認された遺跡である。調査範囲の南側の沖積低地に広範囲に広がる。南東側に6地区、北側に4地区と隣接している。

試掘穴は試掘No.47～52・56～58・60～69の19本である。包含層は表土下1.5mで砂丘の堆積がみられその上部に灰褐色土層が0.4m堆積し、その下部には柱穴が1㎡あたり6～7個、白砂層まで掘込まれている状況が確認できた。その広がりは試掘No.63・62・64・65でみられる。出土遺物は青磁やグスク土器である。時代はグスク時代。遺跡名は伊礼原D遺跡と命名した。

出土遺物

土器（第56図48～71・第57図1～46）（図版36b・37a・b）

第1図48・49は水摩を受けたもので、特に図48は粗い混和材が露出している。図48は直線的に立ち上がり、口唇部は舌状に丸味をもち刺突文を施す。外面の第一文様帯には斜位に第二文様帯には横位の沈線文を施し、内面には三本の横位の沈線文の後、ハの字状の沈線文を重ねている。全体的に黒褐色で、海水に浸かっていたことを窺わせる。口縁部の推計約31cmと大形の曾畑式土器である。図49は口唇部の欠けた無紋の肥厚口縁土器である。胎土に石英を多量に入れ、淡黄褐色の砂質であることからカヤウチバンタ式土器と考える。両者とも試掘No.57の出土である。

第56図50～53は水摩を受けた土器片である。図50・51は外面に条痕を施すが、内面は平坦で終始している胴部片である。同図50は泥質で褐色、同図51は砂泥質で暗褐色を呈する。室川下層式土器の流れを組むものと考えられる。同図52は頸部に突帯を貼り付けその上に半裁竹管状の工具で連続的に刺突文を施すもので、同図53は胴部に数条の細沈線文を単位として斜位に施す土器片である。いずれも砂質で微細な鉱物を多量に含む。面縄前庭式土器である。

第56図55～71、第57図27は口縁部片の土器で、同図55・56・65・68は砂質で口縁部が直線的に作らされ、外面が丁寧なナデを施すが、内面は指頭痕を残すものである。浜屋原タイプの土器である。同図57は口縁部が著しく外反する砂泥質の有文土器である。外面肩部には箸状の工具で刺突文を施し、口縁下の内面には斜位の沈線が荒く施している。胴部の内外面とも指頭痕を残す暗褐色の土器である。同図71は口唇部が欠け、接合面で断面三角形の肥厚部をつくる砂泥質の土器片である。指頭痕を顕著に残すことから粗隆帯文土器と呼ばれる大当原式土器のグループと判断される。同図58～64・66・67・69～70、第57図27は泥質の口縁部片である。全体的に口縁部近くで外反するもので、口唇部が平坦部をなす同図58・60・61・69や、舌状に丸味をもつ同図62・64・66・70がある。同図58の口径は14.8cmと小形で、同図59は26cm、同図60は24.8cmと大形である。第57図27は輪積みをおこない口縁部に肥厚部を形成するものである。これらは内外面ともナデられているが部分的に指頭の痕跡を残すことや泥質の胎土から、くびれ平底の口縁部片と思われる。第57図1～9は平底土器である。同図1は底径が3.5cmで尖底的平底土器である。胎土は砂質で外面は淡黄褐色で内面は灰褐色である。浜屋原タイプの底部と考えられる。同図2～7・9は泥質でくびれ部が丁寧にナデられ、底面の薄い平底土器片である。低部の大きさは同図2の底径は6cm、同図4は7cm、同図5は5cm、同図6は7.5cm、同図9は5.8cmである。底面の残るものは中央部が弱く凹んでいる。胎土は赤粒の混入がみられ内面は灰褐色、外面は褐色で鈍い光沢をもつ。試掘No.65の出土である。

第57図10は口縁部が弱く内灣する有文土器片である。口唇部には刻目文を入れ、外面の第一文

様帯には斜位の刻目文を3～4条めぐらし、その後横位の沈線を施している。下位の第二文様帯は縦位の刻目文を斜位に3本を単位として施している。内面の口縁部下にも斜位の刻目文を施している。外面の口縁部下は黒ずんでいるが全体的に暗褐色で石英を多量に混入する砂質の土器である。内外面ともナデられ室川下層式土器の後続型式と思われる。同図11は頸部片で横位に半裁竹管状の工具で文様を押引くことから爪形状の凹線が結果的にはみられる土器である。内外面とも横位の擦痕がある。砂質で淡黄褐色を呈し器壁は6mmと均一で薄い。面縄東洞式土器である。同図12・13は肩部に弱い稜をもち内面に指頭痕を残す砂質の口縁部片である。図12の口径は21cmで外面の口縁部近くは煤の付着があるが他は淡黄褐色で、芯は淡黒褐色である。図13の口径は16cmと小形で、頸部は横位に胴部は縦位にナデられ、稜がやや明瞭である。外面は暗褐色、内面は淡黄褐色である。いずれも指頭痕よりナデが強調されていることから阿波連浦下層の時期の土器と思われる。試掘No.63の出土である。

第57図14～16は器壁が5mm前後と薄手の砂質の胴部片である。図14は数条の細沈線を縦位に施し、石英を多量に混入したものである。図15は刻目文の下位には横位に接合面の痕跡を残す。同図16の内面には整形時の擦痕を残す。いずれも面縄前庭式土器片で試掘No.62の出土である。

第57図17・25は数条の凹線文で曲線を描く1cm前後で厚手の泥質の胴部片である。内外面はナデられていることから轟E式土器かと思われる。同図18は数条の細沈線文を縦位に施し、器壁が6mmと薄手の胴部片である。砂質で淡黄褐色の面縄前庭式土器である。同図19は口唇部に肥厚した突起部をもつ有文の肥厚口縁土器である。口縁部下には羽状の沈線文を施す。同図20も同図19に類似したものである。仲泊A式土器である。同図21は砂質で同図22～24・26は泥質の口縁部の土器片である。同図21は水摩を受けた外反の強いもので、阿波連浦下層式の土器である。同図23はやや厚手の無紋であるが第1図57に類似した特徴をもっている。同図24は平らな口唇部に刺突文と頸部に凹線文の曲線が施されている薄手の口縁部である。同図26は胴部に最大径をもち外反する口径は24cmとやや大形の土器片である。器壁は5mmと薄く、外面は縦位に内面は横位のハケ目を施す。焼成が良く赤粒を多量に混入した泥質土器である。同図28は尖底的平底で、29・30はくびれ平底土器である。同図28の内面は黒褐色で外面は淡褐色である。同図29・30の底面の中央部はやや凹み、摩耗を受け淡灰褐色を呈する。試掘No.64の出土である。

第57図31・32・34～38・43は口縁部片で、36は淡黄褐色で砂質であるが他はすべて暗褐色の泥質である。同図31・35～38の口唇部は平坦で、同図36には刻目文が施されている。同図37の口径は15.6cmと小形の土器である。同図32は舌状の口縁部で内外面に沈線文により曲線が描かれている。34は弱い外反をもつ先細の口唇部である。39の底径は3.4cmの尖底的平底である。砂泥質で暗褐色を呈する。同図40は5.9cm、同図41は6.5cmの底径をもつくびれ平底土器である。くびれ平底土器の底面は擦れていて、中央部は弱い凹みをもつ。同図40は淡黄褐色の砂質で、同図41は褐色の泥質である。試掘No.52の出土である。

第57図44は底径3.2cmの丸底的平底である。水摩を受け淡灰褐色で赤粒を混入する砂泥質の土器である。同図45は器壁が薄く、水摩を受け鉄分の付着がみられるくびれ平底土器である。試掘No.60の出土である。

第57図46は口縁部の欠けた胴部上半分を残す壺形土器である。頸部の径は17.2cmで、残存部の胴径は約30cm大形の壺である。内外面とも研磨が施され鈍い光沢をもつが、指頭痕や内面の

接合面の痕跡を残している。粗いサンゴ砂を多量に混入するが、内面は剥落しアバタを呈している。淡明褐色で砂泥質の胎土である。グスク土器の壺である。試掘No.50の出土である。

青磁（第61図23～32）（図版41）

第61図23・24・32は無文碗である。図23は外反口縁で口径が16cm。15世紀前半から中頃、試掘No.52より出土。図24は碗底部で、外面胴下部は露胎である。底径は4.8cm。15世紀前半から中頃、試掘No.62より出土。図32は直口口縁で、口径は13.6cm。口縁部下には一条の凹線が巡らされている。15世紀中頃から後半、試掘No.69の出土である。

同図25・26・27・29・30は蓮弁文碗である。図25は直口口縁で弁先が連続した半円を施し、谷間より縦沈線を施す線刻細蓮弁文碗である。15世紀中頃から16世紀前半、試掘№.62より出土。図26は外反口縁で、口唇部は内外面の蓮弁文の弁先を表現するために小さな抉りがみられる。両面とも蓮弁文を上段と下段に区画するため胴部中央に圏線を巡らす。16世紀中頃から後半、試掘No.62の出土である。図27は蓮弁文碗の底部である。底径は5.4cm。外面は高台際まで蓮弁文を施文する。図29は内彎口縁で口径は13.6cm。口縁部は釉垂れがみられ、しかも釉の発色が悪いため、弁先の有無が不明な細蓮弁文である。16世紀中頃から後半、試掘№.64で出土。図30は内彎口縁で弁先が山形となる剣頭状蓮弁文である。16世紀中頃から後半、試掘No.64の出土である。

同図28は壺である。底径は6.5cm。外面は高台際まで縦沈線の細蓮弁文を施文する。14世紀後半から15世紀中頃、試掘No.64の出土である。

同図31は杯である。口縁部は内彎口縁で、口径は7.4cm。外面は弁先が連続する半円を巡らし、その谷間から縦沈線を施す線刻細蓮弁文である。16世紀中頃から後半、試掘No.65の出土である。

石器（図版47－４）

図版47－4は花崗岩製の凹石である。完形品で表裏面および上面に研磨、側面と下面に敲き痕が見られる。平面の形状は円形、断面は隅丸の楕円を呈する。大きさは縦8.01cm、横7.85cm、厚さ4.4cm、重さ438gを測る。試掘No.52、淡灰黒色混砂層で出土。

貝製品（第64図４・５・６・９・10）

本地区ではゴホウラの未製品(第64図4・5）、サラサバティラ（図6）、二枚貝有孔製品（第22表9～12、14、16)の計13点が出土した。

第64図4・5はゴホウラの腹面部分であるが、いずれも明瞭な加工はみられない。また、殻も薄く、後者は貝色も残り、素材貝と思われる。試掘No.65で出土した。

同図6はサラサバティラの体層部と殻頂近くに穿孔が見られる。孔の周縁は内側に抉れていることからスレの結果できたものと思われる。殻は風化気味で他に加工痕はなく、製品の可能性は低い。試掘No.65で出土。

同図9・10はヒメジャコの有孔製品である。同図9は殻高5.1cm、殻長7.5cmの小形の貝で、孔は内殻→外殻に穿孔され、楕円形（径0.5mm×0.9mm）を呈する。孔は後背縁側に近く施されている。また、孔から後背縁にヒビが入り、殻は風化気味である。試掘No.65で出土。

同図10は殻高8.6cm、殻長12.9cmの大形の貝で、殻の摩耗は著しく、また、アバタも見られる。孔は横楕円（19.0mm×31.0mm）で、内殻から穿孔されている。試掘No.68で出土。

同図11・12・14・15はメンガイ類の有孔製品で、図11は試掘No.69、図12、14は試掘No.62、図15は試掘No.52で出土した。同図11は殻高5.8cm、殻長5cmの大きさで殻は摩耗する。孔は径

0.84cm×0.92cmのほぼ円形を呈し、内殻→外殻に穿孔され、周縁は丁寧に加工されてる。図12は殻高7cm、殻長5.3cmの縦長の貝で、殻の中央の薄い部分を穿孔する。孔径1.69cm×1.3cmを測る。図14は殻高6.1cm、殻長5.6cmの大きさで殻は摩耗する。孔は図12と同様、殻の薄い部分を穿孔するもので、孔径2.5cm×2.04cmを測る。同図15は殻高6.9cm、殻長5.6cmの大きさで、殻は厚く、殻表面にはアバタ多い。腹縁は破損し、その近くに長楕円の孔があるが、自然の可能性が高い。孔は内殻→外殻にあけられ、孔径0.9cm×1.2cmを測る。

その他に試掘No64ではリュウキュウサルボオ4個、リュウキュウマスオ1個の有孔製品が得られている。（第24表）

図版45－6はシャコガイのちょうつがい部分を二等辺三角形状に形とったものである。試掘No.64白色枝サンゴ層で出土。

第５表　５地区　伊礼原D遺跡（平成９年度）　**出土遺物集計**

器種	土器															青磁			白磁		染付		沖縄産施釉陶器		沖縄産無釉陶器		外国産陶器		近世陶磁器		陶質土器		小計
試掘No	曽畑	前庭	仲泊	東洞	伊波	荻堂	大山	晩期	弥生	浜屋原	大当原	後期	グスク	不明	小計	碗	皿	その他	碗	その他	碗	皿	碗	その他	小型	中大型		その他	碗	その他	火炉	その他	
47				1											1																		1
50		9								1			2		12															1			13
51															0															1	1		2
52	1	1		5					1	1		90	2		101	2																	103
56												1			1																		1
57	1			3						5		8			17																		17
58												1			1																		1
60		1		1							1	4			7																		8
61															0							2	1			1	1	1	1				8
62	2				6	7	1				5	17			38	3	1		2				2	1	5	6	3						63
63	17	2		1						2		16			38	1																	39
64	8	6	2	2	12		10	2	3	4	46	96			191	6		1			1					8	9						216
65	5	6	1	1	1					8	45	328	6		401	2							1			5							409
66	2											4		1	7																		7
67	4	2			2						1	9		1	19								1			3							23
68							2				7	9	6		24											1							25
69									1	1	3	6			11	5			3	1	1		3			5	5	1				3	38
合計	40	27	3	14	21	7	13	2	5	22	108	589	16	2	869	19	1	1	5	1	2	2	8	1	5	29	18	2	1	1	1	3	974

（凡例）①曽畑：曽畑式土器、室川下層式土器、前庭：面縄前庭式土器・仲泊式土器、嘉徳Ⅰ：嘉徳Ⅰ式土器、大山：大山式土器、浜屋原：浜屋原式土器、晩期：晩期系土器
大当原：大当原式土器、後期：具志原式・アカジャンガー式土器、グスク：グスク系土器
②石器・貝製品・骨製品については観察一覧（第21・22・23表）を参照のこと

６地区（伊礼原C遺跡）

６地区は第二期の調査で確認された遺跡で、調査区の北東側にあたる。本地区は北東側に標高30mの琉球石灰岩台地を背にし、そこから派生する２本の尾根が南西方向に舌状に突出して西側の沖積低地へと開ける地域で、三方を尾根に囲まれた麓の平坦な低地に湧水（ウーチヌカー）があり、それを基点とする低湿地遺跡、さらに南西側に開けた低地には砂丘遺跡が展開している。範囲は試掘No.126・127・133・134・138・140～143・145・146の11本で谷間から平野部に延びる状況で発見された。谷間の低湿地（No.143）あたりは包含層が表土下3.5mに暗灰褐色泥質砂層が厚さ約0.3m堆積している。砂丘地は表土下0.6mに厚さ約0.5m堆積している。出土遺物は前者では曽畑式土器期やシイの実を主体とする有機質を多く含み、獣骨、貝類などが多量に出土する。さらにその下層からは爪形文土器も出土する。後者の砂丘地では面縄前庭様式土器や奄美系土器などが出土する。縄文前期の曽畑式土器層を主体として、縄文時代早期からグスク時代までの土器が出土する複合遺跡である。遺跡名は周知の遺跡である伊礼原Ａ・Ｂ遺跡があることから伊礼原Ｃ遺跡と命名した。

出土遺物

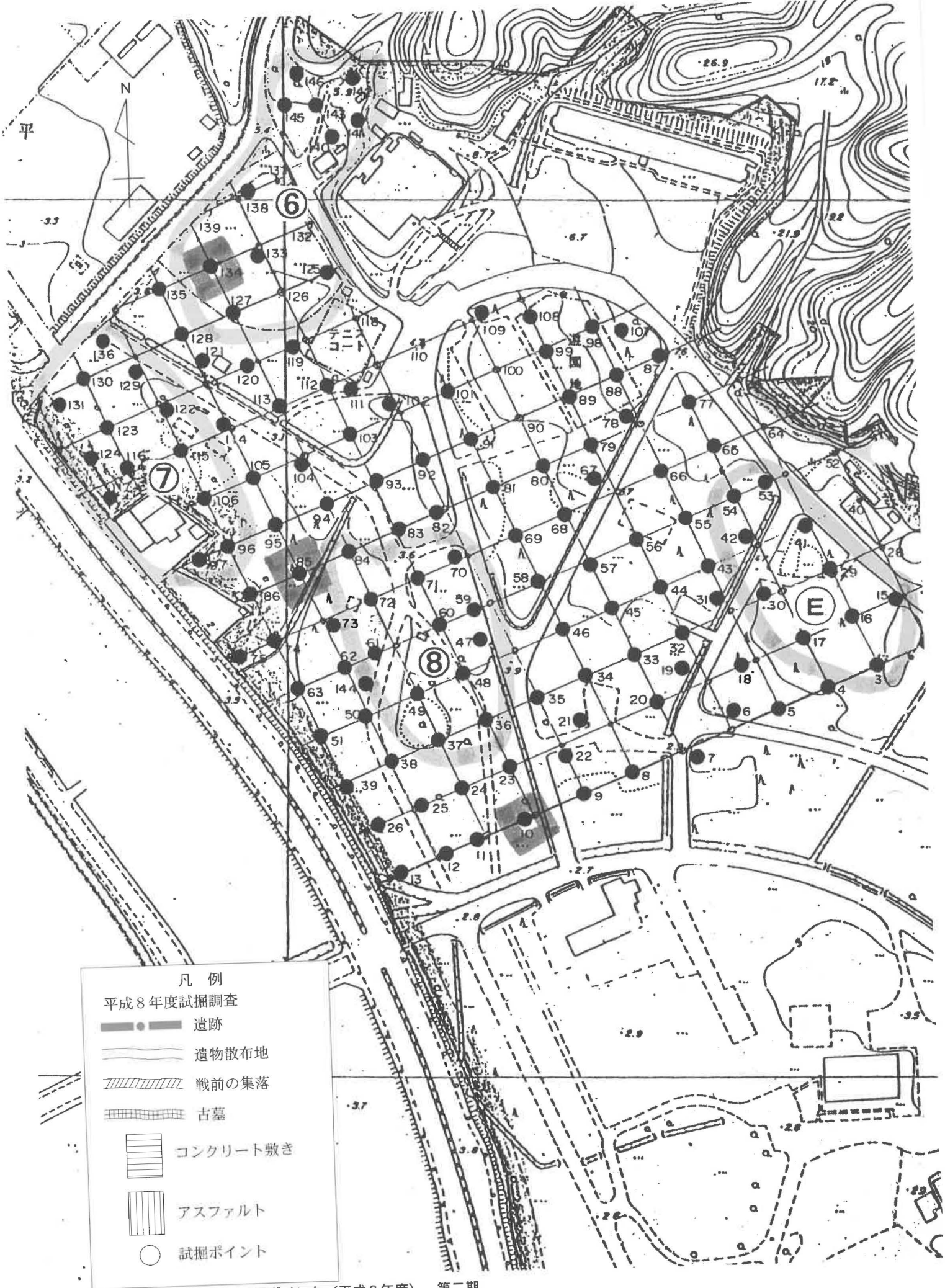
土器（第58図１～70・第59図1～34・38・47）

出土土器は試掘No.125、No.138、No.145が最も多く、年代を決める特徴的なものがあった。第58図1～5が試掘No.145から。第58図6～37が試掘No.125、第58図38～70・第59図1～4までが試掘No.138、第59図5～34が他の試掘穴からの出土である。

第58図1～5は水摩を受け文様も摩耗しているが、爪形文の特徴は保持している土器である。いずれも胴部破片であるが、外器面に爪形状の凹文を残す有文土器である。同図2・4は凹凸が強く広いが他の３点は浅く弱い。前者がヤブチ式土器で、後者が東原式土器である。色調は全体的に淡灰褐色で鉱物が多量に混入する緻密な1・2・4・5と、サンゴ細砂を混入し、軽量な同図3がある。試掘No.145より出土。

同図6～8は地文に条痕をもち、さらに凹線で曲線を引くものである。条痕文土器群で同図7が轟Ｃ式、同図8が轟Ｄ式土器である。同図9～12は外反した口縁部に細いミミズバレの突帯をめぐらし、その上に弧状やM字状の刻みを施すものである。器壁が薄く、胎土は緻密であるのが特徴である。器面調整も丁寧で全体的に暗褐色をおびる。面縄前庭式土器である。同図12～21は口縁部になだらかな三角形状の肥厚部をもち、頸部に段を作る。その肥厚部にＶ字状やM字状に連続に刺突文を流水状に施文して構成する土器群である。面縄東洞式土器とされる一群である。同図23は肥厚する文様帯部に口縁下と頸部近くに突起を2個もち、その上から弧状の連続刺突文が施されている類例資料のないものである。同図22・27～29は口縁部の肥厚部がカマボコ状に形成し、そこに羽状の沈線文を施すものである。胎土は砂質で全体的に淡灰褐色である。仲泊式Ａ式土器である。同図32は器壁が5mmと薄く、底部からの立ち上がりが鋭角であることから面縄東洞式土器の底部である。同図36は輪積み、37は巻き上げによる乳房状尖底土器である。尖底部がシャープに尖ることから仲泊式土器の底部である。試掘No.125の出土である。

同図39・40は約1cmと厚手で太い沈線文を斜位に施す明褐色の土器片である。前者は砂質で石英を多量に含み、後者は泥質で雲母や赤粒を多量に混入するものである。東原式土器である。同



第10図　キャンプ桑江試掘ポイント（平成８年度）　第二期

図41は水摩を受けた器面保持の悪い土器片である。口縁部はやや直線的で、外面には斜位の短沈線文を、さらに竹管状の刺突文が3ヶ所みられる。内面には貝殻腹縁部による押圧文が施されている。砂質で粗い石英を多量に含む黒褐色の室川下層式土器のものである。同図43は口縁部の欠けた肩部片で、横位に突帯文の上に半裁竹管状の刻目文を施し、その上下に細沈線文を数条を単位として構成したものである。器壁は5mmと薄手で細かな石英を多量に混入した暗褐色である。面縄前庭式土器片である。同図56は6mmと薄手で山形口縁部をもつものでる。山形部直下には縦位に、口縁部と頸部には横位に叉状の工具で二条沈線文を施し、その間を斜位の沈線で埋めるものである。暗褐色で石英やチャート片を多量に含む。盛行期の伊波式土器である。同図64は口縁部はやや外反し、頸部に太めの突帯をもつ口径25cmの土器である。口唇部は平坦になる。胴部の器壁は1cmとやや厚い。器面の保持は悪く多量に含まれる石英やチャートの露出がみられ、胎土は砂質で褐色を帯びる。弥生土器の影響下の土器であろうか。試掘No.140の出土である。

同図44・45・47・48は口縁部に山形を作り、口縁部下と胴部上半分に叉状の工具で連点文を横位に施す土器である。同図44は山形部の両サイドにチェブロン状の段を形成し、山形部の直下には縦位の連点文を、口唇部には刺突文が施されている。同図45・55は山形部を欠損しているが、その下位と思われる部分には縦位の連点文を施している。口唇部に文様がないことから44とは別個体と思われる。同図47は幅3mmの篦状の工具で連点状に刻目文を施したものでる。これらはいずれも伊波式土器である。同図49は上面観が方形をなす口縁部で、その角張った部分はさらに山形を形成するものである。その方形山形口縁部分は断面の破損面から三重に粘土塊を付加して形成している。口縁部の肥厚部には半裁竹管状の工具で爪形押引文を施している。内面山形部分にも同様な文様を二条施している。頸部下と内面に横位の擦痕が残る。器壁は6mmと薄く砂泥質で焼成は良く重量感のある暗褐色の土器片である。奄美諸島の市来式土器片である。同図46は爪形押引文のみを施した薄手の土器片で、面縄東洞式土器である。同図50～54は器壁が薄く山形口縁部をもつもので、52・54の山形口縁部下には縦位の弱い稜をもつ。爪形押引文と細沈線を組み合わせて文様構成をするものである。口唇部にも50～52は同様な爪形押引文、53・54は横位の細沈線文が施されている。53・54は同一個体である。いずれも暗褐色で砂泥質の胎土である。これらは奄美諸島の嘉徳Ⅰ式土器である。同図57は細沈線による横位の羽状文を施した5mmと器壁の薄い胴部片である。文様の特徴から仲泊式土器である。同図58～61は平底土器で、58・59は鈍角な立ち上がりを、59・60は鋭角な立ち上がりをもつものである。59・60の底径はいずれも5.8cmで底面が凹む、特に60は脚状になる。59・60は面縄東洞式あるいは嘉徳Ⅰ式土器の58・61は伊波式土器の底部である。同図62・63は直線的な無紋の口縁部で、62の口唇部は平坦で63は舌状に丸味をもつ。外面は細かい擦痕やナデが施されているが、内面は指頭痕を残す。古式の浜屋原タイプである。同図67の底径は3.6cm、同図68は底径3.4cmと小さい平底土器である。特に67の底面からの立ち上がりは稜をもつ。外面は丁寧なナデが施され鈍い光沢をもち、内面は部分的なナデが施されている。砂質で細かな雲母や石英が多量にみられる暗褐色の底部である。縄文晩期の土器底部の特徴を保持している。同図69・70は先端が丸味のある尖底土器である。いずれも砂質の面縄東洞式土器である。試掘No.116の出土である。

第59図1～4は地文に擦痕をもつ厚手の有文土器片である。同図1は刺突文を施した頸部片である。同図2・3は先端がささくれた幅3㎜ほどの篦状の工具で凹線文を２は横位と斜位に、3は斜位

に施したものである。同図4は底部近くのもので文様も薄く器壁は1.5cmと厚い。いずれも粗い石英やサンゴ砂を多量に含む泥質で外面は褐色で、芯は黒褐色を呈している。渡具地東原遺跡の曾畑式土器に類似している。試掘No.140の出土である。第4図5は地文に条痕を施した胴部片である。同図6は突帯上に刻目文を、その下位には細沈線文を斜位に施した胴部片である。5は褐色で6は淡黄褐色を呈する。試掘No.125の出土である。同図7は口径18.4cmの内傾する口縁部片である。頸部は横位のナデが施され、肩部に弱い稜をもつ。胎土は褐色の砂質である。阿波連浦下層の土器に類似する。同図47は口径20cmで外反するが、口唇部を内側に丸めた土器片である。外面はナデた明褐色、内面は淡黄褐色で指頭痕を残す。芯は暗褐色を呈する泥質で焼成が良く硬い。試掘No.138の出土である。

同図8は二対のシャープな突帯を横位にもつ胴部片である。内面に指頭痕を残すが外面と同様に丁寧なナデが施されている。胎土は砂泥質で緻密である。外面と芯は暗褐色であるが、内面は淡褐色を呈する。在地の弥生土器と考えられる。同図9・12・13・17・18は4～5mmと薄手の口縁部片で、同図11・14・19は7～9mmと厚手の口縁部片である。11は肩部にナデによる稜をもつ。17は褐色で、18は淡黄褐色の小形のマリ形土器片である。同図13は唯一の有文土器で、口唇部に短沈線文、外面にU字状の細沈線文が施されている。同図10・16は輪積みの痕跡を残す胴部片である。いずれも砂質で外面は丁寧なナデが、内面はナデられているが指頭痕を残す12もある。阿波連浦下層の土器に類似する。同図15・21・22・23は砂泥質の口縁部片である。同図24は2.5cm、25は3cm、26は2.8cm、27は1.8cm、28は2.2cmの尖底的平底土器である。同図28は底面に指頭による凹部をもつ。同図24は砂質、25・27は砂泥質、28は泥質である。同図26は同図18と同一個体かと思われる。試掘No.133の出土である。

同図20は47に類似した泥質の土器である。試掘No.145の出土である。同図29・30は水摩を受けた土器片である。同図29は刺突文による羽状文を構成する胴部片である。胎土は褐色で粗い石英や細かい雲母を多量に含む。室川下層式土器である。同図30は4mmと薄手の口縁部片で器面保持はよい。先端部が四対になった箆状工具で連点文を横位に施している。細かい石英を多量に含む暗褐色のものである。面縄東洞式土器に含まれるものと考える。試掘No.127の出土である。

同図31は水摩を受け、爪形文と沈線文とで構成する口縁部近くの土器片である。胎土は赤粒を混入した砂質で明褐色を呈する。嘉徳Ⅰ式土器である。試掘No.146の出土である。

同図32・33は水摩を受け、34は鉄分の付着がみられる土器片である。同図32は刺突文を横位に施した口縁部近くの土器片である。摩耗が著しく粗い混和材が露出している暗褐色である。同図33は突帯上に箆状工具で刺突文を施し、その上位に細沈線文を構成する頸部片である。褐色の面縄前庭式土器である。同図34は口縁部下に一条の細い突帯を施す。4mmと器壁が薄い。内面に横位の擦痕をもつ砂質で黒褐色の小形の土器片である。試掘No.120の出土である。

同図35は強い水摩を受けたもので、石灰分の付着がみられる。外面の第一文様帯は横位の刺突連点文、第二文様帯は横位の沈線文、第三文様帯は縦位や斜位の曲線文で文様を構成し、内面の第一文様帯は横位の沈線文後、縦位の沈線文を二対施している。ややくずれた曽畑式土器である。同図36・37は水摩を受けた土器片である。36は口縁部の肥厚部に箆状工具で横位に刺突文を施したものである。37は薄手で間延びした口縁部の肥厚部に横位の爪形文を5列施したものである。いずれも砂質の面縄東洞式土器である。試掘No.116の出土である。

第59図45・46は6地区の南側約40m（米軍テニスコート西側）で出土したもので、地区外と取り扱ったが最も近いこの地区で紹介したい。同図45は尖底土器で同図46は尖底的平底土器である。同図45は砂質で外面は淡灰褐色、内面は淡黄褐色を呈する。同図46は外底面に指頭痕よる凹部をもち、立ち上がりに弱い脹らみを帯びる。外面は褐色で、内面は暗褐色を呈する砂泥質の胎土である。試掘No.112の出土である。

試掘No.143の出土土器（第60図1～53、図版40）

出土土器は沈文（第60図1～53）と浮文（第60図54・55）に分けることができる。

第60図1～13・15～20は沈文の口縁部片である。同図14は口唇部が欠損しているが、内面の文様からここに含めた。厚手のものは同図1・3・5・6・7・9・11・12・16・19で、薄手のものは2・4・8・13・15・17・18・20がある。前者は大形の深鉢で、後者は小形の鉢の土器片である。厚手の大形の口縁部下の第一文様帯は連点文と沈線文を交互に巡らす1や、縦位の短沈線文後に横位の沈線文を施す3・6、横位の短沈線文で終始する11のように内外面の文様構成に同一性がある基本構成をもつ古式のものと、外面は横位の沈線文で、内面は縦位の沈線文をもつ9や、外面は横位の沈線文、内面は横位の連点文をもつ14、外面は連点文をもつ16や、横位の沈線文と斜位の沈線文を構成するもの19があるが、内面は無紋で終始する基本構成のくずれた新式の16・19がある。薄手の小形の土器片も基本的には同様であり、短沈線を内外面にもつ2・13や刺突文もつ4・5・7・8があるが、外面は横位の内面は縦位の短沈線文をもつ10や、外面は斜位の内面は曲線文の沈線文をもつ15がある。外面に横位の羽状文をもつ20のように内灣する碗形の器形のものもある。同図21～48・50は胴部片で、基本的に口縁部の文様構成を踏襲している。同図22～24・26・28の横位の沈線は左から右へ、同図24・26・28の縦位の沈線は上から下へ、同図22・24・25の左斜線は左上から右下へ、同図24～26・28の右斜線は右上から左下へと文様の施文方法は踏襲している。文様の構成でも22・24・26・28のように横位の沈線文帯を施し、その後、26・28・29のように縦位の沈線文で区画し、22・24～29のように斜位の沈線文を埋めていく方法の前後関係がみられることから曽畑式土器の文様構成を基本的に保持していることがうかがえる。同図40・44は底部に近いもので、同図49・51～53は底部片である。特に49は安定の良い丸底の底部で、外面の下面まで文様を施した唯一の有文である。複数の沈線文で円の文様構成を施したもので、胎土にサンゴ砂が多量に含まれることから在地の土器である。

これらの胎土は黒褐色と灰褐色に大別でき、混和材としてサンゴ砂、石英を個々に含むものとサンゴ砂と角閃石を含むものに細別できる。①黒褐色にサンゴ砂を含むの（同図1・3・5・6・7・9・10・12・19・20・23・33・37・50・51・52）が最も多く、全体の約60％である。②灰褐色でサンゴ砂を含むもの（同図16・17・21・27・32・39・44・49・53）は約20％、③黒褐色で石英を含むもの（同図48）は約10％、④灰褐色でサンゴ砂と角閃石を含むもの（同図2・8・22・24・26・28・35・38・46・47）は約5％である。⑤黒褐色でサンゴ砂と角閃石を含むもの（同図4・11・13・14・15・18・29・30・31・40・41・42・43・45）は約5％、①と③の黒褐色は肉眼観察では在地産、②・④・⑤が搬入土器と考えられる。科学分析によると④の角閃石の特徴は角閃石安山岩で、トカラ列島以北のものであるという所見をいただいた。

同図54・55は厚手で幅広い突帯文をもつ浮文の胴部片と、その底部片である。同図54は幅約2.5cm、

高さ約5mmの突帯が放射状に施されたもので石英を多量に含む砂質の土器片である。同図55は中央部で2.7cmと底面の厚い平底土器である。サンゴ砂を多量に含む砂質土器片である。これらの土器は南島で類例がなく、新しい土器のグループと考えられる。

青磁（第62図２～５）

第62図２は内彎口縁で口縁部外面に雷文帯を巡らす。15世紀前半から中頃、試掘№133より出土である。同図３・４は皿である。図３は底径6.6ｃｍ。見込みにスタンプによる花文を施す。15世紀前半から中頃、試掘No.138で出土。図４は口唇部に抉りを入れ波状を呈する稜花皿である。口縁内面には口唇部に沿うように２本の櫛目による沈線を巡らす。15世紀前半から中頃、試掘No.141の出土である。

滑石製品石鍋（第65図８）（巻首図版５-E）

第65図８は滑石製石鍋の底部資料である。内底面から胴部へ立ち上がる部分である。外底はノミ状による加工痕が残り、色調は淡灰黒色である。厚さは約1.5cm。試掘No.133の出土である。

石器（図版47－５・８・図版48－５・６・９・図版50－５）

図版47図5は石斧を二次利用した敲石で、ほぼ完形である。中央および上下面に敲き痕が施され、表裏面および側面は研磨されている。平面形は隅丸方形で両端に若干細くなり、横断面は楕円を呈する。石質は角閃石で、大きさは縦9.85cm、横8.38cm、厚さ3.6cm、重さ514gを測る。試掘No.138、黒褐色砂質土の出土である。

同図8は、刃部を中心に研磨を施した磨製石斧片で、頭部および刃部の一部を欠損する。平面形はややバチ形を呈し、横断面は扁平である。石質は輝緑岩で、残存部の大きさは,縦7.54cm,横5.64cm、厚さ1.6cm、重さ90gを測る。試掘No.133、包含層（暗褐色混土）の出土である。

図版48図5は石斧を二次利用した敲き石で、ほぼ完形品である。敲きは下面に顕著に認められ、他は研磨が残る。平面形は長方形、横断面は蛤状を呈する。石質は斑レイ岩で、大きさは縦11.06cm、横6.02cm、厚さ3.4cm、重さ485gを測る。試掘No.138,黒褐色砂質土の出土である。

同図6は石皿で、表面の中央部に溝状の凹みが見られ、他は敲き痕が残り、裏面と側面に研磨が見られる。ほぼ完形で平面は長方形、断面は扁平を呈する。石質は砂岩で、残存部の大きさは縦21cm、横11.7cm、厚さは最大3.2cm、最小1.8cm、重さ1000gを測る。試掘No.133、包含層（暗褐色混土）の出土である。

図版46－７は小刀状の石製品である。加工は表裏面および側面は研磨され、下部は附刃されている。石質は千枚岩製である。ほぼ完形品で平面は方形、断面は扁平で縦3.08cm、横2cm、厚さ0.28cm、重さ3gを測る。試掘No.138、黒褐色砂質土の出土である。類例はシヌグ堂遺跡など縄文晩期相当期に出土している。

図版50－5は黒曜石で試掘No.143の包含層（暗褐色混土）、同図2のチャートは試掘No.143,淡黒褐色土層で出土している。その他に試掘No.145灰色細砂層からは砂岩製の扁平片刃石斧、試掘No.146の攪乱からは砂岩製の磨石、敲石や花崗岩（閃緑岩）の破片が出土している。

木製品（第66図）（巻首図版６-A・B）

今回得られた有機質の中には多くの木片が得られた。木片は曽畑式土器に伴う層とその上部に堆積する層に認められた。特に前者を中心として４ｍ×４ｍ×0.3mの土量を洗浄し、木片がコンテナの約30箱分得られ、人為的な加工痕が認められたのはその３分の１ほどである。得られた資

料は全て平成８年度の試掘調査で試掘No.143からの出土である。

これら資料の樹種同定は茨城県筑波市所在の森林総合研究所木材利用部の能城修一氏にお願いした。その結果、「前者にみられた樹種はタブノキ属やニシキギ属であった。珍しいのではヒノキ科あるいはスギ科の針葉樹が認められた。ヒノキは日本では屋久島が南限で、それ以南には認められず、台湾には亜種のタイワンヒノキがあるという。両者の区別は木材ではできないようである。また、コウヨウザン属とショウナンボクが認められた。この種は現在日本や琉球列島には生息しておらず、台湾か中国の本土に生育しているものであるという。考古学的にこの時期に交流があったという証拠はないことから、これら樹種の存在をどのように解釈するかいろいろと搬入経路などの考察が必要である」ということである。

後者は主に自然木が多く認められ、サキシマスオウノキとサガリバナが優占し、海岸林あるいはマングローブの奥の林の組成であった。

木製品は上述したタブノキ属やニシキギ属によるものが多く、板状製品・板状有孔製品・丸木棒・薄板有孔製品・角材片・割材等が認められた。その中の５点を図化したので紹介する。また、木片の樹種同定結果リストを第14・15表に記した。

第66図２は半分欠如した三角形状の有孔製品で孔径約1.8cmである。孔は半円状で、両面から穿たれたようである。両面とも摩耗が著しい。縦約８cm、横約７cm、厚さ約1.5cm。材質はタブノキ属。

同図１は、板状の製品で、左上側に焼痕が認められ、上辺端部は削りの加工痕が認められる。縦約12cm、横約13.1cm、厚さ約0.9～1.7cm。材質はタブノキ属。

同図４は半分欠如した薄い板状の有孔製品で孔径約１cmである。孔は半円形で破損している。製品の形状は長方形で上部は薄く、下部はやや厚い。縦約4.8cm、横約２cm、厚さ0.3～0.7cm。材質はツツバキ属。

同図３は丸木棒状で上端部に斜めに削られた加工痕が、下端部は焼痕が認められる。長さ約12.5cm、直径約2.2cm。材質はニシキギ属。

同図５は両面から削られた扁平状な木製品である。上端部は欠損しているが、下端部はスレて丸味をもつ、長さは4.7cm、幅約1.8cm、厚さ0.8cmである。材質はタブノキ属。

同図６は丸味をもつ角錐状のもので、上端部は欠損しているが、下半部は削りにより締まり端部はスレて丸味をもつ。錐状の工具であろうか。現状の長さ約6.1cm、幅は上端部が約0.7cm、下端部は0.4cmである。材質は不明。

バキ属

同図６は丸木棒で図面の上部に加工痕が、下部には焼痕が認められる。長さ約12.5cm、直径約2.2cm。材質はニシキギ属。

貝製品（第64図）（図版44）

本地区からはゴホウラ（第64図２・図版44）、メンガイ類（第64図・図版44-3）、1点・リュウキュウサルボオ4点（図版45-2、3点は表のみ）の計6点出土している。

第64図2はゴホウラの腹面型貝輪の破損品である。周縁は顕著に磨かれ、光沢を帯びている。貝輪の幅は20.4mmの厚手で、先端部は切り取られ、残存部は16.46gの重さである。No.133で出土した。

第６表　樹種リスト（平成８年度　６地区　試掘No.143より出土）

No.	種　子　名	図版番号	No.	種　子　名	図版番号	No.	種　子　名	図版番号
1	タブノキ属		10	センダン		19	サンショウ属	
2	ニシキギ属		11	コウヨウザン属		20	ショウナンボク	
3	ツバキ属		12	イズセンリョウ属		21	クロヨナ	
4	竹		13	ムラサキシキブ属		22	ヒノキ・タイワンヒノキ	
5	チシャノキ属		14	シマトネリコ		23	イスノキ	
6	サキシマスオウノキ		15	モッコク		24	オキナワジイ	
7	サガリバナ		16	イヌビワ属		25	マキ属	
8	ハリギリ		17	エノキ属		26	クワ属	
9	オオハマボウ		18	ギーマ		27	モチノキ属	

第７表　種子リスト（平成８年度　６地区　試掘No.143より出土）

No.	種　子　名	図版番号	No.	種　子　名	図版番号	No.	種　子　名	図版番号
1	オキナワジイ		23	サンショウ属		45	カエデ属	
2	オキナワウラジロガシ	15-2・4	24	カジノキ		46	ムラサキシキブ属	
3	マテバシイ		25	スズメウリ属		47	サクラ属	
4	リュウキュウチシャノキ		26	クスノキ科		48	クサギ属	
5	マルバチシャノキ		27	イイギリ		49	コナラ属	15-3
6	エゴノキ		28	ウラジロエノキ属		50	ホタルイ属	
7	ホルトノキ		29	ヤマモモ		51	ハスノハカズラ？	
8	アダン	15-5・6 16-4・6・7	30	チョウジギク属		52	アカメガシワ属	
9	ショウベンノキ		31	シマサルナシ		53	イバラモ属	
10	シイノキ属		32	ヒルムシロ属		54	モチノキ属	
11	ブドウ属		33	エノキグサ？		55	バラ科	
12	マンサク属		34	イスノキ		56	ツルウメモドキ属	
13	オガタマノキ		35	センダン	16-1・2・3 16-5・8	57	シマサルナシ	
14	クロヨナ		36	コバンモチ		58	ハマクサギ属	
15	アワブキ属		37	ハイノキ属		59	イネ科	
16	シマウリノキ		38	オモダカ科		60	ヒユ属	
17	ヒルムシロ属		39	カラムシ		61	セリ科	
18	スゲ属		40	カタバミ属		62	オキナワスズメウリ	
19	ナデシコ属		41	モミジカラスウリ		63	キク科	
20	ナス属		42	ソクズ		64	オキナワスズメウリ	
21	ウリ科		43	ニワトコ		65	コバテイシ	15-3
22	カラスザンショウ		44	クワ属				

第64図13はメンガイ類の有孔製品である。孔は成長線から破損し、形も不定形である。殻も風化気味であることから自然に開いた可能性が高い。縦(殻高)7.2cm、横(殻長)7.8cm、重さ39.38gを測る。No.48白砂層で出土。

図版45-2はリュウキュウサルボオの有孔製品で殻頂部近くに丁寧に穿孔する。殻の大きさは殻高4.9cm、殻長6.1cm、重さ24g、孔は14.6mm×13mmを測る。No.138黒褐色砂質土で出土。他にリュウキュウサルボオが3個出土している（第24表）。

骨製品（第65図）

骨製品はサメ歯有孔製品２点（第65図1・2）、イノシシ下顎犬歯製品１点（同図3）、イノシシの脛骨（同図4～6）を利用した骨錐が３点の計6点得られた。いずれも試掘No.143で出土した。

同図1・2はイタチザメの歯の基部に径2mm前後の孔を施したものである。孔は前者が基部の中央に１つ穿孔し、後者が基部の両端に２つ穿孔されている。

同図3はイノシシのオスの下顎犬歯を半裁し、エナメル質側を用いたもので、先端部に１つ孔を施す。表面はエナメルが剥がれているが、裏面は研磨のため光沢が見られる。孔は裏面から数回の穿孔を試みているため、径6×3.5mmの楕円を呈している。残存部の大きさは長さ5.44cm、最大幅1.96cm、重さ10.6gを測る。

同図4、5、6はイノシシの脛骨を用いたもので、近位部を尖らし、錐状に加工したものである。4が左脛骨、5・6が右脛骨を用いるが、4は遠位部近くから半裁、5は遠位部から半裁、6は前2者よりは大形の骨で、骨体近くから半裁しているため、先端部は湾曲している。大きさは、4が長さ8.20cm、幅1.94cm、重さ15.6g、5が長さ6.27cm、最大幅1.4cm、重さ11.3g、6が長さ11.8cm、最大幅2.63cm、重さ18.9gを測る。

第８表　６地区　伊礼原C遺跡(平成８年度)　**出土遺物集計**

器種	土器																	青磁				白磁		染付	沖縄産施釉陶器		沖縄産無釉陶器			外国産陶器	近世陶磁器			陶質土器		合計
試掘No	爪	曽畑	前庭	仲泊	東洞	嘉徳Ⅰ	嘉徳Ⅱ	伊波	大山	市来	晩期	弥生	浜屋原	大当	後期	不明	小計	碗	皿	盤	その他	碗	皿	碗	碗(壺屋)	鉢	小型	中大型	すり鉢		碗	盃	その他	火炉	その他	
119			10												11		21																		1	22
120		15	27										1		2		45																			45
121															4		4										3			1						8
125		66	501	2	111	1	1		29			2	3		4	108	828																			828
127		1	13		5			1						3	2		25	1				2		1	1	4	1	2		1	3			1		44
128													3				3								3											3
133			29	87	51	2	1		24		5	7	124	124	173	38	665	4			1		1	1	1		1	2	1	2		1				680
135			6		1										4		11													1						12
138		8	150	1	4	7	2	30	159	1	2	15	5	11	175	86	656	1										1							1	659
139																	0		1						1											2
140		8	1		1	2	1		47					1	96		157																			157
141																	0		1												1					2
143	12	867	2	8	5												894	3		1				2						1			1			902
145	31	3	171		8							1	11	1	27		253																			253
146	1	72	2			1						1	1	1	2		81																			81
合計	44	1040	912	98	186	13	5	31	259	1	7	26	148	141	500	232	3643	9	2	1	1	2	1	4	5	4	5	5	1	6	4	1	1	1	2	3698

〈凡例〉①曽畑：曽畑式土器、室川下層式土器、前庭：面縄前庭式土器・仲泊式土器、嘉徳Ⅰ：嘉徳Ⅰ式土器、大山：大山式土器、浜屋原：浜屋原式土器、晩期：晩期系土器
大当原：大当原式土器、後期：具志原式・アカジャンガー式土器、グスク：グスク系土器
②石器・貝製品・骨製品については観察一覧（第21・22・23表）を参照のこと

７地区（伊礼原B遺跡）

７地区は第二期の調査で確認された遺跡である。６地区の西側の平坦地に位置している。国道５８号線に近い部分には戦前の集落や拝所が所在し、現在もその名残として屋敷囲いのフク木が見られる。時期はグスク時代と縄文時代後期の遺物が確認できる。その範囲は試掘No.96・97・106・
115・116・117・122・123・124・129・130・131・136の13本で国道に沿って南北に延びる。包含層は表土下１ｍに白砂層が堆積しその上部に沖縄産陶器が出土する。さらに１ｍ下げると枝サンゴ層からローリングを受けた土器が出土する。時代はグスク時代以降と縄文時代。本地区は1988年に調査された伊礼原Ｂ遺跡の南側に位置している。今回の出土遺物の内容が類似していることからその範疇と考えられたので遺跡名は同様にした。

出土遺物

土器（第59図35・36・37）（図版39 a）

試掘穴No.116からの出土土器である。いずれも水摩を受けているが、特に第59図35が著しい。同図35は口縁部が残り、口縁部は直線的に立ち上がる土器である。外器面には二条の連点文、横位の沈線、胴部には縦位の曲線文が施され、内器面には横位の沈線文を施す曽畑式土器のくずれた土器である。同図36・37は口縁部に肥厚部をもち、ハの字状や弧状の刺突連点文を施す面縄東洞式土器である。

染付（第63図８・９）

第63図８・９は碗である。図８は外反口縁である。口縁部内外面に圏線を巡らし外面胴部は花文を施す。17世紀、試掘No.136の出土である。同図９は底部で底径7.6cm。高台は高い。胴部より丸みを帯びながら立ち上がる。胴部は寿文を施し、その下部に蓮弁文くずれが巡らされている。高台際と高台外面に圏線を巡らす。18世紀前半から中頃、試掘No.136の出土である。

沖縄施釉陶器（第62図５・第63図26）（図版42・43）

第62図５は鉢である。底径10.6cm。内面は胴下部から見込み及び、外面胴下部から外底まで露胎でいわゆる「フィガキー」である。湧田焼系の灰釉と思われる。18世紀から19世紀前半、試掘No.96の出土である。

第63図26は湧田焼系の灰釉碗底部で底径7.2cm。内外面とも腰部まで施釉されている。見込みは×状の施文を施す。試掘No.96の出土である。

本土産陶器（第63図27）（図版43）

第63図27は有田産の碗底部で底径4.2cm。外面は胴下部まで施釉されている。見込みは蛇の目釉剥ぎである。試掘No.136の出土である。

第９表　７地区　伊礼原B遺跡（平成８年度）　出土遺物集計

器種	土器												青磁	白磁		染付		沖縄産施釉陶器					沖縄産無釉陶器				外国産陶器	その他不明陶器	近世陶磁器				陶質土器		小計
試掘No	曽畑	前庭	東洞	嘉徳Ⅰ	伊波	宇佐浜	浜屋原	大当	後期	グスク	不明	小計	碗	碗	皿	碗	皿	碗	酒器・水注	その他	鉢・壷(褐釉)	その他	小型壷・鉢	中大型壷・鉢	すり鉢	甕			碗	皿	盃	その他	火炉	その他	
86	1	1									1	3												1											4
95		1					2	1	3			7				1		1																	9
96											1	1	1	2	1		1	4		1	3		3	8	4				7			1		5	46
												0																				2			2
97	5	2			2							9																							9
106												0						2	1				2	20					1			1			30
114		4		1					1		1	7																							7
115		2										2				1					2			15					1						21
116	2	4	4				2		1			13							1					1					5			1			24
117												0				5		28	1		7	2		19	8		2		21	3	1	5	1	7	125
122		1										1																							1
123	1	8				1					2	12									1		1	3											18
124	1	6										7																							7
129	3	7							10			20																							20
130	2	3								1	1	7				12		11		1	4	3	2	10				1		1			2	7	62
131		6										6												1											7
136		6			2				3			11	1	1		4		16	2		6	1	1	23	1	2	1	1	2					7	81
合計	15	51	4	1	4	1	4	1	18	1	6	106	2	3	1	26	1	59	5	2	23	6	9	101	13	2	3	2	37	4	1	10	3	26	473

（凡例）①曽畑：曽畑式土器、室川下層式土器、前庭：面縄前庭式土器・仲泊式土器、嘉徳Ⅰ：嘉徳Ⅰ式土器、大山：大山式土器、浜屋原：浜屋原式土器、晩期：晩期系土器
大当原：大当原式土器、後期：具志原式・アカジャンガー式土器、グスク：グスク系土器
②石器・貝製品・骨製品については観察一覧（第21・22・23表）を参照のこと

８地区（伊礼原E遺跡）

８地区は第二期の調査で確認された遺跡である。調査範囲の中央よりやや南西側の平坦地に位置している。本地区の南西側に石灰岩が露頭した小丘を基盤としてそこから北側に遺跡は広がる。その範囲は試掘No.36・37・47・48・49・59・60・61・70・72・73・84の12本で南北に延びている。包含層は表土下１mに縄文時代前期の赤茶褐色混土砂層が約0.3m堆積し、No.47・48あたりに広がる。また縄文時代後期の包含層が表土下1.7mに赤茶褐色砂層が0.2m堆積している。出土遺物は前者が室川下層式土器やチャート片で、後者は奄美系土器が出土する。時代は縄文時代前・後期である。遺跡名は伊礼原Ｅ遺跡と命名した。

出土遺物

土器（第59図39～41・43）（図版39ｂ）

出土土器はいずれも底部の出土であった。同図39は丸底、40は尖底、41は平底の土器である。同図39は水摩を受け、しかも石灰質の付着もみられる丸底土器である。胴部との破損部分は丸くリング状に割れ、接合面からの剥離とみられるものである。器壁は1.5cmと厚く泥質の胎土で重量感がある。内底には焼成時のひび割れが残る。条痕文土器の底部と考えられる。同図40も水摩を弱く受けた尖底土器である。底径は2.5cmで、内底の高さは2cmである。胎土は緻密な砂質で重量感がある。外器面は黄褐色で、内器面は淡灰褐色をおびている。浜屋原タイプの時期の土器と思われる。同図41も水摩を弱く受けた平底の土器破片である。底面は剥離し、立ち上がりの部分を残す。立ち上がり部分の凹みの状態から「くびれ平底土器」の底部と考えられる。胎土は泥質である。内器面や底面剥離面は淡灰褐色であるが、立ち上がり部分は黒みを帯びる。同図39は試掘No.144、同図40は試掘No.72、同図41は試掘No.48の出土である。

同図43は8地区の30m北側で出土した1点の土器で、地区外として取り扱ったものである。遺跡の範囲の拡がる可能性があることを含め、また、水摩を受けた大形破片であることから、ここで取り扱うことした。同図43は全体的に鉄分の付着がみられる口径23cmの口縁部片である。口縁部には厚さ5mmの間延びした方形状の肥厚部をもち、頸部下は4㎜と薄い。肥厚部には貝殻腹縁部による横位の押圧文が4～5条施し、頸部下には細沈線の羽状文を施している。仲泊B式土器である。試掘No.93の出土である。

石器（図版47・48）

図版47－3は敲石の完形品である。表裏面に研磨を有し、上下面に敲きが認められる。平面形は楕円形、横断面は隅丸方形を呈する。石質は泥岩で、大きさは縦8.24cm、横6.83cm、厚さ4.0cm,重さ385gを測る。（第25表）試掘No.144、白砂最下層岩盤上の出土である。

図版48－1は磨製石斧であるが、刃部の一部と頭部を欠く。刃は両刃で、表裏面は研磨され、上方の片側面に横位に溝状の抉りが施され、横断面は楕円を呈する。石質は輝緑岩で、残存部の大きさは縦10cm、横3.05cm、厚さ2.4cm、重さ122gを測る。（第25表）試掘No.47の出土である。

図版48－２は棒状の敲石で、裏面の半分は破損する。表裏面および側面は研磨され、下面に顕著に敲きが認められる。平面形は長方形で横断面は楕円を呈し、形状から石斧を二次利用したものと思われる。石質は輝緑岩で、残存部の大きさは縦11.5cm、横3.49cm、厚さ2.7cm、重さ

140gを測る。（第25表）試掘No.60の出土である。

図版48－4は敲石の完形品である。表面および側面、上下面には若干の敲きが認められる。裏面は岩石の節理面をそのまま利用したものである。平面形はナスビ状に下半分がふくらむナスビ状を呈し、断面は扁平の饅頭型を呈する。石質は礫岩で、大きさは縦10.3cm、横4.08cm、厚さ2.0cm、重さ161gを測る。（第25表）試掘No.72、灰色枝サンゴ層の出土である。

図版50－4はチャートの剥片で試掘No.47で出土した。同試掘では、他に20数個検出されている。

その他に試掘No.144のＶ層からは凝灰岩製の敲石や砂岩、枝サンゴ層からは砂質片岩製の小形磨製石斧や泥質片岩製の打製石器（板状）が出土している。

貝製品（第64図16・図版45）

本地区からはメンガイ有孔製品（第64図16）、ヤコウガイ蓋（図版45-5）、ヤコウガイ（図版45－8）、スイジガイ製品?（図版45－7）の計4点出土した。

同図16はメンガイの右殻で、殻は厚く、殻表にアバタが多く見られ、腹縁は破損する。殻高6.9cm、

第10表　8地区　伊礼原E遺跡（平成8年度）　出土遺物集計

器種	土器											染付		沖縄産施釉陶器				沖縄産無釉陶器			本土産陶磁器		その他不明陶器	近世陶磁器			陶質土器		小計
試掘No	曽畑	前庭	仲泊	東洞	大山	弥生	浜屋原	大当	後期	不明	小計	碗	皿	碗	酒器・水注	鉢・壺(褐釉)	その他	小型壺・鉢	中大型壺・鉢	すり鉢		砥部焼		碗	盃	その他	火炉	その他	
23											0							1											1
35										1	1	1	3	15	4	1	1	1	10	7				5		4		1	53
36											0			3		1	1	1	1							1		2	10
38											0								1										1
47	9	36							1		46																		46
48		23	4	2					30	4	63			1	1	12			21	1			1	1		7		2	110
49	1					1			1		3					1			1										5
59		4		1						1	6					1						1							8
60		2		3						1	6											1							7
61									4		4								1	1									6
62											0	2		2						2				2	1				9
70	3	1									4																		4
71		2									2																		2
72		8					2	4	3	3	20								1										21
73									1		1	1						1			1			1	1				6
82			3	6							9																		9
83					1				4		5																		5
84	1	4									5																1		6
85									1	4	5			1		5	2		1			1	1	1	1			1	19
94	1	13							8		22								4					1				1	28
144	1										1																		1
合計	16	93	7	12	1	1	2	4	53	14	203	4	3	21	5	21	4	4	41	11	1	3	2	11	3	12	1	7	357

〈凡例〉①曽畑：曽畑式土器、室川下層式土器、前庭：面縄前庭式土器・仲泊式土器、嘉徳Ⅰ：嘉徳Ⅰ式土器、大山：大山式土器、浜屋原：浜屋原式土器、晩期：晩期系土器
大当原：大当原式土器、後期：具志原式・アカジャンガー式土器、グスク：グスク系土器
②石器・貝製品・骨製品については観察一覧（第21・22・23表）を参照のこと

殻長5.6cmを測る。（第24表）孔は殻頂と腹縁近くに施され、前者はほぼ円形（1.5mm×1.2mm）で、内殻→外殻に穿孔されている。後者は長楕円（径0.9cm×1.2cm）を呈し、穿孔の位置も腹縁に近く、自然に割れた可能性が高い。試掘No.60の出土である。

図版45－5はヤコウガイの蓋の薄い部分を２回、剥離したもので、火を受けたためか、灰色を呈する。大きさは縦7cm、横8cm、厚さ2.22cm、重さ159gを測る。（第24表）試掘No.72の灰色粗砂(枝サンゴ)の出土である。

図版45－8はヤコウガイの殻口部分を利用したもので、貝匙の可能性が高い。殻の周縁は丁寧に研磨され、貝の外殻は無く、真珠層が露出するが、石灰分が沈着しているため、殻は固い。柄と考えられる中央部に径3.8mmの孔を両面から施す。残存部は最大幅4.8cm、柄の部分が2.06cm、残存部の最大幅4.2cm、厚さ0.41cm、重さ10.68gを測る。（第24表）試掘No.144のＶ層の出土である。

図版45－7はスイジガイの突起部で先端部が破損している。殻の一部に摩耗およびアバタが見られ、死貝の可能性が高い。スイジガイ製利器の未製品と考えられる。突起の幅1.69cm、残存部の長さ2.87cm、重さ75.3gを測る。（第24 表）試掘No.144のＶ層で出土。

９地区（後兼久原遺跡）

９地区は第一期の調査で確認された遺跡である。調査範囲の南東側に位置している。北東側の標高約30m前後の琉球石灰岩の台地から、一段下って標高20mの小丘陵を成す。そこから南東側へ低く広がる沖積層斜面から平坦地へ遺跡は広がる。範囲は試掘No.１～８・17～22・25・26・30・134・139・140の20本でほぼ南北に延びる。包含層は表土下約2.5～3.5mに黒褐色土層が0.1～0.5mの厚さで堆積している。遺物は少なかったが、試掘穴の断面に柱穴の痕跡が確認されたので、生活址の発見の可能性が高い地域である。出土遺物はグスク土器や青磁が出土するグスク時代である。遺跡名は後兼久原遺跡と命名した。

出土遺物

土器（第59図48～53）（図版39 b）

第59図48は口縁部が肥厚するものである。口唇部がコの字状に直行する同図50以外の同図49・51は口縁部が外反を、同図52･53は内灣を呈し、先端が舌状に細くなる。いずれも胴径が口径よりも広いナベ形の器形でグスク土器である。同図49・52・53はやや大形の容器で、同図50は中形、同図48・51は小形の容器である。同図49は頸部で絞り細まり、口縁部が外反するやや壺形に近い器形である。全体的に淡白褐色で外・内器面は光沢を帯びるほど磨かれているが、成形痕を消すほどではない。外器面の肩部に黒色の煤の痕跡がみられる。焼きが良く堅い。胎土にサンゴ砂や褐色の粒を少量含む。同図50はコの字状に切られた口縁部を持ち黄褐色の砂質の土器である。口縁部の特徴から滑石製石鍋の容器を模倣した土器片と考えられる。同図51は外・内面とも黒褐色をおび外器面は光沢をもつが内器面は横位の擦痕を施す。同図52は砂質で淡白色の土器である。外器面は気泡や凹凸を残し成形は荒いが、内器面は擦れていて肌触りがよい。内外器面に褐色混入物と、また気泡がみられることからサンゴ砂の混入があったと考えられる。同図48･49は試掘No.2で、同図50～53は試掘No.139の出土である。

第11図　キャンプ桑江試掘ポイント（平成７年度）　第一期

青磁（第62図６～11）（図版42）

第62図６・11は蓮弁文碗である。図６は鎬蓮弁文碗の底部で、底径が5.4cm。見込みはスタンプによる花文を施す。13世紀中頃から後半、試掘No.26で出土。図11はやや内彎口縁である。口径15.8cm。外面は胴部に圏線を巡らしその後、縦沈線を施し、最後に弁先を単独の半円を描く幅のある蓮弁文である。内面は花文？と思われる。15世紀前半から中頃、試掘No.３で出土。

同図７はやや内彎口縁で口縁部外面に雷文帯を巡らす。14世紀後半から15世紀中頃、試掘No.19で出土。同図８から10は内彎口縁の無文碗である。図８は口径10.8cmで、図９・10に比べ小さい碗である。同図９は口径15.9cm、底径8.9cm、器高6.2cm。図10は口径18.8cm。３点とも15世紀中頃から後半、試掘No.３の出土である。

染付（第63図10）（図版43）

第63図10は壺の胴部片である。外面胴部に唐草文を施す。15世紀後半から16世紀中頃、試掘No.４の出土である。

第11表　9地区　後兼久原遺跡（平成７年度）　**出土遺物集計**

器種 / 試掘No	土器				カムィヤキ	青磁		白磁		染付		沖縄産施釉陶器			沖縄産無陶器		外国産陶器		近世陶磁器		陶質土器	小計
	浜屋原	後期	グスク	小計		碗	皿	碗	皿	碗	その他	碗	酒器・水柱（壺屋）	その他	壺・鉢 中大型	すり鉢		その他	碗	その他	その他	
1			21	21		2	1	1				4	1	2	1				3		2	38
2		2	29	31		6	1		1	1		2		1	2		2					47
3			6	6	1	8	3	1		1			1		6		6			1	1	35
4				0							1			1	2							4
5		4		4								1	1		5	1	1	1			2	16
7			3	3											1							4
8				0		1																1
17				0											1							1
18			6	6	1			1									1				2	11
19			10	10		4		1		1		1					2					19
20			4	4																		4
21			1	1																		1
22				0					1													1
25			1	1																		1
26				0		1																1
30	5			5																		5
139		2	321	323	1	2			1			1					3				1	332
合計	5	8	402	415	3	24	5	4	3	3	1	9	3	4	18	1	15	1	3	1	8	521

〈凡例〉①浜屋原：浜屋原式土器、後期：具志原式・アカジャンガー式土器、グスク：グスク系土器
②石器・貝製品・骨製品については観察一覧（第21・22・23表）を参照

Ａ地区（遺物散布地）

Ａ地区は第三期の調査で確認された遺物散布地である。北側の丘陵と盛土（町管理）との狭い空間の中で試掘調査を行った地域である。北側丘陵の麓に位置している。試掘穴はNo.40・40－Ａ・40－Ｂの３本。表土下1.2mに淡茶褐色土層の堆積の広がりは本範囲の北西側にはみられない。４地区でも述べたように西側の盛土部分が未調査であるため状況が不明である。可能性としては４地区の試掘No.37の広がりの北端部かもしくは北側丘陵からの流れ込みが考えられる。出土遺物は白磁が出土した。時代はグスク時代である。遺跡名は与えず遺物散布地Ａ地区とした。

出土遺物

土器（第57図60）（図版37 b）

第57図60は唯一出土の水摩を受けた胴部片である。幅3mmほどの箆状工具で凹線を縦位には上から下に、斜位では右上から左下に施し、さらに横位には左から右へ重ねて施文している。内面はナデられ、擦痕をかすかに残す。器壁は1cmと厚く細かな石英や光る鉱物を多量に混入した砂泥質の褐色の土器片である。試掘No.40の出土である。

白磁（第63図21）（図版43）

第63図21は内彎型でビロースクタイプ碗である。13世紀後半から14世紀前半、試掘No.40の出土である。

第12表　Ａ地区　遺物散布地（平成９年度）　**出土遺物集計**

器種 / 試掘No	土器							青磁	白磁	染付	沖縄産施釉陶器			沖縄産無釉陶器			外国産陶器	近世陶磁器		陶質土器	合計
	爪形	曽畑	仲泊	前庭	伊波	後期	小計	碗	盤	碗	碗	碗（壺屋）	鉢	小型壺・鉢	中大型壺・鉢	すり鉢			その他	その他	
40	1	6	1	1	1	5	15	4	1	1		6	2	5	9	3	2	11	1	1	61
40-A						3	3				1	3			8					1	16
40-B					1		1							1		3					5
合計	1	6	1	1	2	8	19	4	1	1	1	9	2	6	17	6	2	11	1	2	82

（凡例）①曽畑：曽畑式土器、室川下層式土器、前庭：面縄前庭式土器・仲泊式土器、嘉徳Ⅰ：嘉徳Ⅰ式土器、大山：大山式土器、浜屋原：浜屋原式土器、晩期：晩期系土器
大当原：大当原式土器、後期：具志原式・アカジャンガー式土器、グスク：グスク系土器
②石器・貝製品・骨製品については観察一覧（第21・22・23表）を参照のこと

Ｂ地区（遺物散布地）

Ｂ地区は第三期の調査で確認された遺物散布地である。盛土（町管理）の西側の平坦地に位置している。範囲は試掘No.34～36・41・43の５本で南北に延びる。表土下２mの灰白色砂層が広がり、そこからはグスク時代の遺物が出土する。下層部には枝サンゴ層がみられ、そこからは縄文時代の遺物が出土する。東側は４地区・Ａ地区同様盛土により未調査であるため本体は不明である。時代は縄文時代とグスク時代である。遺跡名は与えず遺物散布地Ｂ地区とした。

出土遺物

土器（第59図42）（図版39 b）

出土遺物は全体的に水摩を受けている。第59図42は有文の口縁部近くの土器片である。器壁は8mmとやや厚手で、口縁部近くの第一文様帯には幅約4mmの箆状工具による縦位の短い凹線文を二条施し、その下位の第二文様帯には同様な工具による横位の凹線文を四条巡らす土器である。内面は丁寧なナデが施されている。細かなサンゴ砂を多量に含む砂泥質の淡黄褐色の胎土である。曽畑式土器である。試掘No.34の出土である。

青磁（第61図33～38・第62図１）図版41・図版42）

第61図33は箆状工具による幅のある蓮弁文を胴下部まで施文する。見込みは無文、底径は5.6cm。14世紀後半から15世紀中頃、試掘No.35の出土である。

同図34・36は無文碗である。図34は底径が5.4cm。14世紀、試掘No.36より出土。図36は外反口縁で口径は18cm。15世紀前半から中頃、試掘No.41の出土である。

第61図35は外反口縁の有文碗である。内外面に文様を施すが、構図ははっきりしない。14世紀後半から15世紀中頃、試掘No.36の出土である。

同図37・第７図１は皿である。両資料は口唇部に抉りを入れ波状を呈する稜花皿である。口縁内面は口唇部に沿うように３～４本の櫛目による沈線を巡らす。15世紀前半から中頃、図37は試掘No.41で出土。第62図１は口径11.8cm、器高2.3cm、高台径4.6cm。試掘No.43の出土である。

同図38は杯と思われる。口縁部外端はつまみだすことにより、口唇部は幅広で平坦になる。両面に文様を施すが構図は不明。14世紀後半から15世紀中頃、試掘No.43の出土である。

第13表　B地区　遺物散布地（平成９年度）　**出土遺物集計**

器種	土器									カムイヤキ	青磁		白磁		染付	沖縄産施釉陶器			沖縄産無釉陶器				外国産陶器		近世陶磁器		陶質土器	合計
試掘No	曽畑	前庭	仲泊	伊波	大山	晩期	浜屋原	後期	小計		碗	皿	碗	その他	碗	碗	その他	その他	小型	中大型	すり鉢	その他		その他	碗	皿	その他	
34	2		1		1			1	5		5		2						2	3	3							20
35					2				2		2					2		1	2	15	1		1		1		1	28
36									0		2							1	3	2				1				9
41	1	5		1				5	12	1	2	1	1	1	2	5		1	4	6	3	2	1		3	4	4	53
42									0							1			1	6	1							9
43	2					1	1	1	5		2	2			1	1	1			8			3		1	1	2	27
合計	5	5	1	1	3	1	1	7	24	1	13	3	3	1	3	9	1	3	12	40	8	2	5	1	5	5	7	146

〈凡例〉①曽畑：曽畑式土器、室川下層式土器、前庭：面縄前庭式土器・仲泊式土器、嘉徳Ⅰ：嘉徳Ⅰ式土器、大山：大山式土器、浜屋原：浜屋原式土器、晩期：晩期系土器
大当原：大当原式土器、後期：具志原式・アカジャンガー式土器、グスク：グスク系土器
②石器・貝製品・骨製品については観察一覧（第21・22・23表）を参照のこと

Ｃ地区（遺物散布地）

Ｃ地区は第三期の調査で確認された遺物散布地である。調査範囲の北東部に位置する。北東部から舌状に南西側に突出する丘陵とそれに沿って流れるナガサ川の間の平坦部にあたる。範囲は試掘No.１～３の３本で東西へ延びる。表土下２～3.6mで岩盤が確認できる。川沿いであることから北東側から黄色系土が流され岩盤の上に堆積していったと考えられ、遺物はその影響によるものであろう。遺跡名は与えず遺物散布地Ｃ地区とした。

第14表　C地区　遺物散布地(平成9年度)　**出土遺物集計**

器種 / 試掘No	土器			沖縄産施釉陶器	近世陶磁器	陶質土器	合計
	後期	グスク	小計	中大型 壺・鉢	その他	その他	
No1			0	8	2	2	12
3	1		1				1
4	1	1	2			1	3
合計	2	1	3	8	2	3	16

D地区（遺物散布地）

D地区は第三期の調査で確認された遺物散布地である。調査範囲の南西側に位置する。北東側丘陵から約180mほど南西側にひらけた平坦地である。表土下３～４mの枝サンゴ層よりローリングを受けた土器が確認できる。本地区の南側は米軍の側溝工事に伴う調査で確認された伊礼原B遺跡が隣接している。遺跡の本体は６地区であろうか。遺跡名は与えず遺物散布地D地区とした。

出土遺物

土器（第57図64）（図版37 b）

第57図64は水摩を受けた土器である。底径が4.5cmとやや大きめであるが、内面はV字状に鋭角に立ち上がる尖底土器である。内底面の高さは1.5cmと厚いが胴部は6mmと薄い。器面調整は荒く泥質の強い胎土で、内外器面は褐色で芯は暗褐色を呈している。条痕文土器の底部である。試掘No.45の出土である。

第15表　D地区　伊礼原B遺跡(平成９年度)　**出土遺物集計**

器種 / 試掘No	土器			沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器			近世陶磁器	陶質土器	合計
	曽畑	後期	小計	碗	小型	中大型	甕		その他	
44	1	2	3	2	1	7		1	3	17
45	2		2							2
合計	3	2	5	2	1	7	0	1	3	19

〈凡例〉①曽畑：曽畑式土器、室川下層式土器、後期：具志原式・アカジャンガー式土器
②石器・貝製品・骨製品については観察一覧（第21・22・23表）を参照

E地区（遺物散布地）

E地区は第二期の調査で確認された遺物散布地である。調査範囲の東側に位置する。東側に標高30～40mの琉球石灰岩台地の麓から沖積低地が広がる前面あたる。範囲は試掘No.２～４・15～17・29・30・41・42・53・54の12本で南北にひろがる。表土下１～1.6mあたりに旧表土がありそこからは沖縄産陶器が出土する。その下層に茶褐色土層がみられ青磁や白磁などが数点出土する。時代はグスク時代である。遺物の散在する状況や包含層の不明確な点から遺物散布地E地区とした。

出土遺物

土器（第59図44）（図版39 b）

特記すべき土器は1点のみで、しかもＥ地区から60m西側で出土しているが、最も近いこの地区で取り上げたい。第4図44は水摩を受けた口縁部片である。口縁内面はD形状に間延びした脹らみをもつが、外面はやや直線的である。外面には細沈線による羽状文が施されている。全体的に薄く、淡灰褐色を帯びる。仲泊A式土器である。試掘No.45の出土である。

第16表　E地区　遺物散布地（平成８年度）　**出土遺物集計**

器種	土器									青磁		白磁		染付	沖縄産施釉陶器			沖縄産無釉陶器				外国産陶器	近世陶磁器			陶質土器		合計
試掘No	曽畑	東洞	大山	浜屋原	大当原	後期	グスク	不明	小計	碗	盤	碗	皿	皿	碗	酒器	鉢	小型	中大型	すり鉢	甕		碗	皿	盃	火炉	その他	
2									0														2					2
3									0						1												3	4
4	4				4				8																			8
15		6				1			7	2									3				1				1	14
16						3			3		1				3	1	1	1	1								1	12
42			7			1	16	19	43			1	1	2	1		1		1	1							1	52
53						4		3	7											1							1	9
55									0														1					1
合計	4	6	7	0	4	9	16	16	68	2	1	1	1	2	5	1	2	1	5	2	0	0	4	0	0	0	7	102

〈凡例〉①曽畑：曽畑式土器、室川下層式土器、前庭：面縄前庭式土器・仲泊式土器、嘉徳Ⅰ：嘉徳Ⅰ式土器、大山：大山式土器、浜屋原：浜屋原式土器、晩期：晩期系土器
大当原：大当原式土器、後期：具志原式・アカジャンガー式土器、グスク：グスク系土器
②石器・貝製品・骨製品については観察一覧（第21・22・23表）を参照のこと

Ｆ地区（遺物散布地）

Ｆ地区は第一期で確認された遺物散布地である。調査範囲の中央平坦地に位置し、その範囲は試掘No.60～65・67・68～73・85・86・114・117～122・125～129の29本で調査区のやや中央部で南北に広い範囲で広がっている。上層の白砂層にはグスク時代の遺物がみられ、下層の枝サンゴ層からはローリングを受けた土器が出土する。時期は底部が尖底や丸底土器の弥生相当期とグスク時代である。

試掘調査の成果をまとめるにあたり、弥生相当期の土器群が流入する遺跡の本体が周辺地域で確認されないことから、当地域を流れるナルカー河川の上流地域、東側に遺跡の本体が想定できた。

出土遺物

土器（第59図54～58）（図版39 b）

出土土器はすべて水摩を受けている、特に同図54・55・58は石灰質の付着がみられることから海底で堆積したことがうかがえる。

同図55・56・57は口縁部破片で、同図54・58は底部破片の土器である。

同図55は外反の著しい口縁部で、口径約18.8cmを測る土器である。全体的に黄褐色で外器面は剥離して胎土が露頭している。内器面は石灰質の付着がみられるが、成形時の指頭痕の痕跡が残る。胎土は微細なサンゴ砂が多量に含む砂質の土器で在地の浜屋原タイプの土器に類似してい

る。深鉢形の器形と考えるが、著しい口縁部の外反の特徴から壺形の可能性もある。試掘No.68の出土である。同図56も口縁部に丸みのある肥厚部をもつ外反口縁土器である。内外器面とも淡褐色をおびるが、芯は淡黒色を呈する。胎土は砂質で石灰質の細砂と光沢のある鉱物を含む。阿波連浦下層土器にみられる小形の土器かと思われる。試掘No.119の出土である。同図57は外面の肩部に弱い稜がみられ、頸部には弱い外反をもつ中形土器の口縁部である。弱い水摩を受けているが肩部の内面側には、指頭圧により肩部を形成した痕跡が残る。口唇部は舌状に丸みをもつ淡灰褐色をした器壁の薄い土器である。試掘No.126の出土である。

同図54は薄手で先端の不明瞭な丸みのある底部片である。外面には石灰分が、内面には鉄分の付着を帯び褐色をしているが、芯は淡黒色を呈している。胎土は砂質で白色や灰色、光沢のある鉱物を含んでいる。試掘No.60の出土である。同図58は底径3.5cmを測り、立ち上がりが開きぎみの乳房状尖底土器である。内底までの高さは2.1cmで、底面は弱い凹みをもつ。内外面とも荒いナデによる整形が施され、褐色を呈している。胎土は泥質でやや硬く、重量感がある。浜屋原タイプ前後の時期の土器かと考える。試掘No.68の出土である。

青磁（第62図12）（図版42）

第62図12は蓮弁文碗の底部で胴下部にみられる施文状況から線刻細蓮弁文である。底径5.4cm。見込みはスタンプによる花文である。15世紀後半から16世紀前半。試掘No.61の出土である。

染付（第63図11）（図版43）

第63図11は内彎口縁碗である。外面に花文を施す。日本産の可能性もある。16世紀から17世紀、試掘No.76の出土である。

地区外

地区外としたのは遺物の出土が認められたが、遺跡の範囲に含められなかった箇所と戦前の集落跡である。分布状況を見てみると国道58号線付近と８地区の北側に見られ、前者は戦前の集落に伴う遺物、後者は弥生相当期が主である。後者は将来、６または８地区のいずれかに含めるべきと考えている。

８地区の東側の試掘No.69より米軍上陸後に廃棄されたと思われる米国新聞が表土下1.5mの燈色砂利混り層より出土した（図版17）。新聞は損傷が激しく断片的であったが、新聞社名と発行年月日は辛うじて読み取れ把握することができたので紹介する。

新聞社は米国マサチューセッツ州ニューベッドフォードのスタンダードタイムス社で、発行年月日は1945年１月４日、沖縄戦３ヶ月前のものである。記事の記事の中にヒィリピンにおける日米の戦禍状況や日本兵の埋葬墓の写真が記載されていた。内容は、「米国と日本との戦死者の比率が米国１に対し日本１３で圧倒的に米国に有利で、その要因に技術の違いに差がある。南洋における日本人の排除はもう近い、太平洋戦争は終わるであろう。」と戦況が米軍有利で進んでいる内容を伝えているものである。

第17表　F地区　遺物散布地（平成７年度）　出土遺物集計

器種	土器										青磁	染付	沖縄産無釉陶器					陶器 外国産	その他不明陶磁器		近世陶磁器			陶質土器		小計
試掘No	曽畑	前庭	仲泊	弥生	浜屋原	大当原	後期	グスク	不明	小計	碗	碗	小型壺鉢	中型壺鉢	すり鉢	甕	その他	その他		碗	皿	盃	その他	火炉	その他	
53										0			10	15	4	1	3	1	2	31	13	2	28			110
57										0						1						1	2			4
60		2	1			2	18		2	25																25
61						1	12			13	1															14
62					1	1				2																2
63						1	2			3														4	5	12
64							1			1									2							3
67							6			6																6
68	1				3	8	1			13													1		1	15
69							1			1			3		1	1				1					1	8
70					6	1	4			11																11
72							1			1				1						1						3
73							1			1										1						2
74							2	1		3															1	4
75										0					1										3	4
76							1			1		1	6	2						1	1	2	1	1	5	21
85							2			2																2
87					1					1													1			1
92										0													1			1
114							10			10			1	1						1			6			14
115							2			2				3						3						14
116							1			1																1
117							1			1																1
118						8	1			9																9
119				1	2		3	1		7																7
120					1	1				2																2
121							1			1																1
124							2			2															1	3
126							1	1		2				1												3
127							1			1																1
128										0													4			4
131							1			1			1	1											1	4
合計	1	2	1	1	14	23	76	3	2	92	1	1	21	24	6	3	3	1	4	39	14	5	44	5	18	281

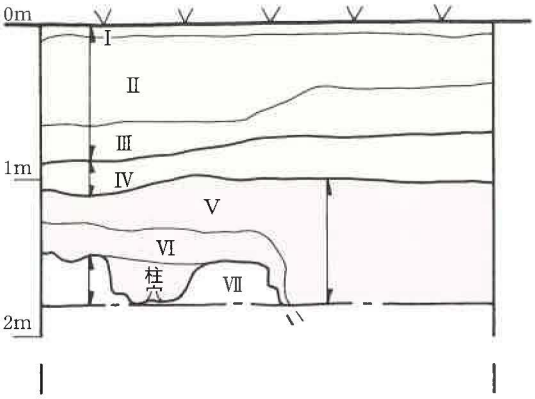
（凡例）①曽畑：曽畑式土器、室川下層式土器、前庭：面縄前庭式土器・仲泊式土器、嘉徳Ⅰ：嘉徳Ⅰ式土器、大山：大山式土器、浜屋原：浜屋原式土器、晩期：晩期系土器
大当原：大当原式土器、後期：具志原式・アカジャンガー式土器、グスク：グスク系土器
②石器・貝製品・骨製品については観察一覧（第21・22・23表）を参照のこと

第18表　地区外　遺物散布地（平成８年度）　出土遺物集計

器種 / 試掘No	土器											青磁	白磁	染付		沖縄産施釉陶器				沖縄産無釉陶器				外国産陶器	近代磁器		陶質土器	合計
	曽畑	前庭	仲泊	東洞	大山	弥生	浜屋原	大当原	後期	不明	小計	碗	碗	碗	その他	碗	酒器水	鉢壷	その他	小型壷鉢	中大型壷鉢	すり鉢	その他		碗	その他	その他	
6		2							3		5					1												6
7											0						1		1	1	1				1		1	6
9											0					1				1	4			1	1	1	1	10
10											0					6			1	13	24				2	1	1	48
11						2	1		1	1	5					4	1	1			2				5	3	1	22
12		7									7		1			1		3			4			1			1	18
13											0					3		1		1	5	1	1				4	16
19										3	3																	3
20											0			1		2		1									3	7
21											0														2	1		3
22											0			1					1			1			1		1	5
25											0				1	3					5			3	2		3	18
26										3	3																	4
39											0		1								2		1		1			5
44											0	1	1			4		2			2				1	1	6	18
45		9	1								10					1		1										12
66											0	2																2
67											0										2	1						3
69										4	4			1		3					3				1	2	1	15
74		1							1		2					1		1		1	4	1				2		12
75											0					1												1
78											0			2				1							1	1	1	6
81											0					2		1			1	1			2		1	8
91										6	6					4			1		1			1	2	1		16
92										1	1																	1
93	2	4	1			1			1	2	11																	11
101									4		4			3		1			1	1	7				2	1		21
102		5	2				1		3		11	1																12
103							1		7		8																	8
104								1			1									2	2				3			8
111	1										1		1			1		2			1					2	1	8
112	2		1	1	1	1	4	86	40	1	137										2				1			140
113										4	4										1							5
不明											0					4		4			22		1	1	7	2		43
合計	5	28	5	1	1	4	7	87	60	25	223	4	4	8	1	46	2	18	5	20	95	5	3	7	35	18	26	521

（凡例）①曽畑：曽畑式土器、室川下層式土器、前庭：面縄前庭式土器・仲泊式土器、嘉徳Ⅰ：嘉徳Ⅰ式土器、大山：大山式土器、浜屋原：浜屋原式土器、晩期：晩期系土器
大当原：大当原式土器、後期：具志原式・アカジャンガー式土器、グスク：グスク系土器
②石器・貝製品・骨製品については観察一覧（第21・22・23表）を参照のこと

1地区（千原遺跡）試掘No.30　（平成９年度）



第12図　南壁

〈調査日〉 平成9年10月15日

〈記述〉

1．標高：3.90メートル

2．層序：

Ⅰ層：客土（10cm）

Ⅱ層：淡褐色混礫土層（30～50cm）クラッシャー（客土）

Ⅲ層：褐色土層（20～30cm）（攪乱）

Ⅳ層：暗茶褐色粘質土層（20～30cm）本土産磁器（砥部焼）、戦前

Ⅴ層：淡褐色混砂土層（20～80cm）上位文化層、グスク土器、青磁

Ⅵ層：黒褐色混砂層（20～50cm）下位文化層、柱穴群　青磁

Ⅶ層：淡茶褐色砂層（表土下1.8m、以下不明）

3．特記事項：

図版：1　南壁

〈出土遺物〉

1．層別

Ⅳ層：（本土産磁器（砥部焼））

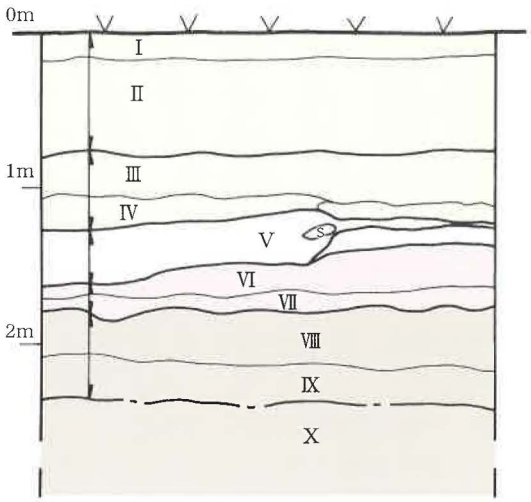
Ⅴ層：（グスク土器・蓮弁文青磁）

Ⅵ層：（グスク土器・泉州青磁）

2．出土遺物：

土器・青磁（蓮弁文　14C後～15C　泉州系15C）・白磁・染付・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・本土産磁器・カムィヤキ．天目・近代磁器・陶質土器。

2地区（平安山原B遺跡）試掘No.20　（平成９年度）



第13図　北壁

〈調査日〉 平成9年10月13日

〈記述〉

1．標高：4.0メートル

2．層序：

Ⅰ層：表土層（20cm）
Ⅱ層：橙黄色シルト層（60cm）
Ⅲ層：暗茶褐色混礫土層（30cm）
Ⅳ層：暗茶色シルト層（10cm）、焼土炭を含む、サーターヤー跡
Ⅴ層：淡褐色シルト層（15～30cm）
Ⅵ層：黒褐色土層（10～25cm）土器出土
Ⅶ層：褐色砂層（10cm）
Ⅷ層：淡白色砂層（30～40cm）
Ⅸ層：淡白色混礫砂層（30cm）
Ⅹ層：淡白色砂層（表土下2.4m、以下不明）

3．特記事項：

〈出土遺物〉

1．層別

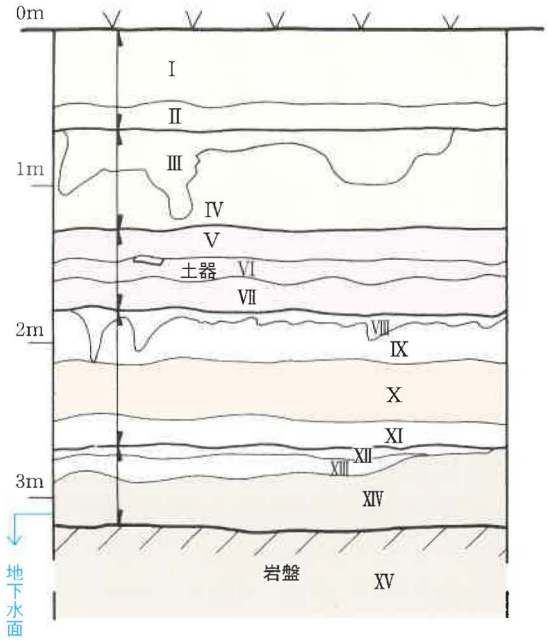
Ⅳ層：サーターヤー（後期系・陶質土器）
　　炉跡周辺清掃時（後期系土器？）
Ⅵ層：（後期系・浜屋原式土器）

2．出土遺物：

土器・青磁・白磁・染付・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・本土産陶磁器・近代磁器。

図版：2　北壁

2地区（平安山原B遺跡）試掘No.21　（平成９年度）



第14図　西壁

図版：3　西壁

〈調査日〉平成9年度10月9日

〈記述〉

1．標高：4.8メートル

2．層序：

Ⅰ層：客土（50cm）、Ⅱ層：灰褐色土層（20cm）、Ⅲ層：淡褐色土層（10～40cm）

Ⅳ層：暗褐色土層（70cm）

Ⅴ層：黒褐色土層（20cm）

Ⅵ層：淡茶褐色土層（10cm）

Ⅶ層：茶褐色混砂土層（20cm）土器出土

Ⅷ層：淡茶褐色砂層（5～10cm）移行層のシミ

Ⅸ層：淡茶褐色砂層（25cm）

Ⅹ層：白色粗砂層（40cm）

Ⅺ層：淡灰白色粗砂層（10cm）

Ⅻ層：灰白色礫層（5～10cm）枝サンゴ礫

XIII層：灰白色礫層（30～50cm）拳大の礫、地下水が湧く

XIV層：岩盤（表土下3.2m）
表土下3.1mで地下水あり

3．特記事項：

〈出土遺物〉

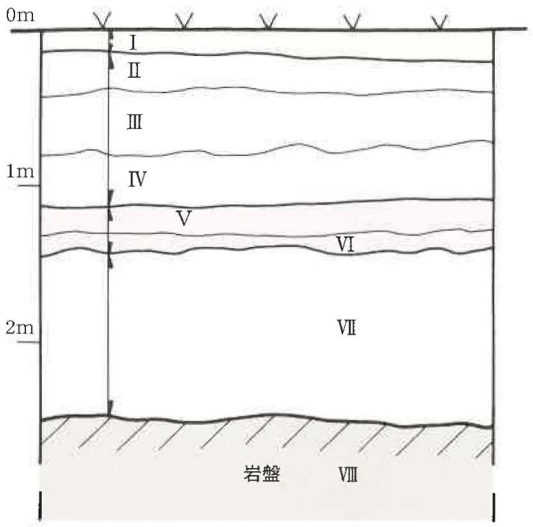
1．層別

Ⅶ層：（後期系ローリング・大当原式・浜屋原式・面縄前庭式・曽畑式土器）

2．出土遺物：

土器。

2地区（平安山原B遺跡）試掘No.53　（平成９年度）



第15図　南壁

〈調査日〉 平成9年10月23日

〈記述〉

1．標高：5.0メートル

2．層序：

Ⅰ層：コーラル（20cm）
Ⅱ層：褐色土層（20cm）
Ⅲ層：淡灰褐色土層（30～40cm）
Ⅳ層：淡褐色土層（40cm）
Ⅴ層：暗茶褐色土層（20～30cm）土器出土
Ⅵ層：暗茶褐色土層（10cm）上層と下層の移行層
Ⅶ層：黄褐色土層（1.1m）上面で土器出土
Ⅷ層：岩盤（表土下2.4m）

3．特記事項：

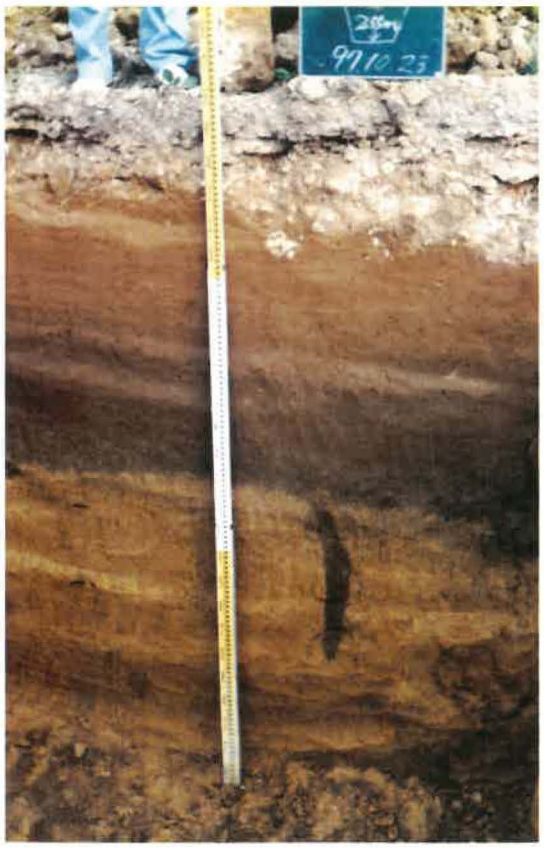
〈出土遺物〉

1．層別

Ⅴ層：（後期系・浜屋原式土器？）
Ⅶ層上面：（浜屋原式・面縄東洞式土器）・Ⅶ層（浜屋原式・弥生式・面縄東洞式・面縄前庭式・曽畑式土器）

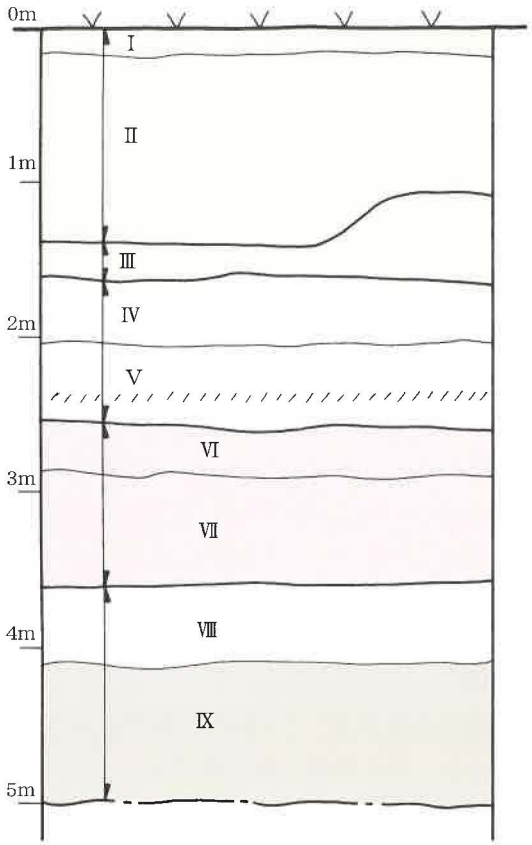
2．出土遺物：

土器・白磁・本土産陶磁器。



図版：4　南壁

3地区（伊礼原C遺跡）試掘No.6　（平成９年度）



第16図　南壁

図版：5　南壁

〈調査日〉平成9年10月3日

〈記述〉

1．標高：5.7メートル

2．層序：

Ⅰ層：表土、Ⅱ層：淡褐色混礫土層（客土）（1.4m）ケーブル埋設時の堀込み

Ⅲ層：黄褐色土層（20～50cm）

Ⅳ層：褐色土層（40cm）カワニナやマンガンを含む

Ⅴ層：淡灰褐色土層（60cm）カワニナを少々含む、横位に　赤いスジが全面に見られる

Ⅵ層：灰黒色土層（30～35cm）土器を含む

Ⅶ層：灰青色砂層（70cm）土器を含む

Ⅷ層：灰青色粗砂層（50cm）　小さい貝が混ざる

Ⅸ層：灰白色細砂層（90cm）　土器出土

3．特記事項：

〈出土遺物〉

1．層別

・Ⅵ層：（後期系・グスク系・大当原式・面縄東洞式・曽畑式土器）

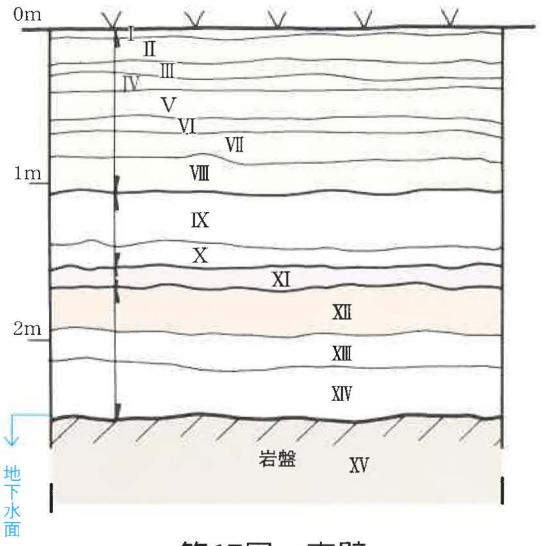
・Ⅶ層：（後期系・浜屋原式・大山式・嘉徳Ⅰ式・面縄東洞式・曽畑式土器、敲石）

・Ⅸ層：（敲石）

2．出土遺物：

土器・敲石・チャート・貝製品。

４地区（平安山原A遺跡）試掘No.11　（平成９年度）



第17図　東壁

〈調査日〉 平成9年10月7日

〈記述〉

1．標高：2.9メートル

2．層序：

Ⅰ層：表土、Ⅱ層：コーラル、Ⅲ層：褐色土層、
Ⅳ層：暗褐色土層、Ⅴ層：コーラル、
Ⅵ層：褐色土層、Ⅶ層：コーラル(80cm)(客土)
Ⅷ層：淡灰褐色土層（20cm）
Ⅸ層：淡灰色土層（20cm）カワニナを含む
Ⅹ層：灰黒色混砂土層（10cm）軽石を含む
Ⅺ層：淡灰褐色砂層（10cm）土器出土、軽石を含む
Ⅻ層：白色砂層（15cm）
ⅩⅢ層：灰白色混礫砂層（20cm）
ⅩⅣ層：灰白色粗砂層（30cm）下面で地下水が湧く、　木片堆積、薄い泥炭層
ⅩⅤ層：岩盤（表土下2.5m）
表土下2.5mで地下水あり

3．特記事項：

〈出土遺物〉

1．層別

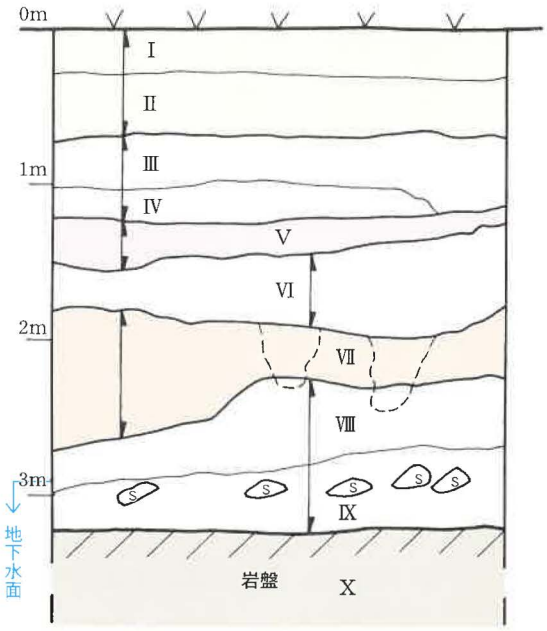
Ⅺ層：（大当原式土器）
Ⅻ層：（後期系土器）

2．出土遺物：

土器・青磁・木片・カワニナ。

図版：6　北東壁

4地区（平安山原A遺跡）試掘No.37　（平成９年度）



第18図　北壁

図版：7　北西壁

〈調査日〉平成9年10月16日

〈記述〉

1．標高：4.1メートル

2．層序：

Ⅰ層：コーラル、Ⅱ層：暗褐色土層(70cm)(客土)

Ⅲ層：灰褐色土層（30～50cm）

Ⅳ層：淡灰色土層（20～25cm）

Ⅴ層：灰色土層（20～40cm）土器出土・貝・骨を含む

Ⅵ層：淡灰色混砂土層（20～60cm）

Ⅶ層：白色砂層（30～90cm）層中にピット状のシミあり

Ⅷ層：白色粗砂層（20～50cm）地下水が湧く

Ⅸ層：淡灰緑色粗砂層（30～50cm）層中央レベルに礫層あり

Ⅹ層：岩盤（表土下3.2m）
表土下2.8mで地下水あり

3．特記事項：

〈出土遺物〉

1．層別

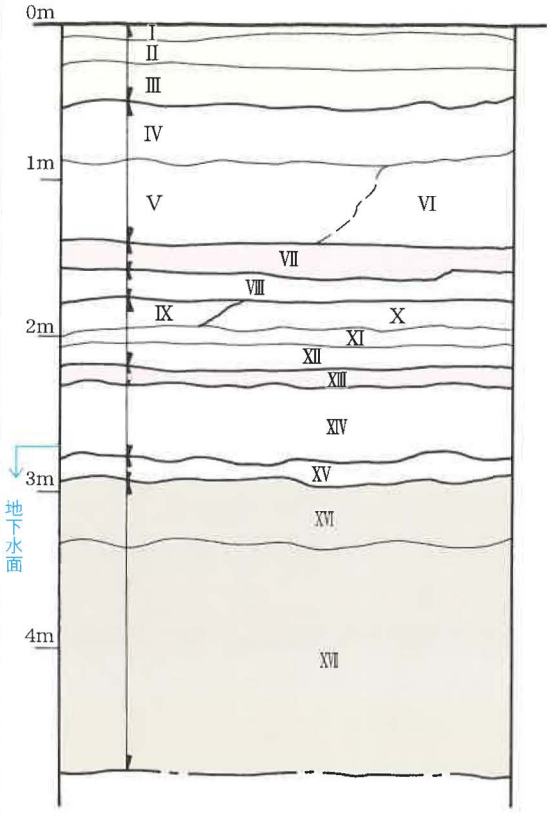
Ⅴ層：（グスク系・後期系・大当原式・伊波式土器？）

Ⅸ層：（後期系・曽畑式土器？）

2．出土遺物：

グスク土器・カムィヤキ・青磁・白磁・染付・褐釉陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・本土産陶磁器・近代磁器・貝・骨。

4地区（平安山原A遺跡）試掘No.59　（平成９年度）



第19図　東壁

図版：８　東壁

〈調査日〉 平成9年10月27日

〈記述〉

1．標高：3.9メートル

2．層序：

Ⅰ層：クラッシャー、Ⅱ層：コーラル、Ⅲ層：褐色土層（50cm）（客土）

Ⅳ層：淡褐色土層（30cm）マンガンを斑点状に含む

Ⅴ層：茶褐色土層（50cm）マンガンを斑点状に含む

Ⅵ層：淡灰褐色土層（55cm）マンガンを斑点状に含む

Ⅶ層：灰色土層（20cm）土器の流れ込み（二次堆積の可能性有り）

Ⅷ層：灰白色土層（20cm）

Ⅸ層：淡灰色混砂土層（15cm）

Ⅹ層：淡灰褐色混土砂層（15cm）

Ⅺ層：灰黒色土層（10cm）

Ⅻ層：淡灰色土層（15cm）

XIII層：灰黒色粘質土層（10cm）　土器出土（縄文晩期～弥生？）

XIV層：灰緑色混砂粘質土層（50cm）地下水が湧く

XV層：黒色土層（10cm）

XVI層：灰色礫層（40cm）枝サンゴの礫

XVII層：灰白色礫層（1.5m）枝サンゴの礫層、土器出土

表土下4.8m、以下不明、表土下2.7mで地下水あり

3．特記事項：

〈出土遺物〉

1．層別

Ⅹ層：（後期系大当原式土器）

XIII層：（後期系・大当原式土器）

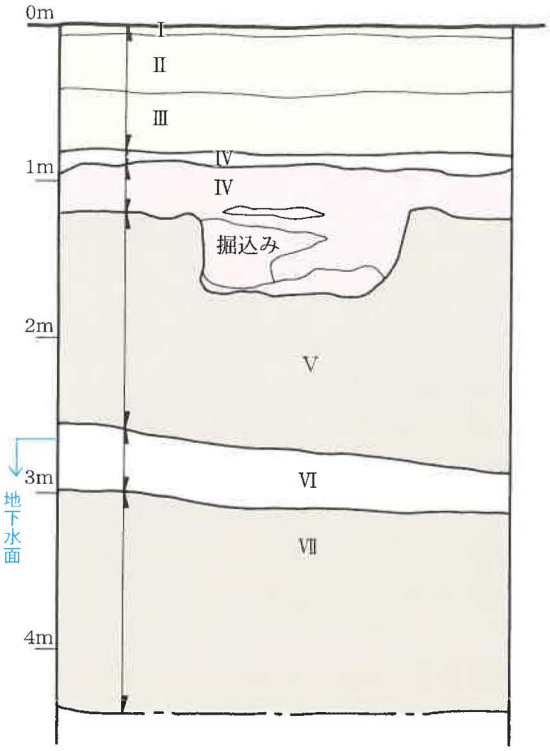
XIV層：（後期系・大当原式・弥生系・大山式土器）

XVII層：（後期系・大当原式・伊波式・面縄前庭式土器？）

2．出土遺物：

土器・貝製品。

4地区（平安山原A遺跡）試掘No.72　（平成９年度）



第20図　東壁

図版：9　東壁

〈調査日〉平成9年11月5日

〈記述〉

1．標高：3.2メートル

2．層序：

Ⅰ層：アスファルト、クラッシャー（40cm）
Ⅱ層：淡灰色混砂土層　礫混り（客土）（40cm）
Ⅲ層：黒色土層（旧表土）（10cm）
Ⅳ層：黒褐色混砂土層（40cm）下面より50cmの掘込みあり水平な粘土層が互層をなす
Ⅴ層：白色砂層（コーラル砂）（150cm）
Ⅵ層：ビーチロック層（40cm）水が湧く
Ⅶ層：白色枝サンゴ層（140cm）

3．特記事項：海獣葡萄鏡

〈出土遺物〉

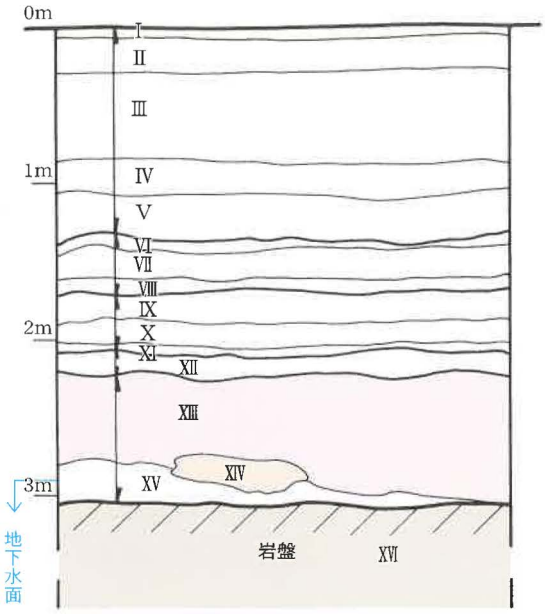
1．層別

・灰色枝サンゴ層（後期系土器、伊波式土器）
Ⅶ層：白色枝サンゴ層（面縄前庭式土器）
・崩落（グスク系土器）

2．出土遺物：

土器・青磁・染付・沖縄産施釉陶器・近代磁器・貝製品。

5地区（伊礼原D遺跡）試掘No.50　（平成９年度）



第21図　北壁

図版：10　北壁

〈調査日〉平成9年10月22日

〈記述〉

1．標高：2.9メートル

2．層序：

Ⅰ層：アスファルト
Ⅱ層：コンクリート
Ⅲ層：暗灰色混礫土層
Ⅳ層：淡灰色混礫砂層、（1.1m）（客土）
Ⅴ層：灰色混礫土層
Ⅵ層：淡灰色土層（30cm）（客土）
Ⅶ層：暗褐色土層（20cm）
Ⅷ層：淡黄褐色土層（15cm）
Ⅸ層：淡灰色土層（10cm）
Ⅹ層：淡灰色混土砂層（10cm）
Ⅺ層：淡灰色混砂土層（5cm）
Ⅻ層：灰黒色混土砂層（15cm）
ⅩⅢ層：淡褐色砂層（60cm）
ⅩⅣ層：灰白色混礫砂層（20cm）ブロック状に枝サンゴ・貝が堆積
ⅩⅤ層：淡灰色砂層（10～20cm）地下水が湧く
ⅩⅥ層：岩盤（表土下3.1m）
表土下2.9mで地下水あり

3．特記事項：

〈出土遺物〉

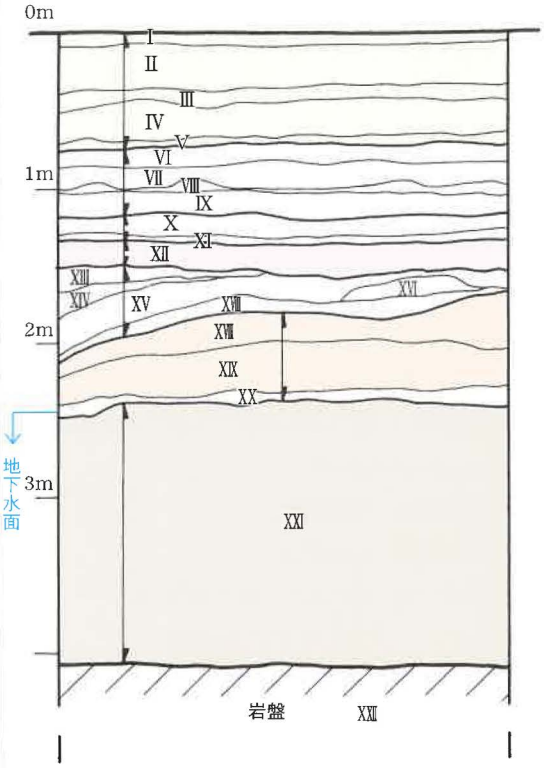
1．層別

ⅩⅢ層：（グスク土器・面縄前庭式土器）

2．出土遺物：

土器・陶質土器・本土産磁器。

5地区（伊礼原D遺跡）試掘No.52　（平成９年度）



第22図　北壁

図版:11　北壁

〈調査日〉平成9年10月23日

〈記述〉

1．標高：3.0メートル

2．層序：

Ⅰ層：アスファルト
Ⅱ層：黄褐色混礫土層
Ⅲ層：灰緑色土層
Ⅳ層：コーラル
Ⅴ層：褐色土層（75cm）
Ⅵ層：明灰褐色土層（10cm）マンガンを含む
Ⅶ層：淡灰褐色土層（20cm）カワニナを含む
Ⅷ層：褐色土層（3cm）マンガン層
Ⅸ層：淡灰色土層（17cm）　カワニナを含む
Ⅹ層：灰色混砂土層（15cm）
Ⅺ層：淡灰色混砂土層（5cm）
Ⅻ層：淡灰黒色混砂土層（20cm）土器を含む（包含層）
XIII層：淡灰黒色砂層・XIV層：灰黒色砂層（20cm）下層は濃い
XIV層：灰白色粗砂層（15cm）
XV層：灰白色礫層（10cm）枝サンゴ砂利層
XVI層：灰色砂層（10cm）
XVII層：白色砂層（15～30cm）
XIX層：白色粗砂層（20～30cm）
XX層：黄色粗砂層（10cm）
XXI層：淡灰色砂層（1.7m）
XXII層：岩盤（表土下401m）
表土下2.4mで地下水あり

3．特記事項：

〈出土遺物〉

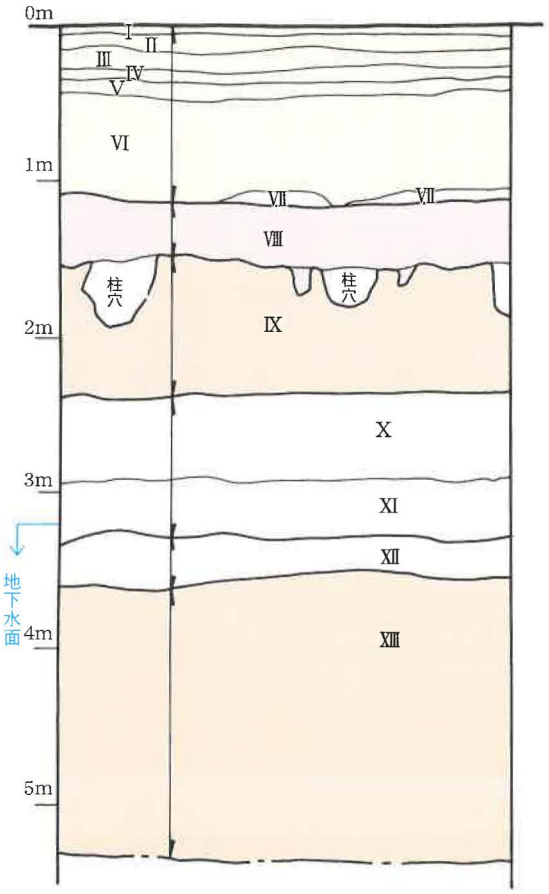
1．層別

Ⅻ層：（グスク系・後期土器ローリング、凹石）
XXI層：（後期・面縄東洞式・曽畑式土器）

2．出土遺物：

土器・青磁・貝製品・石器・カワニナ。

5地区（伊礼原D遺跡）試掘No.62　（平成９年度）



第23図　東壁

図版:12　東壁

〈調査日〉 平成9年10月28日

〈記述〉

1．標高：4.2メートル

2．層序：

Ⅰ層～Ⅴ層：（アスファルト、コーラル、クラッシャー、バラス、コーラル）

Ⅵ・Ⅶ層：コーラル客土・赤土（80cm）

Ⅷ層：淡灰褐色土層（40cm）下面に14個の灰黒色の掘込みあり

Ⅸ層：白色細砂層（80cm）

Ⅹ層：灰色粗砂層（50cm）

Ⅺ層：白色粗砂層（40cm）地下水が湧く

Ⅻ層：ビーチロック層（20～30cm）

XIII層：白色礫層（1.8m）枝サンゴの海成堆積層

3．特記事項：

〈出土遺物〉

1．層別

Ⅷ層：（後期系・大当原式・大当原式土器）

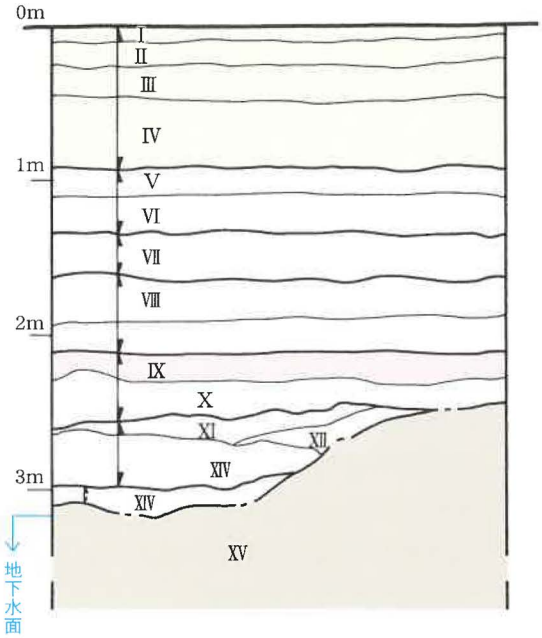
Ⅸ層：（後期系土器ローリング受ける）

XIII層：（後期系・大山式・荻堂式・伊波式・面縄前庭式土器）

2．出土遺物：

土器・青磁・白磁・褐釉陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・貝製品。

5地区（伊礼原D遺跡）試掘No.65　（平成９年度）



第24図　西壁

図版:13　西壁

〈調査日〉 平成9年10月30日

〈記述〉

1．標高：4.0メートル

2．層序：

Ⅰ層：アスファルト

Ⅱ層：コーラル

Ⅲ層：バラス、Ⅳ層：コーラル（90cm）

Ⅴ層：暗灰緑色土層（20cm）マンガン・カワニナを含む

Ⅵ層：淡灰緑色土層（30cm）マンガン・カワニナを含む

Ⅶ層：淡灰黒色土層（40cm）カワニナを含む

Ⅷ層：淡灰白色土層（60cm）カワニナを含む

Ⅸ層：淡灰色土層（20cm）土器出土、カワニナを含む

Ⅹ層：暗灰褐色混砂土層（20～30cm）

Ⅺ層：淡灰黒混砂土層（５～10cm）

Ⅻ層：茶褐色土層（10cm）

XIII層：青灰色シルト層（10～40cm）

XIV層：黒色土層（10cm）

XV層：灰白色砂層　水が湧く
表土下3.1mから地下水あり

3．特記事項：

〈出土遺物〉

1．層別

Ⅸ層：（後期系土器）

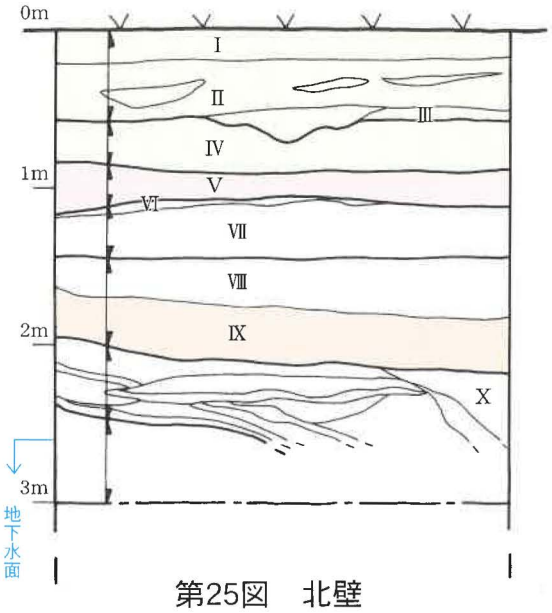
Ⅹ層：（後期系・大当原式・伊波式土器？）

XIII層：（グスク土器、後期系土器）

2．出土遺物：

土器・青磁・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・カワニナ・貝製品。

6地区（伊礼原C遺跡）試掘No.119　（平成８年度）



第25図　北壁

図版：14　北壁

〈調査日〉 平成9年3月13日

〈記述〉

1．標高：4.5メートル

2．層序：

Ⅰ層：現表土（20cm）

Ⅱ層：褐色土層（40cm）（客土）

Ⅲ層：灰色土層（10cm）（ガリガリと堅い）

Ⅳ層：黒褐色土層（30cm）（旧表土）

Ⅴ層：暗褐色土層（20cm）土器・貝出土（包含層）

Ⅵ層：淡茶褐色土層（３～５cm）

Ⅶ層：淡黄色粗砂層（40cm）

Ⅷ層：淡黄色粗砂層（40cm）枝サンゴ・小石・貝を含む

Ⅸ層：白色砂層：枝サンゴ・小石・貝を多く含む

Ⅹ層：淡茶色粗砂層と淡灰白色細砂層の互層（50cm）川底か，2.6mで地下水あり
表土下約３mで灰色砂層を確認

3．特記事項：

－2.6mより2回目の掘り下げを行うが崩落が著しく水の量も多い。約－3m前後で灰色砂層枝サンゴ・貝等を多く含む層を確認。

〈出土遺物〉

1．層別

Ⅴ層：（後期系土器、面縄前庭式土器）

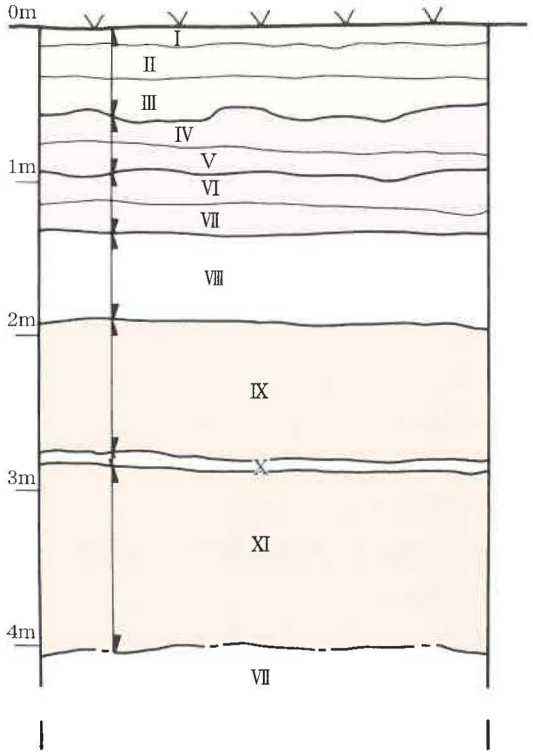
Ⅶ層：（後期系土器）

Ⅸ層：（面縄前庭式土器）

2．出土遺物：

土器・陶質土器。

6地区（伊礼原C遺跡）試掘No.125　（平成８年度）



第26図　南壁

図版:15　南壁

〈調査日〉 平成9年3月14日

〈記述〉

1．標高：4.9メートル

2．層序：

Ⅰ層：現表土（10cm）

Ⅱ層：茶褐色土層（20cm）（客土）

Ⅲ層：淡黄褐色土層（30cm）

Ⅳ層：淡黄褐色土層（20cm）土器出土、下面に土の小塊あり

Ⅴ層：暗黒褐色土層（20cm）土器出土、下面に土の小塊あり

Ⅵ層：茶褐色細砂層（20cm）面縄前庭式土器・チャート

Ⅶ層：淡灰褐色細砂層（20cm）面縄前庭式土器・チャート

Ⅷ層：淡灰白色細砂層（60cm）

Ⅸ層：淡灰白色砂層（80cm）以下、海成コーラル砂

Ⅹ層：淡黄褐色砂層（10cm）

Ⅺ層：淡灰白色粗砂層（1.1m）

Ⅻ層：淡灰緑色混礫砂層、表土下４m、水分を含む

3．特記事項：

淡灰褐色土層20～25cm。縄文晩期～弥生相当期暗黒褐色土層20cm。縄文後期。茶褐色砂層20cm。縄文後期。淡灰褐色砂層20cm。縄文中期～縄文後期

〈出土遺物〉

1．層別

Ⅳ層：土器出土

Ⅴ層：（後期系・浜屋原式・弥生系・嘉徳Ⅰ式・面縄東洞式・仲泊式・面縄前庭式・室川下層式・チャート）

Ⅵ層：（後期系・大山式・嘉徳Ⅱ式・面縄東洞式・仲泊式・面縄前庭式・曽畑式土器）

Ⅸ層：（面縄東洞式土器）

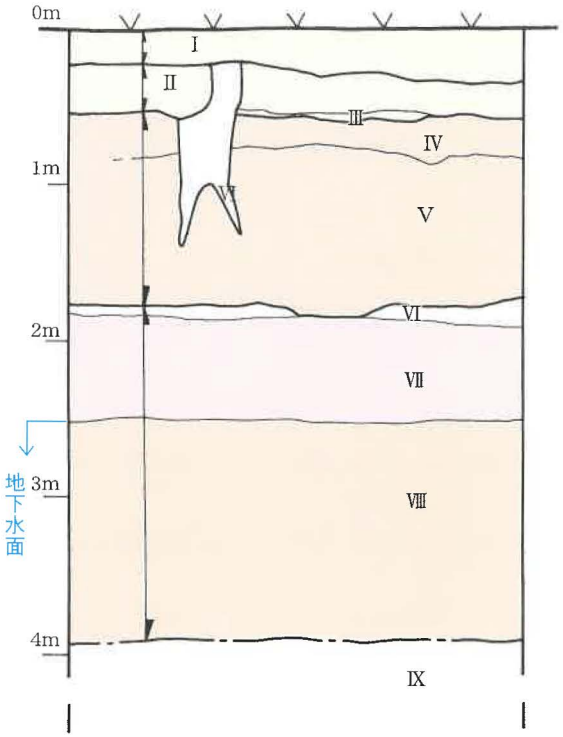
その他層不明　（轟Ｄ式・轟Ｃ式土器）

2．出土遺物：

土器・チャート。

縄文後期が中心、奄美系土器が多い。

6地区（伊礼原C遺跡）試掘No.127　（平成８年度）



第27図　南壁

〈調査日〉平成9年3月17日

〈記述〉

1．標高：4.4メートル

2．層序：

Ⅰ層：褐色土層（20～40cm）（客土）
Ⅱ層：暗褐色土層（30～40cm）旧表土
Ⅲ層：暗褐色混土砂層（５cm）
Ⅳ層：淡黄褐色混土砂層（20cm）
Ⅴ層：淡黄色砂層（１m）
Ⅵ層：淡褐色粗砂層（５cm）
Ⅶ層：灰色粗砂層と灰色混枝サンゴ粗砂層の互層（80cm）
Ⅷ層：灰色混枝サンゴ粗砂層（1.4m）
Ⅸ層：淡灰色泥質砂層（以下は崩壊激しく試掘出来ず）

3．特記事項：

特になし

〈出土遺物〉

1．層別

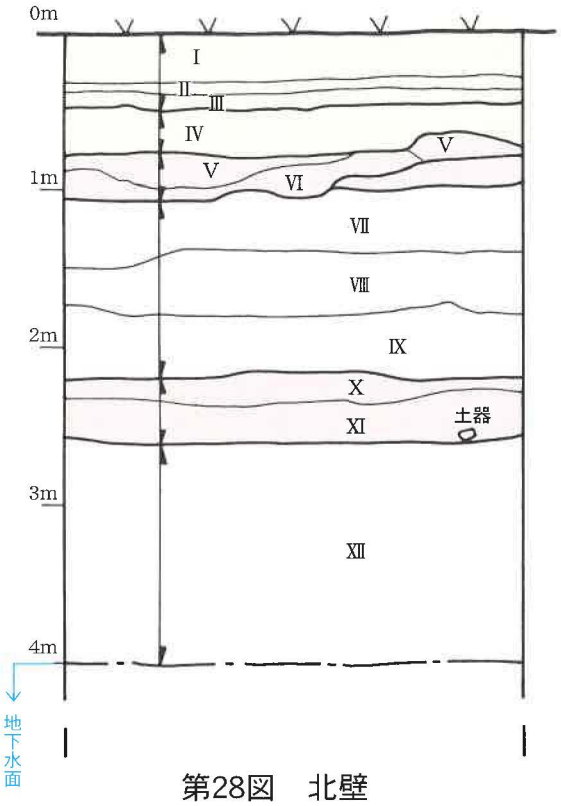
Ⅱ層：（大当原式・面縄東洞式土器）
Ⅶ層：（伊波式・面縄東洞式・面縄前庭式・室川下層式土器）
不明（後期系土器→ローリング）

2．出土遺物：

土器・青磁・白磁・染付・褐釉陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・近代磁器・陶質土器。

図版：16　南壁

6地区（伊礼原C遺跡）試掘No.133　（平成８年度）



第28図　北壁

図版:17　北壁

〈調査日〉平成9年3月17日

〈記述〉

1．標高：4.7メートル

2．層序：

Ⅰ～Ⅲ層：褐色客土（50cm）

Ⅳ層：暗褐色土層（30cm）旧表土

Ⅴ層：黒褐色砂質土層（20cm）砂丘系・乳房尖底土器が多量出土。貝・石器出土。（包含層）

Ⅵ層：暗黄褐色混土砂層（20cm）５層と同様の遺物が出土。

Ⅶ層：淡黄色砂層（40cm）土器・貝集積遺構か？

Ⅷ・Ⅸ層：白砂層（80cm）Ⅷ層は赤味、Ⅸ層は白い。

Ⅹ層：淡赤褐色粗砂層（20cm）土器出土

Ⅺ層：淡黄色粗砂層（20cm）土器出土

表土下４mは淡赤黄色砂層で地下水あり

3．特記事項：

特になし

〈出土遺物〉

1．層別

Ⅵ層ｐｉｔ内（浜屋原式土器）出土

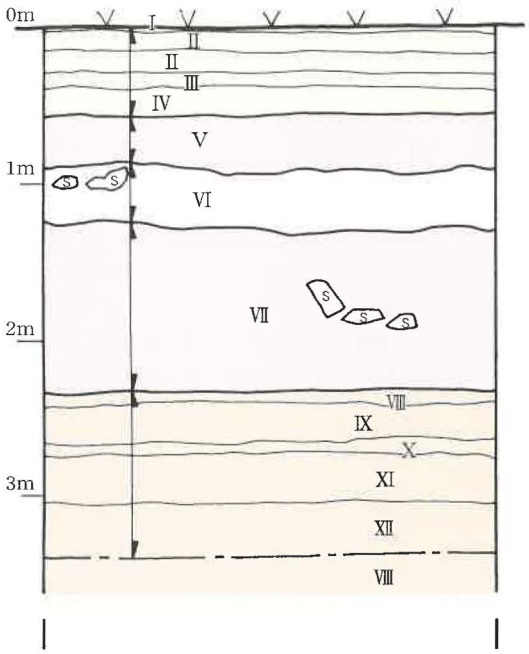
Ⅵ層（後期系・大当原式・浜屋原式・弥生系・晩期系、大山式・嘉徳Ⅰ式・・仲泊式・面縄東洞式・面縄前庭式土器、石鍋、石斧、石皿、黒曜石）

Ⅺ層（嘉徳Ⅱ式土器）

2．出土遺物：

土器・青磁・白磁・染付・褐釉陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・近代磁器・貝製品・石斧・石鍋・石皿・黒曜石。

6地区（伊礼原C遺跡）試掘No.138　（平成８年度）



第29図　南壁

図版:18　南壁

〈調査日〉平成9年3月14日

〈記述〉

1．標高：5.1メートル

2．層序：

Ⅰ層：赤土、Ⅱ層：黒褐色土、Ⅲ層：茶褐色土（40cm）（客土）

Ⅳ層：淡灰褐色混礫土層（20cm）（旧耕作土？）

Ⅴ層：黒褐色土層（30cm）上面にマンガン面、土器出土、包含層

Ⅵ層：灰黒褐色砂層（40cm）

Ⅶ層：灰白色細砂層（１m）海成砂コーラル、下半部で土器・チャート出土

Ⅷ層：灰白色粗砂層（10cm）

Ⅸ層：淡黄褐色粗砂層（30cm）

Ⅹ層：淡灰白色砂層（10cm）

Ⅺ層：淡黄褐色粗砂層（30cm）

Ⅻ層：白色粗砂層（40cm）

XIII層：灰色混礫粗砂層、表土下3.4m以下崩壊（枝サンゴ含む）

3．特記事項：

本ポイントとNo.125を結ぶラインより東側に縄文の堆積が確認され、No.133辺りから西側へは広がらない。

〈出土遺物〉

1．層別

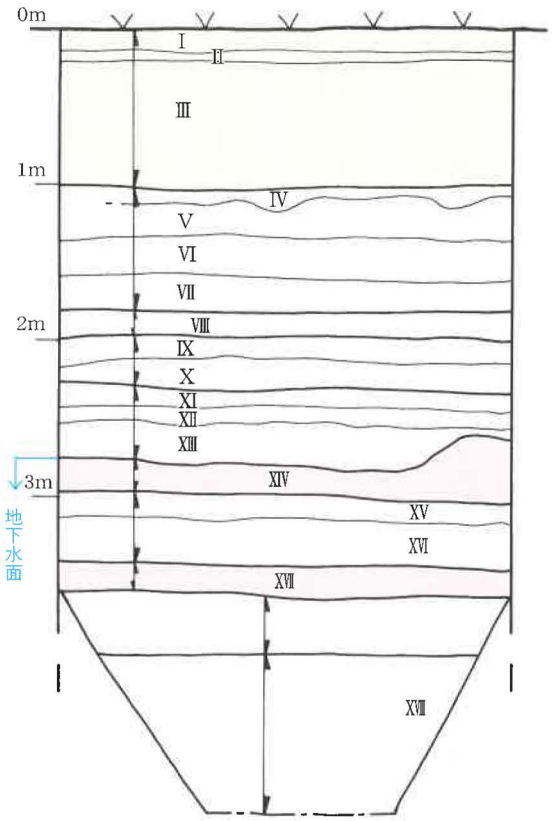
Ⅴ層：（後期系・浜屋原式・弥生系・晩期系・大山式・伊波式・嘉徳Ⅰ式・面縄東洞式・仲泊式・面縄前庭式・室川下層式・曽畑式・磨石・石斧・石製品）

Ⅶ層：（後期系・大当原式・浜屋原式・市来式・嘉徳Ⅰ式土器）

2．出土遺物：

土器・青磁・沖縄産施釉陶器・陶質土器・石英・磨石・石斧・石製品・サンゴ・貝製品。

6地区（伊礼原C遺跡）試掘No.143　（平成８年度）



第30図　北・西壁

図版：19　北壁

〈調査日〉 平成9年3月18日

〈記述〉

1．標高：6.0メートル

2．層序：

Ⅰ層：表土（16cm）、Ⅱ層：黄褐色混礫土層（84cm）（客土）

Ⅲａ層：褐色土層（10～20cm）、Ⅲｂ層：灰色土層（20～40cm）上面に畝旧耕地

Ⅳ層：暗灰色粘質土層（26cm）

Ⅴ層：暗灰緑色泥質土層（22cm）：カワニナが散在

Ⅵ層：暗黒褐色粘質土層（14cm）：カワニナが多い、下面に黄褐色の鉄分が水平に走る

Ⅶ層：暗灰色泥質土層（18cm）

Ⅷ層：黒褐色泥質土層（14cm）（サンプル）

Ⅸ層：黒褐色泥質土層と灰色粘質砂層との互層（12cm）

Ⅹ層：灰色粘質砂層（西側で26cm、東で消える）

Ⅺ層：暗茶褐色泥炭層（西側で18cm、東側で44cm）

Ⅻ層：淡褐色混砂泥炭層（20cm）

ⅩⅢ層：灰色石英砂層（20cm）（一見ガラス質）

ⅩⅣ層：暗灰褐色泥質砂層（22cm～32cm）：曽畑式土器・チャート・石器・木製品・貝・獣魚骨

ⅩⅤ層：暗灰色砂層（22cm～28cm）
表土下2.8mで地下水あり

3．特記事項：
特になし

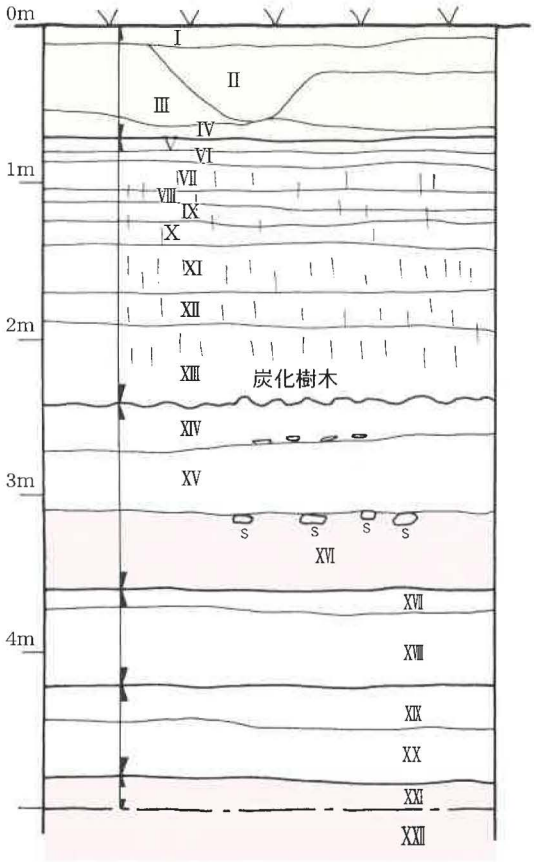
〈出土遺物〉

1．層別

ⅩⅣ層：曽畑式土器やその他の石製品、種子、木製品多量に出土、（文化層）

2．出土遺物：
青磁・染付・褐釉陶器・本土産陶磁器・貝・魚骨・獣骨・骨製品・木製品？・木の実石器・チャート。

6地区（伊礼原C遺跡）試掘No.145　（平成８年度）



第31図　東壁

図版:20　東壁

〈調査日〉平成9年3月21日

〈記述〉

1．標高：6.2メートル

2．層序：

Ⅰ層～Ⅳ層：表土・土のう袋・撹乱・客土・コーラル（客土）（70cm）

Ⅴ層～Ⅹ層：淡灰色粘質土層（70cm）褐色の縦位のスジが下半分に多くみられる。また、中位と下位には２枚の褐色ラインがあり、一線が引ける。カワニナは少ない。

Ⅺ層～ⅩⅢ層：灰色粘質土層（１ｍ）褐色の縦位のスジが上半分に多くみられる。下部はカワニナが多い。

ⅩⅣ層：淡灰色粘質土層：（30cm）上面は跳ね上がりがありラミナ現象がみられる。

ⅩⅤ層：淡暗褐色粘土層：（50cm）上面に樹木片が同一レベルにみられる。

ⅩⅥ層：茶褐色泥炭層（50cm）上面に風化石灰岩礫の面がみられる。下部で土器・貝・獣骨が出土（包含層）

ⅩⅦ層：暗褐色シルト層：（15cm）

ⅩⅧ層：灰色シルト層：（40cm）

ⅩⅨ層：円礫層：（20cm）１～２cm大の石英円礫層、貝殻が多く含む。（貝層？）

ⅩⅩ層：灰色シルト層（30cm）

ⅩⅩⅠ層：黒褐色泥炭層（20cm）

ⅩⅩⅡ層：灰色シルト層　表土下５ｍ。爪形文土器出土（包含層）

3．特記事項：

特になし

〈出土遺物〉

1．層別

ⅩⅥ層：（曽畑式土器・貝殻・獣骨）

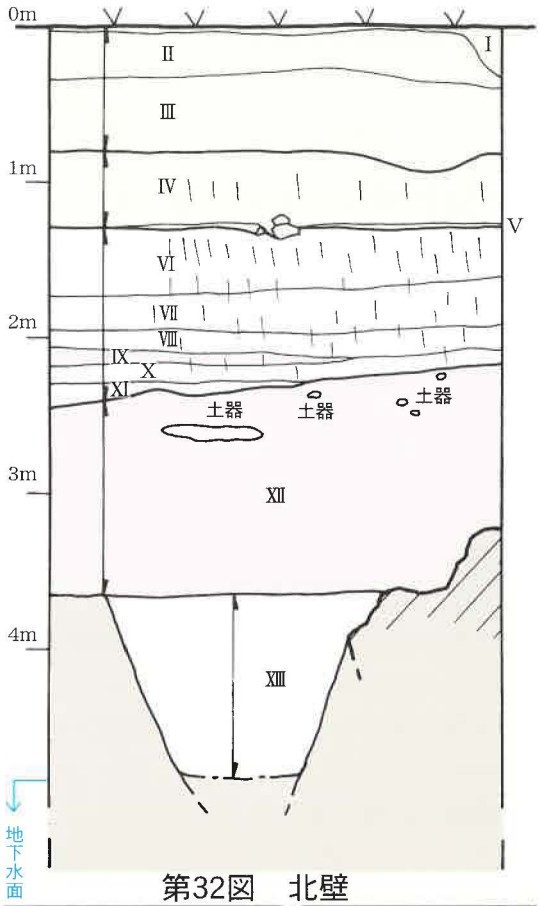
ⅩⅩⅡ層：（爪形文土器・東原式土器）

層不明（後期系・大当原式・浜屋原式・弥生式系・面縄前庭式・東原式土器）

2．出土遺物：

木片・土器・貝・獣骨・石斧・石器片。

6地区（伊礼原C遺跡）試掘No.146　（平成８年度）



第32図　北壁

図版:21　北壁

〈調査日〉 平成9年10月29日

〈記述〉

1．標高：4.0メートル

2．層序：

Ⅰ層：アスファルト、Ⅱ層：コーラル、Ⅲ層：バラス、Ⅳ層：コーラル（90cm）

Ⅴ層：暗灰緑色土層（20cm）マンガン・カワニナを含む

Ⅵ層：淡灰緑色土層（30cm）マンガン・カワニナを含む

Ⅶ層：淡灰黒色土層（40cm）カワニナを含む

Ⅷ層：淡灰白色土層（60cm）カワニナを含む

Ⅸ層：淡灰色土層（20cm）土器出土、カワニナを含む

Ⅹ層：暗灰褐色混砂土層（20～30cm）

Ⅺ層：淡灰黒混砂土層（５～10cm）

Ⅻ層：茶褐色土層（10cm）

XIII層：青灰色シルト層（10～40cm）

XIV層：黒色土層（10cm）

XV層：灰白色砂層　水が湧く

表土下３．１mから地下水あり

3．特記事項：

〈出土遺物〉

1．層別

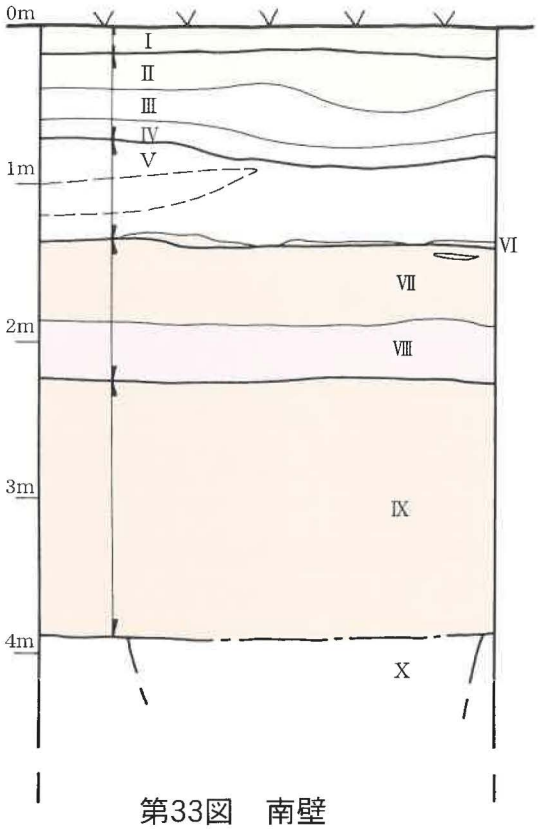
Ⅸ層：

Ⅹ層：

XIII層：

2．出土遺物：

7地区（伊礼原B遺跡）試掘No.97　（平成８年度）



第33図　南壁

図版:22　南壁

〈調査日〉 平成9年3月7日

〈記述〉

1．標高：2.5メートル

2．層序：

Ⅰ層：表土（20cm）

Ⅱ層：暗褐色混土砂層（旧表土）（20～40cm）

Ⅲ層：茶褐色混土砂層（20～30cm）

Ⅳ層：淡暗褐色混土砂層（10cm）

Ⅴ層：白砂層（50cm）下部は砂粒が粗くなる

Ⅵ層：黒色土層（２～３cm）有機質層

Ⅶ層：淡灰色混礫砂層（40cm）枝サンゴ層と粗砂層が互層を呈す。

Ⅷ層：淡灰色粗砂層（40cm）土器・木片・骨片出土（包含層）

Ⅸ層：淡灰色枝サンゴ層（1.7m）数センチの粗めの枝サンゴ

Ⅹ層：暗灰色泥質砂層（表土下４m）

3．特記事項：

特になし

〈出土遺物〉

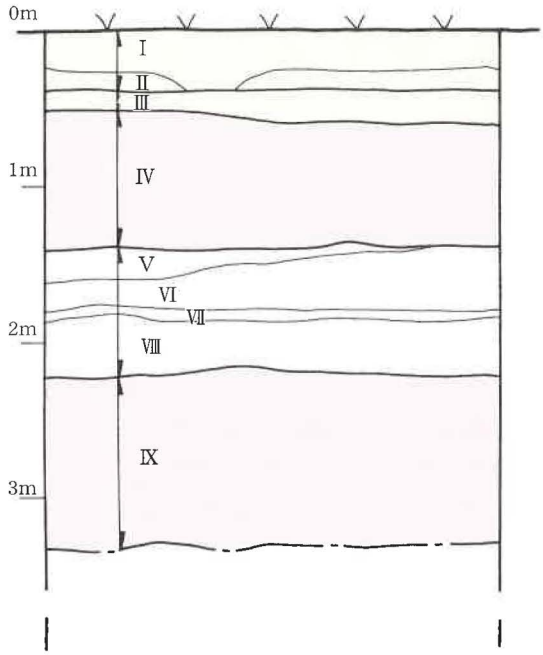
1．層別

Ⅷ層　伊波式・面縄前庭式・曽畑式土器

2．出土遺物：

土器。

7地区（伊礼原B遺跡）試掘No.116　（平成８年度）



第34図　東壁

〈調査日〉平成9年3月10日

〈記述〉

1．標高：2.3メートル

2．層序：

Ⅰ層：現表土、Ⅱ層：コーラル客土（40cm）
Ⅲ層：暗褐色土（20cm）旧表土
Ⅳ層：白色砂層（80cm）土器出土、二次堆積
Ⅴ層：淡黄色混礫砂層（０～20cm）硬質
Ⅵ層：淡黄色混砂礫層（20～40cm）海成枝サンゴ・貝を含む
Ⅶ層：淡黄色砂層（５cm）
Ⅷ層：淡灰白色砂層（15cm）
Ⅸ層：淡灰白色砂層（1.1m）（土器片出土（大山？）

3．特記事項：

伊礼原B遺跡の範疇と考えられる。

図版:23　東壁

〈出土遺物〉

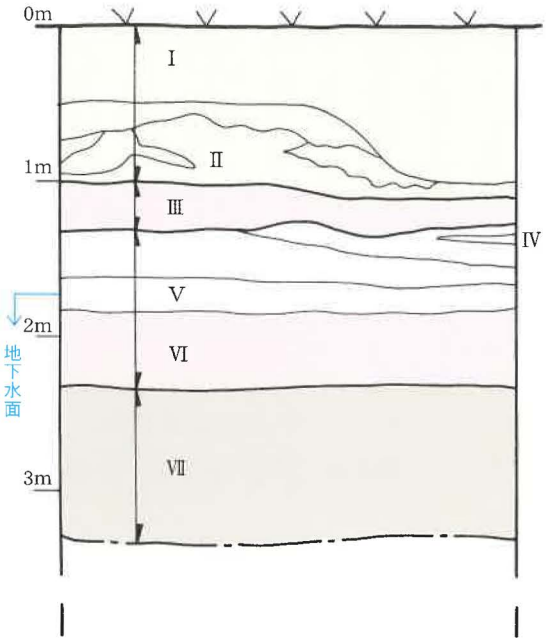
1．層別

Ⅳ・Ⅴ層：（後期系・浜屋原式・面縄東洞式・面縄前庭式・室川下・曽畑式土器）ローリング受けている
Ⅸ層：（大山式・面縄前庭式土器）

2．出土遺物：

土器・貝。

7地区（伊礼原B遺跡）試掘No.136　（平成８年度）



第35図　南壁

図版:24　南壁

〈調査日〉 平成9年3月11日

〈記述〉

1．標高：2.8メートル

2．層序：

Ⅰ層：コーラル、黄色土、客土（0.5～１m）

Ⅱ層：赤褐色土・島尻層（クチャ）・礫の互層（50cm）

Ⅲ層：暗褐色砂層、沖縄産陶器多数出土(30～40cm)

Ⅳ層：淡灰褐色砂層、上部は粗砂、下部は枝サンゴの互層（以下海底砂）（30cm）

Ⅴ層：灰白色粗砂層（20cm）地下水あり

Ⅵ層：灰白色混砂礫層　枝サンゴ層（60cm）

Ⅶ層：灰白色混砂礫層　枝サンゴ・貝・石の量混在層（１m）

表土下1.8mで地下水あり

3．特記事項：

特になし

〈出土遺物〉

1．層別

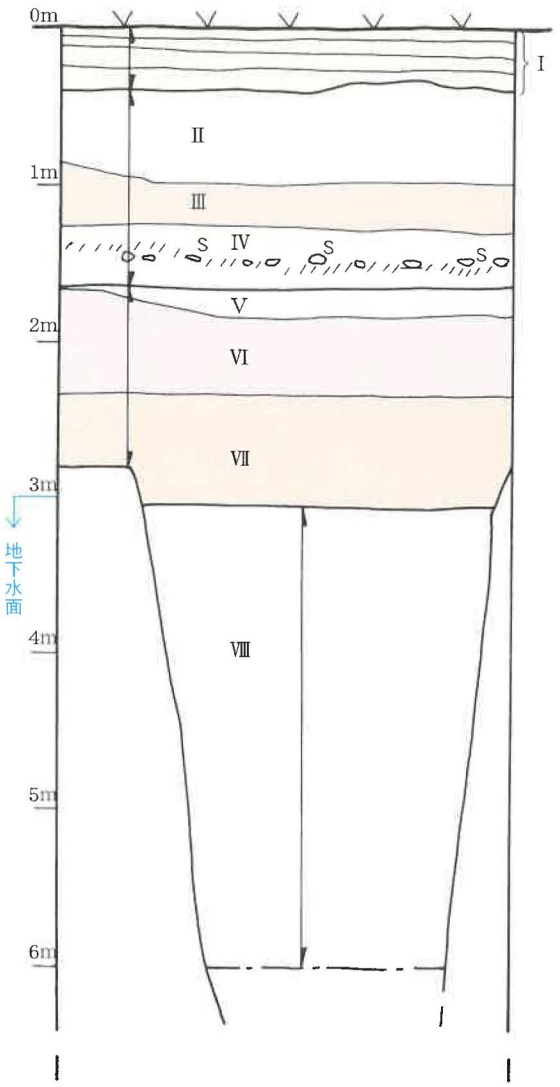
Ⅲ層：（後期土器ローリング・伊波式・面縄前庭式土器）

Ⅵ層：（面縄前庭式土器）

2．出土遺物：

土器・白磁・染付・褐釉陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・本土産陶磁器（有田）・近代磁器・陶質土器・木・貝・サンゴ。

8地区（伊礼原E遺跡）試掘No.60　（平成8年度）



第36図　南壁

〈調査日〉平成9年3月4日

〈記述〉

1．標高：3.4メートル

2．層序：

Ⅰ層：表土、コーラル、客土、赤土、灰褐色混土砂層（旧表土）（40cm）

Ⅱ層：淡褐色砂層（旧表土からの染み込み）

Ⅲ層：白砂層（下面で薄黒い面がある）（30cm）

Ⅳ層：赤茶褐色砂層（中位レベルに礫層がある）（40cm）

Ⅴ層：淡灰色砂層（細砂と粗砂の互層）

Ⅵ層：淡灰色混礫粗砂層（枝サンゴ含む粗砂）（土器・石皿・貝殻出土）

Ⅶ層：粘質混砂土層（灰褐色）
表土下３ｍで湧水あり

3．特記事項：

特になし

〈出土遺物〉

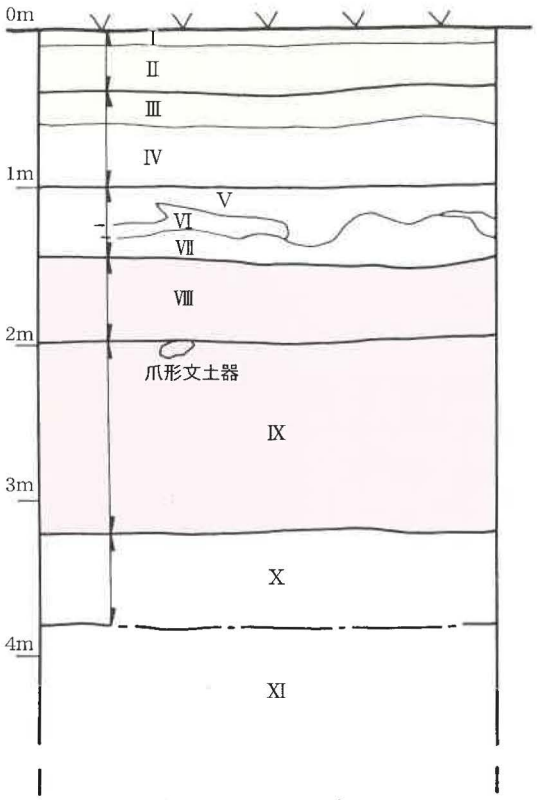
1．層別

Ⅵ層：（面縄東洞式・面縄前庭式土器・敲石）

2．出土遺物：

土器・本土産陶器・貝製品・敲石。

8地区（伊礼原E遺跡）試掘No.72　（平成８年度）



第37図　南壁

図版:25　南壁

〈調査日〉平成9年3月7日

〈記述〉

1．標高：3.0メートル

2．層序：

Ⅰ層：表土、Ⅱ層：赤色土層（客土）（40cm）

Ⅲ層：淡灰褐色混土砂層（20cm）旧表土

Ⅳ層：淡黄褐色混土砂層（40cm）

Ⅴ層：淡黄褐色混土砂層（20～30cm）（炭が混ざる）

Ⅵ層：灰色泥質砂層（15～20cm）泥炭

Ⅶ層：淡黄褐色混土砂層（１０ｃｍ）

Ⅷ層：淡褐色粗砂層（40～60cm）（土器出土）

Ⅸ層：暗灰色混礫粗砂層（1.2m）、枝サンゴ堆積層、上面から爪形文土器出土

Ⅹ層：灰色泥質砂層（60cm）樹木片が混在　灰色泥質砂層：固くしまりがある（樹木片混る）

表土下４m以下は不明

3．特記事項：

泥炭？ 40cm。土器

枝サンゴ層より爪形文土器出土。本体は不明。

〈出土遺物〉

1．層別

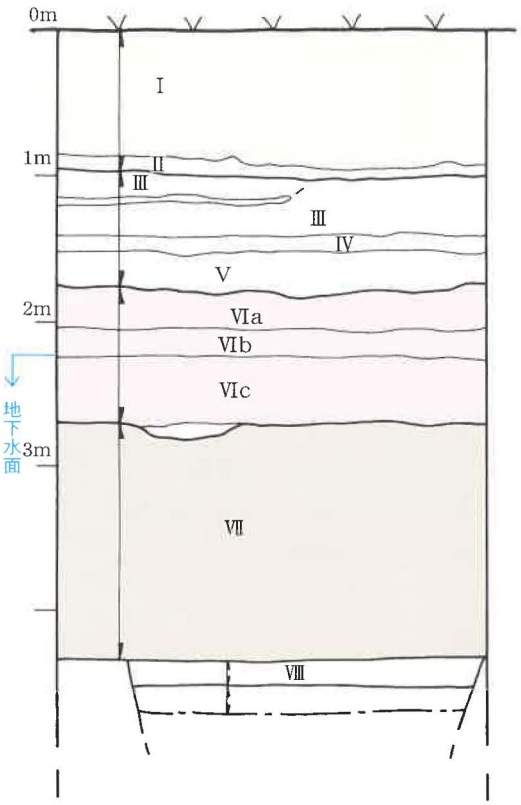
Ⅷ層：（後期系・大当原式・浜屋原式・面縄前庭式土器）

Ⅸ層：（爪形文土器・敲石）

2．出土遺物：

土器・沖縄産無釉陶器・敲石・貝製品。

８地区（伊礼原E遺跡）試掘No.144　（平成８年度）



図第38　北壁

〈調査日〉平成　年　月　日

〈記述〉

1．標高：5.9メートル

2．層序：

Ⅰ層：赤土・コーラルの互層（90cm）（客土）

Ⅱ層：褐色混砂土層（10cm）撹乱層

Ⅲ層：褐色砂層（40cm）下部はやや黄色で粘質。

Ⅳ層：暗灰褐色砂層（10cm）

Ⅴ層：淡灰色砂層（30cm）貝殻やサンゴの混入は少ない（少量）

Ⅵ層：淡灰色小礫層（50cm）枝サンゴ堆積層．粒子の小ａ・中ｂ・大ｃで３区分。上位で土器出土。中位で地下水レベル

Ⅶ層：ビーチロック層　扁平に剥離して割れる。

Ⅷ層：赤褐色砂層　4.5m下位で砂が出土。

3．特記事項：

特になし

〈出土遺物〉

1．層別

Ⅵa層　室川下層式土器・敲石・石器片・貝製品出土

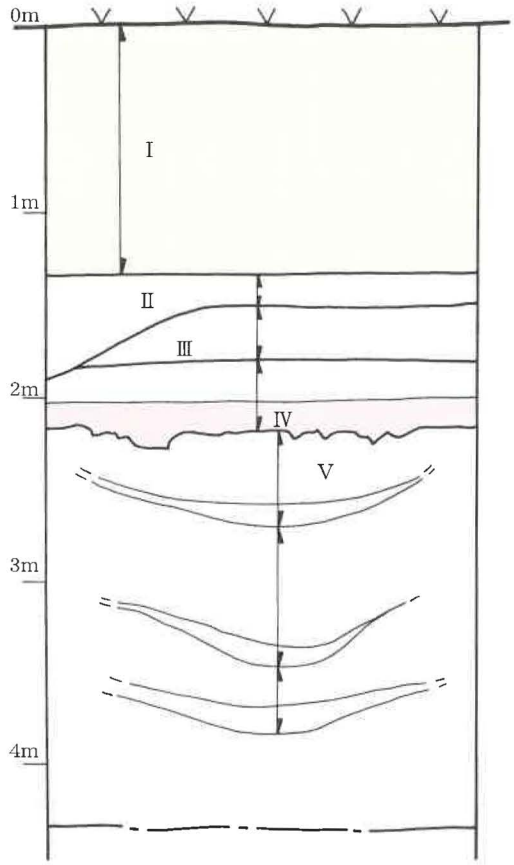
Ⅵc層　板状打製石器・定格式小型磨製石斧・石器片

Ⅶ層　敲石出土

2．出土遺物：

土器・敲石。

9地区（後兼久原遺跡）試掘No.19　（平成７年度）



第39図　北壁

図版:26　北東壁

〈調査日〉平成8年2月22日

〈記述〉

1．標高：8メートル

2．層序：

Ⅰ層：暗褐色混礫土層（客土）（1.4m）

Ⅱ層：褐色土層（旧表土）（20cm）

Ⅲ層：黄褐色シルト層（濁る）（40cm）

Ⅳ層：暗褐色土層（下半部は黒い）（40cm）青磁・土器多数出土（包含層）

Ⅴ層：黄褐色シルト層（2.2m）層中にU字状の河底あり。有機質はない。

3．特記事項：

特になし

〈出土遺物〉

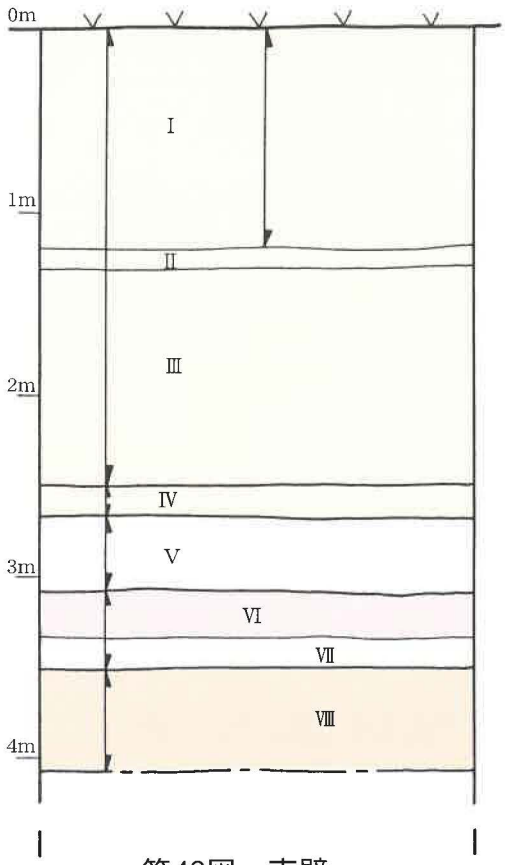
1．層別

Ⅳ層：青磁・土器（グスク土器）多数出土

2．出土遺物：

土器・青磁・白磁・染付・褐釉陶器・沖縄産施釉陶器。

9地区（後兼久原遺跡）試掘No.26　（平成７年度）



第40図　南壁

図版:27　南東壁

〈調査日〉平成8年2月23日

〈記述〉

1．標高：8.2メートル

2．層序：

Ⅰ層：混礫土層客土（1.3m）

Ⅱ層：コーラル層客土（20cm）

Ⅲ層：混礫土層客土（１m）

Ⅳ層：暗褐色土層　旧表土（15cm）

Ⅴ層：茶褐色シルト層（ジャーガル）（45cm）

Ⅵ層：灰色シルト層（25cm）包含層、牡丹スタンプ青磁底部出土

Ⅶ層：淡灰色シルト層（10cm）（オキナワヤマタニシ含む）下面に樹根痕跡あり

Ⅷ層：白砂層（60cm）上部に褐色の縦筋あり

3．特記事項：

淡灰色土層にオキナワヤマタニシが含まれている。

〈出土遺物〉

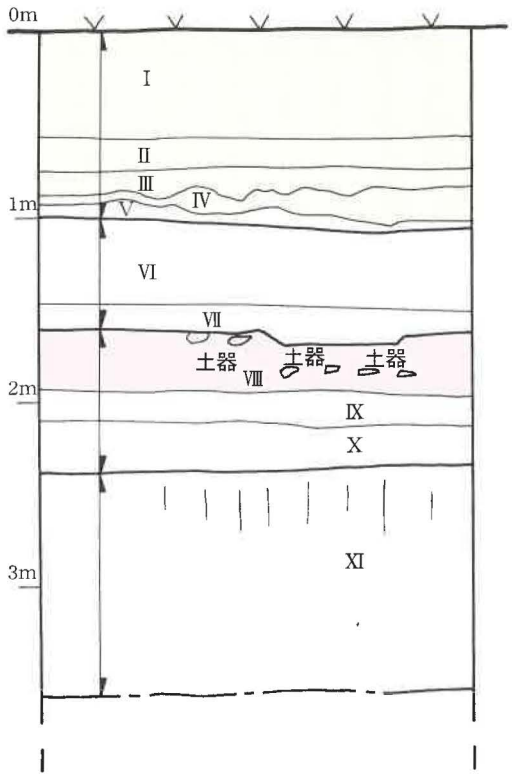
1．層別

Ⅵ層：牡丹スタンプ青磁（底部）出土

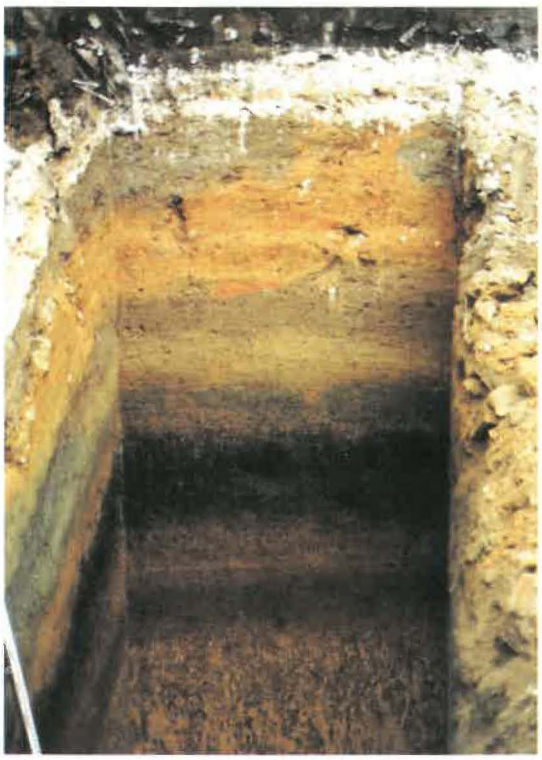
2．出土遺物：

青磁。

9地区（後兼久原遺跡）試掘No.139　（平成７年度）



第41図　南壁



図版:28　西南壁

〈調査日〉平成8年3月11日

〈記述〉

1．標高：15.5メートル

2．層序：

Ⅰ層：戦後の客土（60cm）、Ⅱ層コーラル（20cm）、Ⅲ層腐植土・石灰岩（拳大）（20cm）、Ⅳ層赤土客土（20cm）

Ⅴ層：淡灰色混礫土層（15cm）

Ⅵ層：淡灰色土層（45cm）（上半部は灰色が強く下半部は淡く粘性が強い）

Ⅶ層：褐色土層（下面境目に落ち込み）（10cm）

Ⅷ層：褐色土層（30cm）上面と中位レベル２枚の遺物層あり、（土器・青磁出土）（包含層）

Ⅸ層：赤褐色土層（焼土含む）（15cm）

Ⅹ層：暗褐色土層（20cm）

Ⅺ層：黄褐色シルト層（1.25m）（上半は黄味が強く縦筋が見られる。下半部は赤味を増す。

3．特記事項：

褐色土層30cm。グスク時代。青磁。

〈出土遺物〉

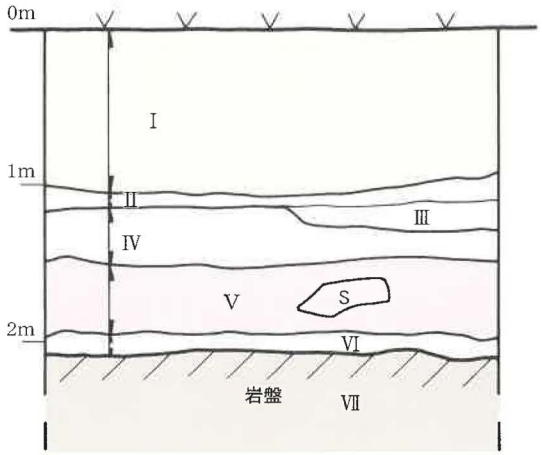
1．層別

Ⅷ層：（後期土器・グスク土器・蓮弁文青磁）

2．出土遺物：

土器・青磁・白磁・褐釉陶器・沖縄産施釉陶器・陶質土器。

A地区（遺物散布地）試掘No.40　（平成９年度）



第42図　北壁

〈調査日〉平成9年10月17日

〈記述〉

1．標高：4.0メートル

2．層序：

Ⅰ層：褐色土層（1.1m）（客土）
Ⅱ層：暗褐色土層（10cm）
Ⅲ層：褐色混礫土層（15cm）
Ⅳ層：淡褐色土層（20～40cm）
Ⅴ層：黄褐色混礫土層（50cm）
Ⅵ層：淡黄色礫層（10cm）
Ⅶ層：岩盤

3．特記事項：

〈出土遺物〉

1．層別

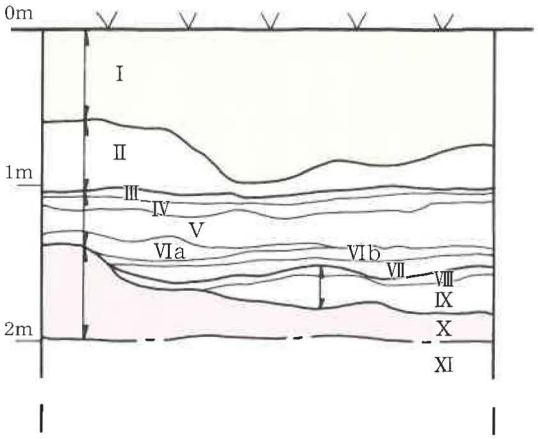
Ⅴ層：赤褐色土層（後期系・面縄前庭式・曽畑式土器）

2．出土遺物：

土器・青磁・白磁・褐釉陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・近代磁器・陶質土器。

図版:29　北壁

B地区（遺物散布地）試掘No.41　（平成９年度）



第43図　西壁

〈調査日〉平成9年11月10日

〈記述〉

1．標高：3.2メートル

2．層序：

Ⅰ層：表土
Ⅱ層：茶色土
Ⅲ層：客土
Ⅳ層：赤土（1.1m）
Ⅴ層：淡茶褐色粘質土層（5cm）
Ⅵa層：黄灰色砂層、Ⅵb層：黄灰色砂層（10cm～20cm）
Ⅶ層：黄灰色砂層（10cm）
Ⅷ層：灰褐色粘質土層（5～10cm）
Ⅸ層：灰色混パミス土層（10～25cm）
Ⅹ層：暗褐色混砂土層（20～60cm）
Ⅺ層：淡灰褐色砂層

3．特記事項：

〈出土遺物〉

1．層別

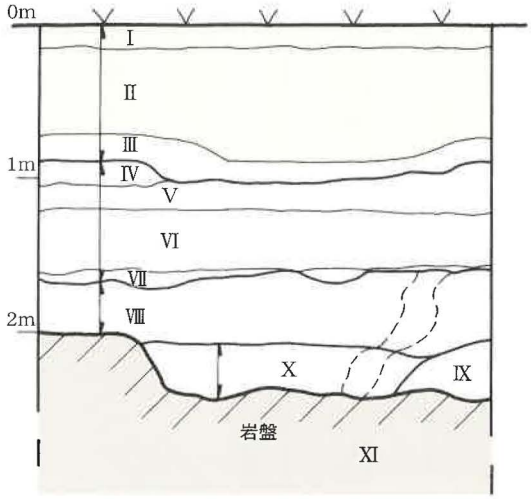
近くに拝所有り

2．出土遺物：

土器・カムィヤキ・青磁・白磁・染付・褐釉陶器・沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器・本土産磁器・近代磁器・陶質土器。

図版:30　西壁

C地区（遺物散布地）試掘No.3　（平成９年度）



第44図　南壁

図版:31　南壁

〈調査日〉 平成9年10月3日

〈記述〉

1．標高：6.5メートル

2．層序：

Ⅰ層：表土（15cm）
Ⅱ層：暗褐色土層（60～70cm）（客土）
Ⅲ層：赤土（10～15cm）
Ⅳ層：淡黄褐色土層（10cm）
Ⅴ層：淡灰褐色土層（20～30cm）
Ⅵ層：黄褐色土層（40cm）
Ⅶ層：淡黄褐色土層（５～10cm）
Ⅷ層：黄白色礫層（40～50cm）石灰岩風化層
Ⅸ層：淡灰礫層（30cm）石灰岩の風化砂利
Ⅹ層：淡灰緑色土層（30cm）
Ⅺ層：岩盤、石灰岩

3．特記事項：

〈出土遺物〉

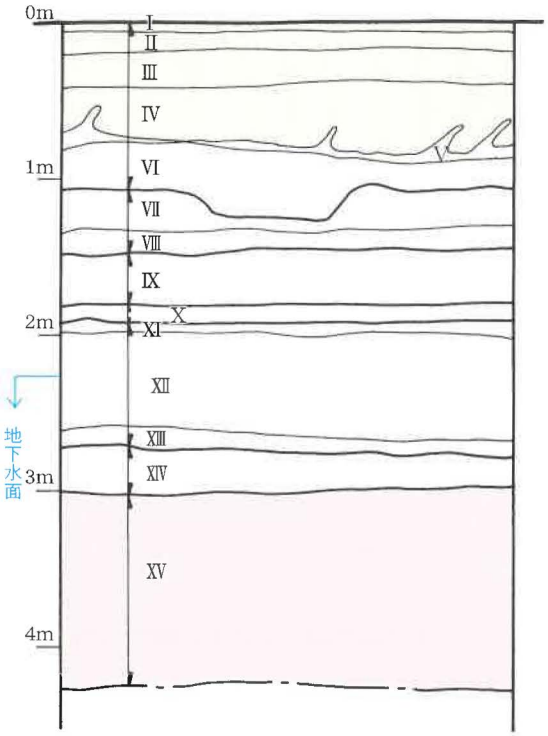
1．層別

・岩盤直上（縄文晩期土器）

2．出土遺物：

土器。

D地区（遺物散布地）試掘No.45　（平成９年度）



第45図　西壁

図版:32　西壁

〈調査日〉 平成9年10月20日

〈記述〉

1．標高：2.5メートル

2．層序：

Ⅰ層：アスファルト、Ⅱ層：コーラル、Ⅲ層：赤土粘土、Ⅳ層：灰白色砂礫層（80cm）（客土）

Ⅴ層：灰色土層（５～10cm）

Ⅵ層：淡灰緑褐色粘質土層（20～45cm）

Ⅶ層：淡緑褐色粘質土層（10～20cm）

Ⅷ層：緑褐色混砂粘質土層（15cm）

Ⅸ層：緑褐色混砂粘質土層（30cm）（マンガン粒子を含む）

Ⅹ層：淡灰色砂層（10cm）

Ⅺ層：白色細砂層（10cm）

Ⅻ層：淡灰白色砂層（60cm）水が湧く

ⅩⅢ層：灰白粗砂層（10cm）

ⅩⅣ層：ビーチロック層（20～25cm）

ⅩⅤ層：灰白色礫層：（1.2m）海成枝サンゴ礫表土下2.3mで地下水あり

3．特記事項：

〈出土遺物〉

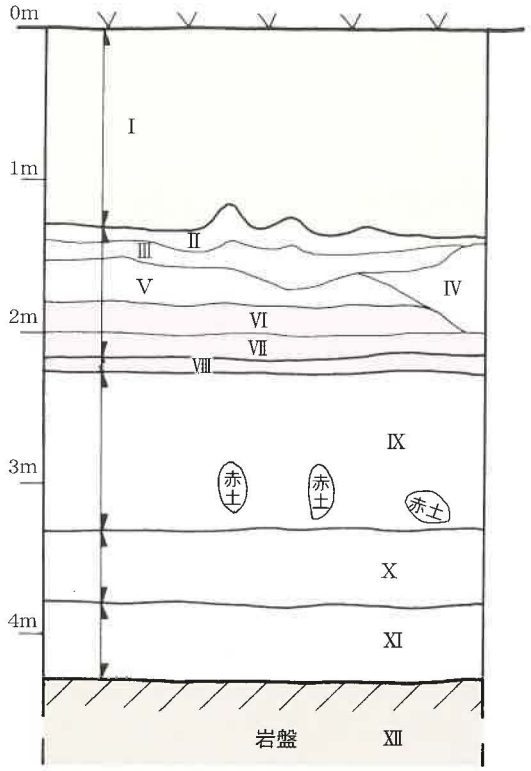
1．層別

ⅩⅤ層：（曽畑式土器）

2．出土遺物：

土器。

E地区（遺物散布地）試掘No.42　（平成８年度）



第46図　南壁

図版:33　南壁

〈調査日〉平成9年2月21日

〈記述〉

1．標高：4.5メートル

2．層序：

Ⅰ層：表土（1.3m）（客土）
Ⅱ層：褐色土層（５～20cm）上面掘削痕
Ⅲ層：褐色土層（20cm）旧耕作土
Ⅳ層：褐色土層、川底堆積
Ⅴ層：褐色土層（20cm）
Ⅵ層：暗褐色土層（20cm）（染付出土）
Ⅶ層：灰色粘質土層（20cm）
Ⅷ層：淡暗灰色粘質土層（10cm）（土器出土）
Ⅸ層：淡黄色粘質砂層（1.05m）
Ⅹ層：淡灰白色砂層（50cm）
Ⅺ層：淡褐色粘質砂層
Ⅻ層：岩盤、表土下4.3m、岩盤の周囲は暗灰色粘質土層

3．特記事項：

特になし

〈出土遺物〉

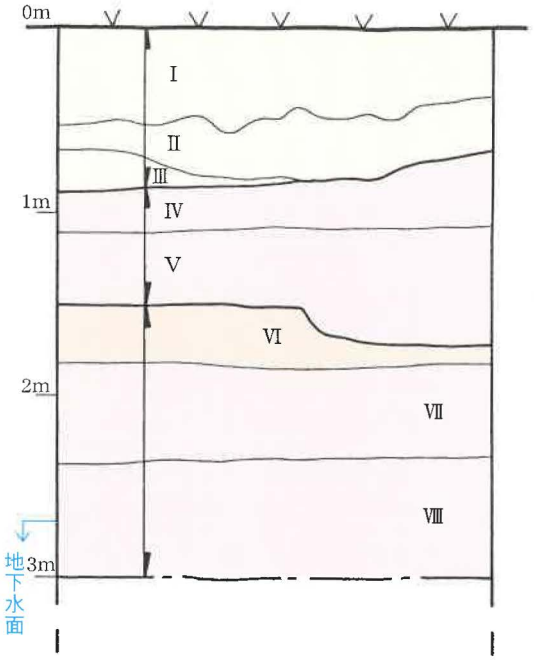
1．層別

Ⅳ・Ⅵ層：（染付・白磁）
Ⅵ層：（大山式土器、不明土器）
Ⅷ層：（グスク系土器、後期系土器？、不明土器）

2．出土遺物：

土器・白磁・染付・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・陶質土器。

F地区（遺物散布地）試掘No.119　（平成７年度）



第47図　北壁

図版:34　北壁

〈調査日〉 平成8年3月7日

〈記述〉

1．標高：3.5メートル

2．層序：

Ⅰ層：コーラル（50cm）

Ⅱ層：赤土客土（30cm）

Ⅲ層コーラル客土

Ⅳ層：灰褐色混砂土層（20cm）

Ⅴ層：茶褐色混土砂層（60cm）→移行層（陶質土器）

Ⅵ層：白砂層（20cm）

Ⅶ層：白砂混礫（サンゴ）砂層（50cm）

Ⅷ層：淡青褐色混砂礫（サンゴ）層（30cm）、土器片大形。

3．特記事項：

〈出土遺物〉

1．層別

Ⅴ層（グスク土器？）

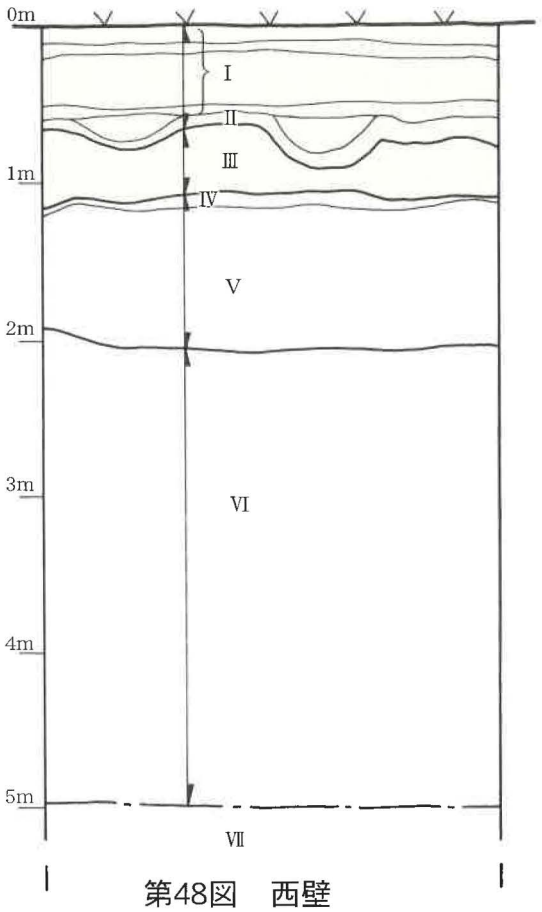
Ⅶ層（後期土器ローリング受け、弥生系土器）

Ⅷ層（弥生系土器）

2．出土遺物：

土器。

地区外（遺物散布地）試掘No.69　（平成８年度）



第48図　西壁

図版:35　西壁

〈調査日〉平成9年2月27日

〈記述〉

1．標高：　メートル

2．層序：

Ⅰ層：現表土・白砂・褐色土・混サンゴ砂層（60cm）（客土）

Ⅱ層：灰色土層（20cm）旧表土，上面は削平

Ⅲ層：茶褐色土層（30cm）Ⅳ層への移行層

Ⅳ層：灰黒色土層（２～８cm）有機質を多量に含む。下面はラミダ痕跡

Ⅴ層：黄褐色混小礫土層（80cm）ネズミ穴から米新聞出土

Ⅵ層：黄褐色粘質土層（３m）粘性が強い

Ⅶ層：黄色混砂土層（1.4m）（水分を多く含む）。

3．特記事項：

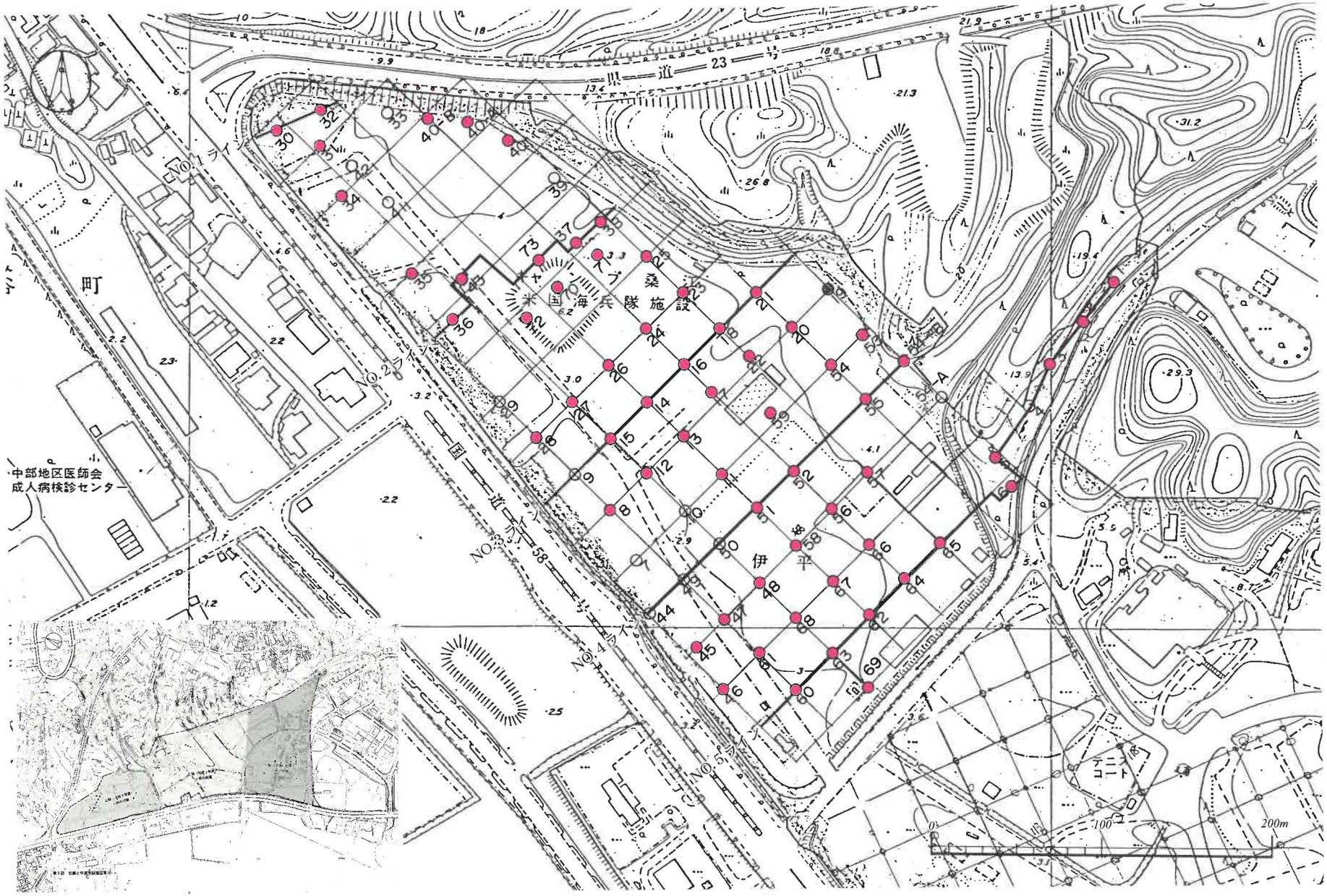
Ⅴ層：層中のネズミ穴より米新聞出土（日付1945.４．１）

〈出土遺物〉

1．層別

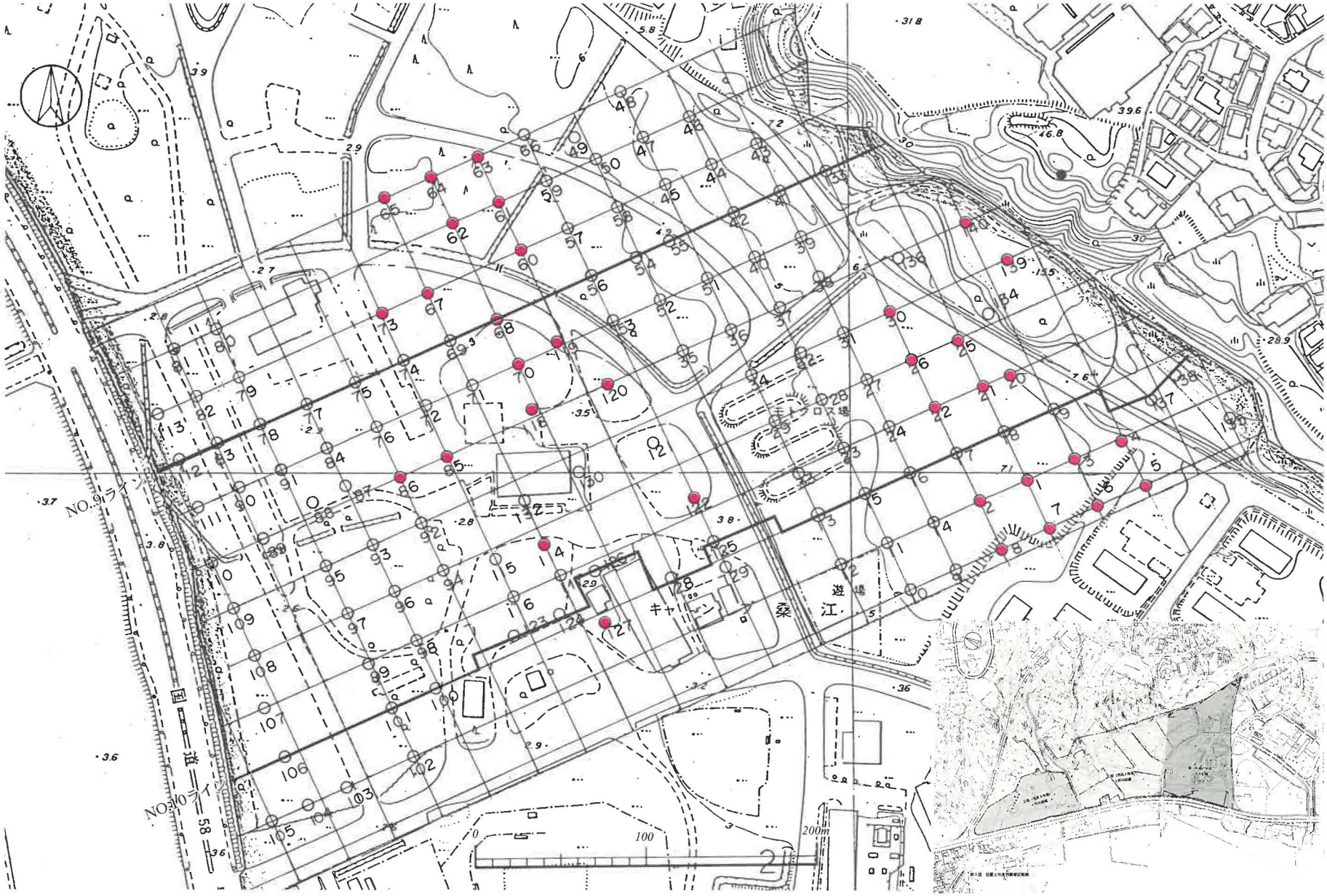
2．出土遺物：

土器・染付・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・本土産陶磁器・近代磁器・陶質土器。



第49図　キャンプ桑江北側試掘ポイント　第三期（平成９年度）

第50図　キャンプ桑江北側試掘ポイント　第二期（平成８年度）



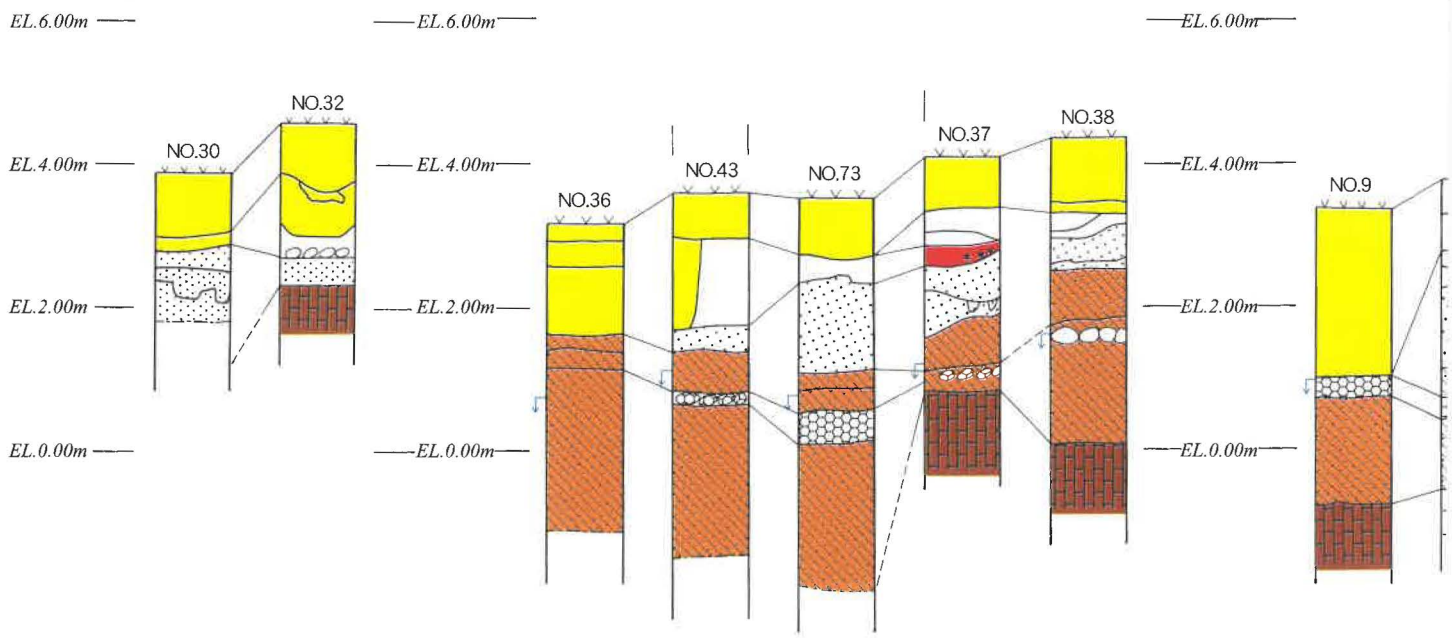
第51図　キャンプ桑江北側試掘ポイント第一期（平成７年度）

第19表　各遺跡の状況

遺跡番号と遺跡名	現行客土	包含層深度	文化層の厚さ	備考
①　千原遺跡	0.4～1m	1～1.5m	0.4m	グスク
②　平安山原B遺跡	0.4～1m	1～3m	0.4m	グスク・砂丘遺跡
③　伊礼原C遺跡	0.8～1.4m	1～3m	0.6～1.5m	曽畑式土器
④a　平安山原C遺跡	0.6～1m	0.6～1m	0.2～0.4m	グスク・砂丘遺跡
④b　平安山原C遺跡？	0.6～1m	0.6～1m	0.4m	グスク
⑤　伊礼原D遺跡	0.8～1m	1.4～2m	0.4m	グスク
⑥a　伊礼原C遺跡	0.1m	3.4m	0.4m	曽畑式土器
⑥b　伊礼原C遺跡	0.6m	0.8m	0.4m	グスク・砂丘遺跡
⑥c　伊礼原C遺跡	0.6m	0.8m	0.4m	グスク
⑦　伊礼原B遺跡	0.2m	0.4～1.8m	0.4m	グスク・縄文後期
⑧　伊礼原E遺跡	0.5～0.8m	1.5～3m	0.2m	縄文前期・後期
⑨　後兼久原遺跡	2.5m	3.4m	0.6m	グスクpit
⑩　志知部原遺跡？	0.6m	2.2m	0.2m	グスクpit
⑪　小堀原遺跡	0.2m	1.15m	0.1m	グスクpit

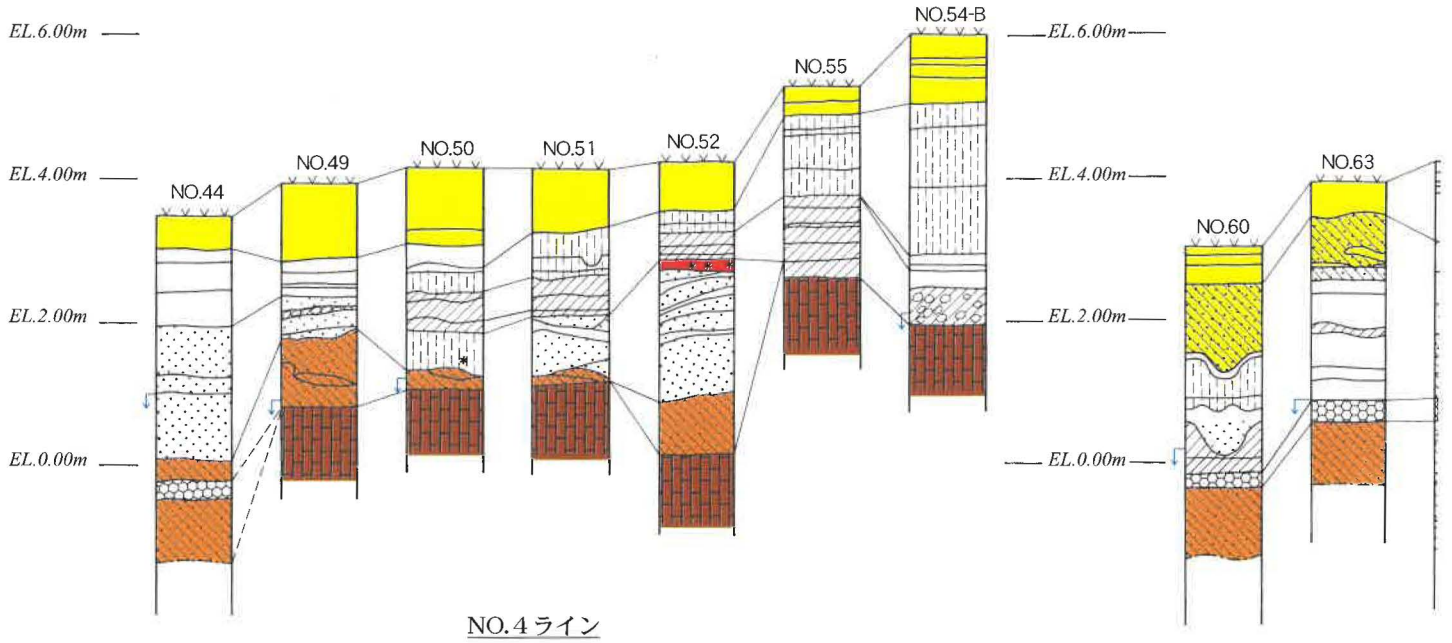
第20表　遺物分布地域

分布番号	現行客土	包含層深度	文化層の厚さ	備考
A	1. 4m	1. 8m	0. 2m	グスク
B	0. 8m	2. 6m	0. 2m	曽畑式土器
C	0. 8m	1. 6m	0. 2m	宇佐浜式
D	0. 8m	2m	0. 2m	縄文中期
E	1. 6m	2m	0. 3m	グスク
F	0. 8m	2m	0. 2m	砂丘遺跡



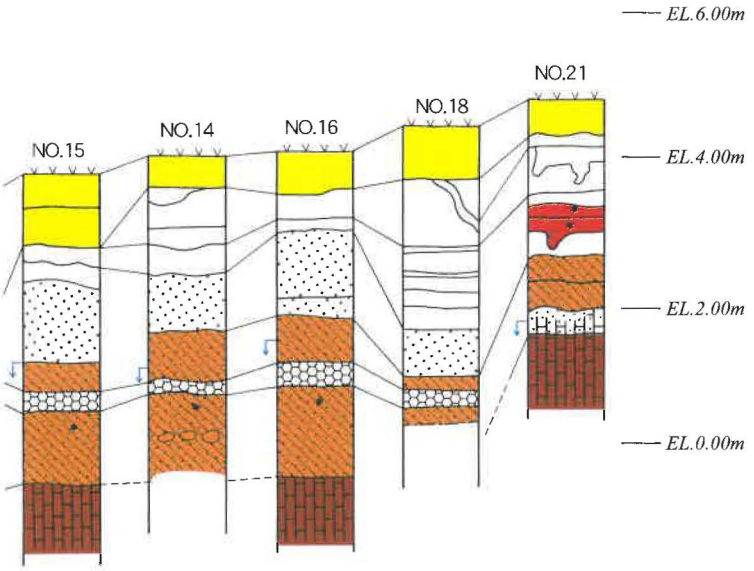
NO.1ライン

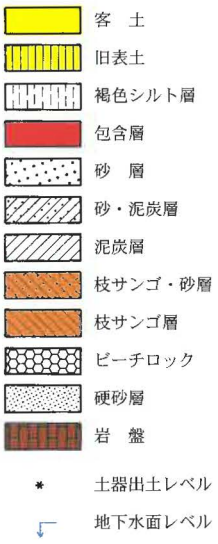
NO.2ライン



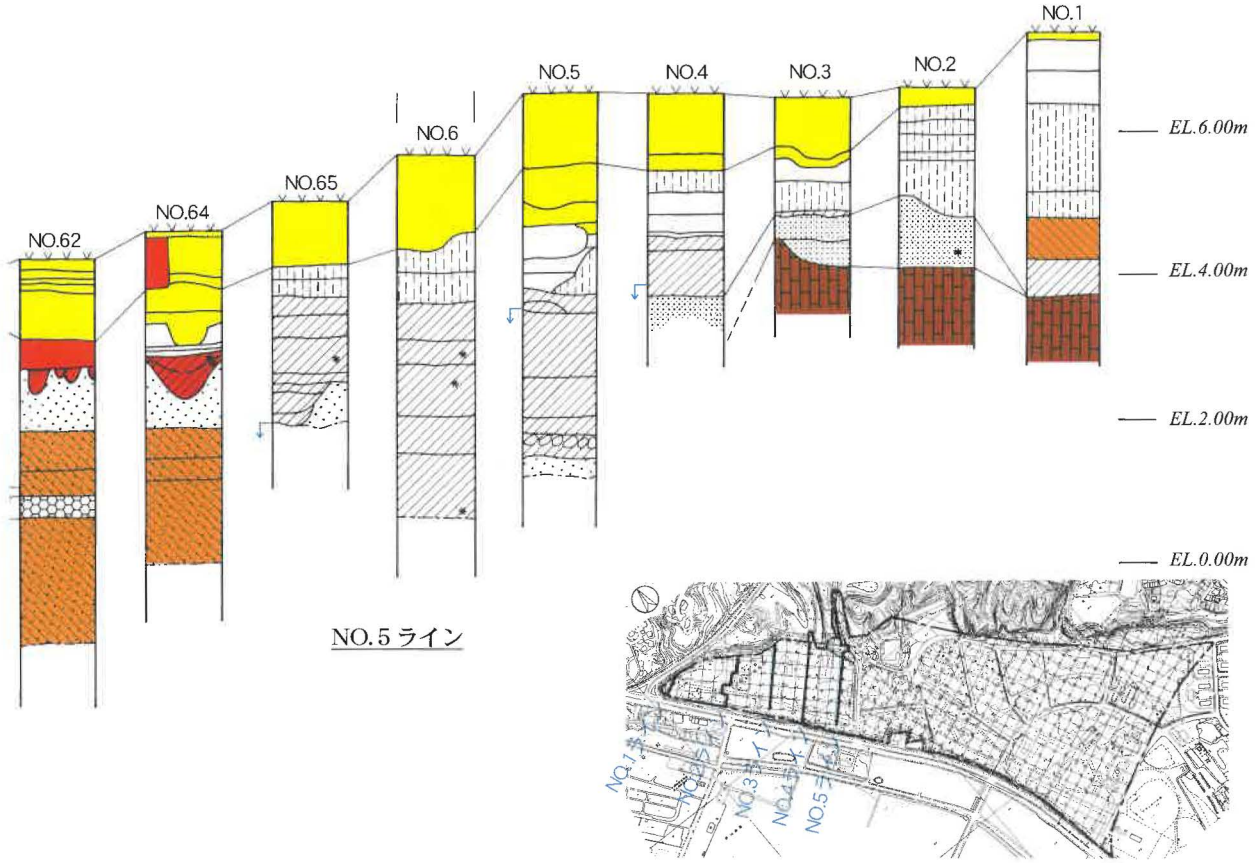
NO.4ライン

第52図　柱状土層断面図（1～5ライン）

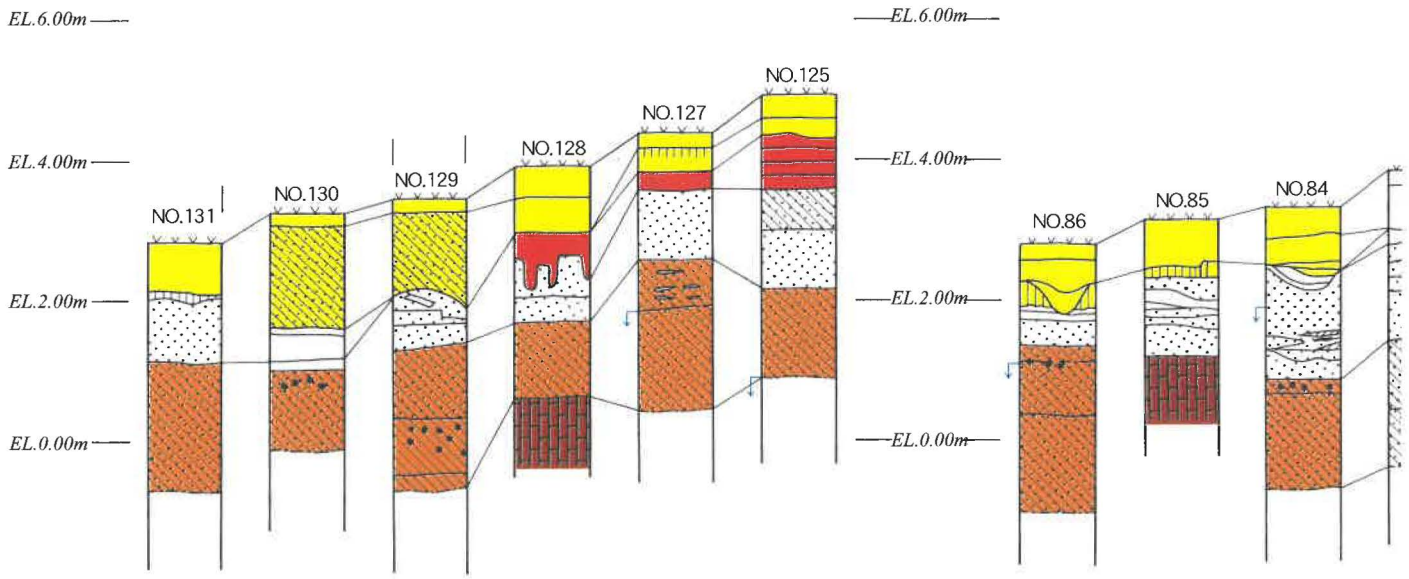




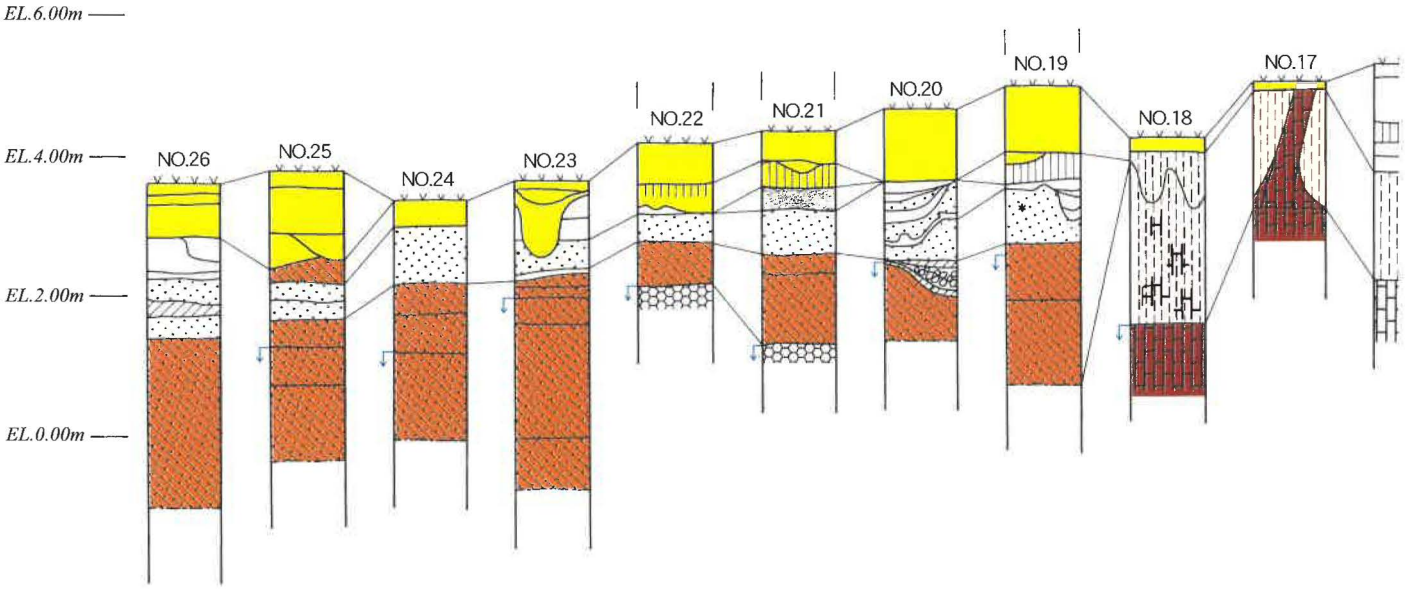
NO.3ライン



NO.5ライン

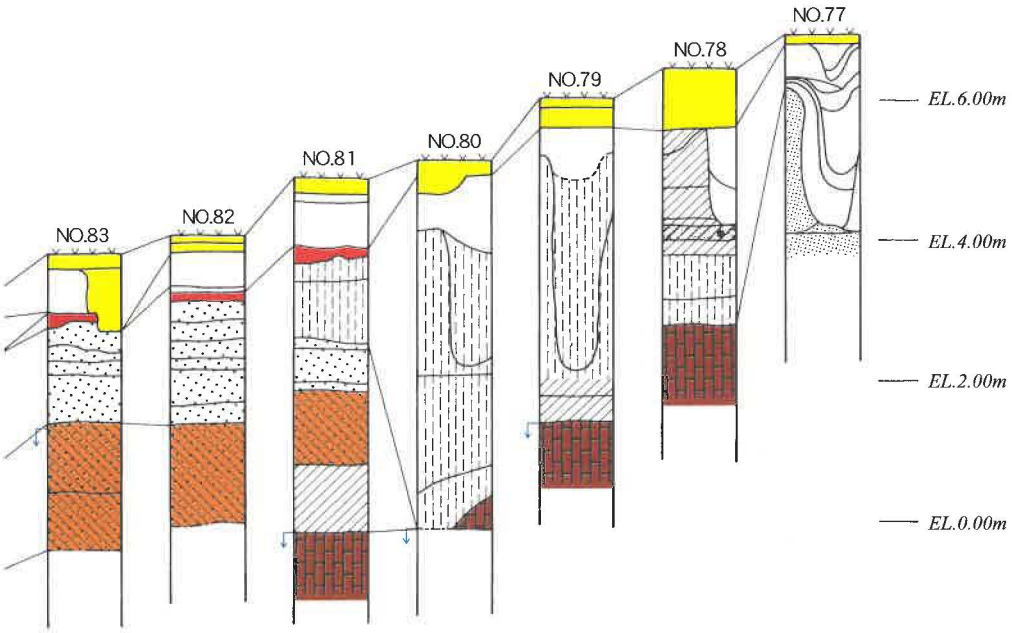


NO.6 ライン

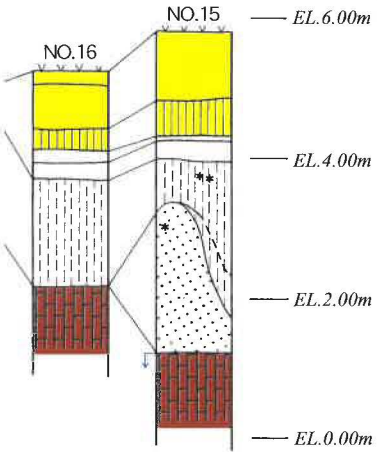


NO.8 ライン

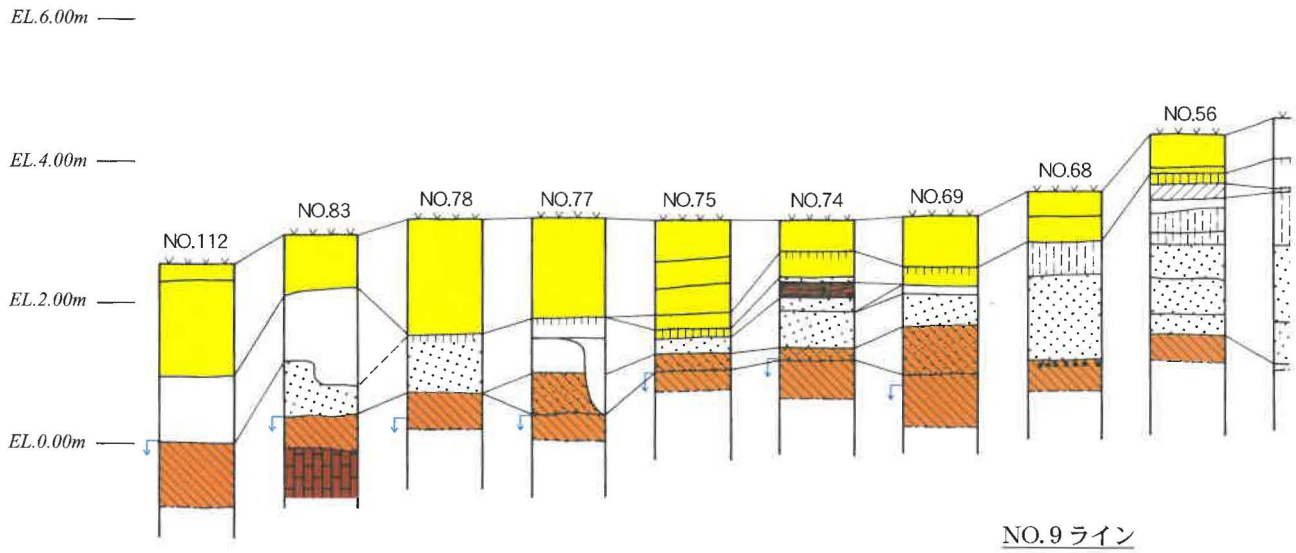
第53図　柱状土層断面図（6～8ライン）

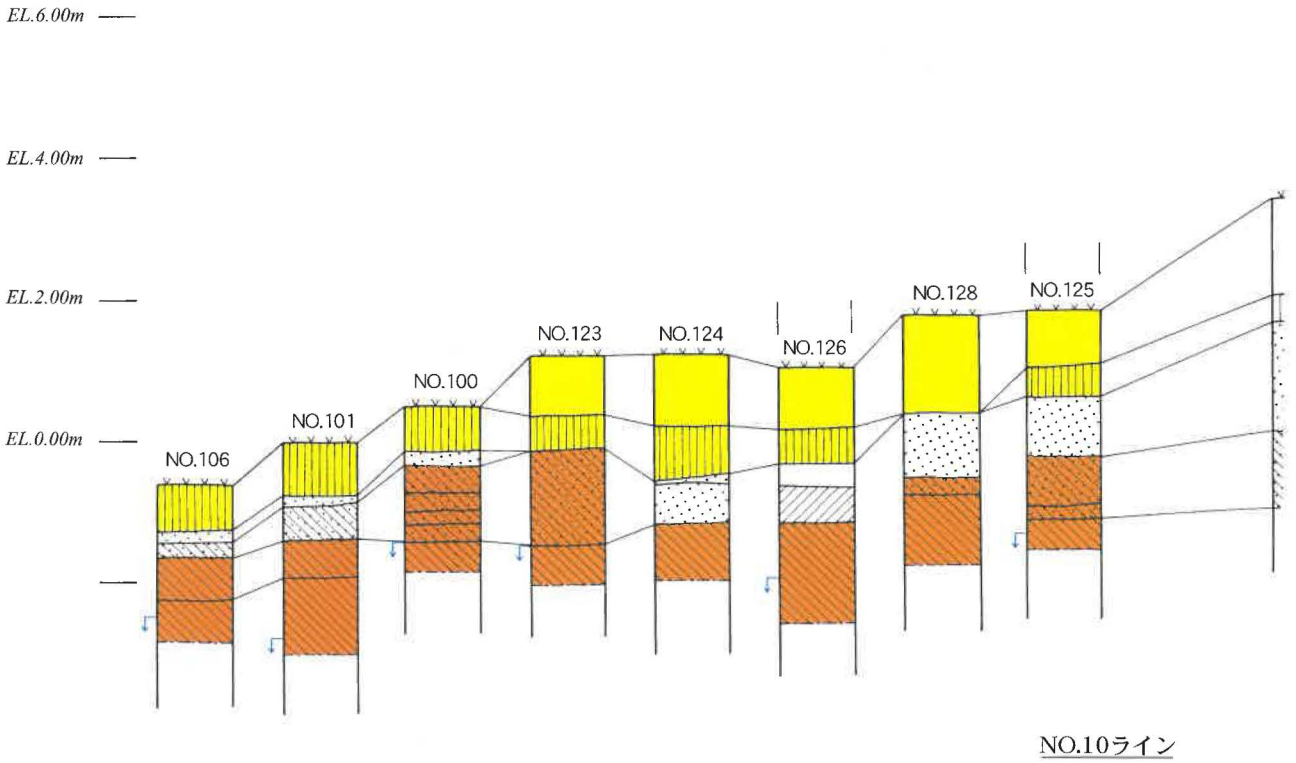


NO.7ライン

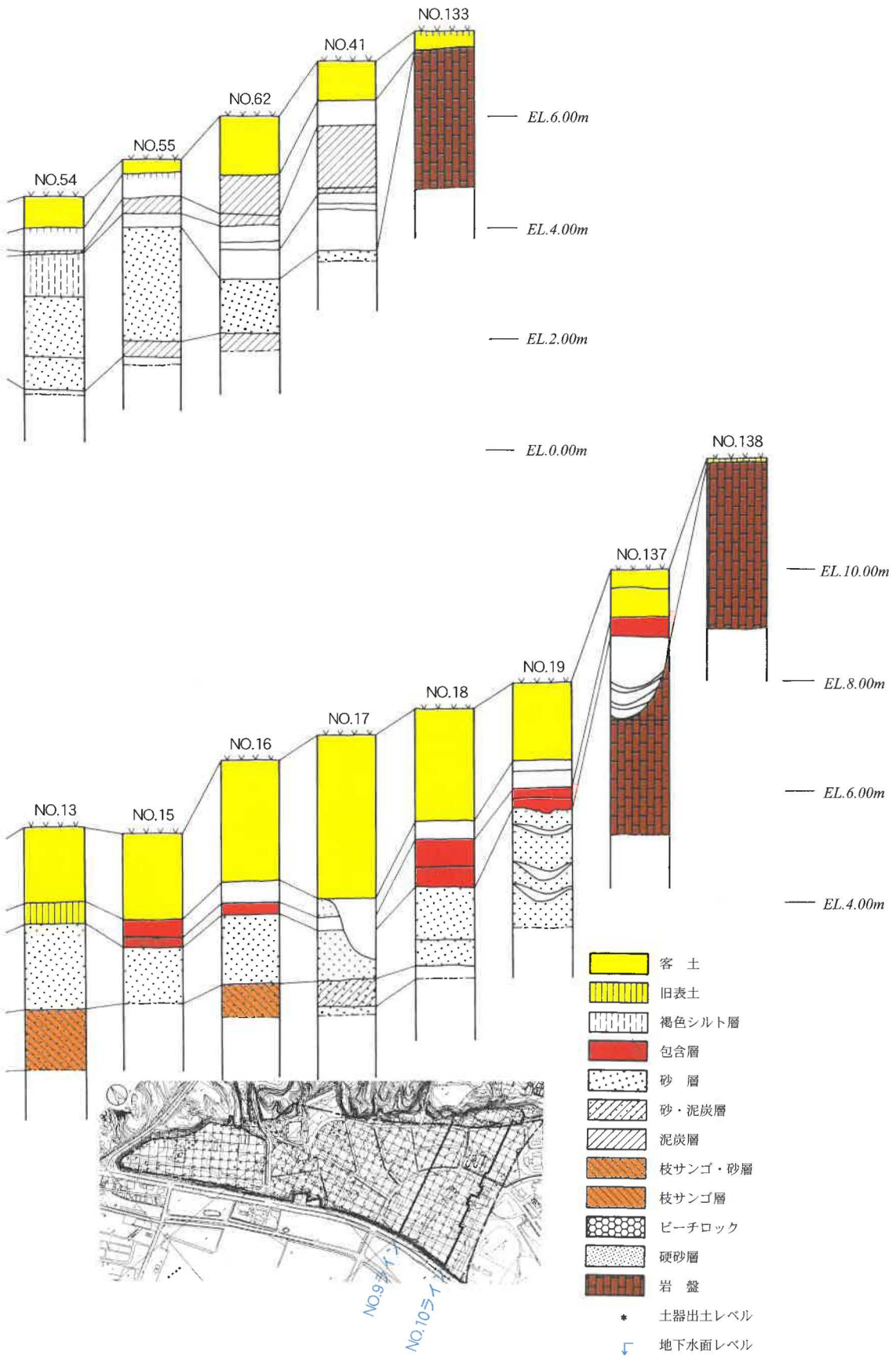


客　土
旧表土
褐色シルト層
包含層
砂　層
砂・泥炭層
泥炭層
枝サンゴ・砂層
枝サンゴ層
ビーチロック
硬砂層
岩　盤
土器出土レベル
地下水面レベル





第54図　柱状土層断面図（9・10ライン）


NO.54
NO.55
NO.62
NO.41
NO.133
EL.6.00m
EL.4.00m
EL.2.00m
EL.0.00m
NO.13
NO.15
NO.16
NO.17
NO.18
NO.19
NO.137
NO.138
EL.10.00m
EL.8.00m
EL.6.00m
EL.4.00m
客　土
旧表土
褐色シルト層
包含層
砂　層
砂・泥炭層
泥炭層
枝サンゴ・砂層
枝サンゴ層
ビーチロック
硬砂層
岩　盤
土器出土レベル
地下水面レベル
NO.9ライン
NO.10ライン

岩盤露出状況（表土下1m）

〃　（表土下2m）

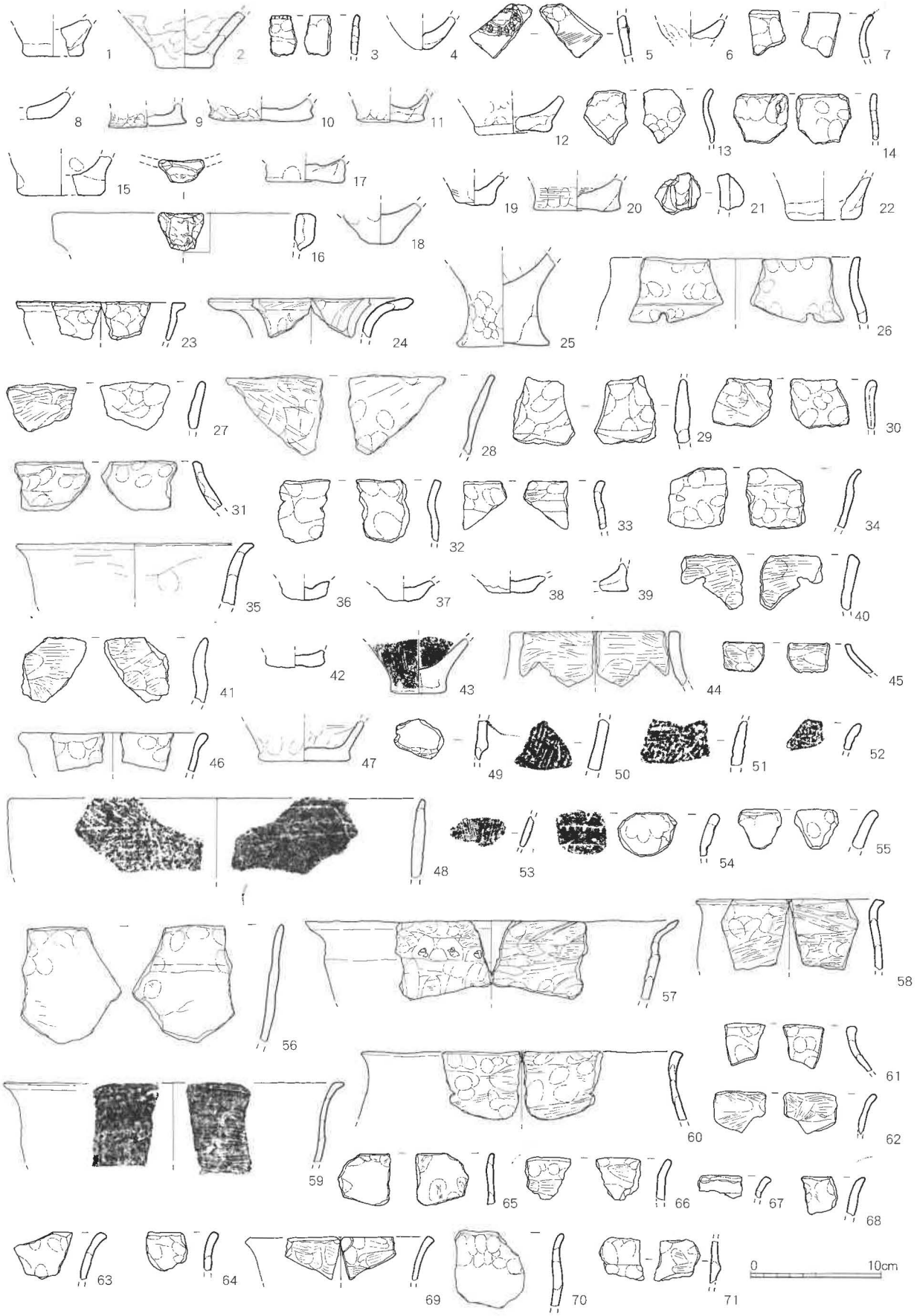
〃　（表土下3m）

砂丘露出状況

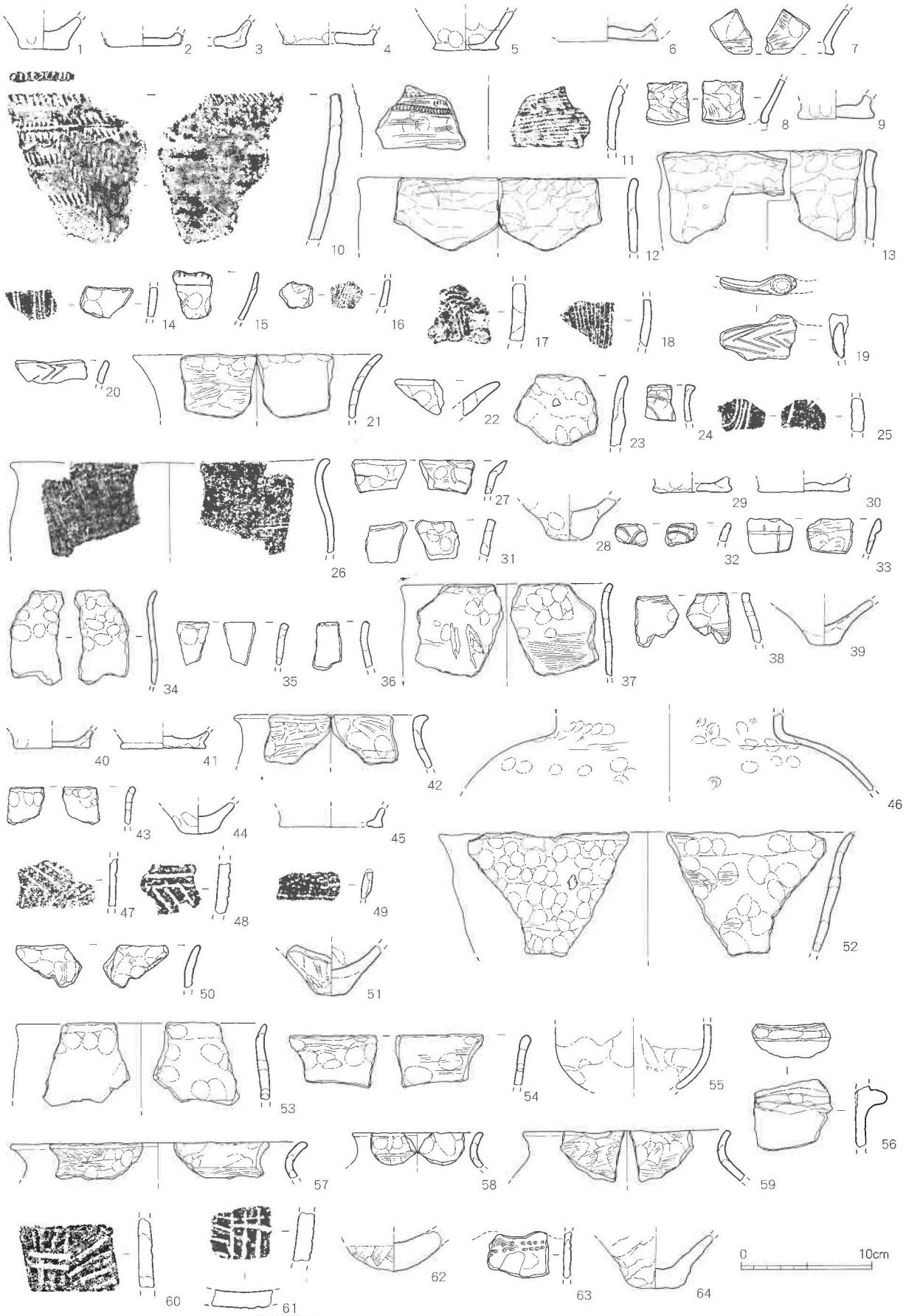
ビーチロック露出状況

第55図　旧地形の復元状況

テニスコート
北谷スポーツセンター
北谷小学校
0
100
200
300m



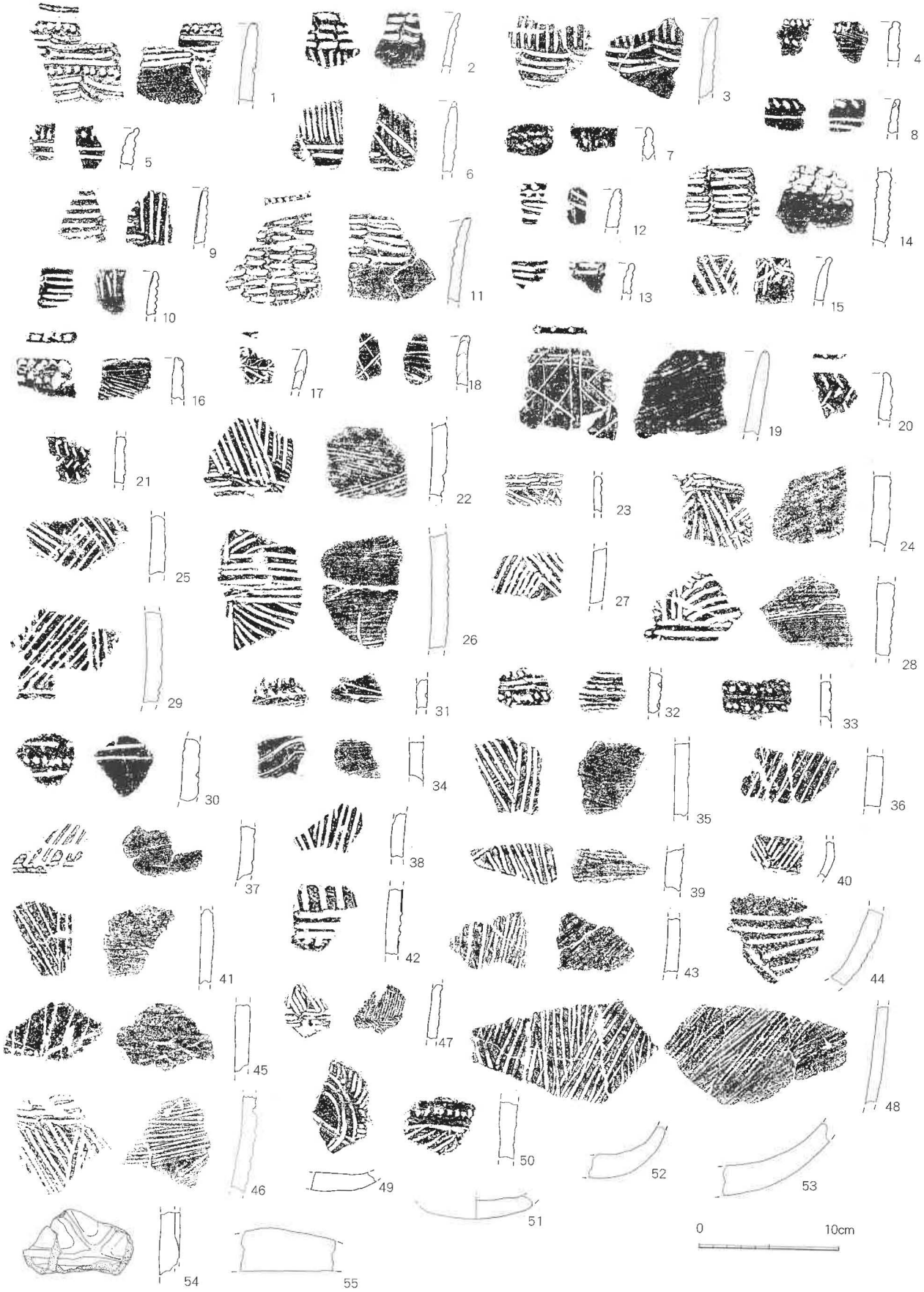
第56図　土器　1地区：1･43(No30)、2地区:2･41･42(No21)、23～39(No20)、40･44(No53)、45･46(No54-A)、47(No54-B)
4地区：3･4(No59)、5～12(No37)、13～17(No25)、18(No18)、19(No24)、20(No14)、21(No70)、22(No71)
5地区：48･49(No57)、50～53･55～71(No65)、54(No62)



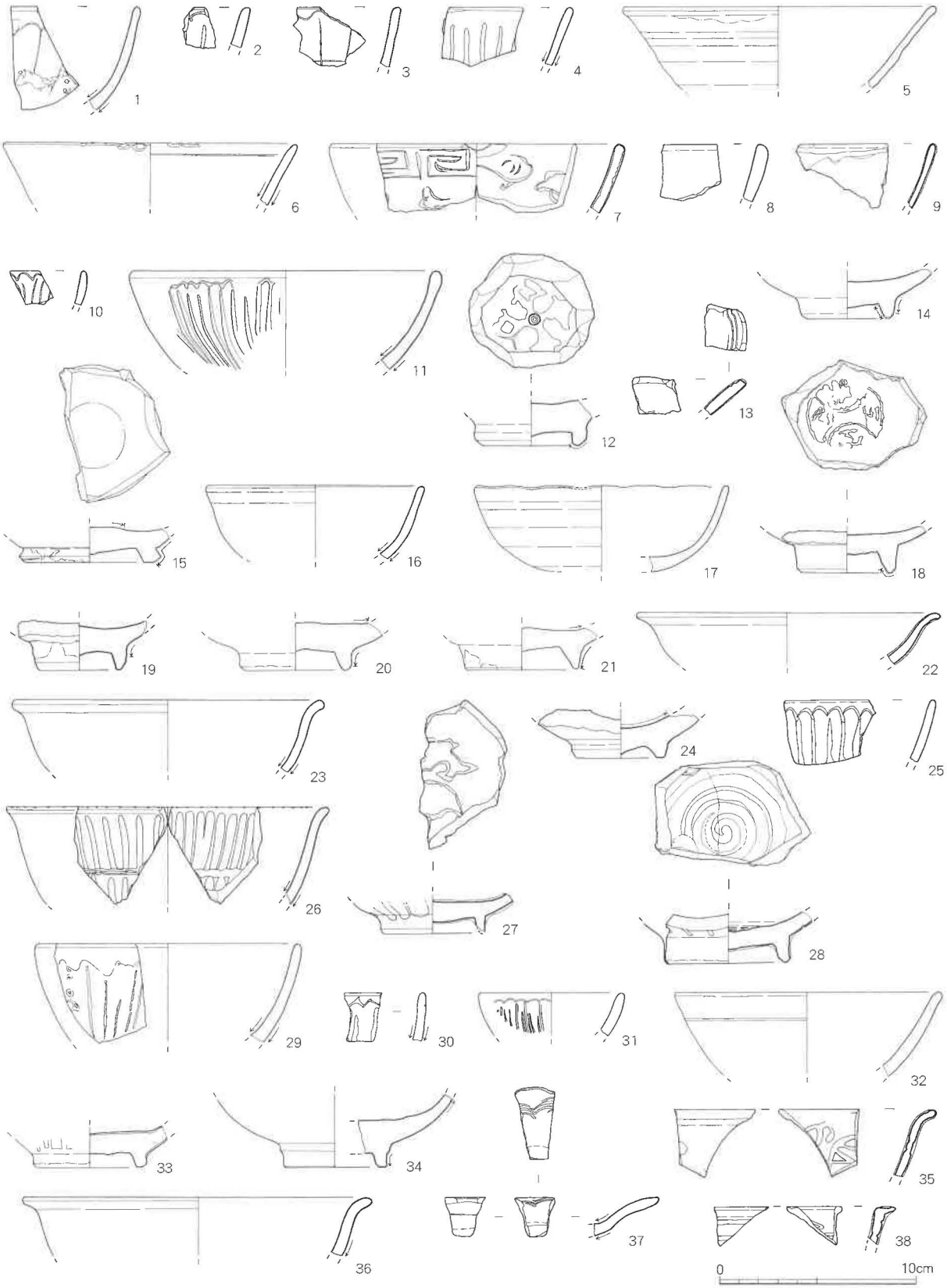
第57図　土器　5地区：1～9･27(No65)、10～13(No63)、14～16(No62)、17～26･28～30(No64)、31･32･34～41･43(No52)、33(No67) 42(No69)、44･45(No60)、46(No50)、3地区：47(No5)、48~59(No6)　A地区：60(No40)、B地区：61(No43)、62(No34) 63(No11)、D地区：64(No45)

第58図　土器　6地区：1～5(No145)、6～37(No125)、39～41･43･56･64(No140)、67(No133)、38･42･44～55･ 57～63･65･66･68～70(No138)

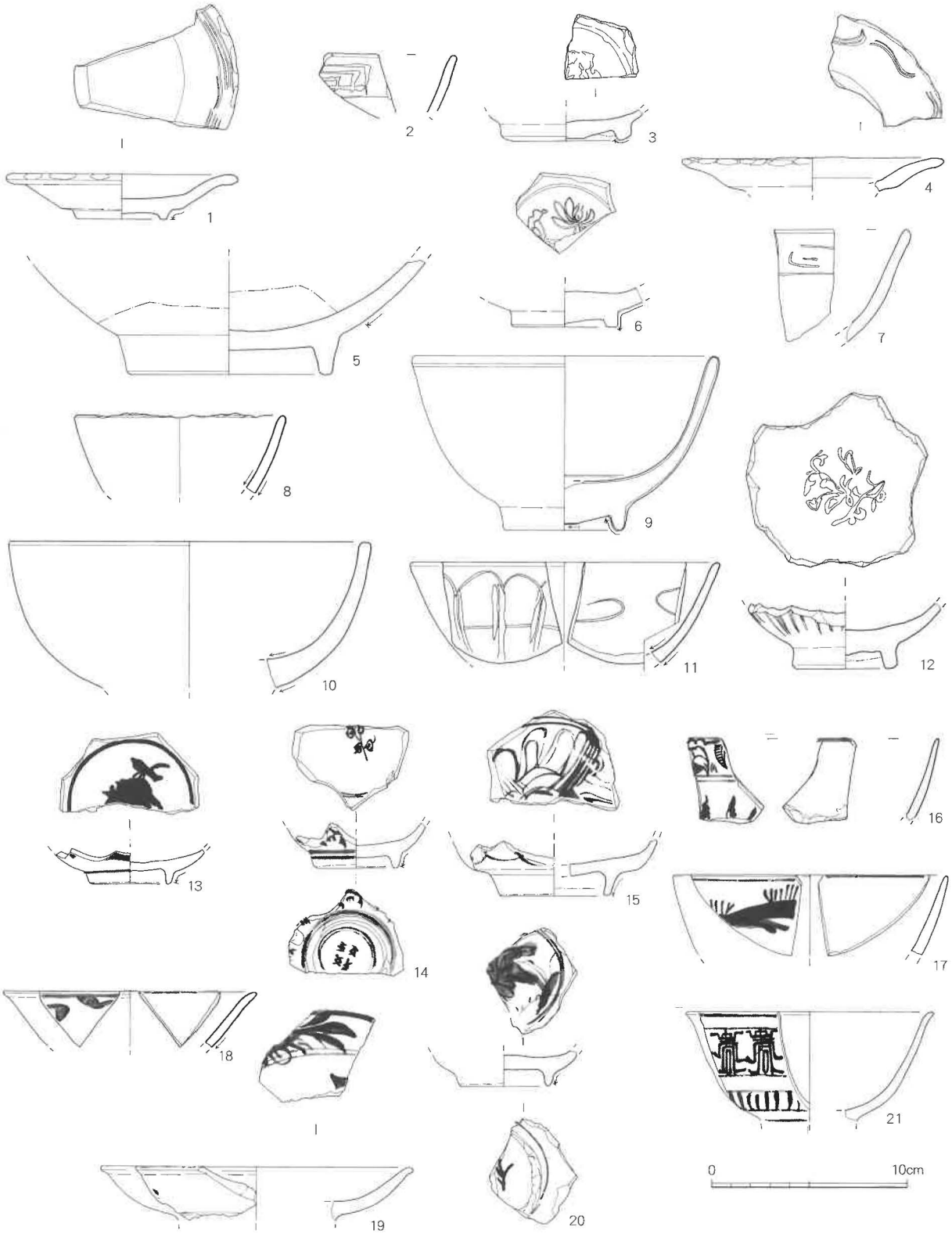
第59図　土器　6地区：1～4(No140)、5･6(No125)、7･47(No138)、8～19･21～28(No133)、20･38(No145)、29･30(No127)、31(No146)
32～34(No120)、7地区：35～37(No116)、8地区：39(No144)、40(No72)、41(No48)、9地区：48･49(No2)、50～53(No139)
B地区：42(No34)、F地区：54(No60)、55(No68)、56(No119)、57(No126)58(No68)、地区外：43(No93)、44(No45)
45･46(No112)



第60図　土器　6地区：1～55(試掘143)

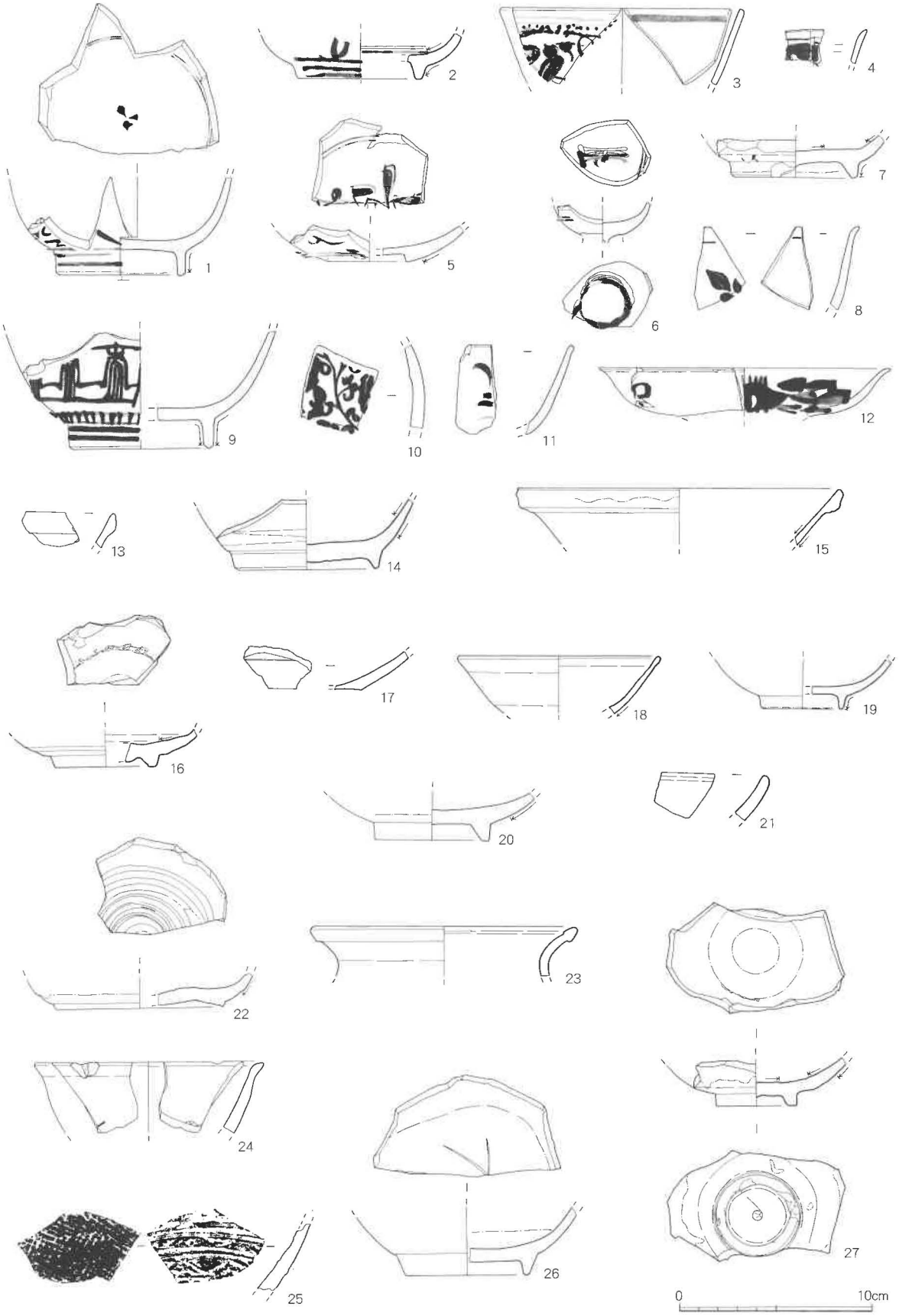


第61図　青磁　1地区：1～5(No30)、4地区：6(No11)、7～12(No14)、13(No15)、14･15(No29)、16～22(No37)
5地区：23(No52)、24～26(No62)、27(No63)、28～30(No64)、31(No65)、32(No69)
B地区：33(No35)、34･35(No36)、36･37(No41)、38(No43)



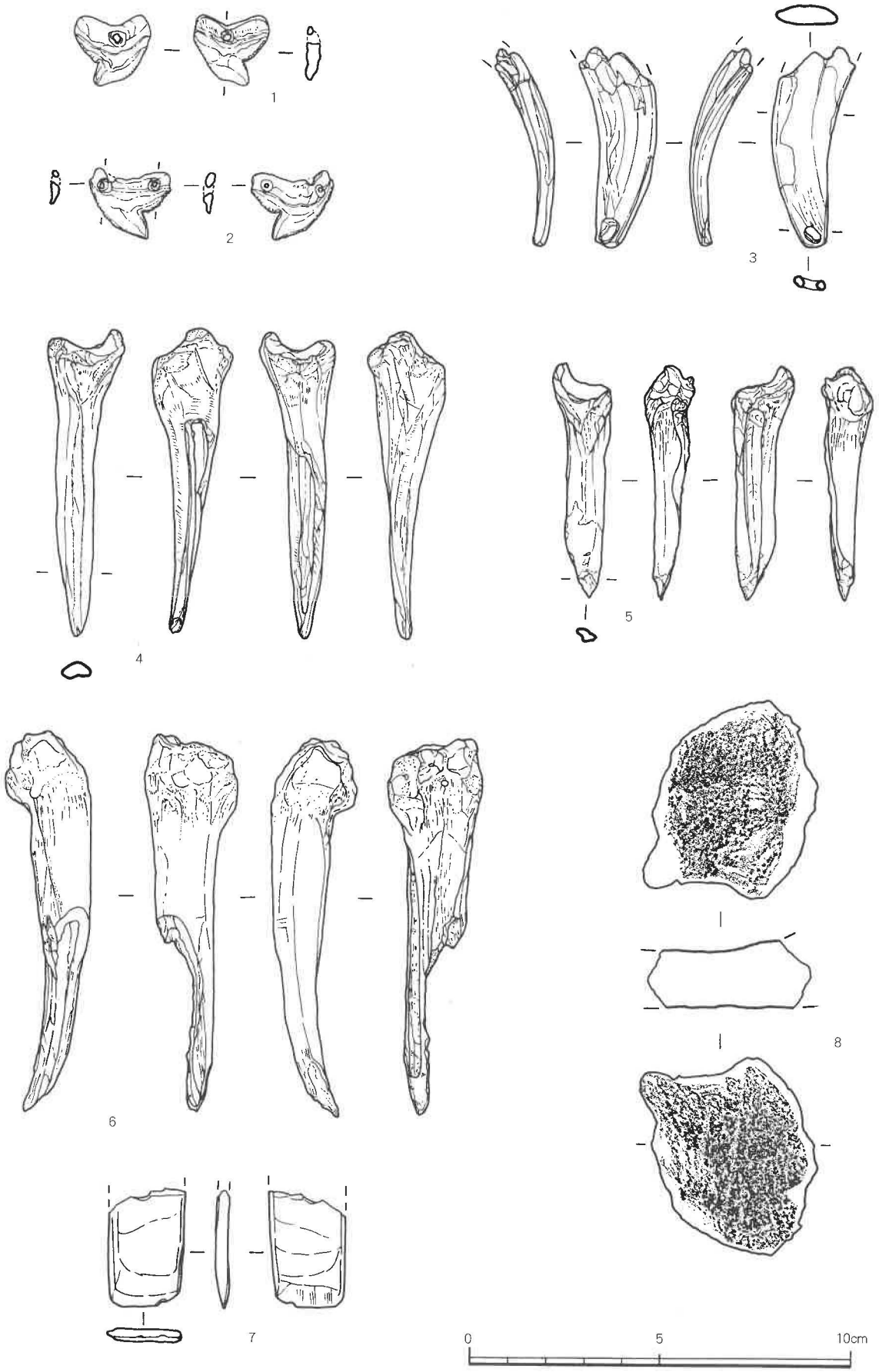
第62図　青磁　B地区：1(No43)、6地区：2(No133)、3(No138),4(No141)、7地区：5(No96),9地区:6(No26)、7(No19)、8～11(No3)
F地区：12(No61)

染付　1地区：13･15･20(No30)、4地区：14･19･21(No23)、16(No12)、17･18(No14)

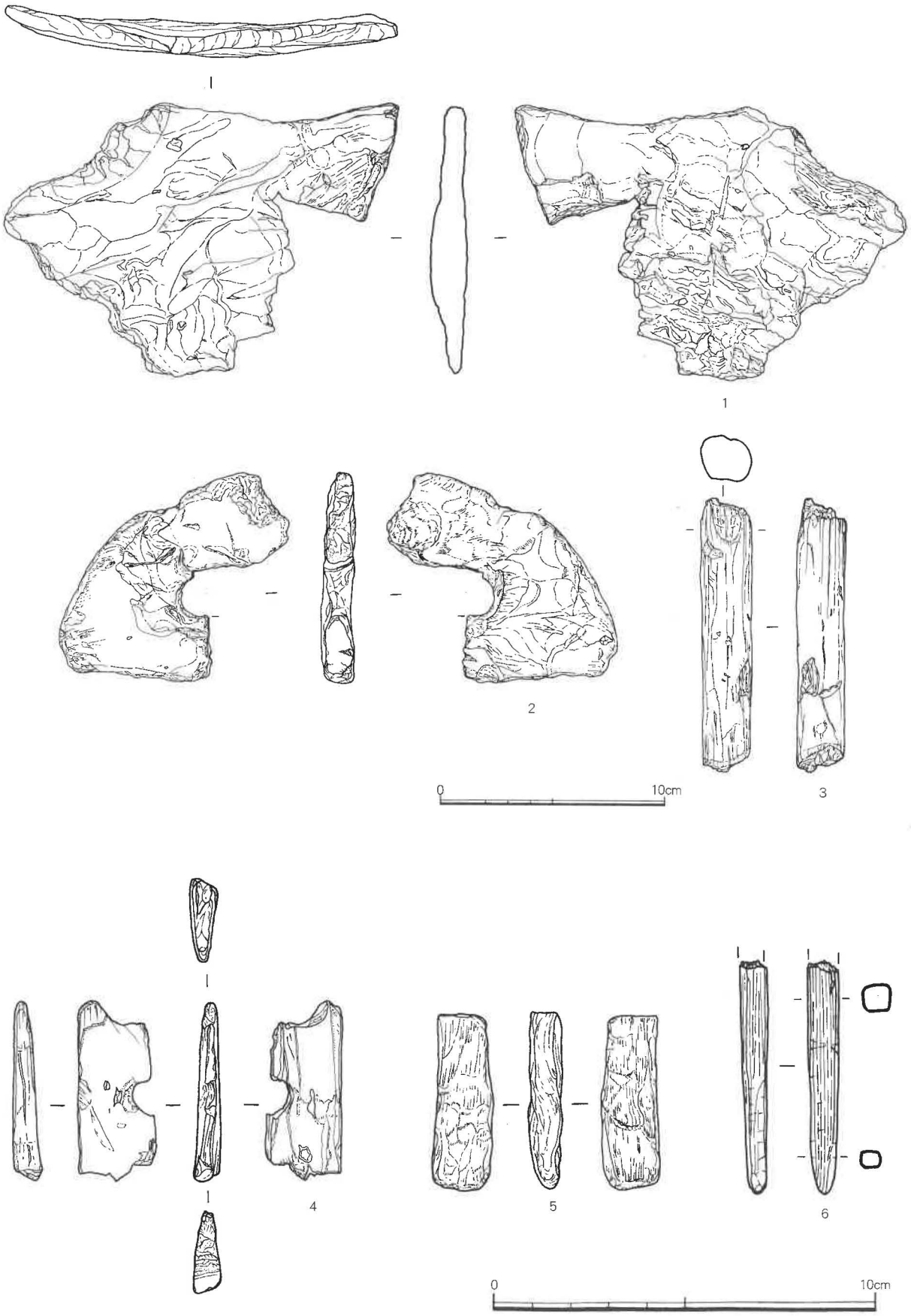


第63図　染付　2地区：5(No20)、6(No54-B)、7(No21-B)、4地区：1(No24)、2～3(No37)、4(No72)、7地区：8･9(No136)、8地区：12(No35) 9地区：10(No4)、F地区：11(No76)、**白磁**　1地区：13･14(No30)、2地区：20(No54-A)、4地区：15･16･18(No37)、17(No24) 19(No14)、A地区：21(No40)、**天目**　1地区：22(No30)　**カムィヤキ**　1地区：23(No30)、4地区：24(No15)、25(No37) **沖縄産陶器**　7地区：26(No96)　**本土産磁器**　7地区：27(No136)

第64図　貝製品　4地区：1イモガイ(No59)、3ゴホウラ(No18)、8シレナシジミ(No72)、5地区：4･5ゴホウラ(No65)、6サラサバティラ(No64)
9ヒメジャコ(No65)、10ヒメジャコ(No68)、11メンガイ類 (No69)、12･14メンガイ類(No62)、15メンガイ類(No52)
6地区：2ゴホウラ(No133)、13メンガイ類(No48)、8地区：16メンガイ類(No60)、地区外：7サラサバティラ(No6)



第65図　骨製品・石製品・滑石製品　6地区：1･2：サメ歯有孔、3：イノシシ下顎犬歯、4：イノシシ左脛骨、5･6：イノシシ右脛骨、(以上No143)
7：石製品（6地区No.138）、8：滑石製石鍋（6地区No.133）



第66図　木製品

第21表a　土器観察一覧

第	実測	遺物	部位	観察事項	地区	遺跡名	試掘	層序
第56図	1	後期系土器	底部	平底、径:4.5cm.泥質。焼成良好。鉱物-微細。褐色。厚さ9mm。	1地区	千原遺跡	No 30	
第56図	2	浜屋原式土器	底部	丸底的平底。径:4.4cm.焼成良好。暗褐色。厚さ8mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 21	茶褐色土層
第56図	3	後期系土器	口縁部	直口。口唇:細沈線文。泥質。焼成良好。褐色。厚さ5mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 59	灰緑色土層
第56図	4	大当原式土器	底部	尖底。水摩。砂泥質。焼成良好。赤粒。淡褐色。厚さ7mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 59	灰黒色土層
第56図	5	室川下層式土器	胴部	「U」字状の凸帯文+刻目文。焼成良好。厚さ6mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 37	灰黒色土層
第56図	6	大当原式土器	底部	尖底。砂質。焼成良好。厚さ6mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 37	灰黒色土層
第56図	7	後期系土器	口縁部	外反。水摩。厚さ5mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 37	灰色土層
第56図	8	グスク土器	底部	鍋。広底。削り。泥質。焼成良好。赤粒。淡黄褐色。厚さ8mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 37	
第56図	9	後期系土器	底部	くびれ平底、径:6cm.底面凹む。焼成:良好。厚さ6mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 37	灰黒色土層
第56図	10	晩期系土器	底部	くびれ平底、径:8cm.泥質。焼成:良好。厚さ7mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 37	灰黒色土層
第56図	11	後期系土器	底部	くびれ平底、径:5.2cm.底面-中央凹む。泥質。焼成:良好。厚さ6mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 37	
第56図	12	後期系土器	底部	くびれ平底、径:6cm.底面-中央凹む。褐色。	4地区	平安山原A遺跡	No 37	茶褐色土層
第56図	13	後期系土器	口縁部	外反。砂質。厚さ5mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 25	
第56図	14	後期系土器	口縁部	直口。砂質。焼成:良好。厚さ5mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 25	
第56図	15	後期系土器	底部	くびれ平底、径:6.6cm.焼成:良好。厚さ9mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 25	灰色砂層
第56図	16	グスク系土器	口縁部	直口。鍋。取手(瘤)2×2cm。泥質。焼成良好。滑石。褐色。厚さ10mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 25	灰色砂層
第56図	17	後期系土器	底部	くびれ平底、径:6cm.底面凹み、内面に小突起。泥質。淡褐色。厚さ6mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 25	灰色砂層
第56図	18	大当原式土器	底部	尖底、径:2.4cm.砂泥質.淡褐色。厚さ8mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 18	
第56図	19	大当原式土器	底部	平底、径:2.8cm.水摩。泥質。焼成良好。淡褐色。厚さ7mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 24	白色枝サンゴ層
第56図	20	後期系土器	底部	くびれ平底、径:6.6cm.底面凹む。砂泥質。焼成:良好。厚さ8mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 14	灰黒色砂質土層
第56図	21	後期系土器	口縁部	泥質。焼成:良好。滑石厚さ7mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 70	白色枝サンゴ層
第56図	22	後期系土器	底部	くびれ平底、径:5.6cm.弱い水摩。砂泥質。焼成良好。淡褐色。厚さ6mm。	4地区	平安山原A遺跡	No 71	崩落
第56図	23	浜屋原式土器	口縁部	外反口縁、径:12.8cm.小形、弥生の影響。厚さ6mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 20	茶褐色土層
第56図	24	浜屋原式土器	口縁部	壷。朝顔状に外反口縁、径:15.2cm.弥生の影響。砂質。石英(やや粗)、雲母.茶褐色。厚さ8mm。	2地区	平安山原B遺跡 平安山原B遺跡	No 20	茶褐色土層
第56図	25	浜屋原式土器	底部	平底、径:7cm.底厚4.3cm、弥生の影響。焼成良好。石英(粗)、雲母(細)。茶褐色。厚さ10mm。	2地区	平安山原B遺跡 平安山原	No 20	茶褐色土層
第56図	26	弥生式系土器	口縁部	外反。有孔(径7mm)。幅広沈線文(横1本)。砂質。焼成良好.黄褐色。厚さ8mm。	2地区	B遺跡 平安山原B遺跡	No 20	黒褐色混貝砂層
第56図	27	浜屋原式土器	口縁部	直口。　砂質。褐色。厚さ7mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 20	茶褐色土層
第56図	28	浜屋原式土器	口縁部	直口。砂質。暗褐色。厚さ7mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 20	茶褐色土層
第56図	29	弥生系土器	胴部	砂質。焼成良好。黄褐色。厚さ10<mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 20	黒褐色混貝砂層
第56図	30	後期系土器	口縁部	外反。砂質。焼成良好.褐色。厚さ6mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 20	茶褐色土層
第56図	31	弥生系土器	口縁部	弥生の壷？。砂質。厚さ9mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 20	黒褐色混貝砂層
第56図	32	晩期系土器	口縁部	外反。砂質.暗褐色。厚さ6～7mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 20	黒褐色混貝砂層
第56図	33	大当原式土器	口縁部	外反。砂質。焼成良好。暗褐色。厚さ6mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 20	淡灰色砂層
第56図	34	浜屋原式土器	口縁部	外反。砂質。褐色。厚さ6mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 20	茶褐色土層
第56図	35	弥生式系土器	口縁部	外反.口径:18.2cm.砂質。焼成良好.黄褐色。厚さ9mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 20	茶褐色土層
第56図	36	大当原式土器	底部	丸底的平底、径:3.4cm.砂質。黄褐色。厚さ6mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 20	黒褐色混貝砂層
第56図	37	大当原式土器	底部	丸底的平底、径:2.6cm.砂質.褐色。厚さ6mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 20	黒褐色混貝砂層
第56図	38	大当原式土器	底部	丸底的平底、径:3.5cm.底面-弱い凹み。砂質.淡褐色。厚さ6mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 20	茶褐色土層
第56図	39	後期系土器	底部	平底、径:7.8cm.砂質。焼成:良好。厚さ9mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 20	
第56図	40	弥生式系土器	口縁部	有段有段。砂質。厚さ7mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 53	橙色土層
第56図	41	浜屋原式土器	口縁部	外反。砂質。焼成良好.淡褐色、芯部:暗褐色。厚さ10mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 21	茶褐色土層
第56図	42	後期系土器	底部	くびれ平底、径:4.5cm.底面-中央凹む。泥質。焼成良好。鉱物。淡褐色。厚さ8mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 21	淡茶黒色土層
第56図	43	後期系土器	底部	平底、径:4.2cm.底厚2cm。泥質。焼成良好。コーラル-微細-少量。暗褐色。厚さ7mm。	2地区	千原遺跡	No 30	
第56図	44	晩期系土器	口縁部	直口、径:12.8cm.砂質。厚さ8mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 53	橙色土層
第56図	45	後期系土器	口縁部	焼成:良好。厚さ>5mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 54-A	淡灰黒色土層
第56図	46	浜屋原式土器	口縁部	外反.口径:13.6cm.砂質.黒褐色。厚さ6mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 54-A	灰黒色土層
第56図	47	後期系土器	底部	くびれ平底。暗褐色。厚さ7mm。	2地区	平安山原B遺跡	No 54-B	淡灰緑色混砂土層
第56図	48	曽畑式土器	口縁部	直口、径:31.0cm。水摩。口唇:刺突文、口縁:幅広沈線文(横位+斜位)、内面:幅広沈線文(横位)。砂質。黒褐色。厚さ10mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 57	黒色土層
第56図	49	カヤウチバンタ式土器	胴部	肥厚砂質。石英-多量.淡黄褐色。厚さ8mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 57	灰青色砂質土層
第56図	50	室川下層式土器	胴部	水摩。幅広沈線文(不揃)。泥質。褐色。厚さ10mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	白色枝サンゴ層
第56図	51	室川下層式土器	胴部	水摩(轟系)。砂泥質.暗褐色。厚さ10mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	白色枝サンゴ層
第56図	52	面縄前庭式土器	口縁部	外反。水摩。凸帯+刺突文。厚さ7mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	白色枝サンゴ層
第56図	53	面縄前庭式土器	胴部	水摩。細沈線文(斜位)。砂質。鉱物-微細-多量。厚さ5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	白色枝サンゴ層
第56図	54	大山式土器	口縁部	水摩。焼成:良好。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 62	白色枝サンゴ層

第21表b　土器観察一覧

第	実測	遺物	部位	観察事項	地区	遺跡名	試掘	層序
第56図	55	浜屋原式土器	口縁部	外反。砂質。焼成:良好。厚さ8mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	
第56図	56	浜屋原式土器	口縁部	直口。砂質。焼成:良好。厚さ8mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	
第56図	57	大当原式土器	口縁部	外反。口径:24.4cm,内面:沈線文(斜位)・外面:刺突文(横位)。砂泥質。焼成:良好。厚さ9mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	灰色土層
第56図	58	後期系土器	口縁部	外反,口径:14.8cm,泥質。焼成:良好。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	灰色土層
第56図	59	後期系土器	口縁部	外反,口径:26cm。泥質。焼成:良好。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	
第56図	60	後期系土器	口縁部	外反,口径:24.8cm。泥質。厚さmm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	灰色土層
第56図	61	後期系土器	口縁部	外反。泥質。焼成:良好。厚さ5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	暗灰褐色混砂土層
第56図	62	後期系土器	口縁部	外反泥質。焼成:良好。厚さ5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	淡灰色土層
第56図	63	後期系土器	口縁部	外反。泥質。焼成:良好。厚さ7mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	灰黒色混砂土層
第56図	64	後期系土器	口縁部	外反。泥質。焼成:良好。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	灰黒色混砂土層
第56図	65	浜屋原式土器	口縁部	外反。砂質。焼成:良好。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	灰黒色土層
第56図	66	大当原式土器	口縁部	外反。厚さ8mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	淡灰色土層
第56図	67	後期系土器	口縁部	外反。泥質。焼成:良好。厚さ5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	
第56図	68	浜屋原式土器	口縁部	外反。砂質。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	灰黒色混砂土層
第56図	69	後期系土器	口縁部	外反。泥質。焼成:良好。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	
第56図	70	後期系土器	口縁部	泥質。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	
第56図	71	後期系土器	胴部	粗隆土器。砂泥質。焼成:良好。厚さ5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	白色枝サンゴ層
第57図	1	浜屋原式土器	底部	尖底的平底、径:3.5cm,砂質,淡黄褐色。厚さ8mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	
第57図	2	後期系土器	底部	くびれ平底、径:6cm,焼成:良好。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	灰色土層
第57図	3	後期系土器	底部	くびれ平底、径:10.2cm。焼成:良好。厚さ7mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	
第57図	4	後期系土器	底部	くびれ平底、径:7cm,焼成良好。赤粒,褐色。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	
第57図	5	後期系土器	底部	くびれ平底、径:5cm。焼成良好。赤粒。褐色。厚さ5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	
第57図	6	後期系土器	底部	くびれ平底、径:7.5cm,焼成良好。赤粒。褐色。厚さ7mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	青灰色シルト層
第57図	7	後期系土器	胴部	くびれ平底。泥質。焼成:良好。厚さ5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	暗灰褐色混砂土層
第57図	8	後期系土器	胴部	平底砂質。厚さ5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	
第57図	9	後期系土器	底部	くびれ平底、径:5.8cm,焼成良好。赤粒。褐色。厚さ7mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	
第57図	10	室川下層式土器	口縁部	内灣口縁、径:33.8cm,後続型式か。口唇:刻目、外面:刻目(斜位)+沈線文(横位)、内面:刻目文(斜位)。砂質。石英-多量。暗褐色。厚さmm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 63	白色枝サンゴ層
第57図	11	面縄東洞式土器	胴部	刺突文(丸)。厚さ7～8mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 63	白色枝サンゴ層
第57図	12	浜屋原式土器	口縁部	直口口縁、径:21cm,媒の付着。砂質。焼成良好。淡黄褐色。厚さ7mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 63	白色枝サンゴ層
第57図	13	後期系土器	口縁部	外反口縁、径:16cm,阿波連浦下層の時期。砂質。暗褐色。厚さ6～7mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 63	白色枝サンゴ層
第57図	14	面縄前庭式土器	胴部	細沈線文(縦位)。砂質。石英-多量厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 62	白色枝サンゴ層
第57図	15	後期系土器	口縁部	直口。刻目文。焼成:良好。厚さ＞5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 62	灰褐色土層
第57図	16	後期系土器	胴部	直口。舌厚さ5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 62	灰褐色土層
第57図	17	轟E式土器	胴部	幅広沈線文(不揃)。泥質。厚さ10mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 64	白色枝サンゴ層
第57図	18	面縄前庭式土器	胴部	細沈線文(縦位)。砂質。淡黄褐色。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 64	
第57図	19	仲泊A式土器	口縁部	山形突起。沈線文(羽状)。厚さ9mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 64	白色枝サンゴ層
第57図	20	仲泊A式土器	口縁部	沈線文(羽状)。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 64	
第57図	21	阿波連浦貝塚下層式土器	口縁部	外反口縁、径:19cm。水摩。砂質。焼成:良好。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 64	白色砂層
第57図	22	弥生式系土器	口縁部	外反。泥質。焼成:良好。厚さ9mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 64	淡灰粘質土層
第57図	23	大当原式土器	口縁部	第1図57に類似第1図57に類似。泥質。焼成:良好。厚さmm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 64	
第57図	24	後期系土器	口縁部	外反。口唇:刺突文、頸部:凹線文(曲線)。泥質。厚さ5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 64	淡灰粘質土層
第57図	25	轟E式土器	胴部	幅広沈線文ー曲線。泥質。厚さ10mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 64	淡灰粘質土層
第57図	26	後期系土器	口縁部	外反,口径:24cm。泥質。焼成:良好。赤粒-多量厚さ5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 64	白色枝サンゴ層
第57図	27	後期系土器	口縁部	外反,輪積み、くびれ平底。泥質。焼成:良好。厚さ7mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 65	
第57図	28	大当原式土器	口縁部	尖底的平底焼成良好。淡褐色。厚さ9mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 64	灰黒色土層
第57図	29	後期系土器	底部	くびれ平底。底面-凹む。淡灰褐色。厚さ5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 64	淡灰粘質土層
第57図	30	後期系土器	底部	くびれ平底。底面-凹む。泥質。淡灰褐色。厚さmm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 64	淡灰粘質土層
第57図	31	後期系土器	口縁部	外反。泥質。焼成良好。暗褐色。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 52	
第57図	32	弥生式系土器	口縁部	外反。沈線文(曲線)ー内外面。泥質。焼成良好。暗褐色。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 52	
第57図	33	面縄前庭式土器	口縁部	直口。幅広沈線文、凸帯文+刺突文。砂質。厚さ5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 67	
第57図	34	後期系土器	口縁部	外反。泥質。暗褐色。厚さ＞5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 52	
第57図	35	後期系土器	口縁部	直口。泥質。焼成良好,暗褐色。厚さ5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 52	
第57図	36	後期系土器	口縁部	外反。口唇:刻目文。砂質。焼成良好,淡黄褐色。厚さ5mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 52	
第57図	37	後期系土器	口縁部	外反、口径:15.6cm,泥質。焼成良好。暗褐色。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 52	
第57図	38	後期系土器	口縁部	直口。泥質。焼成良好,暗褐色。厚さ6mm。	5地区	伊礼原D遺跡	No 52	

第21表c　土器観察一覧

第	実測	遺物	部位	観察事項	地区	遺跡名	試掘	層序
第57図	39	浜屋原式土器	底部	乳房状底、径:3.4cm。砂質。焼成:良好。厚さ7mm。	5地区	平安山原D遺跡	No 52	
第57図	40	後期系土器	底部	くびれ平底、径:6.5cm。底面-凹む。砂質。淡黄褐色。厚さmm。	5地区	平安山原D遺跡	No 52	
第57図	41	後期系土器	底部	くびれ平底、径:6.5cm。泥質。焼成良好。褐色。厚さ5mm。	5地区	平安山原D遺跡	No 52	
第57図	42	浜屋原式土器	口縁部	外反。口径:14.4cm。厚さ5mm。	5地区	平安山原D遺跡	No 60	黒褐色砂質土層
第57図	43	後期系土器	口縁部	直口。泥質。焼成良好。暗褐色。厚さ5mm。	5地区	平安山原D遺跡	No 60	
第57図	44	大当原式土器	底部	丸底的平底、径:3.2cm。水摩。砂泥質。淡灰褐色。厚さ6mm。	5地区	平安山原D遺跡	No 60	白色枝サンゴ層
第57図	45	後期系土器	底部	くびれ平底、径:8cm。水摩、鉄分付着。砂質。厚さ5mm。	5地区	平安山原D遺跡	No 60	白色枝サンゴ層
第57図	46	グスク系土器	口縁部	壷、胴径(30cm)。淡明褐色。厚さmm。	5地区	平安山原D遺跡	No 60	淡褐色砂質土層
第57図	47	曽畑系土器	胴部	水摩。沈線文(斜位)。砂質。厚さ6mm。	3地区	平安山原C遺跡	No 60	白色シルト層
第57図	48	曽畑系土器	胴部	水摩。幅広沈線文(横位+斜位)。厚さ10mm。	3地区	平安山原C遺跡	No 60	
第57図	49	仲泊式土器	口縁部	直口。水摩。砂質。厚さ7mm。	3地区	平安山原C遺跡	No 5	黒色シルト層
第57図	50	浜屋原式土器	口縁部	外反。　砂質。厚さ7mm。	3地区	平安山原C遺跡	No 6	白色シルト層
第57図	51	大当原式土器	底部	乳房状尖底、径:2cm。52と同一個体。大当原式土器より古い。淡暗褐色。厚さ8mm。	3地区	平安山原C遺跡	No 6	灰色砂層
第57図	52	大当原式土器	口縁部	外反、波状口縁、径:31.8cm。51と同一個体。大当原式土器より古い。砂泥質。厚さ6～8mm。	3地区	平安山原C遺跡	No 6	黒色シルト層
第57図	53	大当原式土器	口縁部	外反,口径:18.28cm。厚さ7～8mm。	3地区	平安山原C遺跡	No 6	表採
第57図	54	後期系土器	口縁部	直口。深鉢。　砂泥質。焼成良好。暗褐色。厚さ6～7mm。	3地区	平安山原C遺跡	No 6	黒色シルト層
第57図	55	後期系土器	胴部	底(丸)胴径-12cm黒い煤。砂質。白色。淡黄褐色。厚さ5mm。	3地区	平安山原C遺跡	No 6	白色シルト層
第57図	56	グスク系土器	口縁部	外耳類例:後兼久原遺跡。砂泥質。淡暗褐色。厚さ9mm。	3地区	平安山原C遺跡	No 6	黒色シルト層
第57図	57	グスク系土器	口縁部	外反,口径:23.6cm。泥質。焼成良好。淡黄褐色。厚さ7mm。	3地区	平安山原C遺跡	No 6	灰色砂層
第57図	58	後期系土器	口縁部	直口、径:9.9cm。焼成良好。淡黄褐色。厚さ6mm。	3地区	平安山原C遺跡	No 6	灰色砂層
第57図	59	グスク系土器？	口縁部	直口、径:15.6cm。淡黄褐色。厚さ6～7mm。	3地区	平安山原C遺跡	No 6	灰色砂層
第57図	60	曽畑式土器	胴部	水摩。幅広沈線文(横位+縦位+斜位)。砂泥質。石英、光る鉱物。褐色。厚さ10<mm。	A地区	遺物散布地	No 40	白色枝サンゴ層
第57図	61	曽畑式土器	胴部	幅広沈線文(横・縦)。砂質。厚さ10<mm。	B地区	遺物散布地	No 43	
第57図	62	曽畑式土器	底部	丸底、径:7.1cm。砂質。厚さ10<mm。	B地区	遺物散布地	No 43	白色枝サンゴ層
第57図	63	伊波式土器	胴部	直口。角(山形突起)厚さ6mm。	B地区	遺物散布地	No 34	白色枝サンゴ層
第57図	64	条痕文土器	底部	尖底、径:4.5cm。底厚1.5cm。泥質。褐色。厚さ6mm。	D地区	伊礼原B遺跡	No 145	白色枝サンゴ層
第58図	1	東原式土器	口縁部	直口。水摩。砂質。鉱物-多量。淡灰褐色。厚さ5～6mm。	6地区	平安山原C遺跡		
第58図	2	ヤブチ式土器	胴部	水摩。砂質。鉱物-多量。淡灰褐色。厚さ6mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 145	灰色細砂層
第58図	3	東原式土器	胴部	水摩。砂質。サンゴ細砂。淡灰褐色。厚さ6mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 145	灰色細砂層
第58図	4	ヤブチ式土器	胴部	水摩。爪形文(凹凸が強い)。鉱物-多量。淡灰褐色。　厚さ>5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 145	灰色細砂層
第58図	5	東原式土器	口縁部	直口。水摩。砂質。鉱物-多量。淡灰褐色。厚さ7mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 145	灰色細砂層
第58図	6	条痕文土器	胴部	幅広沈線文(曲線)。砂質。厚さ10mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 145	
第58図	7	条痕文土器	口縁部	直口。轟C式。幅広沈線文(曲線)。砂質。厚さ9mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	
第58図	8	条痕文土器	胴部	轟D式。幅広沈線文(曲線)。砂質。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	
第58図	9	面縄前庭式土器	口縁部	外反。暗褐色。厚さmm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	淡黒褐色土層
第58図	10	面縄前庭式土器	口縁部	外反。砂質。暗褐色。厚さ>5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	11	面縄前庭式土器	口縁部	外反。砂質。暗褐色。厚さ7mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	12	面縄東洞式土器	口縁部	口径:17.2cm。刺突文(流水状)。砂質。厚さ9mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	13	面縄東洞式土器	口縁部	直口。肥厚帯-9mm。刺突文(横位)。砂質。厚さ5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	14	面縄東洞式土器	口縁部	直口。山形口縁。刺突文。砂質。厚さ>4mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	15	面縄東洞式土器	口縁部	外反。刺突文(流水状)。砂質。厚さ>5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	16	面縄東洞式土器	口縁部	直口。刺突文(流水状)。砂質。厚さmm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	17	面縄東洞式土器	口縁部	直口。肥厚帯-1.2cm。刺突文。砂質。厚さmm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	淡黒褐色土層
第58図	18	面縄東洞式土器	口縁部	直口。刺突文(流水状)。厚さ6mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	淡黒褐色土層
第58図	19	面縄東洞式土器	口縁部	外反。刺突文(横位+羽状)。砂質。厚さ6mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	20	面縄東洞式土器	胴部	直口。刺突文(横位)。砂質。厚さ5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	淡黒褐色土層
第58図	21	面縄東洞式土器	口縁部	図12と接合図12と接合。刺突文。砂質。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	
第58図	22	仲泊A式土器	口縁部	沈線文、刺突文(角)。砂質。焼成良好。淡灰褐色。厚さmm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	淡黒褐色土層
第58図	23	面縄東洞式土器	口縁部	外反。連続刺突文(横位)+突起。砂質。黒褐色。厚さ5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	淡黒褐色土層
第58図	24	仲泊式土器	胴部	沈線文(羽状)。砂質。厚さ6mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	25	仲泊式土器	胴部	沈線文(羽状)。砂質。厚さ6mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	26	面縄東洞式土器	口縁部	直口。砂質。厚さ6mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	27	仲泊A式土器	口縁部	直口。沈線文(羽状)。砂質。淡灰褐色。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	淡黒褐色土層
第58図	28	仲泊A式土器	口縁部	沈線文、刺突文(丸)。砂質。淡灰褐色。厚さmm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	
第58図	29	仲泊A式土器	口縁部	外反。沈線文(羽状)。砂質。焼成良好。淡灰褐色。厚さ7mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	30	面縄東洞式土器	口縁部	直口。砂質。厚さ5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	淡黒褐色土層

第21表d　土器観察一覧

第	実測	遺物	部位	観察事項	地区	遺跡名	試掘	層序
第58図	31	大山式土器	口縁部	外反。口唇:沈線文、外面:沈線文。砂質。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	32	面縄東洞式土器	底部	底(平・くびれ)砂質。厚さ5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	33	浜屋原式土器	口縁部	外反。砂質。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	淡黒褐色土層
第58図	34	浜屋原式土器	口縁部	外反。砂質。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	淡黒褐色土層
第58図	35	浜屋原式土器	口縁部	砂質。厚さ10mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	淡黒褐色土層
第58図	36	面縄前庭式土器	底部	底(尖)輪積み。厚さ10mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	37	仲泊式土器	底部	乳房状尖底。巻き上げ。砂質。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	茶褐色砂層
第58図	38	室川下層式土器	胴部	幅広沈線文(斜)。厚さ9mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	黒褐色砂質土層
第58図	39	東原式土器	胴部	幅広沈線文(斜位)、内面:沈線文。砂質。石英-多量厚さ10<mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 140	灰白色砂、灰色砂(水分多い)
第58図	40	東原式土器	胴部	幅広沈線文(縦)。泥質。焼成良好。雲母、赤粒-多量厚さ10<mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 140	灰白色砂、灰色砂(水分多い)
第58図	41	室川下層式土器	口縁部	直口。水摩。短沈線(斜位)+竹管文、内面:貝殻文。砂質。石英-粗い-多量。黒褐色。厚さ9mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 140	灰白色砂、灰色砂(水分多い)
第58図	42	室川下層式土器	胴部	斜沈線文。砂質。黒褐色。厚さ7mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	黒褐色砂質土層
第58図	43	面縄前庭式土器	胴部	凸帯文+刻目(横位)、細沈線文。砂質。石英-多量。暗褐色。厚さ5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 140	灰白色砂、灰色砂(水分多い)
第58図	44	伊波式土器	胴部	山形口縁(チェブロン状の段)・備2-45.48と同一個体。連点文(横位)、口唇:刺突文。厚さ6mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	
第58図	45	伊波式土器	胴部	山形を欠損、図44.48と同一個体。連点文(横位)。厚さ6mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	
第58図	46	面縄東洞式土器	口縁部	直口。爪形押引文(稜杉)。砂質。厚さ6mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	黒褐色砂質土層
第58図	47	伊波式土器	口縁部	直口。山形口縁、図45.48と同一個体。連点文(横位)。砂質。厚さ6mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	
第58図	48	伊波式土器	口縁部	山形口縁、図44.45と同一個体。連点文(横位)。厚さ6mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	
第58図	49	市来式土器	口縁部	外反,積み痕が明瞭。爪形押引文、内面山形部:爪形押引文。砂質。焼成良好。暗褐色。厚さ6mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	白色砂層
第58図	50	嘉徳Ⅰ式土器	口縁部	外反,山形口縁。口唇:爪形押引文、外面:沈線文(流水)・刺突文。砂質。厚さ5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	白色砂層
第58図	51	嘉徳Ⅰ式土器		外反,山形口縁。口唇:爪形押引文、沈線文(細流水)。砂質。厚さ7mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	黒褐色砂質土層
第58図	52	嘉徳Ⅰ式土器		山形口縁。口唇:爪形押引文、外面:爪形押引文+沈線文(流水)。厚さ6～8mm。		伊礼原C遺跡	No 138	白色砂層
第58図	53	嘉徳Ⅰ式土器		直口。図54と同一個体。口唇:沈線文。砂泥質。厚さ5～7mm。		伊礼原C遺跡	No 138	黒褐色砂質土層
第58図	54	嘉徳Ⅰ式土器		直口。図53と同一個体。口唇:沈線文、外面:爪形押引文+沈線文。砂泥質。厚さ5mm。		伊礼原C遺跡	No 138	黒褐色砂質土層
第58図	55	伊波式土器		直口。山形を欠損。連点文。砂質。厚さ8mm。		伊礼原C遺跡	No 138	
第58図	56	伊波式土器		直口。山形口縁。口唇:沈線文、外面:沈線文(横位+斜位)。砂質。石英、チャート-多量厚さ6mm。		伊礼原C遺跡	No 138	灰白色砂、灰色砂(水分多い)
第58図	57	仲泊式土器	胴部	細沈線文(羽状)。砂質。厚さ5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	黒褐色砂質土層
第58図	58	伊波式土器	胴部	平底、径:10.2cm。砂質。厚さ6～7mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	黒褐色砂質土層
第58図	59	面縄東洞式土器	底部	平底、径:5.8cm。底面-凹む。厚さ9mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	黒褐色砂質土層
第58図	60	面縄東洞式土器	底部	平底、径5.8cm。底面-凹む、脚状。厚さ7～9mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	黒褐色砂質土層
第58図	61	伊波式土器	底部	平底、径:10cm。砂質。厚さ7mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	
第58図	62	浜屋原式土器	口縁部	外反。無文。砂質。厚さ5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	
第58図	63	浜屋原式土器	口縁部	直口。砂質。厚さ7mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	黒褐色砂質土層
第58図	64	—	口縁部	外反口縁、径:25cm,弥生土器の影響?。凸帯文。砂質。厚さ10mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	灰白色砂、灰色砂(水分多い)
第58図	65	浜屋原式土器		平底、径:3cm,厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	黒褐色砂質土層
第58図	66	晩期系土器	底部	平底、径:3.6cm。厚さ7mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	白色砂層
第58図	67	晩期系土器	底部	平底、径:3.6cm。砂質。暗褐色。厚さ6mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	包含層(暗褐色混土)
第58図	68	晩期系土器	底部	平底、径:3.4cm。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	黒褐色砂質土層
第58図	69	大当原式土器	底部	尖底。砂質。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	
第58図	70	大当原式土器	底部	尖底。厚さ>5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	
第59図	1	曽畑式土器	胴部	東原遺跡に類似。刺突文(横位+斜位)。泥質。石英、サンゴ砂-粗い。褐色、芯:黒褐色。厚さ9mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 140	灰白色砂、灰色砂(水分多い)
第59図	2	曽畑式土器	胴部	外反,口(舌)東原遺跡に類似。幅広沈線文(横位)。泥質。石英、サンゴ砂-粗い。褐色、芯:黒褐色。厚さ9～10mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 140	灰白色砂、灰色砂(水分多い)
第59図	3	曽畑式土器	胴部	東原遺跡に類似。幅広沈線文(横位)。泥質。石英、サンゴ砂-粗い。褐色、芯:黒褐色。厚さ10mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 140	灰白色砂、灰色砂(水分多い)
第59図	4	曽畑式土器	胴部	東原遺跡に類似。泥質。石英、サンゴ砂-粗い。褐色、芯:黒褐色。厚さ11.5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 140	灰白色砂、灰色砂(水分多い)
第59図	5	曽畑式土器	胴部	曽畑。砂質。褐色。厚さ10<mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	淡黒褐色土層
第59図	6	面縄前庭式土器	胴部	凸帯文+刻目(横位)、沈線文(斜位)。砂質。淡黄褐色。厚さ7mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 125	淡黒褐色土層
第59図	7	晩期系土器	口縁部	内傾「L」字状口縁、径:18.4cm。阿波連浦下層に類似。砂質。褐色。厚さ7～8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	包含層(暗褐色混土)
第59図	8	弥生系土器	胴部	在地系。凸帯文(横位)。砂泥質。焼成良好。暗褐色。厚さ6～7mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	9	後期系土器	口縁部	直口。　厚さ4～5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	10	浜屋原式土器	口縁部	外反。輪積み。砂質。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	11	晩期系土器	口縁部	砂質。暗褐色。厚さ7～8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	12	--	口縁部	直口。阿波連浦下層に類似。砂質。厚さ4～5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)

第21表e　土器観察一覧

第	実測	遺物	部位	観察事項	地区	遺跡名	試掘	層序
第59図	13	弥生系土器	口縁部	外反。口唇：短沈線文、外面：細沈線文(不揃)。砂質。厚さ4～5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	14	弥生式系土器	口縁部	外反。砂質。焼成：良好。厚さ7mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	15	大当原式土器	口縁部	直口。砂泥質。焼成：良好。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	16	大当原式土器	胴部	輪積み。砂質。焼成：良好。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	17	後期系土器	口縁部	砂質。褐色。厚さ4～5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	18	晩期系土器	口縁部	外反。小形マリ形土器、図26と同一個体。淡黄褐色。厚さ4～5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	19	弥生式系土器	口縁部	砂質。厚さ10mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	20	後期系土器	口縁部	外反.図47に類似。泥質。焼成：良好。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	21	晩期系土器	口縁部	直口。砂泥質。焼成：良好。厚さ7mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	22	大当原式土器	口縁部	外反。砂泥質。焼成：良好。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	23	大当原式土器	口縁部	外反。砂泥質。厚さ10＜mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	24	浜屋原式土器	底部	尖底、径:2.5cm。砂質。焼成:良好。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	25	大当原式土器	底部	尖底的平底、径:3cm。砂泥質。焼成:良好。厚さ10mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	26	弥生系土器	底部	尖底的平底、径:2.8cm.図18と同一個体。厚さ＞5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	27	大当原式土器	底部	尖底的平底砂泥質。焼成:良好。厚さ9mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	28	大当原式土器	底部	尖底的平底、径:2.2cm.底面くぼむ。泥質。焼成:良好。厚さmm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 133	包含層(暗褐色混土)
第59図	29	室川下層式土器	胴部	刺突文(羽状)。砂質。石英(粗)、雲母(細)厚さ9mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 127	灰色枝サンゴ堆積層
第59図	30	面縄東洞式土器	口縁部	外反、径:28.8cm.文様帯-3cm。連点文(横位)。砂質。石英(細)-多量厚さ4mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 127	灰色枝サンゴ堆積層
第59図	31	嘉徳Ⅰ式土器	胴部	水摩。爪形文+沈線文。砂質。赤粒。明褐色。厚さ6mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 146	不明
第59図	32	室川下層式土器	胴部	水摩。刺突文(横位)。砂質.暗褐色。厚さ9mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 120	
第59図	33	面縄前庭式土器	胴部	水摩。凸帯文+刺突文(横)、沈線文(斜位)。砂質。褐色。厚さ5mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 120	
第59図	34	面縄前庭式土器	口縁部	直口。鉄分付着、小形。凸帯文。砂質。黒褐色。厚さ4mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 120	
第59図	35	曽畑式土器	口縁部	直口。水摩、石灰分。連点文、沈線文(横位)、胴部：曲線(縦位)、内面：沈線文(横位後、縦位)。砂質。厚さ9～10mm。	7地区	伊礼原B遺跡	No 116	灰色枝サンゴ層
第59図	36	面縄東洞式土器	底部	肥厚。水摩。刺突文(横位)。砂質。厚さ6mm。	7地区	伊礼原B遺跡	No 116	灰色枝サンゴ層
第57図	37	面縄東洞式土器	胴部	水摩。刺突文(横位)。砂質。厚さ＞5mm。	7地区	伊礼原B遺跡	No 116	灰色枝サンゴ層
第57図	38	浜屋原式土器	底部	底(丸)初期。黒褐色。厚さ10mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 145	
第58図	39	条痕文土器	口縁部	丸底。水摩、石灰質の付着。泥質。焼成:良好。厚さ15mm。	8地区	伊礼原E遺跡	No 144	粗砂層(下部)
第59図	40	浜屋原式土器	底部	尖底、径:2.5cm。底厚20mm。水摩。砂質。黄褐色。厚さ9mm。	8地区	伊礼原E遺跡	No 72	灰褐色砂層
第59図	41	後期系土器	底部	くびれ平底。泥質。厚さ7mm。	8地区	伊礼原E遺跡	No 48	
第59図	42	曽畑式土器	口縁部	直口。水摩。幅広沈線文(縦位+横位)、内面：有文。砂泥質。焼成良好。サンゴ砂。淡黄褐色。厚さ8mm。	B地区	遺物散布地	No 34	白色枝サンゴ層
第59図	43	仲泊式土器	口縁部	外反。水摩。厚さmm。	地区外		No 93	黄茶色砂層
第59図	44	仲泊A式土器	口縁部	外反。水摩。沈線文(羽状)。砂質。淡灰褐色。厚さmm。	地区外		No 45	
第59図	45	仲泊式土器	底部	尖底砂質。焼成良好。淡灰褐色。厚さ8mm。	地区外		No 112	灰緑色粘質砂層
第59図	46	大当原式土器	底部	尖底的平底底面くぼむ。砂泥質。褐色。厚さmm。	地区外		No 112	灰緑色粘質砂層
第59図	47	弥生系土器	口縁部	外反口縁、径:20cm。図20に類似。泥質。焼成良好。明褐色。厚さ8mm。	6地区	伊礼原C遺跡	No 138	
第59図	48	後期系土器	口縁部	小形小形。泥質。赤粒厚さ6mm。壷に近い。外反。肩部に媒。大形。	9地区	後兼久原遺跡	No 2	
第59図	49	グスク系式土器	口縁部	焼成良好。サンゴ砂、褐色粒。淡褐色。厚さ6～7mm。	9地区	後兼久原遺跡	No 2	
第59図	50	グスク系土器?	口縁部	直口。中形中形。砂質。焼成良好。黄褐色。厚さ8～9mm。	9地区	後兼久原遺跡	No 139	
第59図	51	グスク系式土器	口縁部	外反。小形。泥質。焼成良好.黒褐色。厚さ6mm。	9地区	後兼久原遺跡	No 139	
第59図	52	グスク系式土器	口縁部	鍋。大形大形。砂質。焼成良好。褐色粒、サンゴ砂。淡白色。厚さ8mm。	9地区	後兼久原遺跡	No 139	
第59図	53	後期系土器	口縁部	鍋。滑石？滑石？。黒褐色。厚さ5mm。	9地区	後兼久原遺跡	No 139	
第59図	54	面縄前庭式土器	底部	乳房状尖底、径:3.5cm。水摩。砂質。白色。灰色。鉱物厚さ7mm。	F地区	遺物散布地	No 60	
第59図	55	浜屋原式土器	口縁部	外反口縁、径:18.8cm。水摩。砂質。サンゴ砂。黄褐色。厚さ7mm。	F地区	遺物散布地	No 68	
第59図	56	阿波連浦下層式土器	口縁部	壷。外反。水摩。砂質。石灰質の細砂、鉱物。淡褐色、芯:淡黒色。厚さ6mm。	F地区	遺物散布地	No 119	ジャリ灰色
第59図	57	後期系土器	口縁部	外反。中形。水摩。砂質.灰褐色。厚さ5～6mm。	6地区	遺物散布地	No 126	
第59図	58	浜屋原式土器	底部	乳房状尖底、径:3.5cm.底面-凹む、水摩。泥質.褐色。厚さ9mm。	6地区	遺物散布地	No 68	
第60図	1	曽畑式土器	口縁部	大形鉢。古式。連点文+沈線文を交互。サンゴ砂。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	2	曽畑式土器	口縁部	小形鉢。内外面：短沈線文。サンゴ砂,角閃石-。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	3	曽畑式土器	口縁部	大形鉢。古式。短沈線文(縦位)+沈線文(横位)。サンゴ砂.黒褐色。厚さ厚mm。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	4	曽畑式土器	口縁部	小形鉢。短沈線文。サンゴ砂,角閃石。黒褐色。厚さ薄mm。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	5	曽畑式土器	口縁部	大形鉢。短沈線文。サンゴ砂。黒褐色。厚さ厚mm。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	6	曽畑式土器	口縁部	大形鉢。古式。短沈線文(縦位)+沈線文(横位)。サンゴ砂。黒褐色。厚さ厚mm。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	7	曽畑式土器	口縁部	大形鉢。短沈線文。サンゴ砂。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	8	曽畑式土器	口縁部	小形鉢。短沈線文。サンゴ砂,角閃石-。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	

第21表f　土器観察一覧

第	実測	遺物	部位	観察事項	地区	遺跡名	試掘	層序
第60図	9	曽畑式土器	口縁部	沈線文(横位)、内面:沈線文(縦位)。サンゴ砂。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	10	曽畑式土器	口縁部	短沈線文(横位)、内面:短沈線文(縦位)。サンゴ砂。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	11	曽畑式土器	口縁部	大形鉢。古式。沈線文(横位)一内外面。サンゴ砂,角閃石。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	12	曽畑式土器	口縁部	大形鉢。サンゴ砂。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	13	曽畑式土器	口縁部	小形鉢。内外面:短沈線文。サンゴ砂,角閃石。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	14	曽畑式土器	口縁部	沈線文(横位)、内面:連点文(横位)。サンゴ砂,角閃石。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	15	曽畑式土器	口縁部	小形鉢。短沈線文(斜位)、内面:短沈線文(曲線)。サンゴ砂,角閃石。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	16	曽畑式土器	口縁部	大形鉢。新式。連点文(横位)、内面:無文。サンゴ砂灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	17	曽畑式土器	口縁部	小形鉢。サンゴ砂。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	18	曽畑式土器	口縁部	小形鉢。サンゴ砂,角閃石。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	19	曽畑式土器	口縁部	大形鉢。新式。沈線文(横位、斜位)、内面:無文。サンゴ砂。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	20	曽畑式土器	口縁部	碗。羽状文(横位)。サンゴ砂。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	21	曽畑式土器	口縁部	サンゴ砂。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	22	曽畑式土器	胴部	沈線文(横位+斜位)。サンゴ砂,角閃石-　。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	23	曽畑式土器	胴部	沈線文(横位)。サンゴ砂。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	24	曽畑式土器	胴部	沈線文(横位+縦位+斜位)。サンゴ砂,角閃石-　。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	25	曽畑式土器	胴部	沈線文(斜位)。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	26	曽畑式土器	胴部	沈線文(横位+縦位)。サンゴ砂,角閃石-　。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	27	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	28	曽畑式土器	胴部	沈線文(横位+縦位)。サンゴ砂,角閃石-　。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	29	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂,角閃石。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	30	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂,角閃石。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	31	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂,角閃石。黒褐色。	6地区	伊礼原B遺跡	試掘143	
第60図	32	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂灰褐色。	6地区	伊礼原B遺跡	試掘143	
第60図	33	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂。黒褐色。	6地区	伊礼原B遺跡	試掘143	
第60図	34	曽畑式土器	胴部		6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	35	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂,角閃石-　。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	36	曽畑式土器	胴部		6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	37	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	38	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂,角閃石-　。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	39	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	40	曽畑式土器	底部近く	サンゴ砂,角閃石。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	41	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂,角閃石。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	42	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂,角閃石。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	43	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂,角閃石。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	44	曽畑式土器	底部近く	サンゴ砂。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	45	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂,角閃石。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	46	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂,角閃石-　。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	47	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂,角閃石-　。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	48	曽畑式土器	胴部	石英。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	49	曽畑式土器	底部	有文。サンゴ砂-多量。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	50	曽畑式土器	胴部	サンゴ砂。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	51	曽畑式土器	底部	サンゴ砂。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	52	曽畑式土器	底部	サンゴ砂。黒褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	53	曽畑式土器	底部	サンゴ砂。灰褐色。	6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	54	曽畑式土器	底部		6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	
第60図	55	曽畑式土器	底部		6地区	伊礼原C遺跡	試掘143	

第22表a　青磁・染付観察一覧

第	実測	遺物	器種	部位	口径	低径	高さ	観察事項	地区	遺跡名	試掘
第61図	5	青磁	碗	口縁部	16.4	16.4		文様:無文。16世紀中頃～後半	1地区	千原遺跡	No 30
第61図	6	青磁	碗	口縁部	14.7			文様:劃花文。12世紀後半～13世紀中頃	4地区	平安山原A遺跡	No 11
第61図	7	青磁	碗	口縁部	15			文様:雷文帯、内面:花文。14世紀中頃～後半	4地区	平安山原A遺跡	No 14
第61図	8	青磁	碗	口縁部				無文。釉の発色が悪い。15世紀中頃～後半	4地区	平安山原A遺跡	No 14
第61図	9	青磁	碗	口縁部				無文。釉の発色が悪い。15世紀中頃～後半	4地区	平安山原A遺跡	No 14
第61図	10	青磁	碗	口縁部				文様:蓮弁文。16世紀中頃～後半	4地区	平安山原A遺跡	No 14
第61図	11	青磁	碗	口縁部	16			文様:蓮弁文。16世紀中頃～後半	4地区	平安山原A遺跡	No 14
第61図	12	青磁	碗	底部				文様:見込み一十字架文。15世紀中頃～後半	4地区	平安山原A遺跡	No 14
第61図	13	青磁	皿	口縁部		4.4		文様:稜花文。15世紀前半～中頃	4地区	平安山原A遺跡	No 15
第61図	14	青磁	碗	底部		6.5		水摩。15世紀。	4地区	平安山原A遺跡	No 29
第61図	15	青磁	碗	底部				蛇の目釉剥ぎ、15世紀。	4地区	平安山原A遺跡	No 29
第61図	17	青磁	碗	口縁部	14.5			輪花、内輪花、内灣	4地区	平安山原A遺跡	No 37
第61図	18	青磁	碗	底部		5		文様:見込み一スタンプ文。15世紀前半～中頃	4地区	平安山原A遺跡	No 37
第61図	19	青磁	碗	底部		4.4		15世紀前半～中頃。	4地区	平安山原A遺跡	No 37
第61図	20	青磁	碗	底部		5.9		16世紀。	4地区	平安山原A遺跡	No 37
第61図	22	青磁	皿	口縁部		15.6		外反15世紀前半～中頃	4地区	平安山原A遺跡	No 37
第61図	23	青磁	碗	口縁部	16			無文15世紀前半～中頃	5地区	平安山原A遺跡	No 52
第61図	24	青磁	碗	底部		4.8		無文。15世紀前半～中頃	5地区	平安山原A遺跡	No 62
第61図	25	青磁	碗	口縁部				直口口縁。文様:蓮弁文。15世紀中頃～16世紀前半	5地区	伊礼原D遺跡	No 62
第61図	26	青磁	碗	口縁部	16.2			外反口縁。文様:蓮弁文、上下に区画有。16世紀中頃～後半	5地区	伊礼原D遺跡	No 62
第61図	28	青磁	壷	底部		6.5		文様:細蓮弁文。14世紀前半～15世紀中頃	5地区	伊礼原D遺跡	No 64
第61図	29	青磁	碗	口縁部	13.5			文様:細蓮弁文。釉垂れ。16世紀中頃～後半	5地区	伊礼原D遺跡	No 64
第61図	31	青磁	杯	口縁部	7.4			内。文様:線刻細蓮弁文。16世紀中頃～後半	5地区	伊礼原D遺跡	No 65
第61図	32	青磁	碗	口縁部	13.6			直口口縁。文様:一条の凹線。15世紀中頃～後半	5地区	伊礼原D遺跡	No 69
第61図	33	青磁	碗	底部		5.6		文様:蓮弁文。14世紀後半～15世紀中頃	B地区	遺物散布地	No 35
第61図	34	青磁	碗	底部		5.4		無文。14世紀	B地区	遺物散布地	No 36
第61図	35	青磁	碗	口縁部				外反口縁。文様:有文。14世紀後半～15世紀中頃	B地区	遺物散布地	No 36
第61図	36	青磁	碗	口縁部	18			無文。15世紀前半～中頃	B地区	遺物散布地	No 41
第61図	37	青磁	碗	口縁部				稜花。15世紀前半～中頃	B地区	遺物散布地	No 41
第61図	38	青磁	杯	口縁部				玉縁口縁。文様:有文。14世紀後半～15世紀中頃	B地区	遺物散布地	No 43
第62図	2	青磁	碗	口縁部				文様:雷文帯。15世紀前半～中頃	6地区	伊礼原C遺跡	No 133
第62図	3	青磁	皿	口縁部		6.6		文様:見込み一スタンプ花文。15世紀前半	6地区	伊礼原C遺跡	No 138
第62図	4	青磁	皿	口縁部	13.2			稜花。15世紀前半～中頃	6地区	伊礼原C遺跡	No 141
第62図	5	青磁	碗	口縁部		10.6		フィガキー(湧田焼系)。18世紀～19世紀前半	7地区	伊礼原B遺跡	No 96
第62図	6	青磁	碗	底部		5.4		文様:見込み一スタンプ花文。鎬蓮弁文碗の底部、13世紀中頃～後半。	9地区	後兼久原遺跡	No 26
第62図	7	青磁	碗	口縁部				内彎口縁。文様:雷文帯。14世紀後半～15世紀中頃	9地区	後兼久原遺跡	No 19
第62図	8	青磁	碗	口縁部	10.8			無文15世紀中頃～後半	9地区	後兼久原遺跡	No 3
第62図	9	青磁	碗	口縁部	15.9	8.9	6.2	無文15世紀中頃～後半	9地区	後兼久原遺跡	No 3
第62図	10	青磁	碗	口縁部	18.8			無文15世紀中頃～後半	9地区	後兼久原遺跡	No 3
第62図	11	青磁	碗	底部	15.8			内彎口縁。文様:鎬蓮弁文。15世紀前半～中頃	9地区	後兼久原遺跡	No 3
第62図	12	青磁	碗	底部		5.6		文様:蓮弁文。15世紀中頃～16世紀前半	F地区	遺物散布地	No 61
第62図	13	染付	碗	底部		4.4		文様:見込み一圏線、花文。16世紀	1地区	千原遺跡	No 30
第62図	14	染付	碗	底部		4.4		文様:見込み一圏線、花文。16世紀中頃～後半	4地区	平安山原A遺跡	No 23
第62図	15	染付	皿	底部		5.6		文様:外面一唐草文、見込み一十字架文。18世紀～19世紀前半	1地区	千原遺跡	No 30
第62図	16	染付	碗	口縁部				直口口縁。文様:外面一二本の圏線、間に波濤文、芭蕉文、内面:圏線。16世紀前半	4地区	平安山原A遺跡	No 37
第62図	17	染付	碗	口縁部	14			文様:外面一圏線+文様、内面一圏線。日本産の可能性もある。17世紀	4地区	平安山原A遺跡	No 14
第62図	18	染付	碗	口縁部	10.6			文様:外面一圏線+文様、内面一圏線。18世紀前半～中頃	4地区	平安山原A遺跡	No 14
第62図	19	染付	皿	口縁部	16			外反口縁。文様:外面一圏線、内面一圏線+花文。16世紀中頃～後半	4地区	平安山原A遺跡	No 23
第62図	20	染付	皿	底部		5		文様:外面一圏線、見込み:圏線+花文。16世紀中頃～後半	1地区	平安山原A遺跡	No 30
第62図	21	染付	碗	口縁部	12.4			外反口縁。文様:外面一二本の圏線+寿文+蓮弁文。18世紀前半～19世紀	4地区	平安山原A遺跡	No 32
第63図	1	染付	碗	底部		6.8		文様:見込み:圏線+葉文?。16世紀後半～17世紀中頃	4地区	平安山原A遺跡	No 24
第63図	2	染付	碗	底部		6.6		蛇の目釉剥ぎ　,文様:外面一花文、高台脇一圏線、内面胴下部一圏線。15世紀	4地区	平安山原A遺跡	No 37
第63図	3	染付	碗	口縁部	12.7			直口口縁。文様:外面一圏線+唐草文、芭蕉文。16世紀中頃～後半	4地区	平安山原A遺跡	No 37
第63図	5	染付	皿	口縁部				碁笥底16世紀	2地区	平安山原B遺跡	No 20
第63図	6	染付	杯	底部		3.8		馬上馬上杯、16世紀後半～17世紀中頃	2地区	平安山原B遺跡	No 54-B
第63図	7	染付	碗	底部		2.4		18世紀前半～中頃	2地区	平安山原B遺跡	No 21-B

第22表b　青磁・染付観察一覧

第	実測	遺物	器種	部位	口径	低径	高さ	観察事項	地区	遺跡名	試掘
第63図	8	染付	碗	口縁部				外反口縁。文様:外面一圏線+花文、内面一圏線。17世紀	7地区	伊礼原B遺跡	No 136
第63図	9	染付	碗	底部		7.6		文様:寿文+蓮弁文くずれ+圏線。18世紀前半～中頃	7地区	伊礼原B遺跡	No 136
第63図	10	染付	壷	胴部				文様:外面一唐草文。15世紀後半～16世紀中頃	9地区	後兼久原遺跡	No 4
第63図	11	染付	碗	口縁部				内彎口縁。文様:外面一花文。16世紀～17世紀,日本産の可能性もあり。	F地区	遺物散布地	No 76
第63図	13	白磁	碗	口縁部				玉縁口縁12世紀前半～中頃	1地区	千原遺跡	No 30
第63図	14	白磁	碗	底部		7.5		無文15世紀	1地区	千原遺跡	No 30
第63図	15	白磁	碗	口縁部	16.9			玉縁口縁12世紀前半～中頃	4地区	平安山原A遺跡	No 37
第63図	16	白磁	皿	底部		5.4		蛇の目釉剥ぎ。15世紀	4地区	平安山原A遺跡	No 37
第63図	17	白磁	皿	底部				ベタ底15世紀	4地区	平安山原A遺跡	No 24
第8図	18	白磁	碗	口縁部	10.6			無文15世紀中頃～後半	4地区	平安山原A遺跡	No 37
第63図	19	白磁	碗	底部		4.4		無文15世紀中頃～後半	4地区	平安山原A遺跡	No 14
第63図	20	白磁	碗	底部		5.9		15世紀中頃～後半	2地区	平安山原B遺跡	No 54-A
第63図	21	白磁	碗	底部				ビロースクタイプビロースクタイプ、13世紀後半～14世紀後半	A地区	遺物散布地	No 40

第23表　骨製品観察一覧

図	遺物番号	種　類	製品名1	観察事項	重量	横(殻長)	タテ(殻高)	地区	試掘番号
第65図図版46	1	サメ歯	有孔	基部に1孔,,	4	1.99	1.98	6	143
第65図図版46	2	サメ歯	有孔	基部に2孔,,	5.5	2.1	1.66	6	143
第65図図版46	3	イノシシ下顎犬歯	装飾品	1孔、半裁研磨,,	10.6	5.44	1.96	6	143
第65図図版46	4	イノシシ左脛骨	骨錐	先端研磨,,	15.6	1.94	8.2	6	143
第65図図版46	5	イノシシ右脛骨	骨錐	先端研磨,,	11.3	1.4	6.27	6	143
第65図図版46	6	イノシシ右脛骨	骨錐	先端研磨,,	18.9	2.63	11.8	6	143

第24表　貝製品観察一覧

図	遺物番号	種　類	製品名1	観察事項	重量	横(殻長)	タテ(殻高)	地区	試掘	遺跡名	層　序
図版45	9	ヤクシマダカラ	有孔製品？	穿孔、貝殻は研磨？	40	3.5	6.1	1	30	千原遺跡	淡褐色砂質土層
		リュウキュウサルボウ		穿孔、殻頂のためはっきりしない。	23	6	4.1	2	20	平安山原B遺跡	茶黒色土層
図版45	4	ヤコウガイの蓋	蓋製品		166	8.3	6.7	3	5	伊礼原C遺跡	黒色シルト層
図版45	3	ヤコウガイの蓋	蓋製品		134	7.7	6.6	3	6	伊礼原C遺跡	白色シルト層
		ヤコウガイ			106	7.2	7	3	6	伊礼原C遺跡	白色シルト層
第64図・図版44	3	ゴホウラ	貝輪	背面、背面の周縁は打割か,風化、貝は他の２個より小さい。	31.87	1.5	8.9	4	18	伊礼原E遺跡	白色枝サンゴ層
第64図・図版44	1	イモガイ(アンボンクロザメ)	円盤状未製品	体層、研磨,殻頂周辺にアバタが10数個確認できる。殻表には加工痕はみられない。円盤状製品の未製品か	24.31	4.1	3.9	4	59	伊礼原E遺跡	白色枝サンゴ層
第64図・図版44	8	シレナシジミ	？	腹縁は、貝の成長線に沿って割れる。,殻は大きく、厚い、外殻にシレナシジミ特有のアバタが見られる。自然の可能性が高い。	123	8.3	8.6	4	72	伊礼原E遺跡	黒色土層
第64図・図版44	15	メンガイ類	穿孔	右殻、孔は内→外,殻は厚い、殻表にアバタ多し。腹縁破損、腹縁近くに長楕円があるが、自然の孔と考えられる。腹縁近くに長楕円があるが、自然の孔と考えられる。	42.12	5.6	6.9	5	52	伊礼原D遺跡	淡灰黒色混砂土層
第64図・図版44	12	メンガイ類	穿孔	孔は殻の薄い部分を穿孔、自然の可能性が高い。	24.52	5.3	7	5	62	伊礼原D遺跡	灰褐色土層
第64図・図版44	14	メンガイ類	穿孔	孔は殻の薄い部分を穿孔する。殻は摩耗、貝錘の可能性あり。	20.63	5.6	6.1	5	62	伊礼原D遺跡	灰褐色土層
第64図・図版44	6	サラサバティラ	？	体層、殻頂近くに２孔あり、研磨痕は確認できない。風化気味,製品の可能性は低い	229	9.3	8.5	5	64	伊礼原D遺跡	白色枝サンゴ層
図版45	6	シャコガイのちょうつがい(偶然の産物)	貝斧未製品	貝斧の荒い割、未製品か	191	5.7	11	5	64	伊礼原D遺跡	白色枝サンゴ層
		リュウキュウサルボオ	穿孔		31	6.07	5	5	64	伊礼原D遺跡	暗灰色粘質土
		リュウキュウサルボオ	穿孔		65	6.5	6.2	5	64	伊礼原D遺跡	暗灰色粘質土
		リュウキュウサルボオ	穿孔		24	6	4	5	64	伊礼原D遺跡	暗灰色粘質土
		リュウキュウマスオ	穿孔		9	6	4	5	64	伊礼原D遺跡	暗灰色粘質土
第64図・図版44	4	ゴホウラ	貝輪未製品	腹面、特に加工の痕跡なし,風化、殻薄い。未製品か廃棄品	97.06	-	13.4	5	65	伊礼原D遺跡	暗灰褐色混砂土層
第64図・図版44	5	ゴホウラ	貝輪未製品	腹面、特に加工の痕跡なし,風化、殻薄い、貝の文様残る。未製品か廃棄品	230	-	14.5	5	65	伊礼原D遺跡	暗褐色混砂土層
第64図・図版44	9	ヒメジャコ	2枚貝	右殻、内側から穿孔、後背縁にヒビが見られる。孔は横楕円,やや風化,孔は単孔で自然の破損の可能性有り。	24.52	7.5	5.1	5	65	伊礼原D遺跡	暗灰褐色混砂土層
図版45	1	メンガイ	有孔製品？	有孔製品か？	40	8.5	8.2	5	65	伊礼原D遺跡	白色枝サンゴ層
第64図・図版44	10	ヒメジャコ	穿孔	孔は横楕円、内側から穿孔,風化、外殻にアバタが顕著に見られる。網の錘の可能性が高い。	162	12.9	8.6	5	68	伊礼原D遺跡	
第64図・図版44	11	メンガイ類	穿孔	孔は丁寧に加工、内→外に穿孔。,殻は摩耗。網の錘の可能性が高い。	18.95	5	5.8	5	69	伊礼原D遺跡	白色枝サンゴ層
第64図・図版44	2	ゴホウラ	貝輪	腹面、縁は丸み、先端部は切り取り、研磨。	16.46	1.5	2	6	133	伊礼原C遺跡	包含層(暗褐色混土)
図版45	2	リュウキュウサルボオ	有孔製品	右殻	24	6.1	4.9	6	138	伊礼原C遺跡	黒褐色砂質土
		リュウキュウサルボオ			22	4.3	4.9	6	138	伊礼原C遺跡	黒褐色砂質土
		リュウキュウサルボオ			40	7.3	5	6	138	伊礼原C遺跡	黒褐色砂質土
		リュウキュウサルボオ			36	6.7	5	6	138	伊礼原C遺跡	黒褐色砂質土
第64図・図版44	13	メンガイ類	穿孔	孔は不定形、内→外、孔の一部は成長線から破損,風化気味,自然の可能性あり。	39.38	7.8	7.2	6	48	伊礼原C遺跡	白砂層
図版45	8	ヤコウガイ	貝匙？	周縁-ケンマ、穿孔。	10.68	2.06(上) 4.2(下)	4.8	8	144	伊礼原E遺跡	Ⅴ層a
図版45	7	スイジガイ	利器？	アバタ-死貝か	75.53	2.87	1.69	8	144	伊礼原E遺跡	Ⅴ層a
第64図・図版44	16	メンガイ類	穿孔	孔は他と違い、腹縁に近いところに穿孔、腹縁破損、使用痕か。殻は厚い。内外ともアバタが顕著、死貝の可能性あり。	39.87	6.9	8.3	8	60	伊礼原E遺跡	
図版45	5	ヤコウガイの蓋	蓋製品	色-灰色、薄い部分に剥離２回。	159	8	7	8	72	伊礼原E遺跡	灰色粗砂(枝サンゴ)
第64図・図版44	7	サラサバティラ	？	殻底、自然の割れ、風化。	46.92	9.1	2.7	地区外	6		混礫砂層
		ヤコウガイの蓋		薄い部分若干ハズレ	173	8.6	8	不明	不明		不明

第25表　石器観察一覧

図版	遺物番号	製品	石質	観察事項	縦	横	厚さ	重量	地区	遺跡名	試掘	層位
47	1	敲石	砂岩	表裏および側面のほぼ中央に敲き痕	11.04	9.04	5.9	1000	3	伊礼原C遺跡	6	白色シルト層
47	2	円盤状製品	輝緑岩	円形を呈し,表裏面に大きな打割がある。	11.08	9.77	3	368	3	伊礼原C遺跡	5	白色シルト層
47	3	敲石	泥岩	表裏および側面は研磨、上下面に敲き痕	8.24	6.83	4	385	8	伊礼原E遺跡	144	A－3白砂最下層岩盤状
47	4	凹石	花崗岩	表裏および上面は磨面が見られ、側面および下面に敲き痕が施される。	8.01	7.85	4.4	438	5	伊礼原D遺跡	52	淡灰黒色混砂
47	5	敲石	角閃石	平面形は隅丸方形、横断面は楕円形を呈し、表および上下面に敲き痕、裏および側面に研磨有り。	9.85	8.38	3.6	514	6	伊礼原C遺跡	138	黒褐色砂質土
47	6	磨石	砂岩	上下に細い。表裏および側面に研磨有り、上下面に敲き痕がある。	11.41	8.49	3.9	670		不明		不明
47	7	敲石	安山岩(角閃石)	上下部および側面は破損、表面は研磨され、裏面は自然である。	8.64	13.2	2.8	449	4	伊礼原E遺跡	73	白色枝サンゴ
47	8	石斧	輝緑岩	薄手のややバチ形を呈し、刃部破損。表および側面は研磨、裏面は破損。	7.54	5.64	1.6	90	6	伊礼原C遺跡	133	包含層(暗褐色混土)
48	1	石斧	輝緑岩	両刃磨製が頭部は破損。表裏面は研磨、側面に抉りが見らる。	10	3.05	2.4	122	8	伊礼原E遺跡	47	Eブロック　LEVEL100～180cm
48	2	敲石	輝緑岩	磨製,表および下、側面に敲き痕が見られる。特に下部は顕著、表裏および側面研磨、上部は破損。	11.5	3.49	2.7	140	8	伊礼原E遺跡	60	-
48	3	石斧	砂岩	未製品で、刃部は丸味を呈し、上部は緩やかに尖り、横断面は饅頭形。表面は研磨が見られるが、自然面が強い。裏面は石の摂理面であるが、中央はくぼむ。片側面は研磨あり。	13.07	5.085	1.9	208	3	伊礼原C遺跡	5	黒色シルト層
48	4	敲石	礫岩	表および上下面に敲き痕が見られる。裏面は摂理面である。	10.3	4.08	2	161	8	伊礼原E遺跡	72	灰色枝サンゴ層
48	5	敲石	斑レイ岩	両刃石斧の二次利用のため平面形は長方形を呈する。表裏および側面は研磨有り、下面に敲き痕が見られる。	11.06	6.02	3.4	485	6	伊礼原C遺跡	138	黒褐色砂質土
48	6	石皿	砂岩	扁平の長方形を呈し、表および側面に敲き痕、裏面は研磨面が見られるが、中央に溝状の凹み、上面は摩耗、下面-破損。	21	11.7	3.2(1.8)	1000	6	伊礼原C遺跡	133	包含層(暗褐色混土)
48	7	敲石	輝緑岩	表および側面に敲き痕、裏面は研磨され、丸味を帯びる。下面は節離し、上面は自然面である。	9.4	13.4	7.5	1500	3	伊礼原C遺跡	5	黒色シルト層
48	8	石皿	砂岩	表裏面は研磨有り、上および側面は自然面を呈し,下面は破損する。	15.05	16.08	2.2(1.2)	1400	3	伊礼原C遺跡	5	白色ｼﾙﾄ層
46	7	石製品	千枚岩	板状で方形を呈し、下部は刃部となる。表裏および側面は研磨有り。	3.08	2	0.28	3	6	伊礼原C遺跡	138	黒褐色砂質土
49	1		チャート		2.4	1.5		3.63	6	伊礼原C遺跡	143	
49	2		チャート		2.6	2.93		1.71	6	伊礼原C遺跡	143	
49	3		チャート		3.56	0.227		5.11	6	伊礼原C遺跡	143	
49	4		チャート		0.356	3.55		11.36	6	伊礼原C遺跡	143	
49	5		チャート		4.9	3.34		25.74	6	伊礼原C遺跡	143	
49	6		チャート		2.2	4.1		24.39	6	伊礼原C遺跡	143	
49	7		チャート		2.1	5.2		23.3	6	伊礼原C遺跡	143	
49	8		チャート		5.8	4.5		88.25	6	伊礼原C遺跡	143	
50	1	不明	チャート・石核		8.13	6.6		33.0	3	伊礼原C遺跡	6	黒色砂質土
50	2	不明	チャート						6	伊礼原C遺跡	125	淡黒褐色土層
50	3	不明	チャート						3	伊礼原C遺跡	5	白色シルト層
50	4	不明	チャート						8	伊礼原E遺跡	47	試掘
50	5	不明	黒曜石		2.65	2.46		3.93	6	伊礼原C遺跡	133	包含層(暗褐色混土)

第七章　まとめ

まとめ

キャンプ桑江北側半分約40.5haの試掘調査を平成７年度から平成9年度の3年間をかけて試掘調査を行ってきた。返還地域を3区分し、年次ごとに消化していく方法を用いた。結果的には返還前のまだ機能している施設内での試掘調査であることから、直接的な現場での作業はスムーズに対応できたが、事前の手続きであるユウティリテイセクションとの調整が時間を費やした。各セクションの関係者はAラインが切れた場合はBあるいはCラインに切り替えるということを念頭に現地踏査後の許可を出していたようで、３区分したことは両者にとって幸いしたと思われる。

試掘調査の方法は約40.5haの地域を3区分し、1／2500地形図上で国道58号を南北の基軸とし30mメッシュを画け、そのポイントを試掘穴の位置とした。既存の施設に架かるものは現地でずらし、それでも不可能な場合は近接の試掘穴の状況を判断の材料として割愛した。よって当初の本数より減少している。特に北側の第三期では著しかった。

平成7年度はすでに返還を見越して先行して基地内に建設する庁舎建設予定地域のある南側（第一期）から試掘調査を始めた。

平成７年度には約20haで140本、平成8年度には約10.5haで146本、平成9年度には約10haで78本の試掘調査を行ってきた。その総数は364本である。

その結果、９遺跡、6遺物散布地が確認された。それらを整理するにあたり遺跡や遺物散布地を北側から順次番号を付し、小字名を持って遺跡名とした。さらに小字名に複数所在する場合にはＡＢＣの細分ナンバーを付加して遺跡名とした。たとえば伊礼原Ａ遺跡、伊礼原Ｂ遺跡、伊礼原Ｃ遺跡となる。個々の遺跡を整理するにあたり、全国の順序に統一するため北側から整理し始め、番号も付した。

北側の第三期（平成9年度）からその成果をまとめると、第三期は10haで78本を試掘調査した結果、5遺跡（縄文時代・弥生時代相当・グスク時代・戦前の集落遺構）と、４遺物散布地を確認した（第24・25表）。包蔵面積は4.59haであった。

1地区（千原遺跡）は上下2枚の柱穴を伴う15世紀前後のグスク時代の生活址であった。その中心は国道58号と県道23号線（通称国体道路）が接する北西側に拡がることが予想された。

2地区（平安山原Ｂ遺跡）は戦前のサーター屋の釜址下に4本の高床式掘建柱址である12世紀ごろのグスク時代の遺構と、その下位には砂丘系の浜屋原タイプの弥生時代相当期の柱穴群が確認された。石灰岩丘陵部から沖積平野部に移行する斜面の陸生シルトにグスク時代の遺跡は立地し、下位の柱穴群は海生砂地に形成されていた。遺跡は斜面一帯に拡がるものと考えられた。

3地区（伊礼原C遺跡）は当初、平安山原C遺跡として把握したが、遺跡の範囲が狭いこと、遺物の出土深度や諸特徴から南側に位置する後述の伊礼原C遺跡に類似していることからそれに含めた。

4地区（平安山原A遺跡）は戦前の平安山集落に重複していることから近世の遺物が多かった。特記すべきこととしては出土例の極めて少ない海獣葡萄鏡の破片が出土したことである。民俗事例からみると「ノロ」の所有物としての伝製品が見受けられる。検出後、京都国立博物館の久保

智康氏の所見をいただいたことは知念勇氏の見識であり、幸いであった。その下位にはグスク時代や砂丘系土器が出土したが、戦前の集落の形成もあって明確な遺構は確認できなかった。

5地区（伊礼原D遺跡）は海生砂地の平坦部に形成された15世紀前後の青磁を伴う柱穴群である。米軍航空写真や地籍図を精査した結果、ナガサガーの河口左岸に形成された一つの集落であることが判断された。後述の伊礼原C遺跡の西側砂地まで拡がると思われ、砂丘の形成に沿って楕円形に広がり、その集落の規模は約1.5haと考えられた。

遺物散布地ではA・B・C・D地区の4ヶ所があった。A地区は近世陶磁器に混在して青磁・白磁・グスク土器が散見されたが、その本体を確認するまでには至っていない。南側に区画整理事業のための盛り土があり、その移動をまって改めて試掘調査の結果を行う予定である。B地区は海生砂地や枝サンゴ砂利層で縄文時代の土器等が検出された。二次堆積と判断された。C地区は谷間で徳川河川の下流域、ナガサガーの合流地域にあたる。水摩を受けた土器が検出され、宇佐浜式土器に類似していたが細片のため明確でなかった。上流域からの流入と判断した。D地区は昭和63年度に河川工事の際に発見され緊急発掘調査を行った伊礼原B遺跡の北側にあたる。遺物の出土状況やナガサガーの旧河口地域にあたることから二次堆積と判断した。

第二期（平成8年度）は10.5haの広さの範囲で、130本を試掘した結果、3遺跡（縄文時代・弥生時代相当期・グスク時代・戦前の集落遺構）と、1遺物散布地が確認された。包蔵面積は3.33haであった。

6地区（伊礼原C遺跡）は当初、東側の丘陵部麓のウーチヌカー（湧水）周辺の低湿地遺跡（伊礼原C）と西側の沖積平野部砂丘地遺跡（伊礼原A）とは区別して名称をあたえていたが、資料整理の成果と範囲確認調査の進行に伴いCは調理場で、Aは生活址であることが明らかになった。その後まとめて伊礼原C遺跡として呼ぶこととした。低湿地遺跡は特に表土下3.5mの礫層から約4トンの有機質に伴い九州縄文前期の曽畑式土器が多量に検出された。有機質は膨大な樹木片や種子の中に木製品や加工品、獣魚骨や現存しない貝種が含まれていた。九州から持ち込まれた曽畑式土器も特質されたが、特に有機質や獣魚骨・貝類はこれまで沖縄諸島では前例のない資料で、その分析結果が注目を引いた。今回、その中間報告の一部を辻誠一郎・能城修一氏の所見を受けることができた。樹木には台湾や南中国に現存するショウナンボクの種類や、種子ではやや寒冷地のニワトコ等の植相がみられること。食料残滓として多量の破砕されたシイの実が存在することから、低湿地遺跡は調理場であった可能性が高いことが判明し、南島縄文文化の特徴を示していることが明らかになった。獣魚骨では樋泉岳二氏によると爪形文土器（ヤブチ式）と共伴した嘉手納町野国B遺跡出土のイノシシ骨が3歳以上の大型であることや回遊魚の骨があることから、これまで沖縄諸島の縄文時代遺跡では出土類例がないという。貝種につては現存しないフクレハイガイなどあり、検証の必要あるという黒住耐二氏の貴重な所見があった。

沖積世砂丘地では奄美系統の宇宿下層土器が多量に出土し、広範囲に拡がっていることが判断された。これら奄美系統の土器は沖縄諸島でも3遺跡しかなく、特に面縄前庭式・仲泊式・面縄東洞式土器など、彼我の縄文時代の比較検討には欠かせない貴重な資料であることが判断できた。また、砂丘の下層からは地文に条痕をもつ室川下層式土器も出土していることから、当地地域には複数に重なり合った包含層や生活址が存在していることが予想された。さらに海よりの西側には弥生土器片やグスク土器と柱穴群が拡がっていることが判明した。これら伊礼原C遺跡は丘陵

部近くには縄文時代の早期・前期の古い地域があり、砂丘の発達と軌を一にするように海側に近づくにつれ縄文中期・後期・晩期、弥生時代、グスク時代の集落址、ひいては国道58号近くの戦前の集落まで連綿とたどれ、約7000年間の長い間の人々の痕跡が、この伊礼原C遺跡の周辺に集約されているという驚異的な環境の良い地域であったことが予想された。その根源はウーチヌカーを中心とした背後の丘陵部の植相、前面には飛び石上に点在した小島々との間に形成された砂丘とそのバックマッシュ（後背湿地）などの環境が要因であったと予想された。

7地区（伊礼原B遺跡）は戦前の集落地域にあたり、集落の始祖にあたる屋敷が集中する場所で、近世の陶磁器、グスク土器等が出土した。下層では縄文時代の遺物も出土したが、海生粗砂や枝サンゴ砂利に混在して、二次堆積の様相であった。南側に基盤の石灰岩塊の露頭が存在することからオリジナルな遺跡の存在が予想され、範囲確認調査で精査することとした。

8地区（伊礼原E遺跡）は7地区と同様な遺物の出土状況であり、また、南側に基盤の石灰岩塊の露頭が存在することからオリジナルな遺跡の存在が予想された。範囲確認調査で精査することとした。

遺物散布地のＥ地区は近世の遺物やグスク土器等が出土したが、客土や土壌の汚れからオリジナルな層は確認されなかった。

南側の第一期（平成7年度）地域は約20haで140本を試掘調査した。1遺跡と1散布地が確認された。9地域が後兼久原遺跡でグスク時代の遺跡でその範囲は1.98haである。庁舎建設予定地の南東角約1／4ほどに重なっていた。1散布地はFとした砂丘系統の「くびれ平底土器」を含む二次堆積の範囲で3.69haである。また、試掘カードを整理する段階でF遺物散布地の本体（生活址）が不明で、三方の地域にもなく地形や流域を検討した結果、当地域が泥炭層地域であることや、東側からナルカーが流入している地域あることから、その上流地域に遺跡の本体が考えられ、試掘調査カードの精査で再確認し発見したのが小掘原遺跡である。今回は小堀原遺跡の詳細については割愛した。

9地区（後兼久原遺跡）は丘陵部から平野部へ移行する緩斜面地域で、表土下1～1.5mで包含層と数個の柱穴が確認できた。丘陵部の中腹でも包含層と多量のグスク土器が検出されたのでグスク時代の一つの集落が予想された。その拡がりは約1.5haと判断した。また、当地域には「メーマシの火の神」という拝所が存在し、古い生活址の痕跡であることが予想された。庁舎建設に先立ち平成8年度に発掘調査を行った結果、後兼久原遺跡の集落の北西側約1／5をその対象地域とした。その成果として平地式掘建柱住居趾と高床式掘建柱建物址が対になる新発見があり、さらに木棺土坑墓や畠の畝など11世紀後半～12世紀初頭であるグスク時代黎明期の集落の一端を把握することができた貴重な調査であった。

遺物散布地ではＦ地区の1ヶ所があり、試掘調査事業地域内で最も広い範囲であった。表土下2mまでは海生砂地であったが、いずれの試掘穴でもその下層は有機質を多量に含む泥炭層であった。砂地と泥炭層の境で水摩を受けた「くびれ平底」土器が散在していた。二次堆積であった。

平成7・8・9年度の試掘調査の結果から遺跡や遺物包含層（遺物散布地）が沖積層平坦地域の中でどのような状態で堆積しているのか、また、遺跡の立地はどのような地形・地質に立地しているのか、その全体的な広がりや、特徴を把握する為に個々の試掘調査柱状図を山手から海手（東北から南西側）に並べてみた。基本的には升目（メッシュ）を直線上に並べたが、遺物包含層や

地形の特徴を顕著に現すために折れ線上に組み入れ、そのラインとした（第49・50・51図）。

個々の柱状土層断面図は等間隔に配置し、表土層の標高を基準レベルとして全体の標準高とした。また、試掘調査で確認された土層の特徴や地下水の流出レベルも判断材料として、その資料を記入した。特に包含層がどの土層に包含されているのか、その下層の土壌堆積にどのような相関関係があるのかの把握に努めた。よって、土層の特徴はバックホーのアームが届く範囲をできるだけ表記することとした。例えば客土・旧表土・シルト層・包含層・砂層・泥炭層・枝サンゴ砂層・枝サンゴ層・ビーチロック・硬砂層・岩盤（隆起石灰岩）に分けた（第52・53・54図）。

遺物包含層は海生砂地に形成されるものと、陸地側から流入した褐色土や褐色シルト（隆起石灰岩風化土）に形成されるのがある。例外的にNo.5ラインの試掘No.6の泥炭層で縄文前期の曽畑式土器が検出されたのもある。これらのことから、土質に包含される遺跡の時期の新旧に相違はなく、丘陵部近くに位置している遺跡は古く、西の海側に近くなるにつれ新しい遺跡が形成されている。また、海生の枝サンゴ堆積後やビーチロック形成以前の海底に二次堆積として曽畑式土器や条痕文土器の古いものが検出される。それより新しく堆積したと思われる枝サンゴ層にも弥生相当期の土器が検出される。それらは海生堆積物の時期の判断として逆に目安になると判断される。

地下水の流出レベルを点検比較すると、山手側はやや高いが、平野部では一様でなく高低差がみられる。これは地中の地形の構造や地質の構成が一様でないことを示しているものと考えられ、一見、平坦を帯びているこれら旧キャンプ桑江北側半分の沖積平野部の地中は複雑な様相を呈していると暗示される。

これら柱状土層断面図でみられた遺跡の範囲と、岩盤（隆起石灰岩）・ビーチロック・海生砂丘の堆積状況を試掘で得られた総数364本の試掘穴に当てはめ、改めて旧キャンプ桑江北側半分の地形図に諸特徴をドットしてみた（第55図）。

岩盤は検出されたレベルの相違、表土下1m、2m、3mの深度で区別し、浅いものは細い右斜線（濃い）、中間のものは右斜線（灰色）、深いものは粗い右斜線（淡い）で区別した。露出している岩盤は細い左斜線（濃い）で重ねて示した。海生砂丘の堆積地域については白丸（○）で表記し、ビーチロックは三角赤（▲）で示した。

岩盤の状況をみると試掘調査第二期目の中央部には、唯一現状でも確認できる標高約10mの高台、通称将校クラブ跡地（隊舎No399）があり、そこから南西側に飛び石状に岸塊が存在し、国道58号に隣接して存在する拝所のクランモー（獅子蔵）、さらに西崎に存在するケラマジー拝所（ニライカナイの岸塊）がある。以前は海中から飛び石上に連なった小島であったと判断され、その後、沖積層の流入や海生砂丘が形成され、堆積の安定と共に岩盤を背にした状態で遺跡が点在し、戦前の景観になったが、戦後の基地建設に伴い微高地は削られ窪地は客土され低平な現状に至ったと判断される。

これらの試掘穴の土層断面図をドットとして把握し、キャンプ桑江北側地区の遺跡の立地を沖積平野の中に位置しているかを表した。それからみるとキャンプ桑江北側半分の中央部分に石灰岩塊が、東側の丘陵部地域から数を減らして飛び石状に国道58号まで伸びていることが判断できる。その国道58号に接するあたりに戦前の伊礼集落があったことが見える。それらを堺として北側の平安山地域には飛び石状の石灰岩塊はなく、東側の丘陵部に沿って北側は県道23号線（国体

道路）が国道58号に接するあたりと、南側は伊礼地域の飛び石状の石灰岩塊の間に海岸砂丘が弧状に形成されていることが判断できる。キャンプ桑江南半分の桑江地域ではそれをやや大きくした形で同様に弧状の海岸砂丘の形成がみられる。それを基準に遺跡の範囲を重ねると、遺跡は東側の丘陵の麓から沖積世平野部の接点に形成されていることが判断される。また、中央部の飛び石状の石灰岩塊の周辺にも遺跡が点在することがみられる。

土壌からみると、より古い遺跡は陸生二次堆積土壌に形成されることがみられ、次に古い遺跡は砂丘上に形成されていることが判断され、三番目に新しい遺跡は海成堆積物の上に形成されていることが判断された。このように、遺跡の立地からみると丘陵部と沖積堆積層の接点に遺跡の展開がみられることが、キャンプ桑江北側地域の特徴と考えられる。

以上のことを考慮し、戦後の米軍の土地利用からすると、国道58号沿いは例外として東側の大半は1～2mほどの客土を行い、その後施設等の建設をおこなったようである。それは、戦前の屋敷跡が50cm～1.5m表土したに確認されることで判断される。

キャンプ桑江北側半分の40.5haには9遺跡の9.74haの範囲に遺跡の存在が明らかになった。今後、その範囲を確定する必要があり、範囲確認調査を継続して限定していく予定である。

〈参考文献〉

1　中村　愿　「北谷町の文化財」わが町を語る『調和』財団法人防衛施設周辺整備協会　1996年

2　中村　愿　「沖縄県北谷城（グスク）の状況」『考古学ジャーナル』№398　ニューサイエンス社　1996年

3　中村　愿・与那覇政之　『後兼久原遺跡展』　北谷町教育委員会　1997年

4　中村　愿　「沖縄県北谷町・米軍基地における埋蔵文化財の近況」『月間文化財』9月号　1998年

5　中村　愿　「沖縄の先史時代－縄文時代相当期の最近の様相－」『日本考古学協会1998年度沖縄大会資料』1998年

6　東門研治　「〈速報〉伊礼原Ｃ遺跡」『考古学ジャーナル』№454 ニューサイエンス社　2000年

7　中村　愿　「米軍基地と埋蔵文化財の調査」『平成12年度埋蔵文化財担当職員講習会－発表要旨－』夏季岡山大会・冬季千葉大会　文化庁・岡山県教育委員会・千葉県教育委員会　2001年

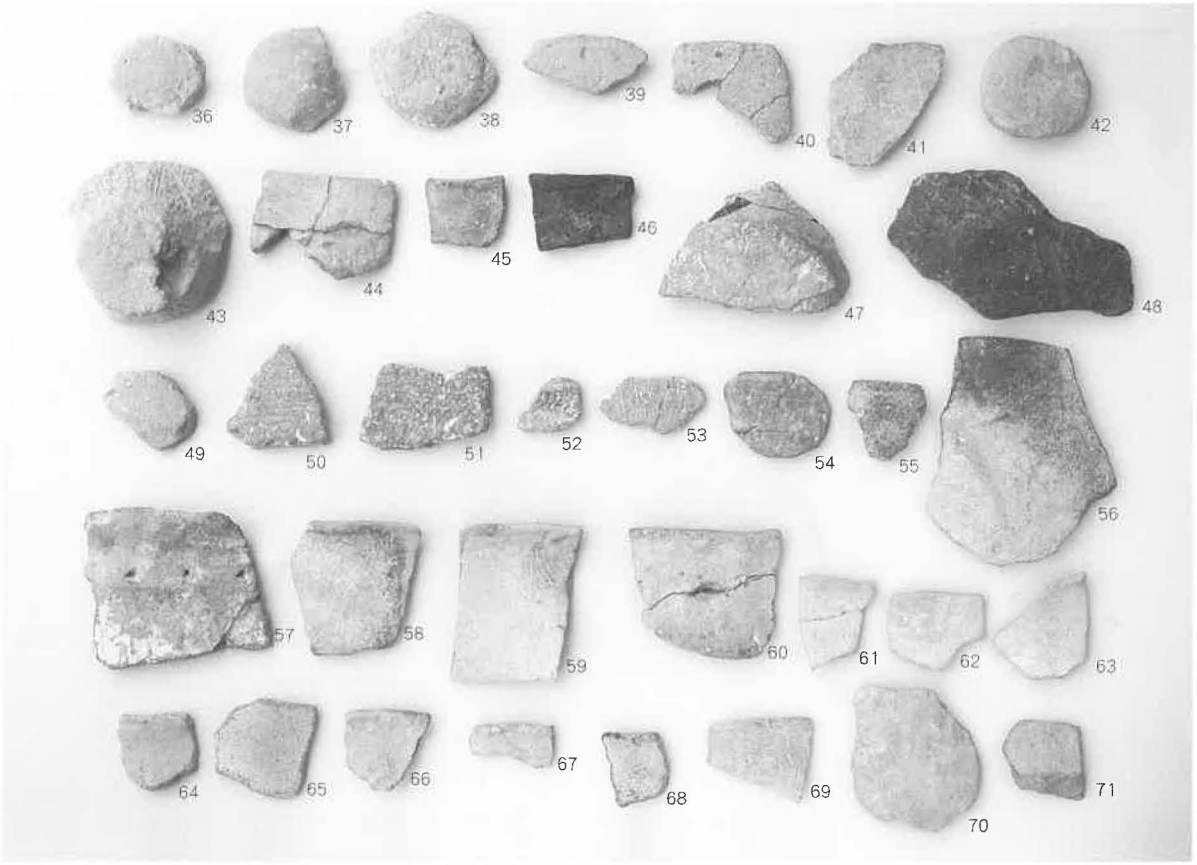
8　東門研治・山城安生ほか　『後兼久原遺跡』北谷町文化財調査報告書第21集　北谷町教育委員会　2003年

9　中村愿ほか　『伊礼原Ｃ遺跡の語るもの』－伊礼原Ｂ遺跡ほか出土遺物保存処理事業－北谷町教育委員会　2004年

図　　版

1－A

図版36ａ　土器　1地区：1(No30)、2地区：2(No21)、23～35(No20)、4地区：3･4(No59)、5～12(No37)、13～17(No25)、18(No18)
19(No24)、20(No14)、21(No70)、22(No71)

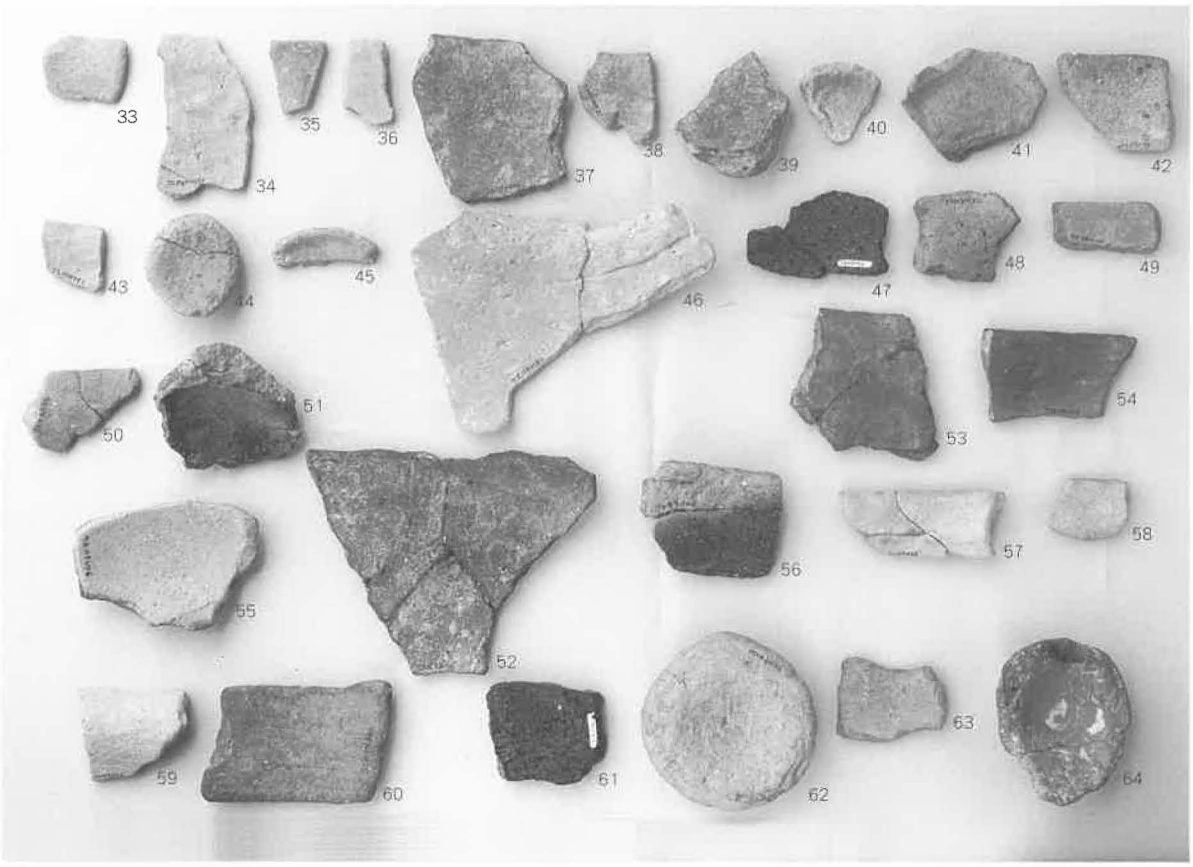


1－B

図版36ｂ　土器　1地区：43(No30)、2地区：36～39(No20)、40･44(No53)、41･42(No21)、45･46(No54-A)、47(No54-B)
5地区：48･49(No57)：50～53･55～71(No65)、54(No62)

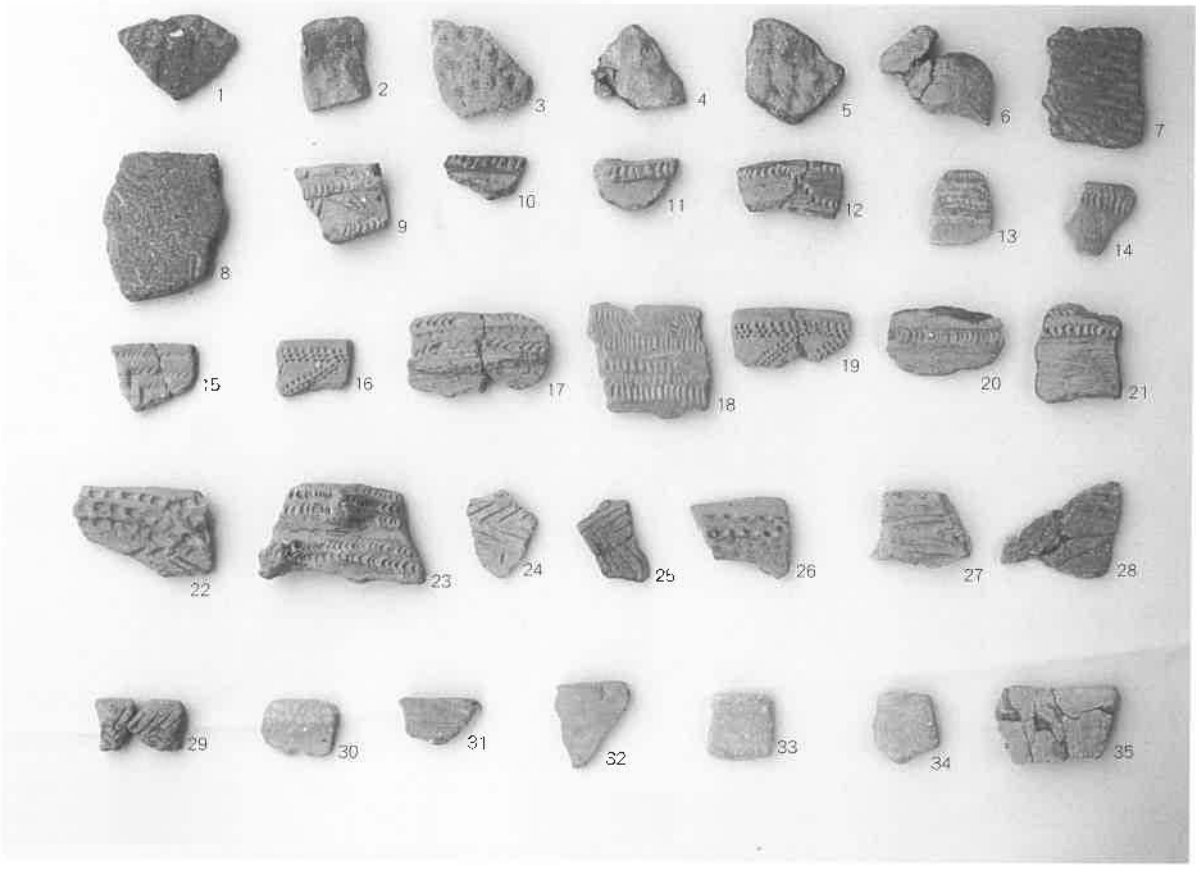
2－A

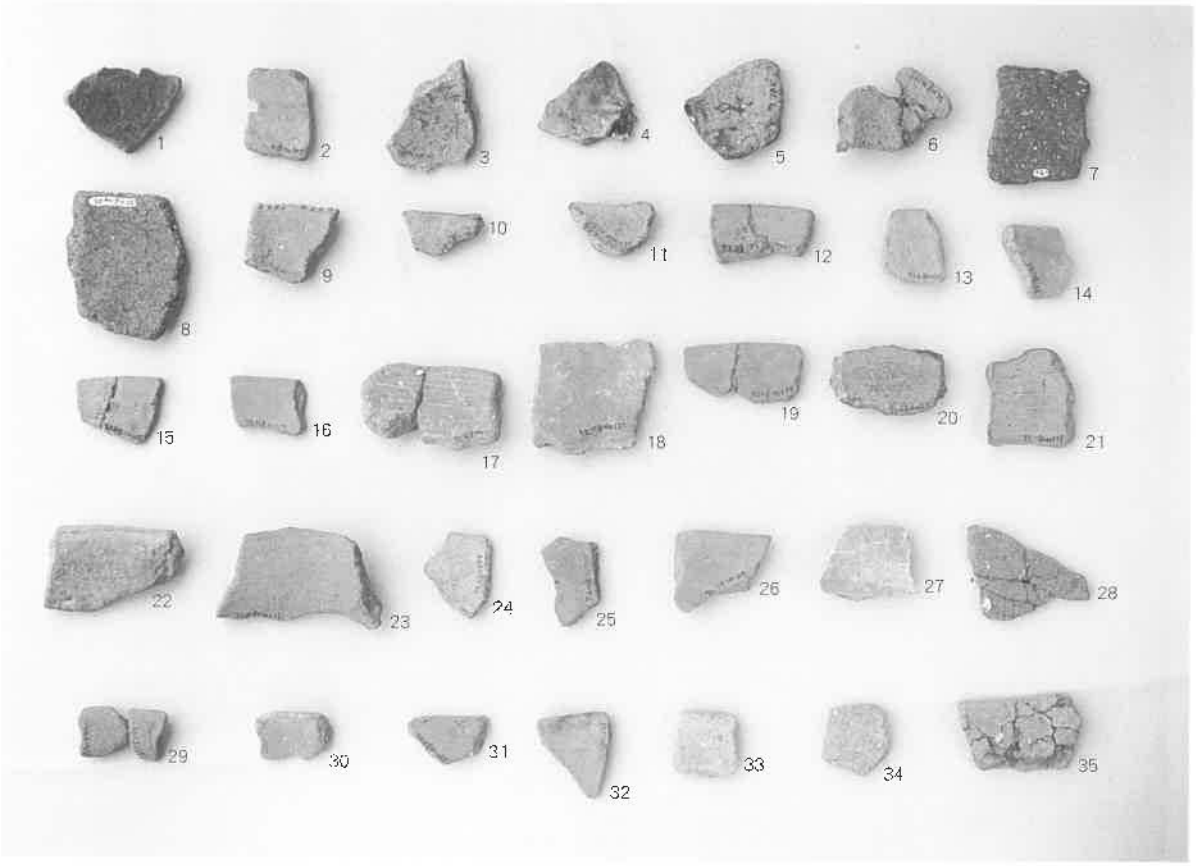
図版37 a　土器　5地区：1～9･27(No65)、10～13(No63)、14～16(No62)、17～26･28～30(No64)、31･32(No52)



2－B

図版37ｂ　土器　5地区：33(No67)、34～41･43(No52)、42(No69)、44･45(No60)、46(No50)、3地区：47(No5)48～59(No6)
A地区：60(No40)、B地区：61(No43)、62(No34)、63(No11)、D地区：64(No45)



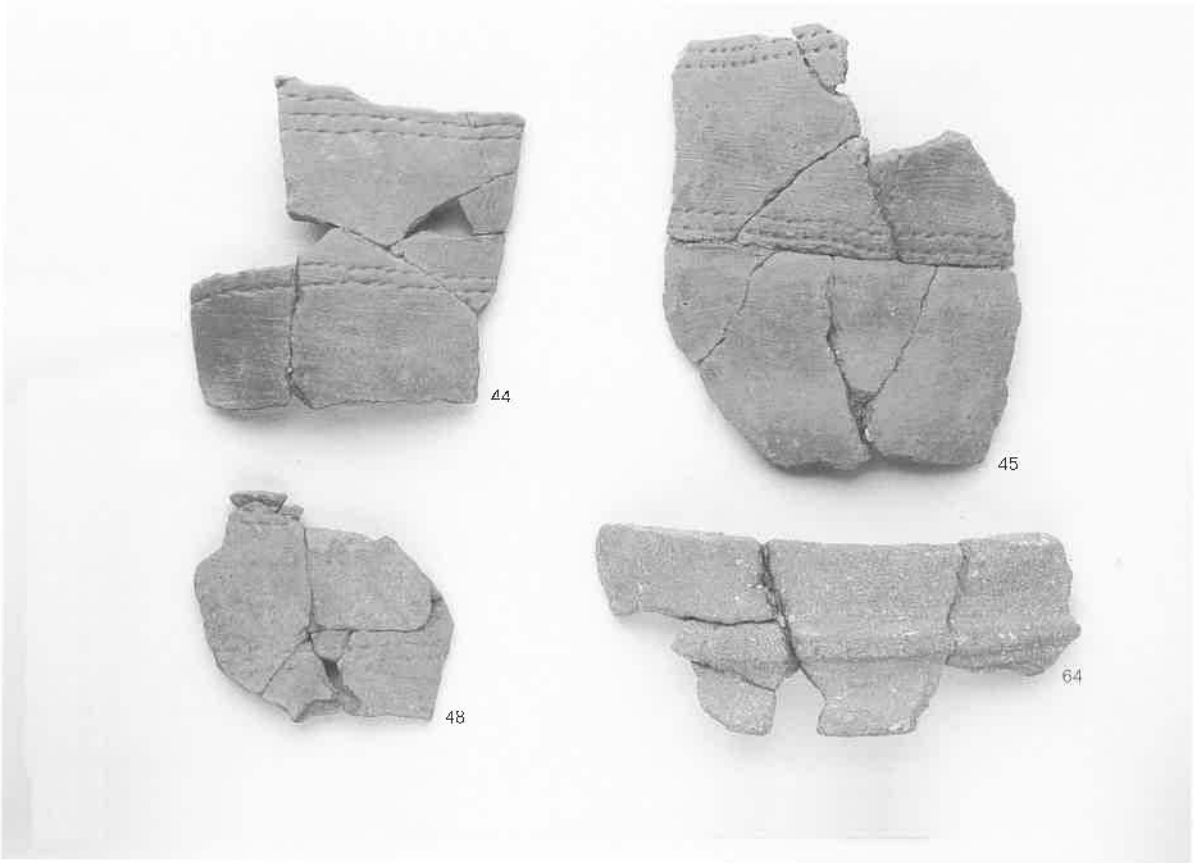


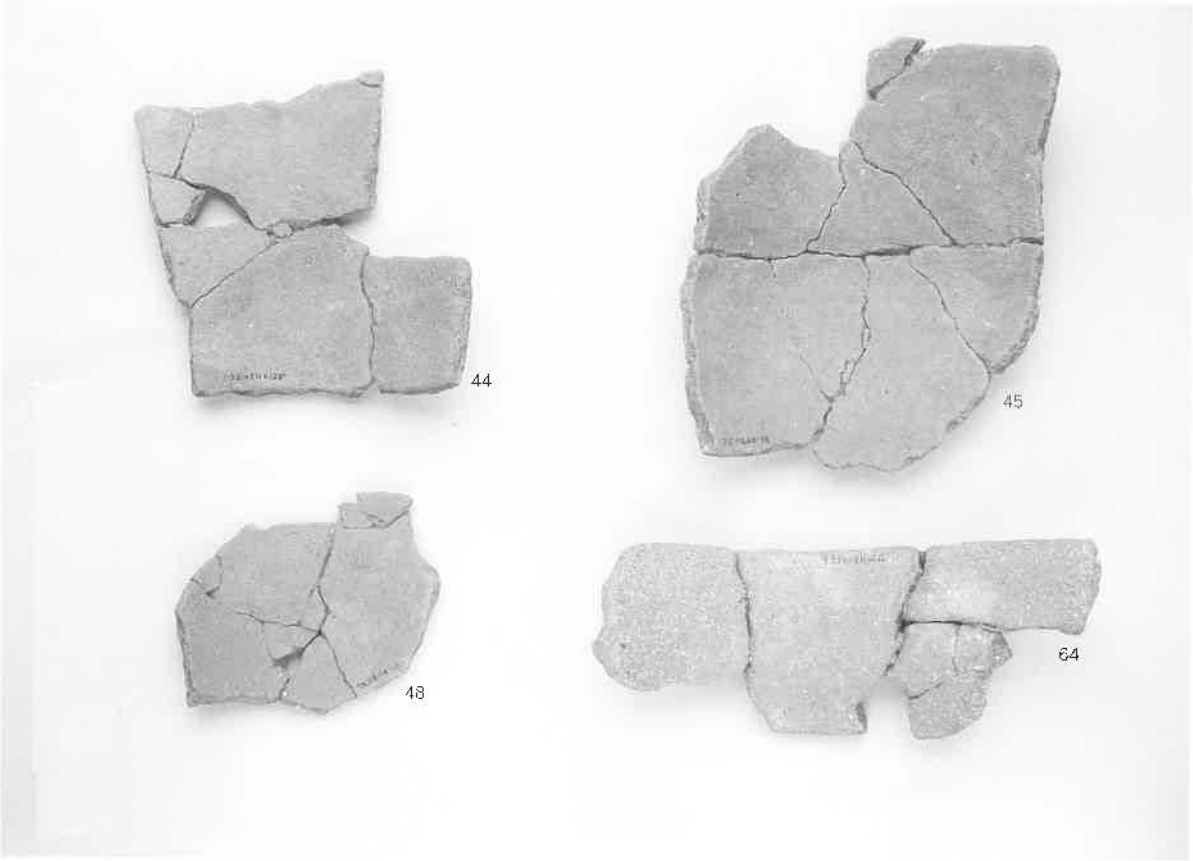
3－A

図版38 a　土器　6地区：1～5(No145)、6～35(No125)

3 - B

図版38 b　土器　6地区：36·37(No125)、39～41·43·56·64(No140)、67(No133)、38·42·44～55·57～63·65·66·68～70(No138)



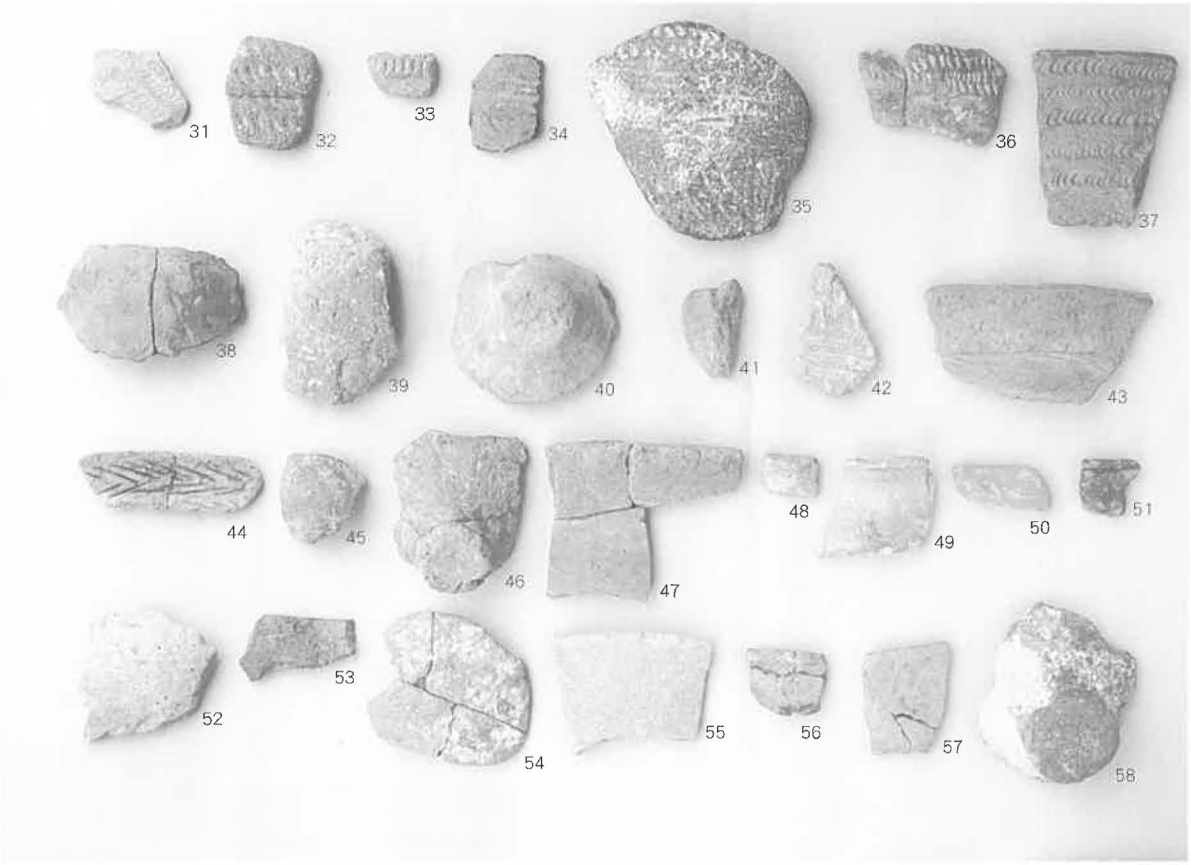


3－C

図版38 c　土器　6地区：44･45･48･64(No138)

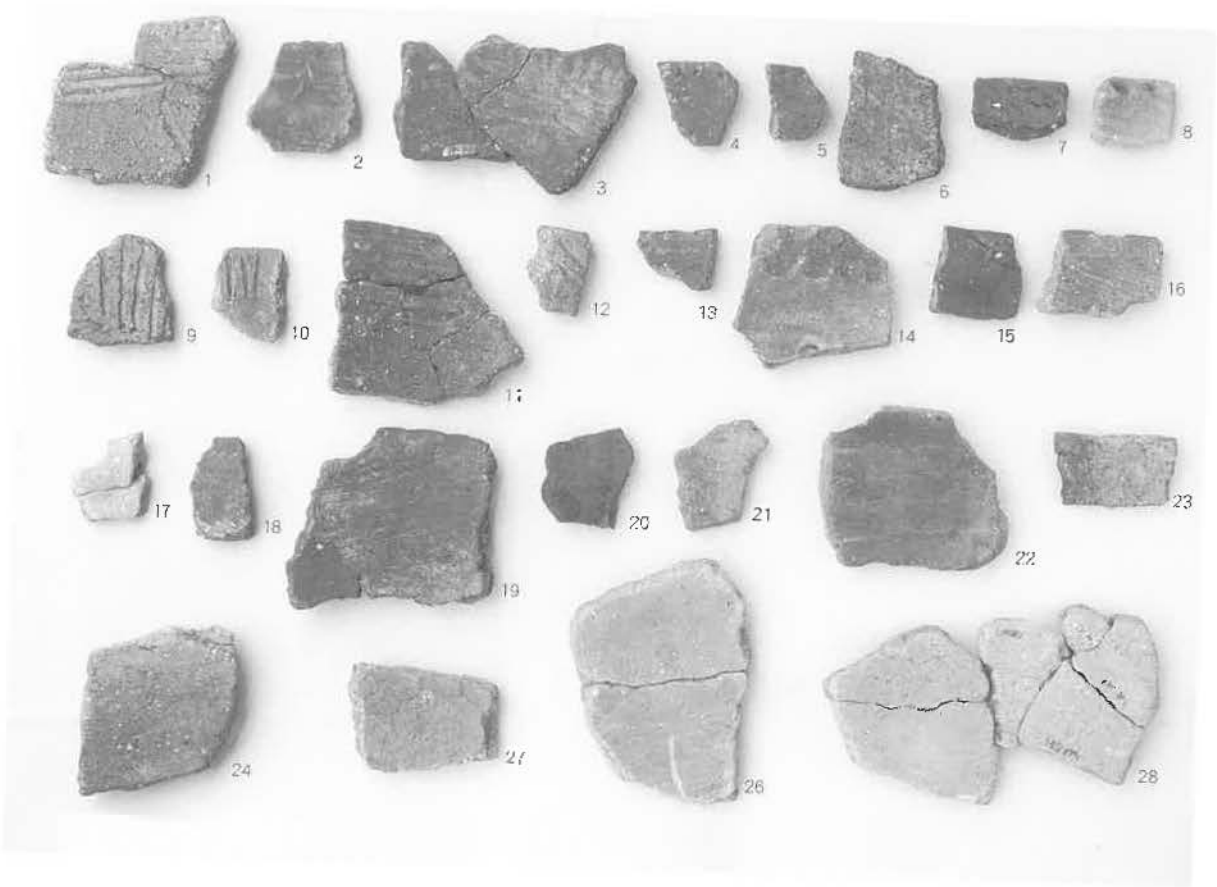
4・A

図版39 a　土器　6地区：1～4(No140)、5･6(No125),7(No138)、8～19･21～28(No133)、20(No145)、29･30(No127)



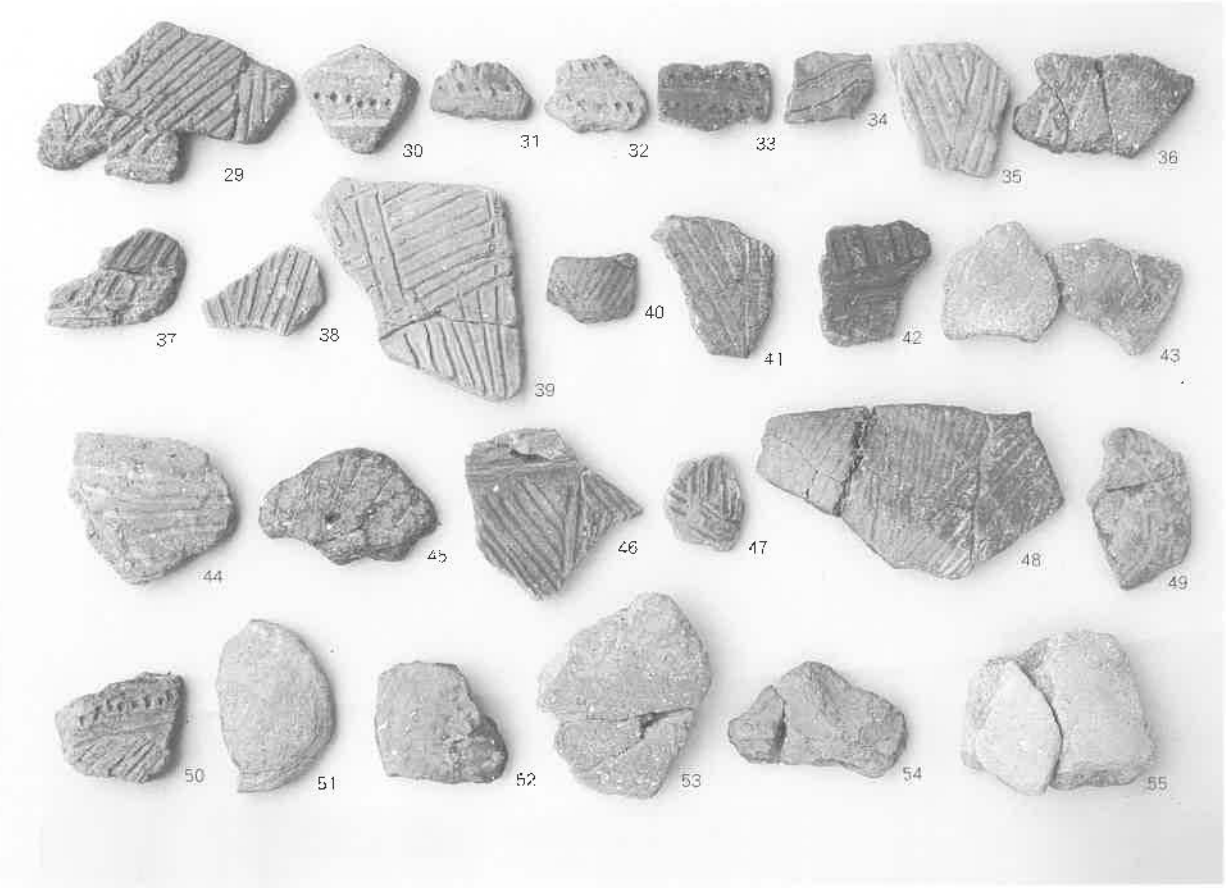
4－B

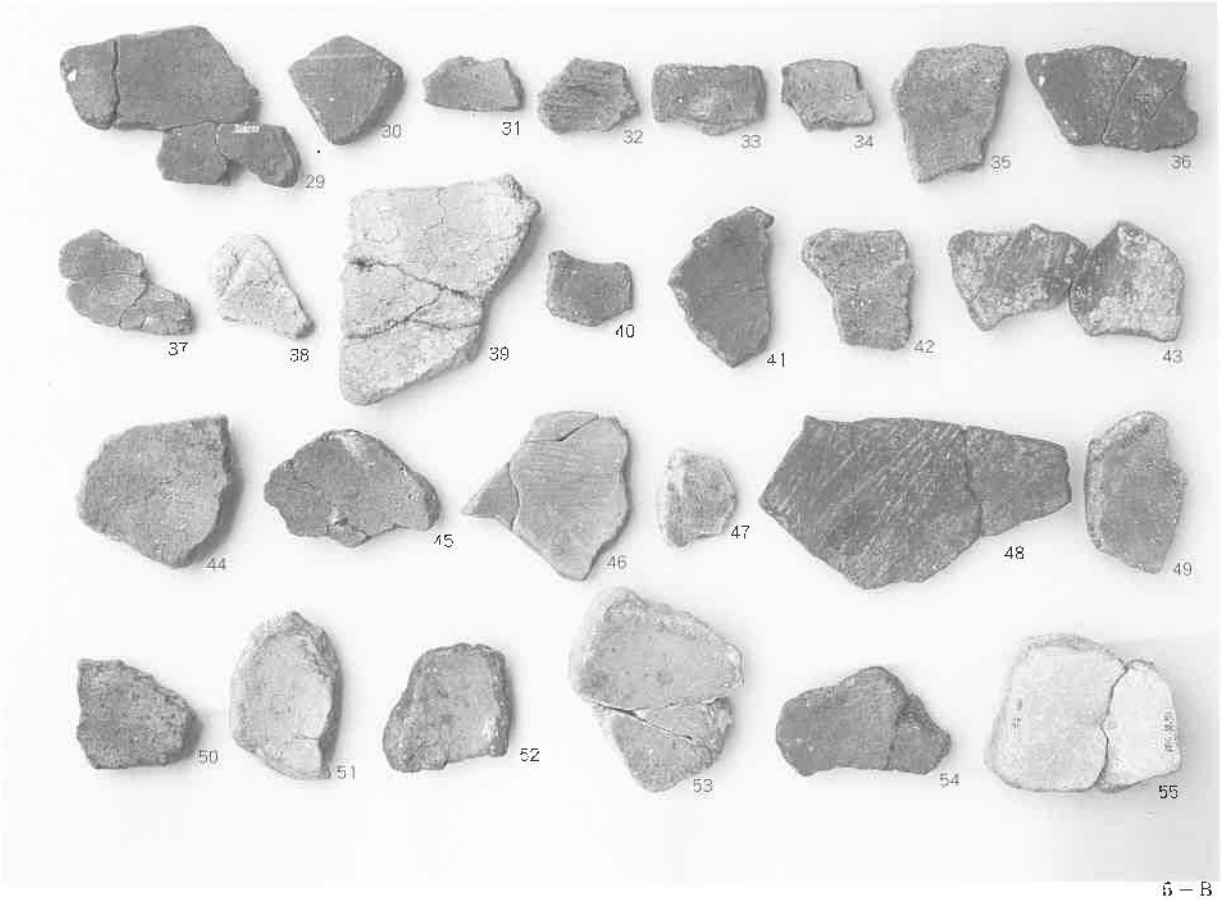
図版39ｂ　土器　6地区：31(No146)、32～34(No120)、38(No145)、47(No138)、7地区：35～37(No116)、8地区：39(No144) 40(No72)、41(No48)、9地区：48･49(No2)、50～53(No139)、B地区:42(No34)、F地区：54(No60)、55(No68) 56(No119)、57(No126)、58(No68)、地区外：43(No93)、44(No45)、45･46(No112)



図版40 a　土器　6地区：1～28(No143)

5－A





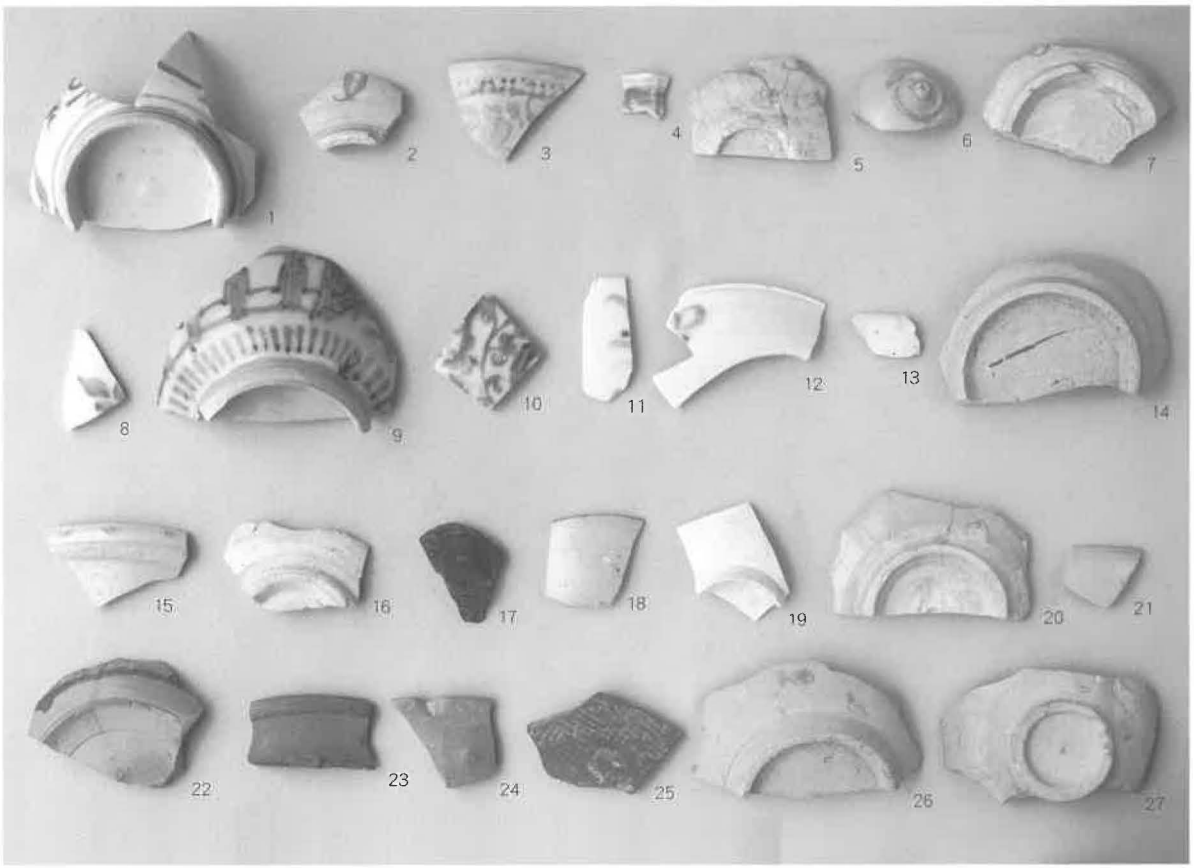
6－B

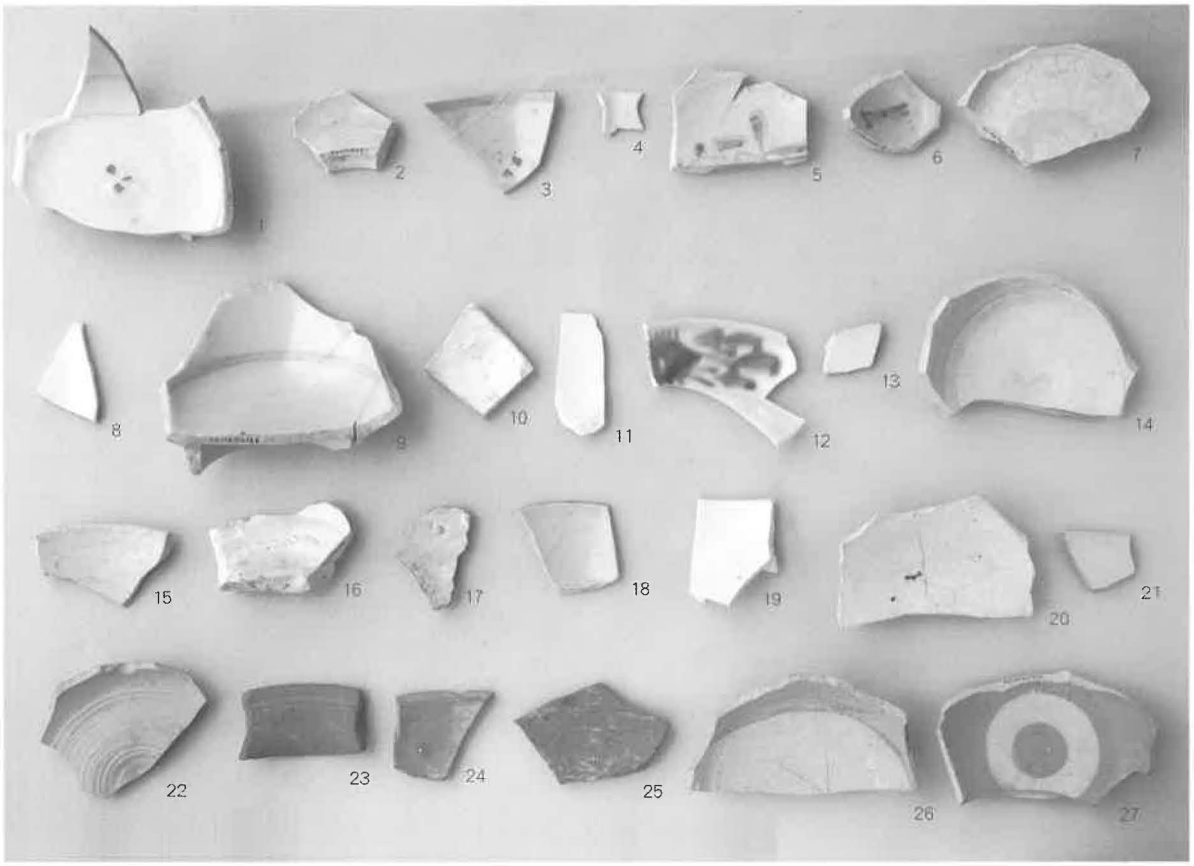
図版40ｂ　土器　6地区：29～55(No143)

5－A

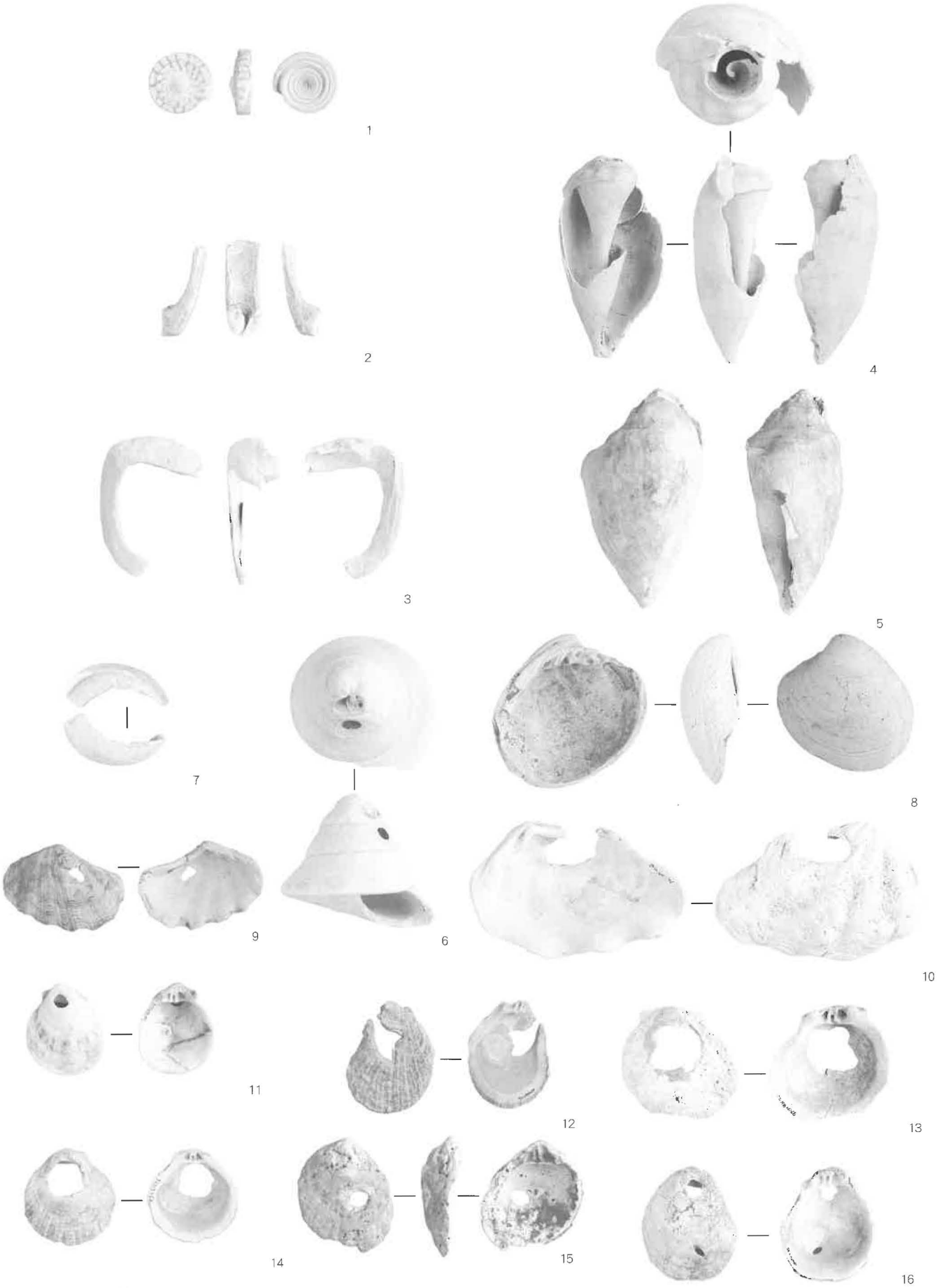
図版41　青磁　1地区：1～5(No30)、4地区：6(No11)、7～12(No14)、13(No15)、14･15(No29)、16～22(No37)
5地区：23(No52)、24～26(No62)、27(No63)、28～30(No64)、31(No65)、32(No69)、B地区：33(No35)、
34･35(No36)、36･37(No41)、38(No43)

図版42　青磁　B地区：1(No43)、6地区：2(No133)、3(No138)、4(No141)、7地区：5(No96)、9地区：6(No26)、7(No19)
8～11(No3)　F地区：12(No61)　**染付**　1地区：13･15･20(No30)、4地区：14･19･21(No23)、16(No12)
17、18(No14)

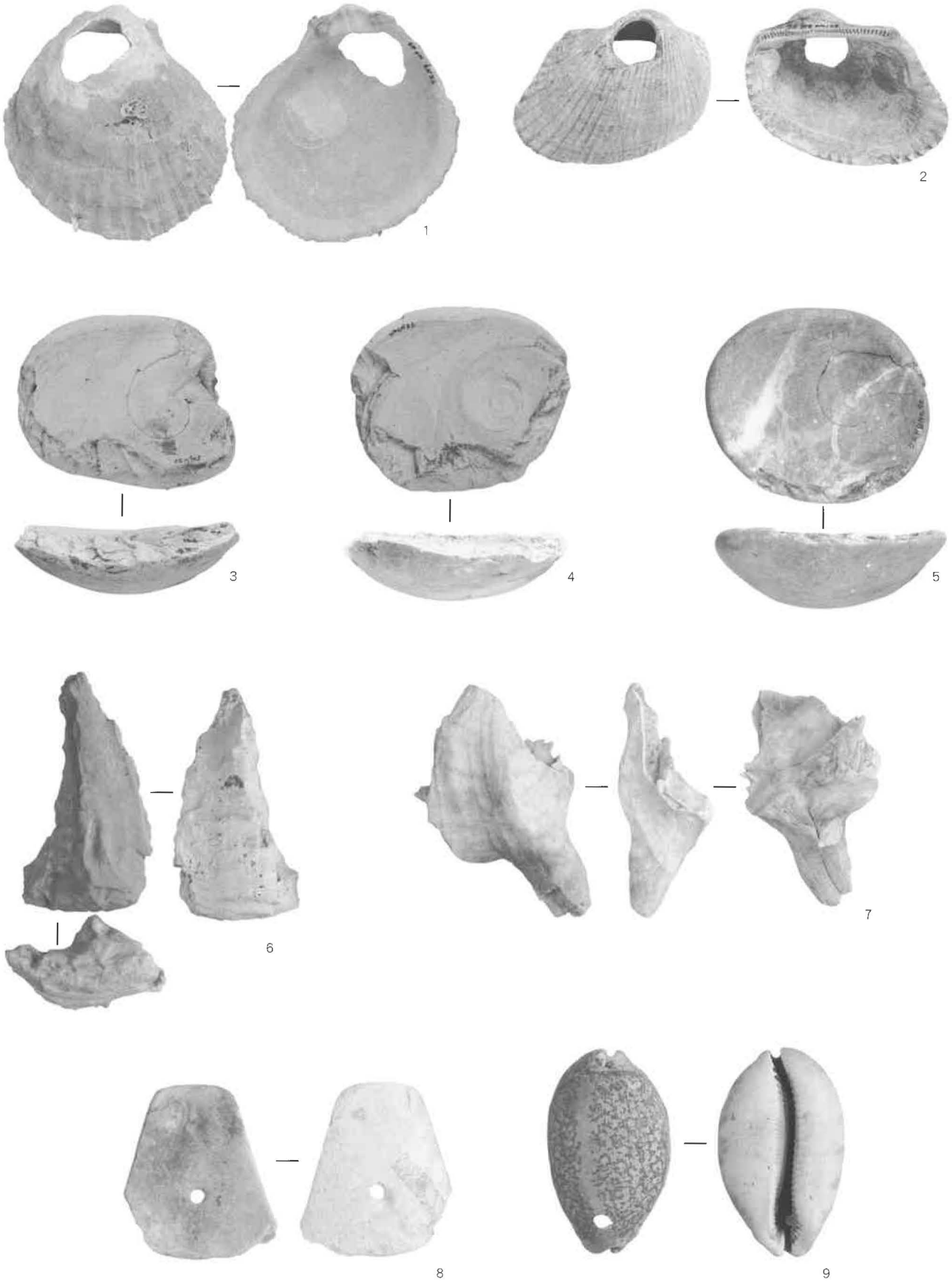




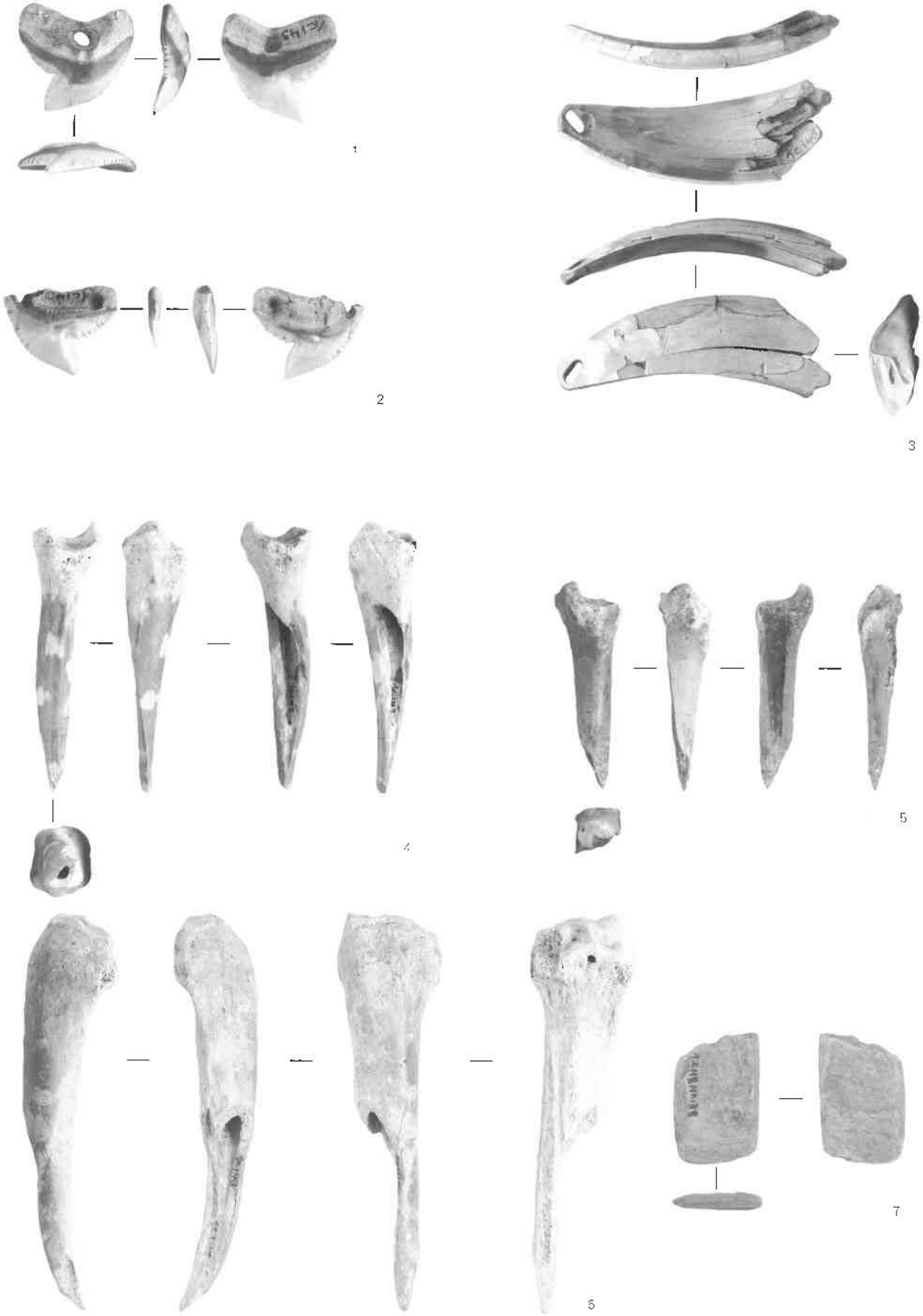
図版43　染付　4地区：1(No24)、2～3(No37)、4(No72)、2地区：5(No20)、6(No54-B)、7(No21-B)、7地区：8･9(No136)
9地区：10(No4)、F地区：11(No76)、地区外：12(No35)　**白磁**　1地区：13･14(No30)、4地区：15･16･18(No37)
17(No24)、19(No14)、2地区：20(No54-A)、A地区：21(No40)　**天目**　1地区：22(No30)
カムィヤキ　1地区：23(No30)、4地区：24(No15)、25(No37)　**沖縄産陶器**　7地区：26(No96)
本土産磁器　7地区：27(No136)



図版44　貝製品　4地区：1:イモガイ(No59)、3:ゴホウラ(No18)、8:シレナシジミ(No72)、5地区：4･5:ゴホウラ(No65)、6:サラサバティラ(No64)
9:ヒメジャコ(No65)、10:ヒメジャコ(No68)、11:メンガイ類(No69)、12･14:メンガイ類(No62)、15:メンガイ類(No52)
6地区：2:ゴホウラ(No133)、13:メンガイ類(No48)、8地区：16:メンガイ類(No60)、地区外：7:サラサバティラ(No6)

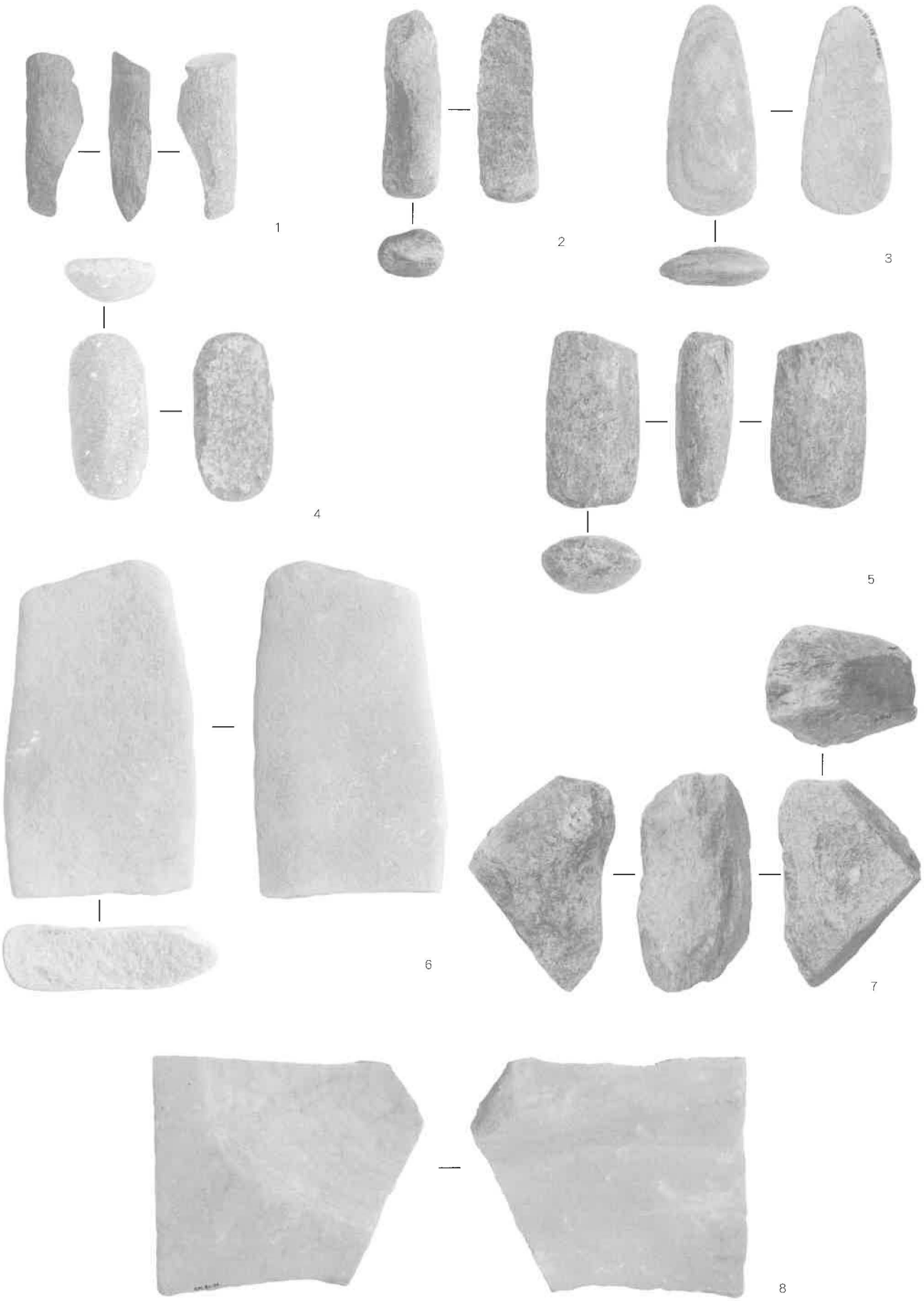


図版45　貝製品　5地区：1:メンガイ(No65)、6:シャコガイ(No64)、6地区：2:リュウキュウサルボウ(No138)、3地区：3:ヤコウガイの蓋(No6)
4:ヤコウガイの蓋(No5)、8地区：5:ヤコウガイの蓋(No72)、7:スイジガイ(No144)、8:ヤコウガイ(No144)
1地区：9:ヤクシマダカラ(No30)

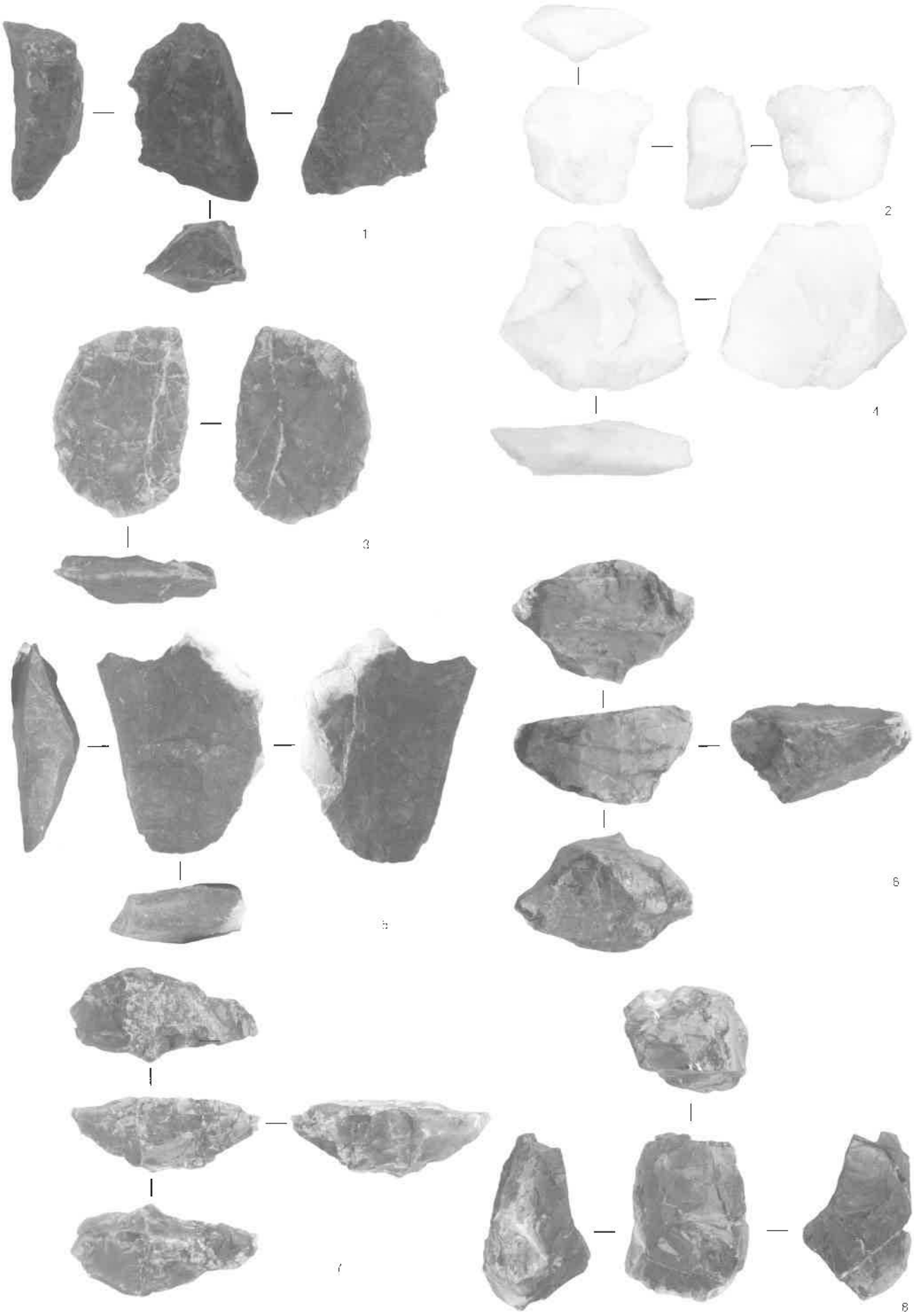


図版46　骨製品　6地区：1･2サメ歯有孔、3:イノシシ下顎犬歯、4:イノシシ左脛骨、5･6:イノシシ右脛骨(No143)　**石製品**（7）

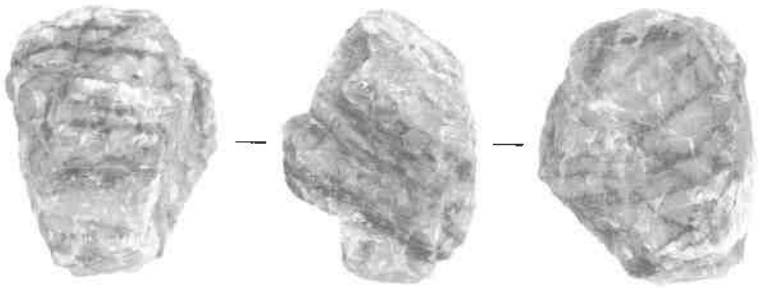
図版47　石器　9地区：1敲石(No.6)、2円盤状製品(No.5)、8地区:3敲石(No.144)、7敲石(No.73)、5地区：4凹石(No.52)、6地区：5磨石(No.138)、8石斧(No.133)、不:6磨石(.不明)



図版48　石器　8地区：1石斧(No.47)、2敲石(No.60)、4敲石(No.72)、3地区：3石斧未製品(No.5)、7敲石(No.5)、8石皿(No.5)
6地区：5石斧二次(No.138)、6石皿(No.133)

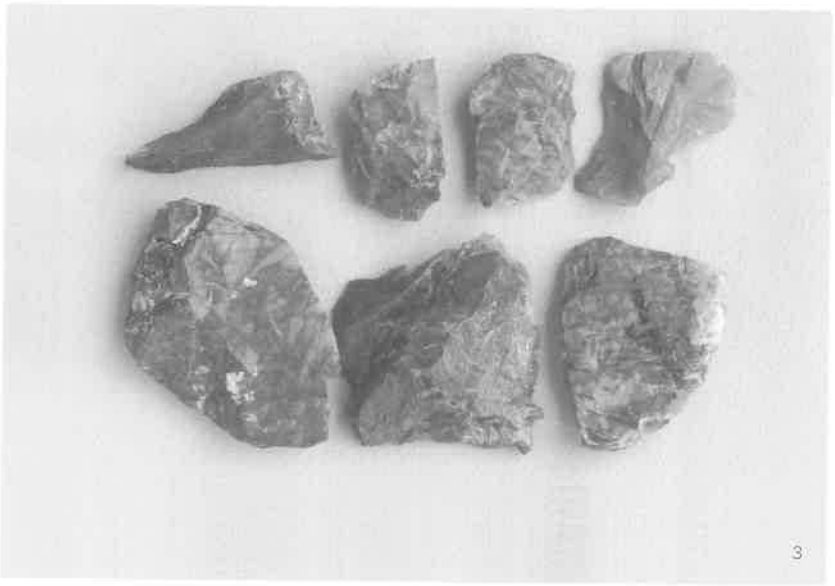


図版49　チャート　6地区：1～8(No.143)



1

2



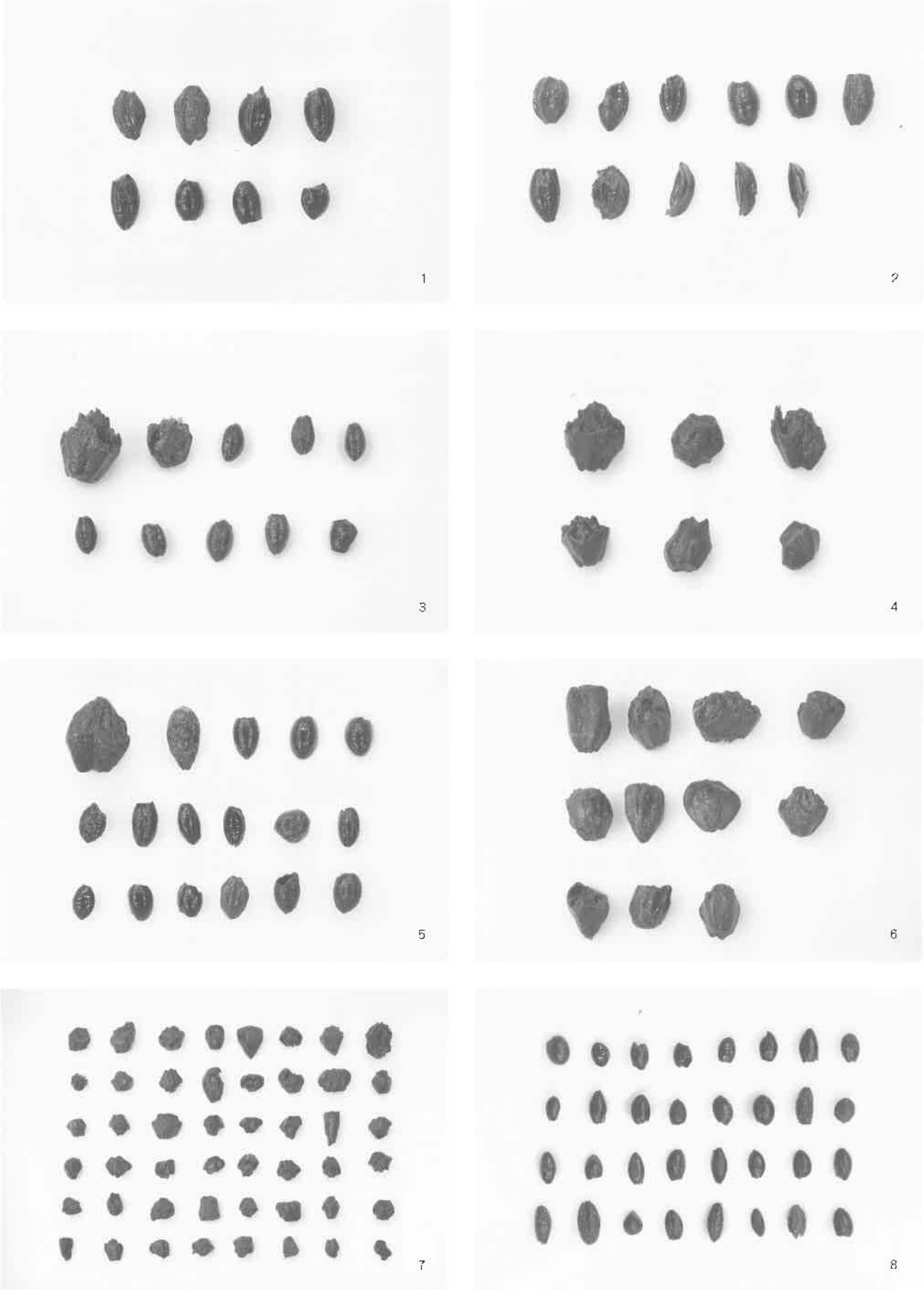
3

4

5

図版50　チャート　3地区：1:石核(No.6)、3:チャート(No.5)、6地区：2:チャート(No.125)、4:チャート(No.47)、5:黒曜石(No.133)

図版51　木の実（1）



図版52　木の実（2）

THE STANDARD-TIMES, NEW BEDFORD,

Tells Story

SINCE PACIFIC WAR BEGAN

Area Passed Bond Quota

Next-to-final report from F
eral Reserve in Boston shows
E Bond buyers of Region 3, c
prising Bristol, Barnstable,
and part of Plymouth Co
bought $5,348,000 in War
during the 6th War Li
closed Sunday, 105.8 per
quota of $5,054,700. Sales
to be processed and the f
port is expected from Bosto

ALL AMERIC

GRACIA
FURNITU
105 COUNTY ST.
"The Small Store wi

HURSDAY, JANUARY 4, 1945.

Health, three-year term;
A. Terry, Assessor, three
S. Rogers Jr. and
Campbell, School Com-
years; George B.
Fund Commissioner,
ars; John Jarvis, Tree
one year; George A.
nd Herbert W. Candage,
Board, four years;
Packard, Moderator,
Miss Mabel L. Potter,
mission, three years;
B. Maxfield, Sewer
oner, three years.
e for filing nomination
th the Registrars of
5 p. m. Jan. 18.
town meeting members
four precincts will be

haven Filed

st to Fairhaven citizens
filed by the Board of
with the Legislatu
ld reduce the quor
conduct town me

or an annual t
under Fairha
vn meeting gov
be reduced to
rum for specia
uld be the nu
ng members
spec
me

Autos Must Carry Plates at Rear

William B. Atchison, chief i
spector at the New Bedfor
Registry of Motor Vehicles,
warned today that under no
conditions should a plate appear
on the front of a Massachus
vehicle.

He declared the use of
plates became illegal at
Monday and their use in the
auto bracket is punishab
court action. Mr. Atchison
that the new plate belongs
rear of an auto "and only
rear," he emphasized.

HOME ON LEAVE

Private John C. Pacheco
Vernon Street is home on fu
from Camp Leonard

Political

RSDAY, JANUARY 4, 1945.

Buy n Block

Now Houses ters of Post

the Whitfield
ng from 48 to 54
haven, was vot-
of Fairhaven Post
an Legion, Tues-
ructure to be re-
dquarters for re-
n.
ilding will be
ven Institu-
includes Le-
eeting place
rincess Theater,
stores, four of-
-family dwelling.
as not disclosed.
crete contribution
,200 men in uni-
rd L. Kerin, Post
want returning
e better treat-
eived when we
first World War.
greet them with
ises. It doesn't
ay join the Le-
lding is for all
rning from
buying for
ive renovations
ll begin in t

War Ace Bong Returns to U.S.

WASHINGTON, Jan. 4 (INS)— — Major Richard I. Bong, top American air ace, is back in the United States after three months in the Southwest Pacific with 12 more Jap planes to his credit.

Bong went back to the Southwest Pacific for brief service as a gunnery instructor, but, as he puts it, "demonstration is a good way of teaching," and he raised his score from 28 to 40 enemy planes while on a "non-combat" assignment.

The youthful hero told a n conference he was back for assignment, and planned to vi his family in Poplar, Wis.

Conn Equity Case Settlement Made

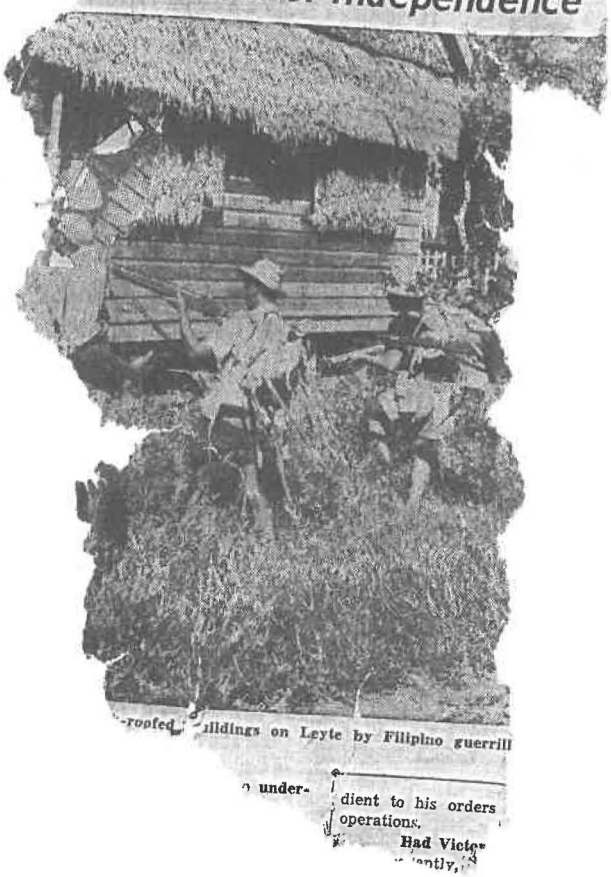
A settlement was reached terday in Superior Court in equity suit brought by Mrs. Ru Ruth Barber of Fairhaven and sisters, the Misses Grace E. Ida E. Conn, both of Milwauke Wis., who sued their brother, An drew C. Conn of Holly Street.

Four defense witnesses we heard Tuesday afternoo Judge Lewis Goldbe litigation involving estate to Mr. C the late Mrs. S opened last. You was c tiffs a

4-Me On G

Four ing pr yeste. Cour L. gar in St st gol Si

Proving Loyalty wn Idea of Independence



-roofed buildings on Leyte by Filipino guerrill

under- dient to his orders operations.

Had Victo ently,

図版53　英字新聞資料

北谷町文化財調査報告書　第23集

キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査

— 伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業 —

編　集：　北　谷　町　教　育　委　員　会
発行年：　2005年（平成17年）３月
〒904－0192　沖縄県北谷町字桑江226番地
TEL 098－936－3490　FAX 098－926－2871
印　刷：　有　限　会　社　　金　城　印　刷
〒901－0305　沖縄県糸満市西崎町５丁目9－16
TEL 098－995－0001　FAX 098－994－9886